

鎌倉市・小町

(推定)藤内定員邸跡遺跡

—鎌倉市新中央公民館用地内
遺跡の発掘調査報告書—

1985年 2月

鎌倉市教育委員会



序 文

鎌倉市教育委員会
教育長 尾崎 實

「文化都市」鎌倉にふさわしい文化施設の建設は、市民の永年にわたる願望でした。教育委員会では、昭和30年に第10回国民体育大会柔道場として建てられた中央公民館（現分館）に代わる施設の建設計画をすすめてきました。そして教育文化施設建設審議会の答申にもとづき、若宮大路に面した旧市庁舎跡地に新たな中央公民館を建設することが決定したのです。これについて、土地所有者大巧寺の絶大なるご理解とご協力をいただいたことはいうまでもありません。

若宮大路は、よく知られているように鎌倉時代からのメインストリートで街づくりの基軸となる街路でした。大路の両側には中世鎌倉の主要な建物が薈を並べていただろうことは容易に想像がつきますし、事実、公民館建設決定時までに郵便局舎や旧鎌倉消防署跡地など4か所の発掘調査が二ノ鳥居周辺で行われ、青磁、白磁などの舶載品を始めとする多量の遺物や建物跡等の遺構が発見されていました。

このため教育委員会では建設工事に先立ち、齋木秀雄氏（鎌倉考古学研究所員）にお願いして発掘調査を実施することに決定しました。調査は三次にわたって行われましたが、若宮大路に面した「要地」にふさわしい豊富な内容をもつ多くの重要な成果を得ることができました。ここに至るには齋木氏を始めとする調査団の方々の大変なご苦労がありました。改めて感謝の念を表したいと存じます。

現在、鉄筋造地上4階地下2階建の近代的な中央公民館が完成し、既に市民の文化活動の中心施設として多くの方々に活用されています。文化の発展は常に「温故知新」の繰り返しであるといえます。祖先の築いた文化を現在に伝える遺跡の上に建つ中央公民館は、未来に向けた文化創造活動の場にいかにもふさわしい立地と評されるでしょう。

この調査報告書がより広範な方々に読まれ、活用されることを深く祈念する次第です。

例 言

1. 本書は鎌倉市小町、新中央公民館用地内の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、試掘調査も含め、鎌倉市教育委員会の委託を受けた教育文化施設建設予定地内発掘調査団（団長・齋木秀雄）が昭和54年3月～昭和55年6月の間に実施した。
これに際しては鎌倉市教育委員会・文化財保護課より指導と助言を受けた。
3. 本書を刊行するに際しての整理事業は鎌倉市教育委員会の委託を受けて、昭和58年4月～同年8月の間に調査団が行った。
4. 発掘調査団の構成及び調査参加者名は本頁下段に示した。
5. 本書の執筆は下記の5人が分担して行った。
齋木秀雄、河野真知郎、宮田 真、小沢隆幸、宗基秀明
又、報告書作成には、執筆分担者の他に武淳一、木村美代治、渡辺知子らがあたった。
6. 本書に使用した写真は遺構は長谷川健雄、遺物は木村美代治が撮影した。

調査団編成

- 団 長 齋木秀雄
主 任 河野真知郎
調査員 岡山貢一、馬淵和雄、長谷川健雄（カメラマン）
調査補助員 荒川清隆、飯島政一、茨木久美子、石川寛、上田明美、上田和久、遠藤雅弘、遠藤裕子、大河内勉、岡本圭一、小沢隆幸、神原頼子、菊川英政、久保明彦、後藤典幸、近藤真佐夫、小泉まみ、作田千尋、佐々木富貴子、宗基秀明、杉山春信、園部信、高橋邦男、武淳一、千葉孝弥、坪内登美枝、富沢和彦、仲光裕人、西山修一、浪川幹夫、原広志、日野智薫、藤田陽康、増田裕美、増田秀義、美原千雪、山城永津子、山城啓一、山口順弘、米川雅夫
調査協力者 清泉女学院中・高等学校郷土研究部（小林ゆかり、菊地夕起子、松田亜弓、渡辺知子）
太田美幸

目 次

本 文 目 次

第1章 遺跡の位置及び歴史的環境	1
第2章 調査の経過	3
I. 調査の経過	3
II. 試掘調査の結果	5
III. 土層堆積	7
第3章 検出された遺構	8
I. 土 墳 墓	8
II. 土丹敷遺構	11
III. 溝	12
IV. 方形竪穴建築址	15
V. 建 物	20
VI. 井 戸	23
VII. その他の遺構	27
第4章 出土遺物	30
I. 先史古代の遺物	30
II. 舶載陶磁器	31
(1) 青 磁	31
(2) 白 磁	44
(3) 青 白 磁	50
(4) 緑 釉 陶	58
(5) 黄 釉 陶	60
(6) 褐 釉 陶	60
(7) その他の舶載陶磁器	62
III. 国産陶磁器	64
(1) 瀬戸窯系陶器	64
(2) 山茶碗・窯系陶器	77
(3) その他の陶器	81
(4) 炆 器	82
(5) 播 鉢	94
(6) 東播地方産須恵質捏鉢	95

(7) 亀山風(格子叩目)陶器	96
(8) 須恵質陶器	97
(9) 土師質、瓦質雑器	98
(10) 伊勢系土鍋	100
(11) 羽 釜	101
(12) 罌 釜	101
(13) 瓦器、瓦器質土器	102
(14) か わ ら け	103
(15) 白かわらけ	110
(16) 瓦器質黒縁皿類	112
(17) 瓦	117
(18) 土 製 品	117
IV. 石 製 品	118
(1) 硯	118
(2) 砥 石	121
(3) 軽 石	121
(4) 碁 石	121
(5) 燧 石	123
(6) 滑 石 製 品	123
V. 金 属 製 品	128
(1) 鉄 製 品	128
(2) 銅 製 品	133
(3) 銅 錢	134
(4) ガラス製品	140
(5) 鑄造関係の遺物	140
VI. 木 製 品	143
(1) 木 製 品	143
(2) 漆 製 品	143
VII. 骨 角 製 品	
VIII. 自 然 遺 物	
第5章 まとめと考察	

図版目次

Fig. 1	遺跡周辺地図	2
Fig. 2	調査区設定図	3
Fig. 3	第1テストピット	5
Fig. 4	第2・第3テストピット	5
Fig. 5	第4・第5テストピット	6
Fig. 6	堆積土層模式図	7
Fig. 7	土壙墓位置図	9
Fig. 8	A・B土 墓	10
Fig. 9	G 土 壙 墓	10
Fig.10	I 土 壙 墓	10
Fig.11	K 土 壙 墓	11
Fig.12	M 犬 骨	11
Fig.13	土丹敷上面の溝	12
Fig.14	第 1 溝	12
Fig.15	第 2 溝	13
Fig.16	第5・第6溝	14
Fig.17	第1方形竪穴建築址	15
Fig.18	方形竪穴建築址	16
Fig.19	第6方形竪穴建築址	18
Fig.20	壁板組復元模式図	19
Fig.21	第1建物・上段	21
Fig.22	第1建物・下段	22
Fig.23	第 1 井 戸	24
Fig.24	第 2 井 戸	25
Fig.25	第 3 井 戸	25
Fig.26	第 5 井 戸	26
Fig.27	第 6 井 戸	27
Fig.28	第 8 井 戸	27
Fig.29	石 列	28
Fig.30	土 壙	29
Fig.31	先史・古代の遺物	30
Fig.32	青 磁 1	32

Fig.33	青磁 2	34
Fig.34	青磁 3	36
Fig.35	青磁 4	37
Fig.36	青磁 5	39
Fig.37	青磁 6	42
Fig.38	青磁 7	44
Fig.39	白磁1 四耳壺・水注	45
Fig.40	白磁2 玉縁碗・高台付皿・端反碗	46
Fig.41	白磁3 口几皿・碗	48
Fig.42	白磁4 合子・小壺・小皿	50
Fig.43	青白磁1 梅瓶	50
Fig.44	青白磁2 梅瓶蓋・小壺蓋・合子	52
Fig.45	青白磁3 碗・小皿	55
Fig.46	青白磁4 壺・水注・器台等	57
Fig.47	緑釉・二彩	59
Fig.48	黄釉(鉄絵)	60
Fig.49	褐釉	61
Fig.50	その他の舶載陶磁器	62
Fig.51	瀬戸 1	65
Fig.52	瀬戸 2	67
Fig.53	瀬戸 3	68
Fig.54	瀬戸 4	70
Fig.55	瀬戸 5	71
Fig.56	瀬戸 6	73
Fig.57	瀬戸 7	75
Fig.58	入子	76
Fig.59	山茶碗・山皿(粗胎)	77
Fig.60	山茶碗・山皿(精胎)	78
Fig.61	山茶碗窯系捏鉢	80
Fig.62	志野	81
Fig.63	産地不明品	82
Fig.64	常滑 1 甕	83
Fig.65	常滑 2 甕	85
Fig.66	常滑 3 中型・小型壺	86

Fig. 67	炆器類押印拓影	87
Fig. 68	常滑 4 捏鉢	89
Fig. 69	常 滑 5	90
Fig. 70	渥美 1 壺・甕	91
Fig. 71	渥美 2 捏鉢、他	93
Fig. 72	播 鉢	94
Fig. 73	東播地方産須恵質捏鉢	96
Fig. 74	亀山風陶器・須恵質陶器	97
Fig. 75	手 焙 り 1	98
Fig. 76	手 焙 り 2	99
Fig. 77	伊勢系土鍋、他	101
Fig. 78	瓦器・瓦器質土器	102
Fig. 79	かわらけ 1	104
Fig. 80	かわらけ 2	106
Fig. 81	かわらけ 3	107
Fig. 82	かわらけ 4	109
Fig. 83	白かわらけ	111
Fig. 84	瓦器質黒縁皿類	112
Fig. 85	瓦 1	114
Fig. 86	瓦 2	115
Fig. 87	研磨痕のある陶片	116
Fig. 88	土 製 品	117
Fig. 89	硯	119
Fig. 90	砥 石 1	122
Fig. 91	砥 石 2	123
Fig. 92	軽 石 他	123
Fig. 93	滑 石 鍋	124
Fig. 94	滑 石 製 品	126
Fig. 95	温 石	127
Fig. 96	鉄 製 品	129
Fig. 97	鉄 鍋	130
Fig. 98	鉄製品、刀子他	131
Fig. 99	銅 製 品	134
Fig. 100	出土古銭拓影	135

Fig.101	出土古銭拓影 2	136
Fig.102	ガラス製品	140
Fig.103	鑄造関係の遺物	141
Fig.104	溶 範	142
Fig.105	木 製 品	144
Fig.106	漆 製 品	145
Fig.107	骨 製 品 1	146
Fig.108	骨 製 品 2	147

写真目次

P L. 1	1. 調査前全景（東から） 2. 同（西から）
P L. 2	1. 第2テストピット部分（東から） 2. 第3テストピット 土丹敷遺構（南から） 3. 同（東から）
P L. 3	1. 第4テストピット上層（東から） 2. 同、鎌倉石出土状態（北から） 3. 第5 テストピット（西から）
P L. 4	1. 第II次調査区 3. 土丹敷遺構（東から） 2. 同（西から） 3. 土丹敷遺構上 の溝（南から） 4. 同（東から）
P L. 5	1. 第II次調査区全景（最終 東から） 2. 同（西から）
P L. 6	1. 第1方形竪穴建築址（北から） 2. 同遺物出土状況 3. 検出土壙群他（東から） 4. 小土壙出土5群かわらけ
P L. 7	1. 検出柱穴列他（西から） 2. 同（北から） 3. 同（西から） 4. 土壙 井戸 （南から）
P L. 8	1. 銅銭出土状態（II次） 2. II-87土壙（東から） 3. II-4土壙 4. II-71 土壙 遺物出土状況
P L. 9	1. 土層堆積 II-28土壙 2. 同 II-66土壙 3. 同 II-25土壙 4. 同 II- 35土壙
P L. 10	1. 第III次調査区全景西部分（南から） 2. 第III次調査区全景（西から）
P L. 11	1. 第III次調査区全景東部分（南から） 2. 第III次調査区全景（東から）
P L. 12	1. 第1トレンチ 鎌倉石集合（北から） 2. 第1トレンチ全景（東から） 3. 第1トレンチ西端 近世地行層（北から） 4. 同出土志野皿
P L. 13	1. B土壙墓（I次 南から） 2. A、B土壙墓（I次 北から） 3. E土壙墓（東 から）

- PL. 14 1. C土壙墓(Ⅱ次) 2. 同 六道銭出土状況 3. D土壙墓(Ⅱ次 南から)
- PL. 15 1. H土壙墓(Ⅲ次 北から) 2. E土壙墓(Ⅱ次 東から) 3. G土壙墓(Ⅱ次 南から) 4. I土壙墓(Ⅲ次 南から)
- PL. 16 1. 第1溝内人骨出土状況(西から) 2. 同(東から) 3. 同 部分(東から)
- PL. 17 1. 第5溝内 J土壙墓(北から) 2. K犬骨 3. L犬骨
- PL. 18 1. 第1溝(西から) 2. 第6溝(北から) 3. 第8溝(西から)
- PL. 19 1. 第2溝(西から、大雨後の崩落状態) 2. 同 土層堆積(西から) 3. 同 第1井戸との切合い状態(西から) 4. 同 東端の現代攪乱 5. 第5溝(北から)
- PL. 20 1. 第2方形竪穴建築址(東から) 2. 同 覆土上部遺物出土状況 3. 同 北壁の壁板圧痕と小柱穴列(南東から)
- PL. 21 1. 第3方形竪穴建築址(西から) 2. 第4方形竪穴建築址(北から)
- PL. 22 1. 第5方形竪穴建築址(東から) 2. 同(西から) 3. 同 中央部根太木交差状況(西から)
- PL. 23 1. 第5方形竪穴建築址(北から) 2. 同 3. 同 土層堆積状況部分(北から)
- PL. 24 1. 同 中央東西根太木と北側の縦板(北から) 2. 同 北壁板組み痕(南から) 3. 同 北壁に残る棧木と残存する柵穴(南から) 4. 同 根太木下部漆器検出状況(北から)
- PL. 25 1. 同 竪穴覆土上部検出の曲物及び同銭出土状況(北から) 2. 同 覆土下部遺物・出土状況 3. 同 床面(?)青白磁水注片出土状況 4. 同 全景(北東から)
- PL. 26 1. 第1建物(南から) 2. 同(北から) 3. 同 建物東かわらけ出土状況 4. 同 建物西銅銭出土状況
- PL. 27 1. 第1井戸(西から) 2. 同 井戸土層堆積(北から) 3. 同 井戸下部土層堆積(西から) 4. 同 井戸枠に残る銅銭跡
- PL. 28 1. 第2井戸(東から) 2. 同(南から) 3. 同(南西から)
- PL. 29 1. 第3井戸(西から) 2. 同(北から) 3. 同(西から) 4. 同 全景(北から)
- PL. 30 1. 第4井戸(南から) 2. 同 全景(南から) 3. 第5井戸(東から)
- PL. 31 1. 第6井戸青磁皿出土状況(北から) 2. 硯出土状況 3. 同 4. 白地鉄絵片出土状況 5. 5群かわらけ出土状況
- PL. 32 1. 土製小型仏華瓶出土状況 2. 渥美壺出土状況 3. 鉄製品(不明) 4. 銅銭出土状況
- PL. 33 古代
- PL. 34 青磁1、櫛描劃花文碗
- PL. 35 青磁2、櫛描劃花文碗、劃花文碗A、B

- PL. 36 青磁 3、劃花文碗 A、B
- PL. 37 青磁 4、劃花文碗 B、蓮弁文碗
- PL. 38 青磁 5、碗、皿
- PL. 39 青磁 5、碗、鉢、壺、瓶
- PL. 40 白磁 1、壺
- PL. 41 白磁 2、碗
- PL. 42 白磁 3、碗、皿
- PL. 43 白磁 4、口兀皿
- PL. 44 青白磁 1、梅瓶、蓋、皿
- PL. 45 青白磁 2、碗、皿、合子
- PL. 46 青白磁 3、水注、元・明白磁
- PL. 47 青磁釉、天目、白磁鉄絵、黄釉
- PL. 48 黄釉、緑釉
- PL. 49 褐釉
- PL. 50 瀬戸 1、壺、瓶、盤、洗
- PL. 51 瀬戸 2、盤、洗
- PL. 52 瀬戸 3、盤、おろし皿
- PL. 53 瀬戸 4、おろし皿
- PL. 54 瀬戸 5、碗、その他
- PL. 55 瀬戸 6、鉄釉、天目、その他
- PL. 56 瀬戸 7、その他、入子
- PL. 57 山茶碗、皿（美濃系）
- PL. 58 山茶碗、皿
- PL. 59 山茶碗、皿、山茶碗窯系捏鉢
- PL. 60 常滑 1
- PL. 61 常滑 2
- PL. 62 常滑 3
- PL. 63 渥美
- PL. 64 渥美、備前
- PL. 65 魚住、志野、信楽
- PL. 66 亀山、須恵質不明品、すり常滑他
- PL. 67 手焙り
- PL. 68 伊勢系土鍋
- PL. 69 かわらけ 1

- PL. 70 かわらけ 2
- PL. 71 かわらけ 3
- PL. 72 かわらけ 4
- PL. 73 かわらけ 5
- PL. 74 瓦器、瓦器質黒縁皿
- PL. 75 瓦器質黒縁皿、早島式土器
- PL. 76 白かわらけ
- PL. 77 瓦 1
- PL. 78 瓦 2
- PL. 79 土製品
- PL. 80 滑石鍋、滑石製品
- PL. 81 滑石転用硯、滑石スタンプ、陶硯、基石
- PL. 82 砥石、燧石、軽石
- PL. 83 硯
- PL. 84 鉄製品 1、釘、刀子、他
- PL. 85 鉄製品 2、釣、燧金、青銅製品
- PL. 86 鑄造関係遺物
- PL. 87 骨製品 1
- PL. 88 骨製品 2
- PL. 89 木製品 1、曲物
- PL. 90 木製品 2、漆製品
- PL. 91 自然遺物 1、貝、種
- PL. 92 自然遺物 2、動物遺体
- PL. 93 自然遺物 3、動物遺体
- PL. 94 自然遺物 4、動物遺体
- PL. 95 自然遺物 5、動物遺体

表 1. 出土古銭一覧表(1)

2. 出土古銭一覧表(2)

付図 最終遺構全体図

第1章 遺跡の位置及び歴史的環境

遺跡地は鎌倉市市街地の中心路・若宮大路東側、鎌倉中央郵便局北、鎌倉市小町1丁目891番に位置する。

若宮大路は治承四年（1180）に源頼朝が鎌倉に入ってから改修・築造を始めた主要街路の一つであり、鶴岡八幡宮の参拝路としても良く知られるところである。頼朝は寿永元年（1182）には妻政子の安産祈禱のために大路中央部に、大路より一段高い「段葛」を、由井ヶ浜の一の鳥居から八幡宮社頭の三の鳥居までの間に築いている。おそらくこの頃までに主要路である若宮大路は一応の完成をみたものと思われるが、近代になり横須賀線の開通等の要因により二ノ鳥居以南の「段葛」を失い、現在の姿になっている。

『新編相模国風土記稿』などによれば若宮大路には三ヶ所の鳥居の他にそれぞれの近くに上・中・下の三つの下馬橋、「駒留木」（古文書などには釘貫と記してあるとされている）があり、騎馬での社寺乗り入れを禁止していた。

遺跡地周辺をみると、約150m八幡宮寄りには二ノ鳥居があり、現在鎌倉警察署の在る付近（あるいは鎌倉警察署北側の道路）には「小町口」と呼ばれる東西方向の街路が存在していた。この街路は若宮大路と東に平行する小町大路とを結んでいた。この小町大路の北側、八幡宮社頭の三ノ鳥居前を東西に通る「横大路」との間には鎌倉時代には長い間幕府が存在していた。このように鎌倉時代には幕府近くの地でありながら文献等から居住していた住人を推定するのは困難である。「中世鎌倉歴史地図」^(註1)では小町口の南側若宮大路沿いに藤内定員邸が推定されており、『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報・I』^(註2)では小町口南側（鎌倉警察署付近）から本遺跡に至る間を「推定・藤内定員邸」としている。

遺跡地北東に接する大巧寺は長慶山正覚院大巧寺と号する日蓮宗寺院であるが、寺伝によれば、もと真言宗寺院で大行寺と称し鎌倉市十二所に存った。その地は源頼朝が軍の評議をしたところであるといい、現在の地には元応二年（1320）に移ったとされている。日蓮宗への改宗は日蓮が妙本寺にいたときになされ、文永十一年（1274）であったという。

遺跡地周辺の発掘調査は、昭和49年の鎌倉市中央郵便局用地以来度々実施されており、部分的な発掘調査が多いながら、数多くの遺構が検出されており、二ノ鳥居周辺部での鎌倉時代、室町時代等中世鎌倉の市街地の様相が明らかにされつつある。

註1 阿部正道、安田三郎 「中世鎌倉歴史地図」第2図・小町大町地区

註2 1983 鎌倉市教育委員会



Fig. 1 遺跡周辺地図

第2章 調査の経過

I 調査の経過

本遺跡に対する発掘調査は本調査を含めて4回にわたり実施されている。すなわち、試掘調査1回、本調査3回（うち1回は拡張調査）である。本調査の実施回数が多いのは調査期間の問題もあるが、最大の要因としては掘削土を場内で処理せざるをえなかったことがあげられる。これは、仮に掘削土を一旦場外に搬出した場合、又埋め戻さなくてはならず経費が莫大なものになり、発掘調査経費そのものが圧迫されてしまうためである。

第I次試掘は昭和53年3月に斉木秀雄の他に河野真知郎、笠原穂高、上田明美、高橋邦男らが参加して実施された。試掘調査の結果については後項で触れているのがここでは除くことにするが、建築予定地内に広く遺構が分布していることが確認された。

第I次調査の結果、建設予定地内に比較的密度が高く中世の遺構の存在が予測できたため鎌倉市教育委員会文化財保護課と教育文化施設建築の担当部局である教育委員会社会教育課との間で協議が重ねられ建設予定地全面に対する発掘調査の実施が決定された。

本調査は昭和53年8月に開始されたが、第I次調査の結果及び場内の掘削土収容能力を考慮し、用地内北側に確認された土丹版築面、土壇墓等の調査と南側の暗褐色粘質土層上面の遺構群の調査とをそれぞれ別個に実施することとした。

第II次調査は同年8月～11月にかけて実施された。調査区は土壇墓の集中が予測された第2テストピットを中心にして東は第3テストピット、西は大巧寺山門付近にかけて、北側の私道沿いに設定した。その結果溝、道路状遺構、中世～近世にかけての土壇墓群が検出された。それらの調査の後の一部を除いて暗褐色粘土層上の遺構群の調査を行ったが、その面でも井戸、方形竪穴建築址、土壇、礎石等多くの遺構が検出された。

第III次調査は同年12月～昭和54年6月にかけて実施された。調査区は、数多くの遺構の存在が予測されたため、場内掘削土収容能力限界を考慮して建設予定地南側に設定した。

調査では数多くの溝の他に井戸、方形竪穴建築地、柱穴、土壇、礎石建築址等が検出された。さらに土壇墓が多く確認され、墓域の広がりも把握できた。礎石建物の規模確認のため拡張調査区は東側に設定したが、掘削土の関係もあり十分な広さが確保できなかった。

建設予定地に対するすべての発掘調査は昭和54年6月に終了したが、未調査部分が多く残ってしまい、調査方法も含め反省すべき点が多い調査であったとの感が強い。

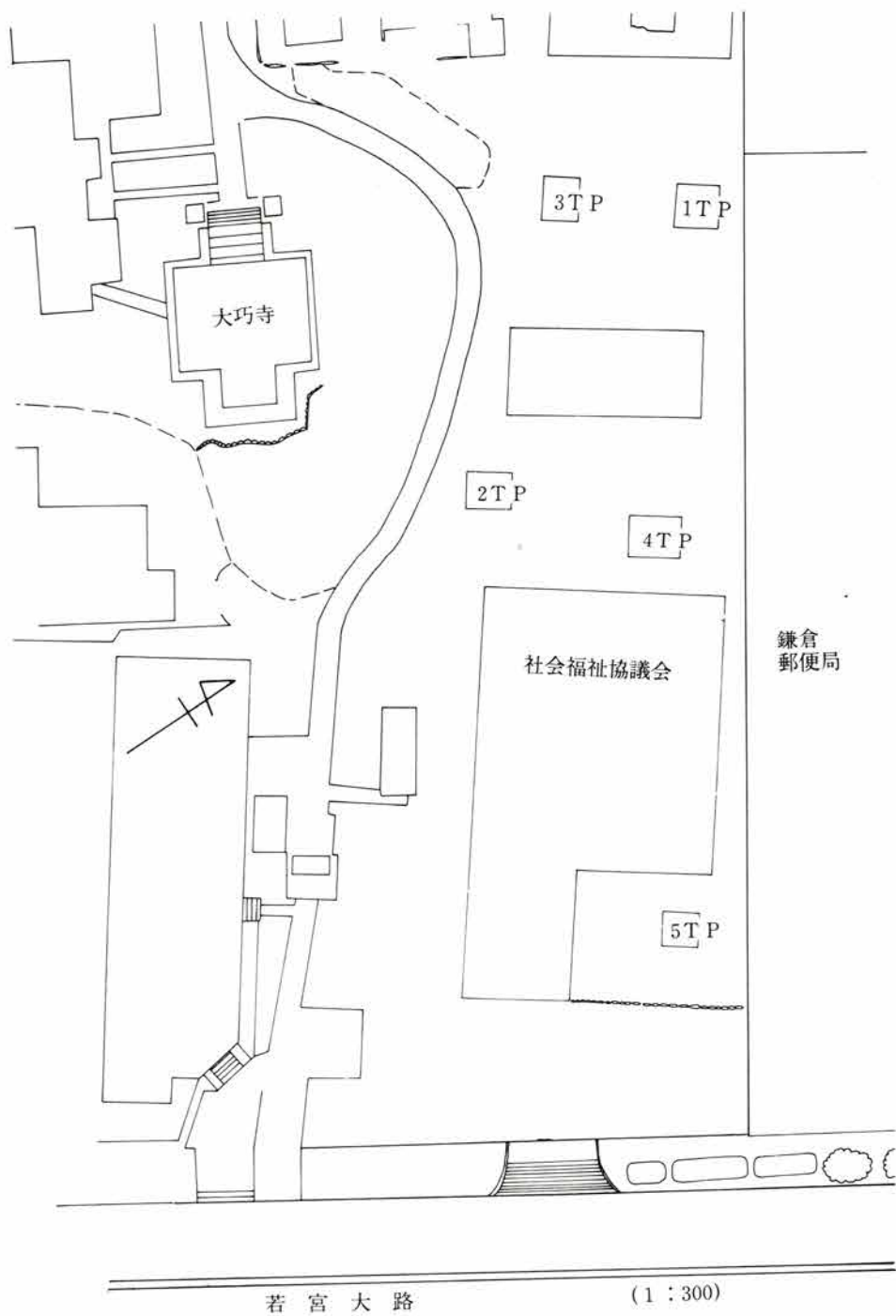


Fig. 2 試掘調査区設定図

II. 試掘調査の結果

本遺跡に対する試掘調査は昭和53年3月に教育文化施設建設用地試掘調査団（団長齋木秀雄）によって実施された。試掘調査では鎌倉市社会福祉協議会等の既存建物、旧鎌倉市役所第四分庁舎の基礎コンクリート等のため広範囲の調査は困難であったが、敷地内東端および中央部の南北にそれぞれ1箇所、西端（若宮大路側）南に1箇所の計5箇所にトレンチを設定した。

以下、試掘各トレンチ（第1～第5トレンチ）について記していくが、出土した遺物は本調査のものと一緒に一括して取り扱ったためここでは触れないこととする。

(1) 第1テストピット

旧建物の地下室らしきものの存ったところ（現地表ではコンクリートは見られなかった）で、地表下1.3mまで現代攪乱が及んでいる。現代攪乱を除去すると若干の中世遺物包含の堆積がみられ、その下は中世基盤土層・暗褐色粘質土層となる。暗褐色粘質土層上からは小土壌の下部（上部のほとんどは削平を受けている）が1基検出された。土壌は径45cm程の不整円形を呈し、覆土からは釘、常滑小型片口壺（Fig.69-1）が出土した。

(2) 第2テストピット

設定規模は4m×4mであったが、現代攪乱（コンクリート）が部分的に地表下1.6mまで達していたため、調査面積は極く狭いものとなってしまった。ここでは地表下1m、1.5mと2時期の生活面が確認された。

上層の生活面は破碎泥岩（土丹、以下土丹と言

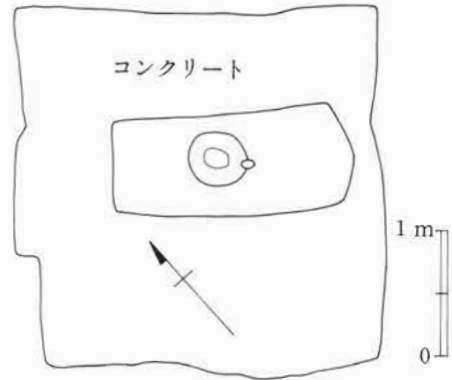
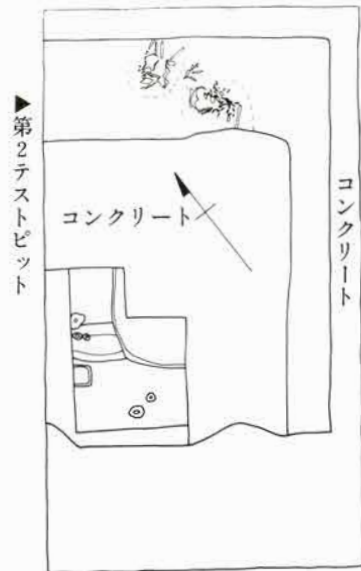


Fig. 3 第1テストピット



▼第3テストピット

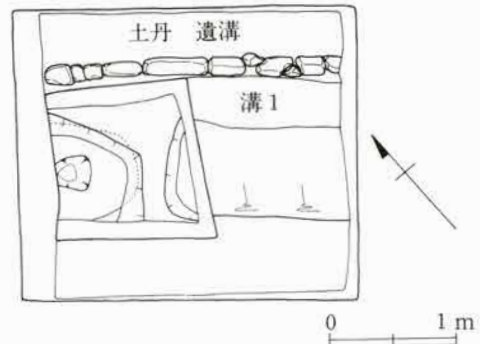


Fig. 4 第2・第3テストピット

う)を固めた良好な面で2基の土壇墓が検出された。土壇墓はいずれも現代攪乱によって一部を破壊されており不明瞭な点もあるが、共に側臥屈葬と思われる。土壇墓からの出土遺物は確認できなかった。

下層の生活面は暗褐色粘質土層上面を使用しており、土壇、柱穴、溝等が検出された。

(3) 第3テストピット

地表下0.8mで良好な土丹版築地行面が検出された。地行は3～4期に分けて行われているらしく、版築面、暗褐色土層が数枚互層状にみられた。地行面の南側は上幅1m、深さ0.8mの溝になっており、地行面南端、溝北岸には大形の土丹塊を石垣状に積み上げ、土止めとしている。この溝の方向はN-76°-Wで、若宮大路と直交方向ではあるがやや斜交している。溝南岸および溝底からは同遺構より古い時代の土層が2基検出され、さらに、地表下1.7mの深さに暗褐色粘質土層上面を使用した生活面の存在も確認された。土壇覆土からは多量の木片が出土した。

(4) 第4テストピット

地表下1.4m付近まで現代攪乱が及んでいるが、その下10cm、30cmにそれぞれ生活面を確認した。上層の面は土丹を使用した版築面ではなく、砂を多く含む、暗褐色土層で軟弱である。砂質凝灰岩切石(鎌倉石、以下鎌倉石と言う)が2石検出された。この2石の鎌倉石は「L」字型に配されており、何らかの構築物の一部と考えられる。下層の面は暗褐色粘質土層上面を使用した面であり、土壇等が検出された。

(5) 第5テストピット

第1テストピット同様、地表面では確認できない現代攪乱(コンクリート)があり設定規模(3m×3m)より狭い調査である。地表下1.5mで暗褐色粘質土層上面に達した。上部の遺物包含層は30cmほど堆積しているが、攪乱が激しい。暗褐色粘質土層上面からは土壇、柱穴等が検出された。遺物の出土量は少ない。

調査の結果、第2、第3テストピットを中心とした敷地内北側部分に、土壇墓を伴う土丹版築面の広がり把握されたが、南側部分では現代攪乱が深くまで及んでおり、一部を除き、中世基盤層上面まで遺構が検出されない事が判明した。

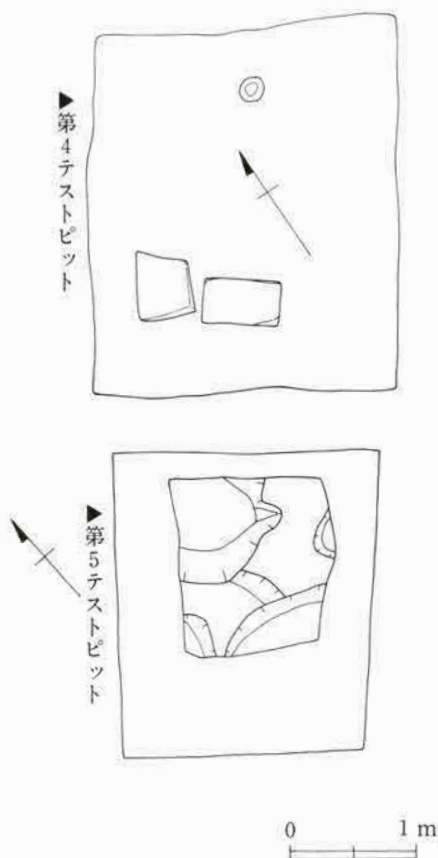


Fig. 5 第4・第5テストピット

III. 堆積土層

遺跡地の堆積土層は大きく6層に分れる。このうち下部2層は中世無遺物層である。

第1層 表土、現代攪乱土層

第2層 細かい土丹を多く含む暗褐色土。遺物を多く含む。

第3層 やや砂質に富み、土丹は少ない。色は黒褐色、遺物は多くない。

第4層 下層の第5層と第3層との中間的な層である。遺物は極く少量出土する。

第5層 暗褐色粘質土。鎌倉市内の中世基盤土層である。本土層中に弥生時代の住居址の検出された遺跡もある。

第6層 黄褐色砂層。遺構の底面はほとんどこの層中に掘り込まれている。

この堆積土層は、周辺遺跡も含め市内各遺構に共通して認められる。しかし第5層堆積時の凸凹により2～4層の厚さが異なっている。若宮大路付近での第5層の上面レベルをみると、本遺跡地を含む大路東側では海拔6～7m、西側、二ノ鳥居西遺跡付近では同4.5～5mを測る。

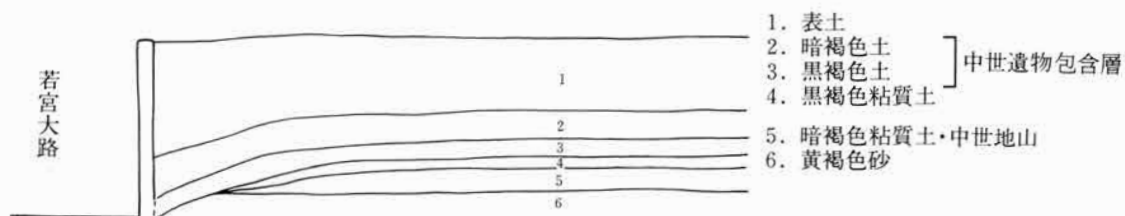


Fig. 6 堆積土層模式図

第3章 検出された遺構

第1調査区、第2調査区から溝、井戸、方形竪穴建築址、土壌、土壌墓、礎石建築址等数多くの遺構が検出されたが、これらの遺構は一部を除きすべて暗褐色粘質土層上で確認、調査された。これは近世遺構の攪乱が激しく、良好な面の堆積が破壊されているせいでもあるが、とりあえずここでは暗褐色粘質土層より上位に検出された遺構から順次説明を加えていくことにする。この順は建築年代の新・旧を示すものではない。検出された主要遺構間の新旧関係については後章（第5章）で復元を試みることにする。

以下、検出された土壌墓、溝、井戸等について説明を加えていくが、井戸、方形竪穴建築址を除く遺構の番号は調査時に使用したものをそのまま使用した。そのため土壌番号では第1調査区、第2調査区間で番号の重複があるが、これらを説明するにあたっては第1調査区をⅡ（試掘調査がⅠ）、第2調査区をⅢとした。井戸、方形竪穴建築址はそれぞれ新たに1から番号を附した。

I. 土壌墓

第Ⅱ次調査区中心に11基の土壌墓が検出された。さらに埋葬されたものかは判然としないが2体の犬が検出された。犬の埋葬例としては市内では南御門遺跡^(註1)に1例知られており、本遺跡のものも土壌は検出されなかったものの、骨格の遺存状態等から埋葬されたものとしてこの項で扱った。土壌墓の調査区内での分布をみると、第Ⅱ次調査区西半分付近に集中しており、第Ⅲ次調査区内ではさらに若宮大路付近まで広がっている。各個の土壌墓については以下で説明を加えていくことにするが、出土遺物（埋納遺物）からみると、かなり長期間にわたり当地に墓地が営まれていたようである。

以下、各土壌墓について説明を加えていくことにするが、土壌墓はすべて土葬である。又、骨の小片がわずかに検出できただけの土壌墓（土壌も明確でない）は図面、説明を割愛した。

(1) A土壌墓

第Ⅰ次調査第2テストピットで検出された。南東部でB土壌墓と切り合っているが新旧関係は明確でない。又北半分は現代基礎コンクリート下部に入ってしまったっており全体の調査は不可能であった。土壌は東西58～80cm、南北65cm以上、出土人骨からみて北頭位右側臥屈葬であったと思われる。頭位はN-38°-Eに近い。副装品は確認できなかった。

(2) B土壌墓

A土壌墓と切り合って検出された。南側を現代基礎コンクリートにより失う。土壌は底面近くのみ残っているが、東西57cm、南北40cm以上を測る。人骨の残存状態は悪く葬位は不明瞭であるが、頭骨、肋骨等の検出状況からみて座葬であった可能性が強い。副葬品と思われる遺物は出土していないが、周辺から、かわらけ、鉄釘が出土している。

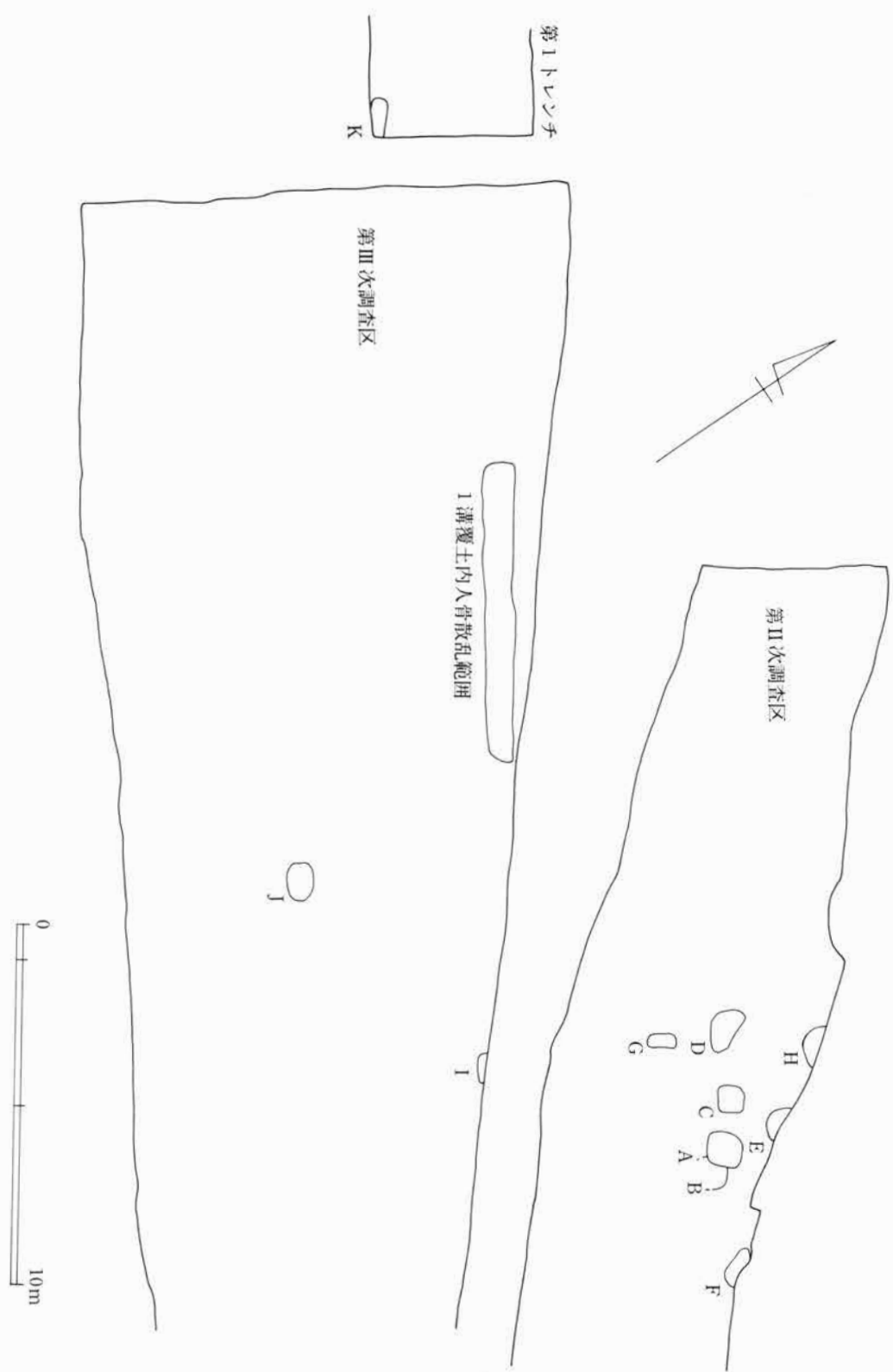


Fig. 7 土坟墓位置図

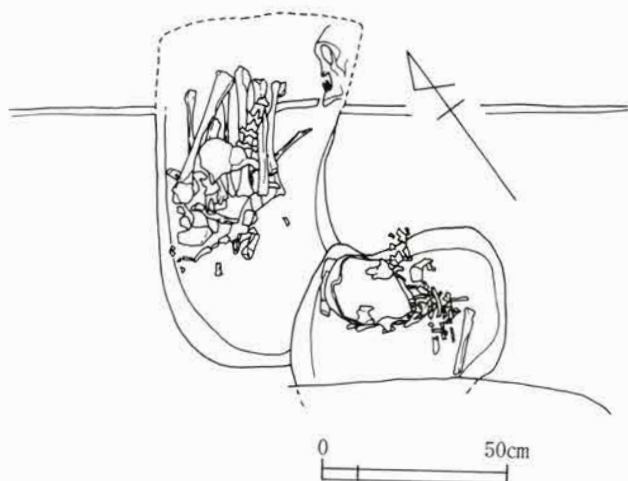


Fig. 8 A・B土塚墓

(3) C土塚墓

比較的良好に残存していた土塚墓である。土塚は東西72cm、南北76cmの平面方形を呈し、人骨の出土状況から南向きの座葬と思われる。(P.L.14-1、2)。埋葬時の箱(棺箱)は検出できなかったが、土塚内から数本の鉄釘が出土しており、I土塚墓同様に棺箱が使用されていたものと思われる。副葬品としては顔の下部付近から寛永通宝が6枚出土している。六道銭と思われるが、これらの銭は銀薄状のものでくるまれていた痕跡があり、又銭の位置からすると埋葬時には首からつり下げていたものと考えられる。

(4) G土塚墓

第II次調査区現代コンクリート基礎内側で検出された。西半分を失うため十分な調査はできなかったが、骨の出土状態などからみて南向きの座葬であったと思われる。土塚は南北79cm、東西35cm以上を測り、平面形は円形に近い方形を呈していたと思われる。副葬品は検出できなかった。

(5) H土塚墓

第II次調査区北壁際で検出された。土塚墓のほとんどは北側調査区外にあり(道路際地下)十分な調査ができず、土塚規模は不明。人骨の出土状態からみると北頭位仰臥屈葬であったと思われる。頭骨はほぼ真北に向く。副葬品としては6枚の六道銭(寛永通宝)が出土している。

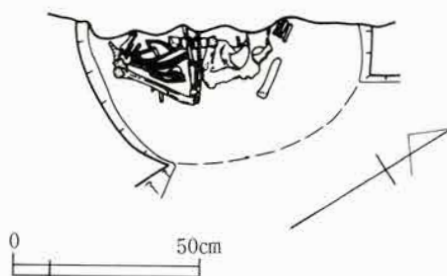


Fig. 9 G土塚墓

(6) I土塚墓

第III次調査区中央北壁際で検出された。北半分を現代基礎コンクリートによって破壊されており不十分な調査しか行えなかった。人骨の遺存状態は不良であるが、出土状態から南向きの座葬であったと思われる。土塚は把握できなかったが、木材の圧痕がわずかに残っており遺体を納めた棺の存在が判明した。箱は東西61cm、南北45cm以上を測る。副葬品は検出されなかったが数本の鉄釘、かわらけ小片が土塚内より出土している。



Fig. 10 I土塚墓

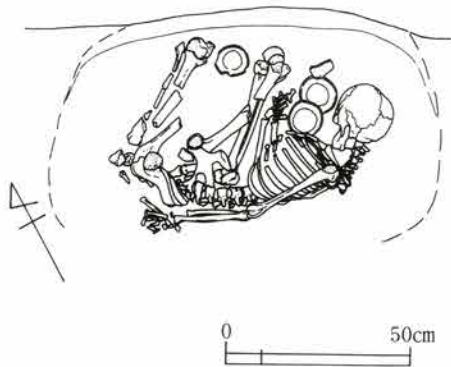


Fig. 11 K土壇墓

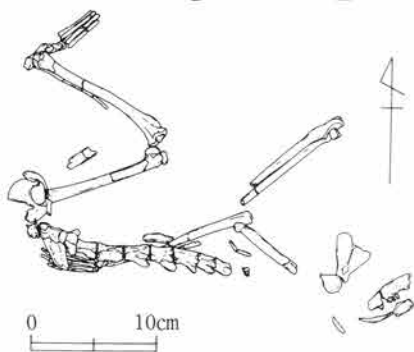


Fig. 12 M犬骨

註. 南御門遺跡 1979年調査、未報告

II. 土丹敷遺構

(1)土丹敷

第I次調査第3テストピットおよび第II次調査で検出された遺構である。本遺構に類似するものは千葉地遺跡、本覚寺旧境内遺跡等で検出されており、それぞれに「道路」、「道路状遺構」という名称を与られている。本例もそれらと同様の性格の遺構と考えられるが、検出されたのが部分的であることなどからここでは標記の名称を使用した。

遺構は第1溝（第II次調査区）北側に、ほぼ平行して検出された。第1溝北岸の一部では土丹敷遺構の南側土止めとも思われる人頭大の土丹が積み上げられており、本遺構と第1溝はほとんど同時期に構築あるいは使用されたものと思われる。土丹敷の範囲は南北2.5m以上、東西18m（それ以外の東西では不明瞭になるか調査区外へ延びている）を測る。構築をみると土丹敷は3～4層が版築されており、各版築面間には砂層の堆積が認められた。砂層は厚いところで3cm、薄いところでは0.5～1cmであるが、千葉地遺跡検出の道路でも数期にわたる使用の各版築面（道路面）上には砂の堆積がみられる。本例もそれと同様、数期にわたる修改築がなされたものであろう。又、千葉地遺跡例では道路両側に溝が検出されている。

(7) K土壇墓

第III次調査区第1トレンチで検出された。土壇は第2溝覆土内に掘り込まれており、把握できなかったが、第2溝北壁に残存する土壇の一部から推定すると東西1m、南北60～80cmの隅丸長方形であったと思われる。人骨の残りは非常に良好で足指骨を除くすべてが確認できた。葬位は東頭位右側臥屈葬、主軸はN-95°-E。副葬品は六銅銭は検出されなかったものの胸と顔の前に2枚、両脚の間に1枚の計3枚のかわらけが出土した。出土したかわらけは1群に属するもので、戦国時代(15世紀後半～16世紀前半)の年代が考えられている。

以上、主要土壇墓について述べてきたが、その他に第1溝（第III次）覆土中位からは2～3体分の土葬骨が長さ6mにわたって散乱状態で検出されている。伴出遺物がないため人骨の廃棄時期は把握できないが、第1溝の終末時期にはすでに土壇墓群の成立が始まっていたものと考えられる。

(2) 土丹敷上面の溝

土丹敷遺構上から、2期目の面上で検出された。上幅50~75cm、深さ45~50cm、主軸N-45°-Eを測る。残存状況は良くないが東西両壁に板(横積み)痕がみられることから、当初は木組み溝であったと思われる。調査区内で約2mにわたり検出され、南側は第1溝に合流、北はさらに調査区外に延びる。土丹敷遺構に伴うものであるが、先の千葉地遺跡検出の道路では直交方向・道路上の溝は検出されていない。

III. 溝

第1調査区で2本、第2調査区で9本の計11本の溝が検出された。検出されたそれぞれの溝は規模、断面形状等に変化が認められるが、主軸方向で大別すると、若宮大路に平行方向の溝と直交方向の溝とに分れる。前者は6本、後者は5本であるが、直交方向の溝のうち第1調査区の1本と第2調査区の1本は方向、規模、覆土が類似しており同一と考えられるので、最終的には平行方向6本、直交方向4本の計10本であろう。

以下、各溝について説明、記述を加えていくことにするが、溝の番号は第2調査区から第1調査区の、調査順に附し、記述中の溝底面レベルは海拔数値で示した。又、幅と深さの記述にあたっては、基本的には土層図を使用し原形を失わないように務めたが、土層図のないものについては確認面での規模を示した。

(1) 第1溝

第III次調査区北側で約30m検出され、東端は近代基礎コンクリートで失われ、西端は第1トレンチ内若宮大路付近まで続く。磁北との差はN-53°-Wである。溝幅、深さは14ライン付近(溝幅の把握できる東端)で80cm、37cm、西壁付近で100cm、70cmを測るが、西壁の土層堆積状況を観察すると本来は上幅1.7m、深さ1m(西壁近く)を測る大きな溝であったことが判明した。溝底面は14ラ

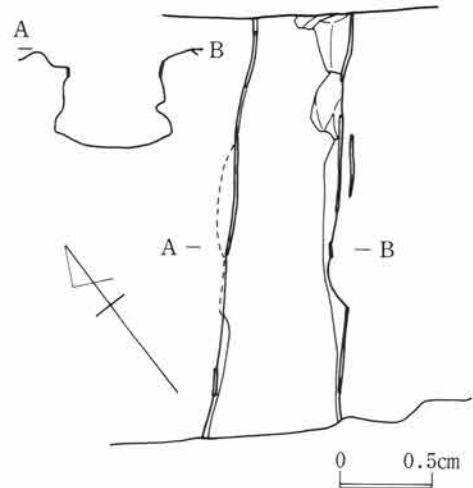


Fig. 13 土丹敷上面の溝

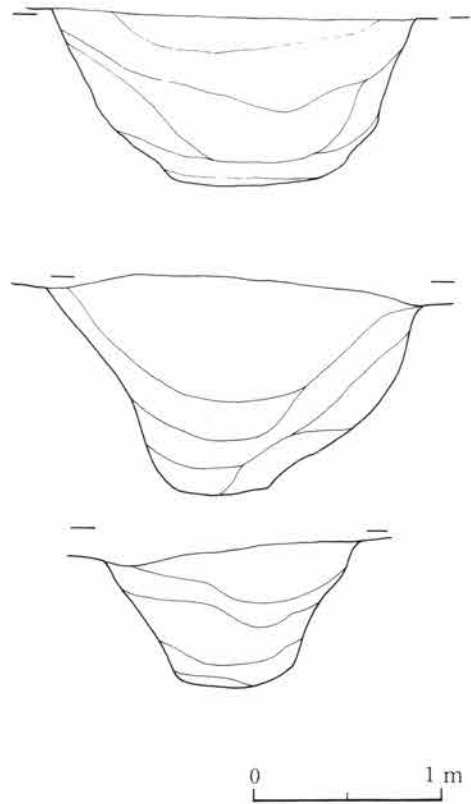


Fig. 14 第1溝

イン付近より西壁近くが約30cm低い。東より西へ傾斜（流れ）する溝である。断面はやや「V」字状を呈する。

溝覆土からの遺物出土状況は興味深く、12ラインから18ラインにかけての約12mにわたりかわらけなどと共に入骨片が出土した。これらの人骨は砕けたものが多く、また頭骨片が数メートルにわたり散乱するなどの状況にあり、埋葬骨ではなく、この溝を埋めるにあたって周辺にあった墓地の骨を投げ入れたものと思われた。投げ込まれた人骨は出土骨片から1～2体分と思われる。

(2) 第2溝

第Ⅲ次調査区やや北寄りDライン付近で検出された。若宮大路側第1トレンチ内でもその延長が検出され調査部分は約30mの長さにあたるが、調査区西壁より20m、13ライン付近で攪乱（現代）により破壊を受け、それより東では全く検出されない。第1トレンチ内でもほぼ規模が変化せず、若宮大路付近まで続き、近世の井戸によって失われる。若宮大路との関係は不明である。

溝幅、深さは14ラインで130cm、70cm、調査区西壁付近で、180cm、90cmを測る。溝底面レベルは14ラインで5.6m（海拔）、西壁近くで5.5m（海拔）と西に傾斜している。西壁土層堆積状況を観察し、第2溝の規模を復元すると、西壁付近では上幅2m、深さ1.6m、下幅1mの規模となる。断面は「U」字状を呈する。溝覆土からは多量の鎌倉石が検出された。

(3) 第3溝

第1溝南約7m、調査区南壁に沿って検出された。部分的な調査であり溝幅、深さは不明であるが、確認幅90～120cm、深さ70cmを測る。磁北との差は第1、第2溝とほぼ同様と考えられる。西は調査区外に延びるが、東では第5、第6溝以東には検出されない。

(4) 第4溝

第Ⅲ次調査、第2溝、第3溝との間約10mの長さで検出した。第3溝以南は調査区外の為不明であるが、第2溝以北では検出されなかった。磁北との差はN-38°-Eである。溝幅、深さは第2溝付近で40cm、16cm、第3溝付近で30cm、30cmを測る。底面レベルは北端で6.58m（海拔）、南端で6.69m（海拔）を測り、やや北にむかって傾斜している。断面は「U」字状を呈する。

(5) 第5溝

第Ⅲ次調査区13ラインに沿って検出された。南、調査区外へさらに延び、北はEライン付近で現代

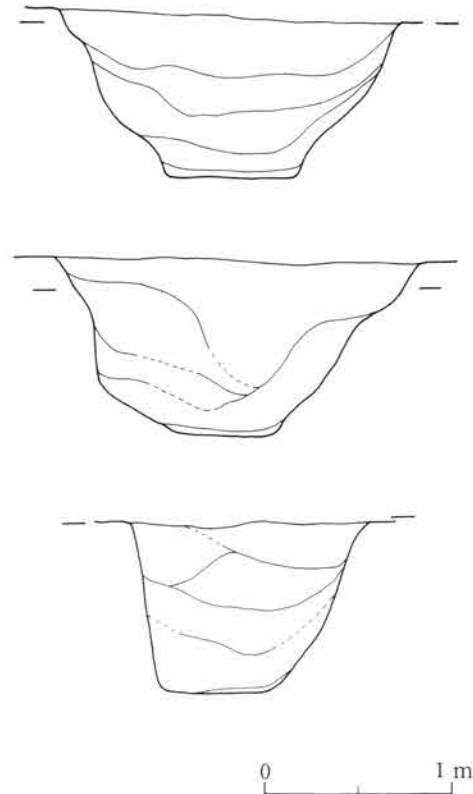


Fig. 15 第2溝

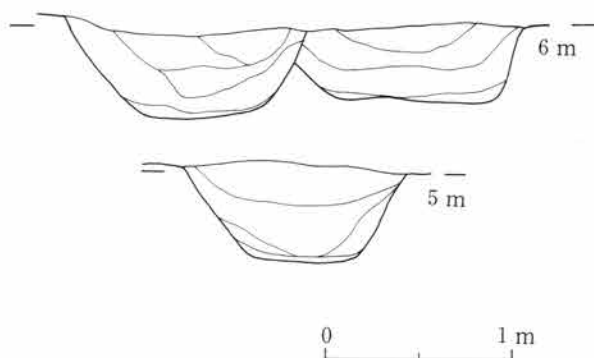


Fig. 16 第5・第6溝

の攪乱により失われている。攪乱以北(第1溝北)では検出されなかった。溝幅、深さはEライン付近で、110cm、40cm、南壁近くで130cm、65cmを測る。溝底面レベルはEラインで5.6m(海拔)、南壁近くで5.5m(海拔)とやや南傾斜である。

溝覆土内Fライン付近では人骨が出土した。この人骨は埋葬されたものであると思われる(土壌は検出、確認できなかったが)。このような例は第1トレンチ内2溝覆土にも見られた。

(6) 第6溝

第5溝直下、ほぼ同軸で調査区南壁から北壁まで検出された。さらに南北に延びるものと思われるが、第II次調査区では検出されていない。磁北との差はN-41°-Eである。溝幅、深さはそれぞれ北壁際1.2m、25cm、南壁際1.4m、68cmを測り、南壁に向かってやや広く、深くなっている。また海拔レベルでの底面レベルは南壁際で約12cm深くなっている。断面形は「U」字状を呈し、覆土には地山(暗褐色粘質土層)ブロックが多量に混入している。

(7) 第7溝

第III調査区、東側拡張区で検出された。磁北との差はN-39°-Eである。調査区南壁から北壁まで検出され、さらに南北に延びるが、第2次調査区では検出されなかった。溝幅、深さは北壁際で70cm、26cm、南壁際で70cm、25cmを測る。南端・北端での溝幅の変化はみられないが、底面は北にむかってゆるやかに傾斜するようである。断面は「U」字状を呈す。溝東岸の斜面には3口の柱穴が検出された。各柱穴は径30cm、深さ30cmをはかる小柱穴であるが、溝のラインにほぼ一致して並んでいる。柱穴間の距離は北から1.3m、2.3mを測る。

(8) 第8溝

第III調査区第1溝の北1.3~2mで、ほぼ同方向に検出されたが、第II調査区では検出されなかった。

上幅80cm、下幅15~25cm、深さ40cmを測るが、第II調査区西壁土層堆積をみると上幅1m以上であったと思われる。覆土は暗褐色粘質土層を主体と少量の炭化物、かわらけ片を含む土層であるが粘性は非常に強い。本遺跡検出の各溝覆土と比較すると第6溝に類似する。

以上、各溝について説明を加えてきたが、後章での各遺構の組合せを行うまえに、ここで各溝の同時使用(セット)について簡単に述べることにする。

覆土、出土遺物等からみると東西方向の溝では第II次、第III次調査区の第1溝が同一である。また各溝では第2、第5溝および第6、第8溝が同時期に使用され、若宮大路際の小区画を形成しているようである。第3溝、第4溝については不確定であるが第1溝との関係が考えられる。第3溝は出土遺物が少なく不明な点が多いが、第1溝と同時期の可能性がある。

IV. 方形竪穴建築址

第I調査区1基、第II調査区5基の計6基検出された。5基検出された第II調査区では井戸のように偏在することはなく、調査区東から西まで広範囲にわたってみられた。これらの方形竪穴建築址は本遺跡の堆積土層、標高のためか壁板等が良好な状態で残っているものはなかった。

以下、検出された各方形竪穴建築址について記述を加えていくが、記述中の床面レベルは海拔数値で示した。

(1) 第1方形竪穴建築址

II次調査区ほぼ中央部で検出された。南東部分を現代建物の基礎コンクリートによって破壊されているが、壁高70cm、南北3m（下幅2.8m）、東西2.5m（下幅2.4m）、床面レベル4.83mを測る。床面は暗褐色粘質土層中に構築され平坦であるが、古代の住居址の床面のごとく固くはない。壁板及び床板の痕跡は認められなかったが、西壁及び南壁直下には上幅15~20cm、深さ2~6cmの溝が検出された。又、南西隅では1口の柱穴、そのやや北寄りに安山岩がそれぞれ検出された。安山岩の上面は平坦ではあるが床面より高くに位置し、柱穴は非常に浅く、本建築址に直接伴うものとは考えにくい。東壁での計測ではN-28°-Eを測る。

覆土からは、口元の白磁片、山茶碗窯系のこね鉢片が出土している。

(2) 第2方形竪穴建築址（1土）

14Eグリットで検出された。平面形は東西で4m、南北2.1mの長方形を呈し壁高65cm、南北軸N-30°-Eを測る。南西部で第2井戸を破壊している。床面は黄褐色砂層中に構築され軟弱、平坦であるが、やや中央がくぼむ。床レベルは5.2mを測る。壁あるいは床面では木材の圧痕等も検出できなかった。又、床面では径5cm前後、深さ10~25cmの小柱穴が5口検出されたが、これらの小柱穴は建築址南半分に集中しているものの規則的な配置は認められない。丸杭を打ち込んだ痕と思われる。

(3) 第3方形竪穴建築址（38土）

18Fグリットで検出された。南北1.9m、東西2.6mの長方形を呈し、壁高75cm、床面レベル5.1m~5.2m、床面積約4.3m²を測る。南北軸はN-38°-E。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、床面は黄褐色砂層中に構築され、平坦ではあるがやや中央がくぼむ。壁板等の残存状態は非常に悪く、北壁の一部で壁板痕が検出されたにすぎない。

床面には2基の小土壙が残り、又東西南北各壁

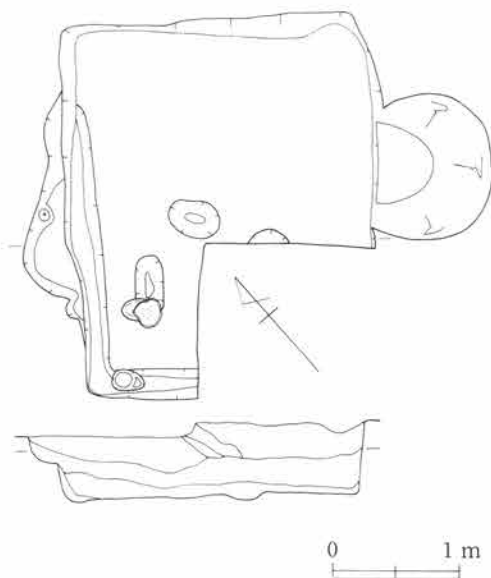
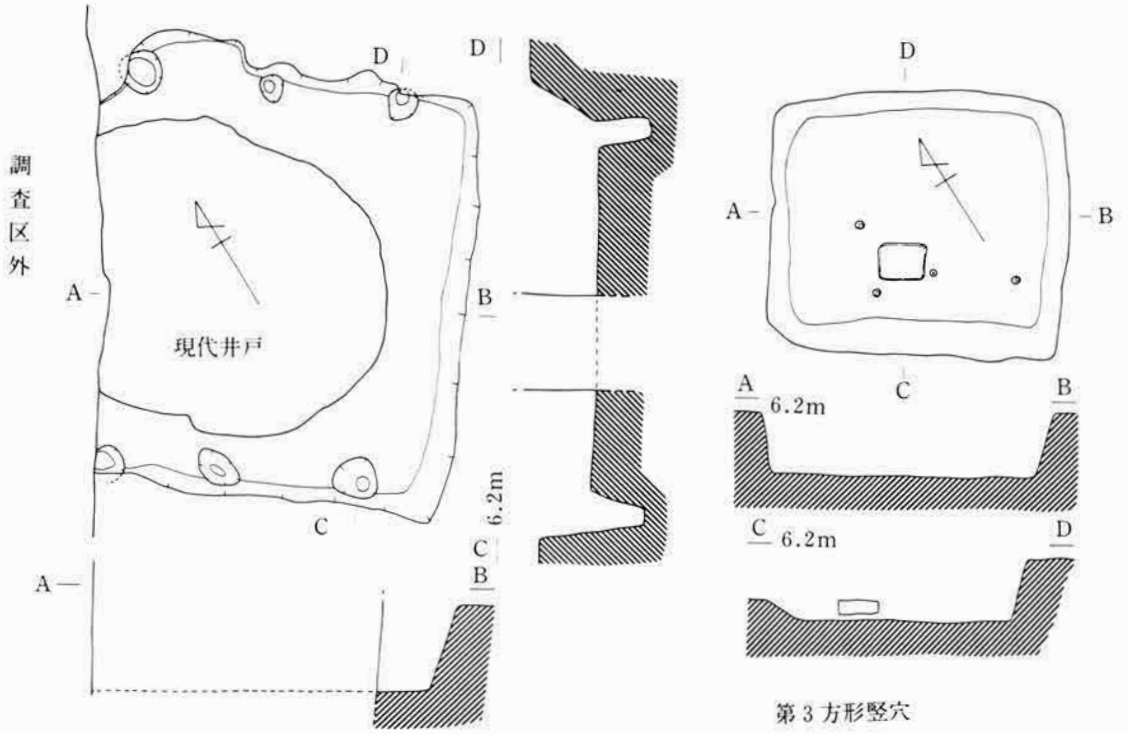


Fig. 17 第1方形竪穴建築址

第4 方形竖穴

第2 方形竖穴



第3 方形竖穴

第5 方形竖穴

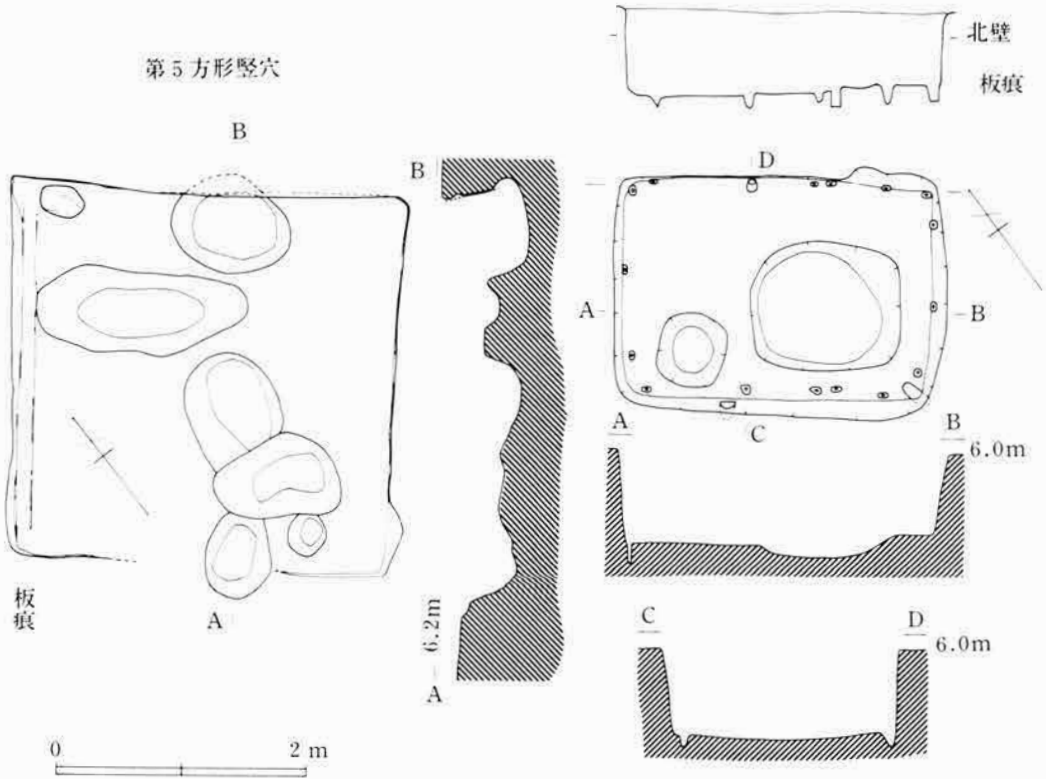


Fig. 18 方形竖穴建筑址

直下床面上には17口の小柱穴が検出された。小柱穴は径10cm前後の円形、ないしは方形を呈するもので、深さは浅いもので9cm、深いもので25cmを測る。土壌は浅く、断面すり鉢状を呈するもので焼土等は検出されていない。

残存板痕等から本建築址の木組み（壁板）の復元を試みると、北壁で検出された板痕は、板を横積みにした状態であることが確認されており、これからみると壁板を横積みにした後、壁直下の小柱穴に打ち込んだ杭でこれらを支えたものと思われる。小柱穴は北壁で6口、西壁3口、南壁5口、東壁3口検出されており、それぞれの小柱穴は東西、南北でほぼ同位置に存る。

(4) 第4方形竪穴建築址 (92土)

21E、Fグリットで検出された。さらに調査区外西へ延びるため全体規模は知り得ないが、調査規模で東西2.9m、南北3.4m、壁高70cmを測る。平面形は方形を呈していたものと思われるが、北壁は崩落のためかゆがみがある。南北軸はN-38°-E、第4溝、第6溝とほぼ同軸である。床面は黄褐色砂層中に構築され軟弱である。又床面の大部分を現代井戸により破壊されてしまっており平坦であったかどうかは判然としないが、やや中央部に向かって傾斜していたようである。床面レベルは攪乱付近で5.4mである。壁、床には木材の圧痕等はみられなかったが、北壁直下に3口、南壁直下に3口の計6口の柱穴が検出された。壁板を支える柄柱の掘り方と思われる。それぞれの柱穴は長軸40cm程の不整形円形を呈し深さは浅いもので10cm、深いもので40cmを測り、南北ほぼ同位置に約1mの間隔で配されている。

(5) 第5方形竪穴建築址 (287土)

2Eグリットで検出された。非常に残存状態が悪く全体形、構築等に疑問が多く残るが、(壁)板痕内部規模で東西3m、南北3.1mを測る。壁高20cm、床面レベル5.2m。床面は暗褐色粘質土層中に構築されており、軟弱、平坦であるが後世の土壌が5基が掘り込まれており遺存状態は悪い。

壁板はそれぞれの壁で圧痕状に確認された。壁板の支えとしての柱穴(柱)、棧木痕等は検出できなかったが、北西隅には安山岩が1石、北壁、西壁の壁板を支えるように置かれ、又、西壁では壁直下に幅10～15cmの板(あるいは角)材の圧痕が認められた。この板痕には柄穴等はみられなかったが、おそらくは壁板を支える部材の一部であったと思われる。

南壁中央部は掘り込み壁が不明瞭になり、やや張り出し状を呈しているが、これは他遺跡で検出されている「入口」状の施設の跡とも考えられる。

(6) 第6方形竪穴建築址 (166土)

第Ⅲ次調査区東側拡張区で検出された。部分的(南側)に現代基礎コンクリートに覆われているが、使用木材、掘り方共に残存状態良好である。

以下、検出された掘り方、木組み(壁、床)について説明を加え、その後に若干のまとめを行うこととする。

A. 掘り方

暗褐色粘土層上面で検出したが、深さ90cm、東西4.1m、南北3.35mを測る。底面レベル5.0～

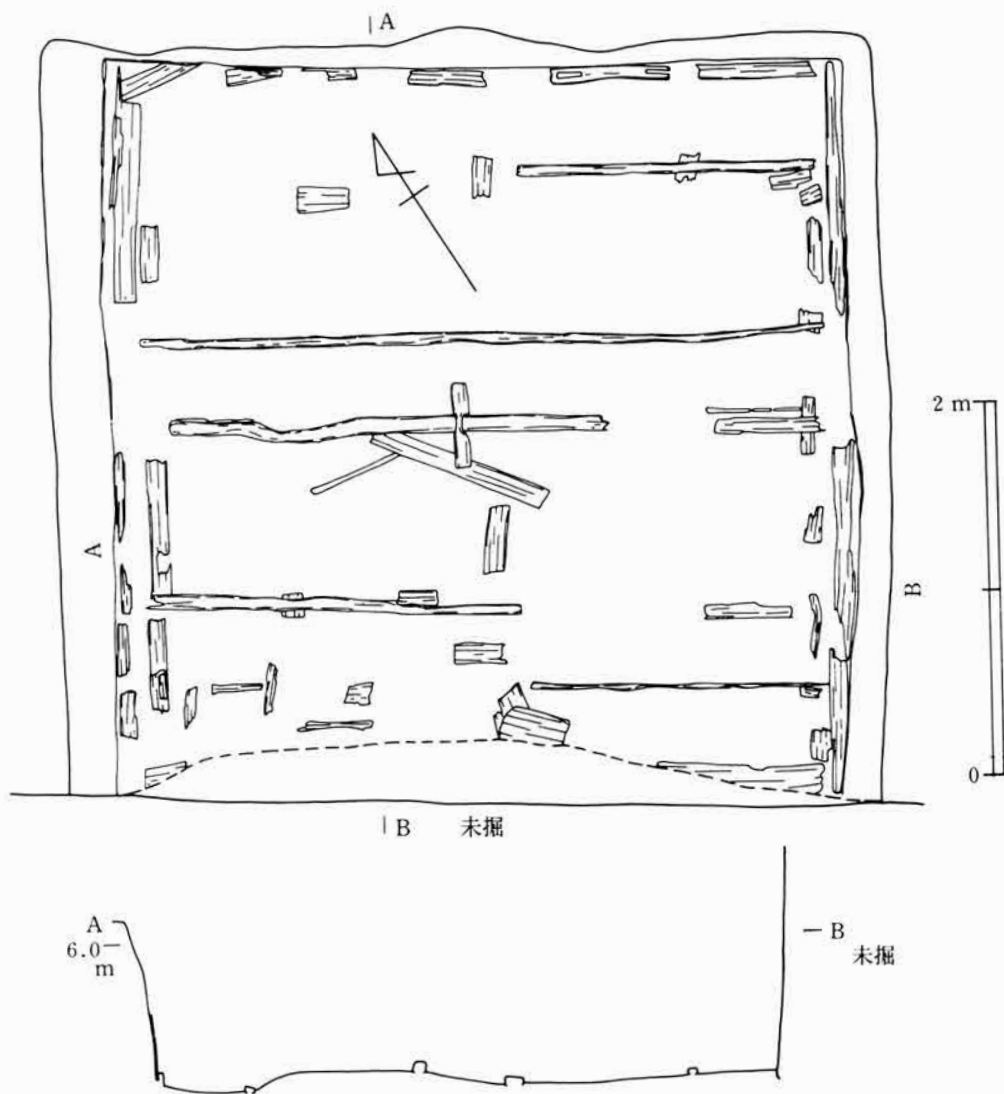


Fig. 19 第6方形竪穴建築址

5.2m、黄褐色砂層を掘り込んでいる。掘り込みはほぼ垂直になされ、底面は多少の凸凹はあるものの平坦、軟弱である。平面形は木組み本体に沿った方形であり、市内他遺跡検出の方形竪穴建築址と同様である。

B. 木組み

a. 壁板

壁板は東・北・西壁では良好に検出できなかったが、南側現代基礎コンクリート下を部分的にくりぬき調査した所、南壁ではほぼ建築時（使用時）の様相が把握できた。又、北壁では極く限られた部分ではあるが、掘り込み底面上30cmの位置から横棧状の、柄穴のある角材が検出されている。この角材は9～10cm角で、柄穴は2箇所残存しており、両柄穴は芯々距離で45cmを測る。各柄穴は

幅2～3cm、長さ10～12cmを測り、長軸は壁に平行方向である。

以上のことから本建築址の壁板組みを復元するとFig.20になる。これは、各壁で検出された板痕、椽木痕をもとに推定復元したものである。実際には最下段の横椽はほとんど検出されていない（西壁および東壁ではそれと思われる木材痕が壁板内側にわずかに認められた）し、検出された横椽状の木材とそれとをつなぐ支柱（あるいは柄柱）も検出されていない。

壁板は幅10～20cmの板をたて並べその前面を四隅で組んだ横椽で止め、さらに上部では上・下の横椽を結ぶ支柱あるいは柄柱で支えたと考えられる。壁板の最も良好な南壁では、たて並べた板の後に横積みの板痕がみられた。他の壁では検出されなかったが、これが本来の姿と思われる。壁板内規模は東西3.9m、南北3.8m以上を測る。

b. 床

床板は検出されなかったが、床板の下部木組みと思われる根太木が東西方向5本検出された。又それぞれの根太木を水平に保つよう各根太木の下に入られた木片、板材も比較的良好に検出されている。さらに、一部では根太木に沿ってたて並べられた板も検出されており、本建築址の床構造に興味深いものがある。

各根太木は1辺5～10cmの角材であるが、中には大きく湾曲しているものもあり、それほど規格はしっかりしていなかったようである。

根太木の位置は北壁（検出された横椽）から、芯々距離で50cm、140cm、185cm、280cm、325cm、それぞれは90cm、45cm、105cm、45cm離れている。根太木下の木片は、出土状況からみると、各根太木と東・西両壁との接点付近および中央部に使用されているようである。

以上、検出された各部について述べて来たが、本建築址は木組内規模東西3.9m、南北3.8m以上である。市内検出の方形竪穴建築址に類例をもとめると、壁板組みがたて並べであるという点では御成・ヤノヤ用地^(註1)、鶴岡八幡宮研修道場第2方形竪穴^(註2)、諏訪東遺跡第1方形竪穴^(註3)に類似する点が多い。しかし、床構造が推定できるという点では異なる—他の例では木質の残存状況が悪いということもあるが—。

方形竪穴建築址の上屋構造は、現在の所、把握されていないが、諏訪東遺跡では床面に棟持柱の礎石が六個検出された例もあり、又その遺構には入口状の方形張出しがつくことも確認されている。やがては方形竪穴建築址の性格・構造が明らかにされるであろう。

註1. 鎌倉考古学研究所調査研究報告第2集1982年

註2. 研修道場用地発掘調査報告書 1983年 P. 19

註3. 1981年調査 未報告

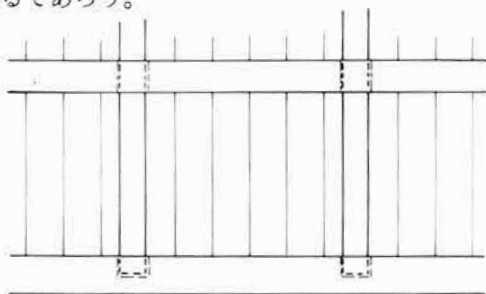


Fig. 20 壁板組復元模式図

V. 建 物

柱穴は数多く検出されたが、建物として把握されたものはない。わずかに第II調査区で1例、第III調査区で1例、柱穴列として把握されたにすぎない。これは、大形土壇（井戸、方形竪穴建築址他）が多く掘り込まれているためである。

礎石を有する建物は1軒確認できたが、礎石自体が持ち去られたためか、他は全く建物としては確認できなかった。

以下、柱穴列、礎石建物（第1建物）について説明を加える。

(1) 柱穴列

A. 第II次調査区

26～28土壇北側で検出された東西方向の柱穴列である。周辺の遺構検出状況から小規模で北に延びていたものと考えられる。

柱穴は平面方形、1辺20～30cmを測り、3穴（2間）検出された。柱穴間距離は東から1.4m、1.3mを測る。柱穴列周辺では13口の小型柱穴列が検出されたが両者の関係は把握できなかった。各小柱穴は杭の打ち込み痕とも考えられる。

B. 第III次調査区

第III次調査区中央南壁際で東西方向に4穴、3間が検出された。大形土壇、現代攪乱が密集しており、不明瞭であるが、南へ延びていたものと考えられる。

各柱穴は45～50cmの円形を呈し、深さは20～40cm、柱穴間（芯々）は東から1.9m、1.8mを測る。各柱穴覆土からの遺物出土量は少ないが、東から2穴目の柱穴からは魚住窯の捏鉢（ほぼ完形）が出土している。

(2) 第1建築址

D～Fの1～3グリット、第2層下部で検出された東西2間、南北2間の小型礎石建築址である。本建築址は同位置で2期にわたって構築されていたと思われ、8個所の礎石（南列中央が上、下2期とも検出されていない）のうち4個所では2段積みの礎石が検出された。各2段積みの礎石では2石の間にわずかな間層を狭むものの、ほとんど継続して建物が営まれたものと考えられる。

下層の礎石をみると2間×2間の建物の南側に鎌倉石を2石据えた「入口」的な施設が存る。各礎石間の距離は東列が北から1.9m、2.2m、西列が北から1.9m、2.0mを測り、東西方向では中央で西から1.65m、1.95m、北列、南列では中間が欠けるがそれぞれ2.7mである。上層の礎石でも多少の差異はあるものの同数値を測る。使用されている石は、下層の礎石ではすべて安山岩河原石であるのに対し、上層では鎌倉石を2石使用している。

周辺での遺物の出土は十分に把握されていないが、建築址西側、同レベルでは銅銭が98枚、貫銭の状態出土している。この銭には永楽通宝、洪武通宝は含まれていない。建築址はN-28-Eを測り、他の方形竪穴建築址などとほぼ同一軸をもっている。

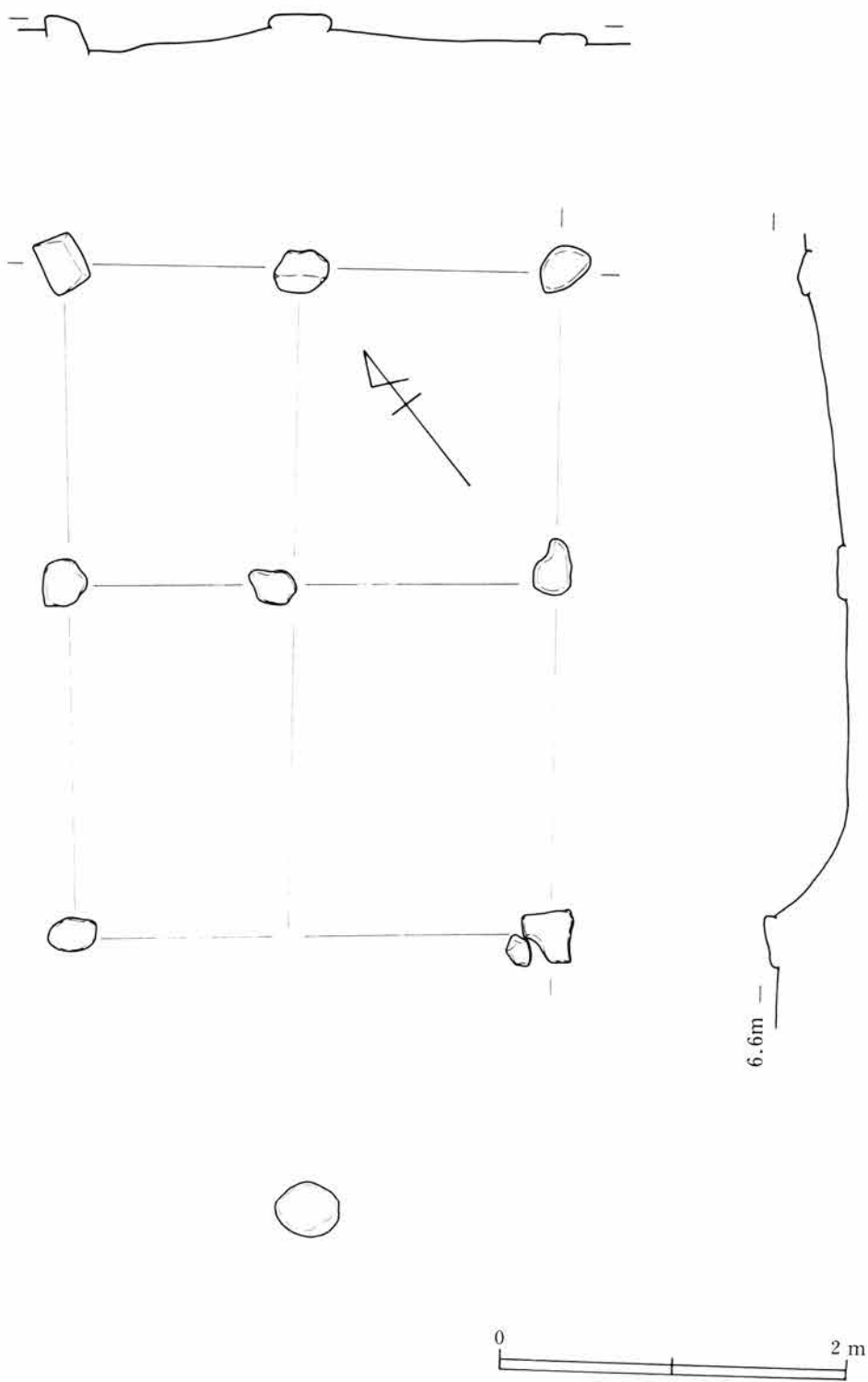


Fig. 21 第1建築址・上段

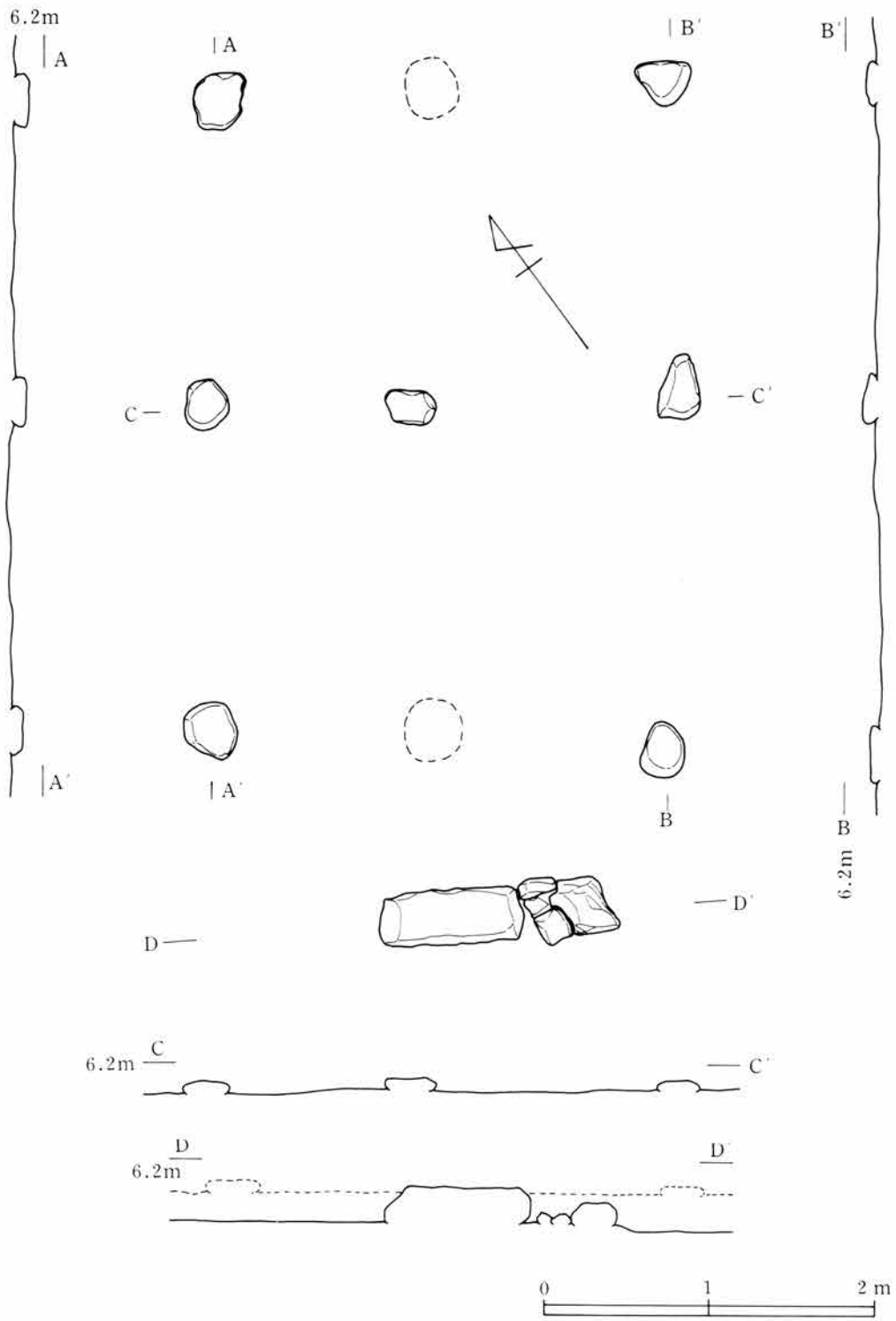


Fig. 22 第2 建築址・下段

VI. 井戸

木枠の残存しているもの5基、木枠の残存していないもの3基の計8基の井戸が検出された。これらの井戸の検出位置をみると第5溝以西(若宮大路側)に7基が存り、松風堂ビル用地、島森書店用地^(註2)同様に井戸が若宮大路近くに偏在する傾向が認められる。

木枠の残存する井戸をみると、木枠はすべて「方形横棧支柱型」であり「隅柱横棧型」は検出されなかった。又第5井戸では井戸底に曲物を据えており、この木組みの井戸は鎌倉でも例が少ない。本遺跡検出例を除くと南御門遺跡^(註3)に1例存るだけである。以下各井戸について記述を加えていくが、記述中の底面レベル等は海拔数値で示した。

註1、「小町1丁目309番5地点発掘調査報告」1983年(推定)藤内定員邸跡発掘調査団

註2、昭和54年調査、未報告。注1遺跡の南に接する遺跡である。井戸5基、方形竪穴建築址等が検出されている。

註3、昭和56年調査、未報告

(1) 第1井戸

14Dグリットで検出された。北側の一部を第2溝によって破壊されているが残存状態は良好である。掘り方は径2.2m~2.4mの不整形円形、断面逆台形を呈し、底径は約1mを測る。井戸枠は方形横棧支柱型、掘り方ほぼ中央に組まれており、底面から1.3mまで残存していた。それより上部では側板、横棧等は腐蝕が激しく原形をとどめないものの圧痕として把握できた。井戸枠内規模は1辺約90cm、井戸底面は3.9mである。

各部材の寸法をみると、横棧は幅10~12cm、厚さ3~4cmで検出された。各棧は長辺を上下に使用しており、南北壁では両端が女桝、東西壁では両端男桝に切られている。支柱は3×4cmの角材で長さ39~40cm、側板は幅22~28cm、厚さ2~3、5cmのものを使用しており各壁とも3~4枚を最前面に置き、裏面では前面の板の間をふさぐように2~3重に並べられている。各材は表面に丁寧な丁斧仕上げが施されており、漆喰が塗られている。

覆土からは遺物が多量に出土しており、特に本遺跡出土瓦の80%は本井戸内から出土している。他に瓦片を多く出土する遺構がないだけに興味深いものがある。

(2) 第2井戸(3土)

第2方形竪穴建築址に切られている。掘り方は南北1.6m、東西2.3mの不整形を呈し、深さ1.8m、底面レベル4.1mを測る。木材の残存状態は非常に悪く数片の木材が検出されたにすぎない。検出された木材は支柱・横棧に使用されていたものと思われ、一本の角材の両端には女桝が刻まれている。おそらくは方形横棧支柱型の木組みがなされていたものと思われる。

(3) 第3井戸(93土)

17Gグリットで検出された。第3溝より新しい時期に掘り込まれている。調査区外南へ延びているため全体規模は把握できないが、径1.8mの不整形円形の掘り方をもつ、方形横棧支柱型の井戸で

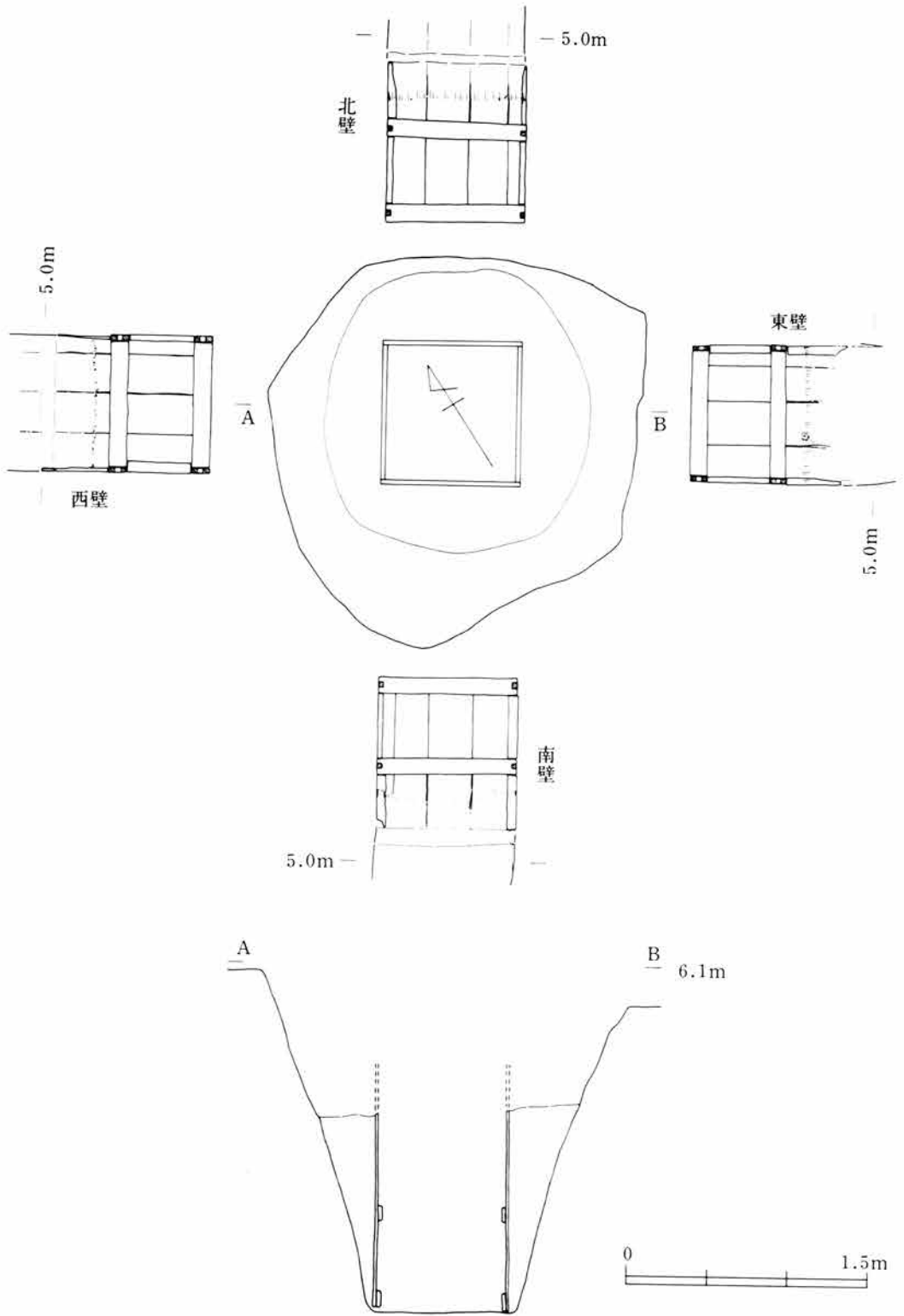


Fig. 23 第1井戸

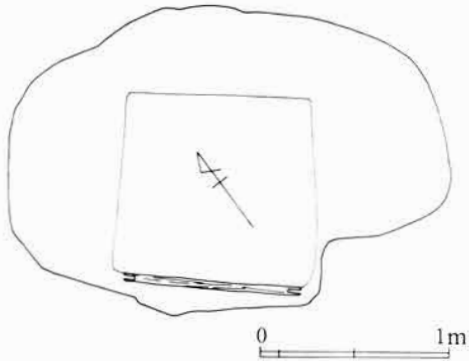


Fig. 24 第2井戸

打ち込んでいる。

井戸覆土からは青白磁合子、かわらけ、とこなめ等が出土している。

(4) 第4井戸 (115土)

第Ⅲ次調査区北西隅に近い地点で、第1溝に中央部上半を切られて検出された。

掘り方は東西2m、南北2.1mの平面不整形を呈するが、調査中に大雨のため周囲が崩落し原形を失ってしまった。P.L.30-1は崩落前の状態である。

木材の残りは非常に悪く、横棧2段、支柱2段が検出されたにすぎないが、本来は方形横棧支柱型の木組みがなされていたものと思われる。井戸枠内寸法は各辺90cm程度である。使用各部分材は丁斧で丁寧に仕上げられ、表面には漆喰が塗られている。出土遺物は少なく、底面近くでは小型の曲物が検出された。

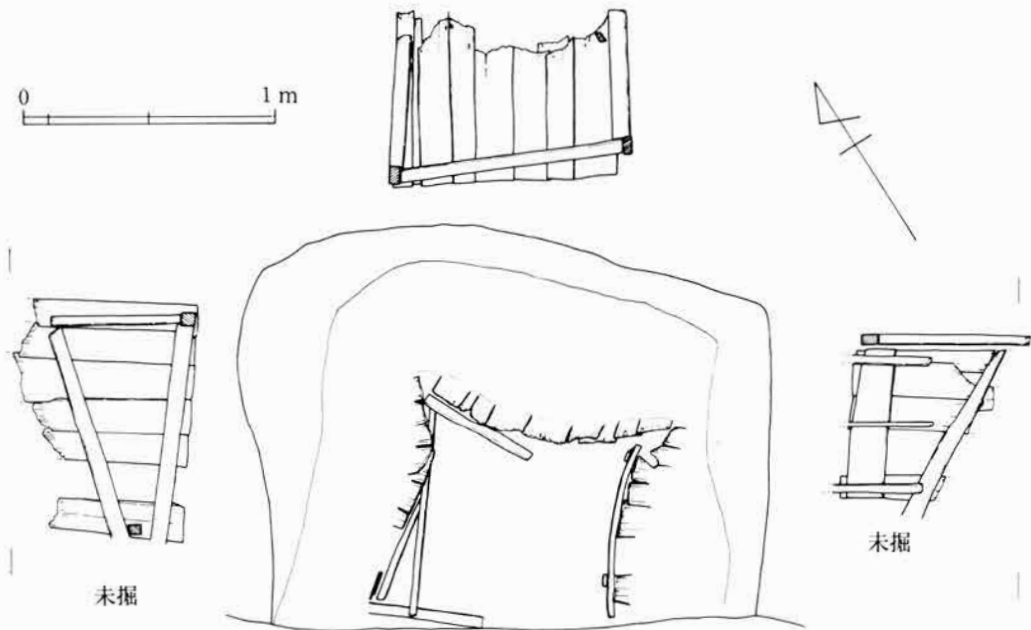


Fig. 25 第3井戸

(5) 第5井戸 (97土)

19Cグリッドで検出された。中央上半分を第2溝に破壊されている。掘り方は1辺約1.6mの平面方形を呈し、深さ1.3mを測る。残存する井戸枠から方形横棧支柱形の木組みがなされていたものと思われるが、木材の腐食が激しく、最下段の横棧3本、2段目（下から）の横棧1本、側板1枚が検出されたにとどまった。横棧は構築時の姿を失っているが、柄の状態等からみて井戸枠内規模は75~80cm（1辺）であったと思われる。井戸底面には径60cm、深さ20~25cmの穴が掘られ、径48cm、高さ26~28cmの曲物が据えられていた。曲物には底板はみられなかった。使用されている各部材には丁寧な丁斧仕上げが施されており、横棧・側板の一部には漆喰がみられた。井戸底部（曲物下部）レベル3.7m、南北軸N-40°-Eを測る。

(6) 第6井戸 (39土)

第3方形竪穴建築址、第4溝西で検出された。掘り方（土壌上端）は東西1.8m、南北2.0mの平面円形を呈し、深さ1.4m、底面レベル4.6mを測る。

土壌は2段構造を呈しており上部土壌は先に記したが、下部土壌東西70cm、南北80cmを測り、土壌東壁はN-50°-Eである。深さは約50cm。これは同時期の掘り込みと考えられるが、上部土壌の底面レベルは5.1~5.2mであり、仮に、下部土壌に曲物等を据えたとしても井戸としての十分な深さは得られない。

本井戸は全く木枠が検出されないが、下部土壌は、井戸枠のための掘り方とも考えられる。遺物は下部土 から同安窯系青磁皿（完形品、Fig.36-21）が出土している。

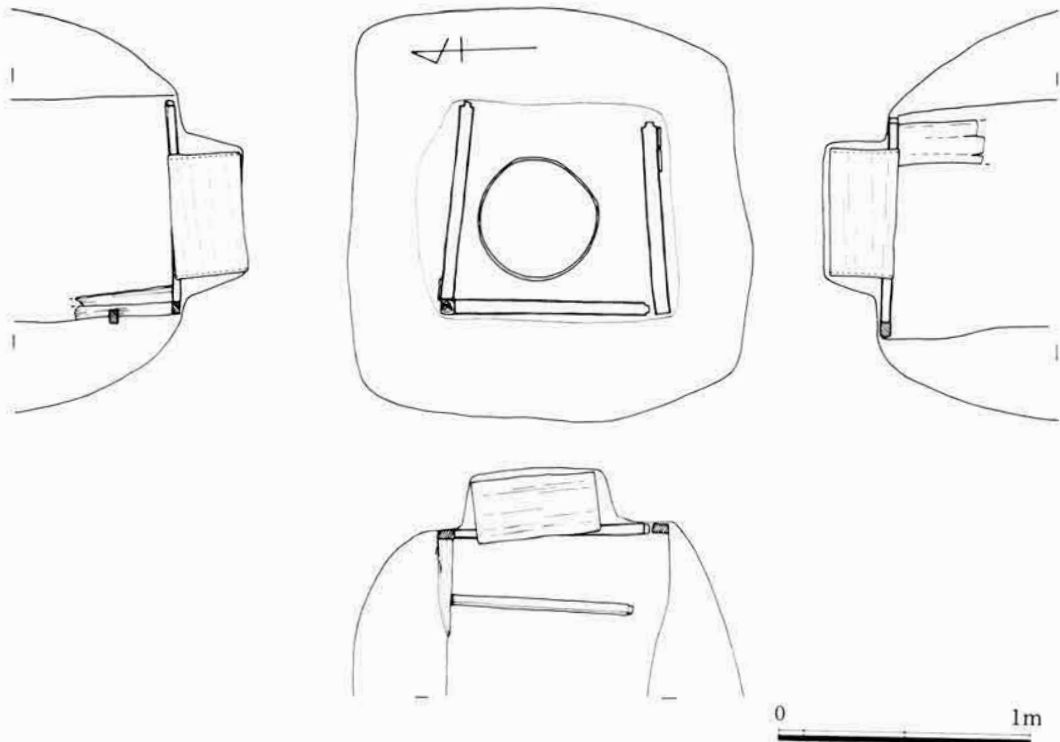


Fig. 26 第5井戸

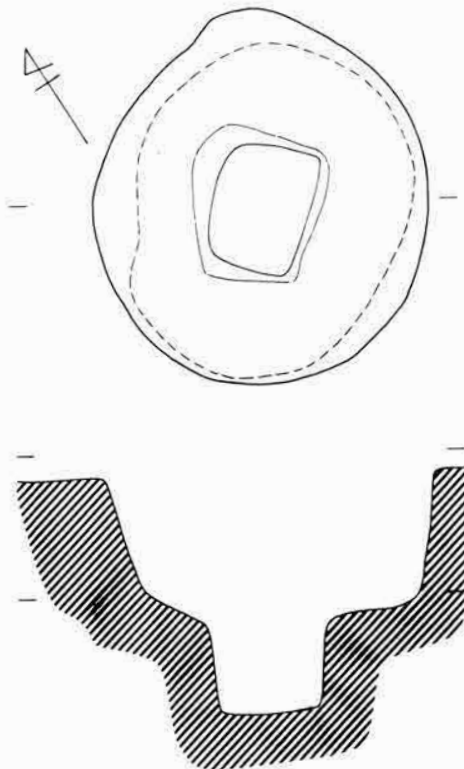


Fig. 27 第6井戸

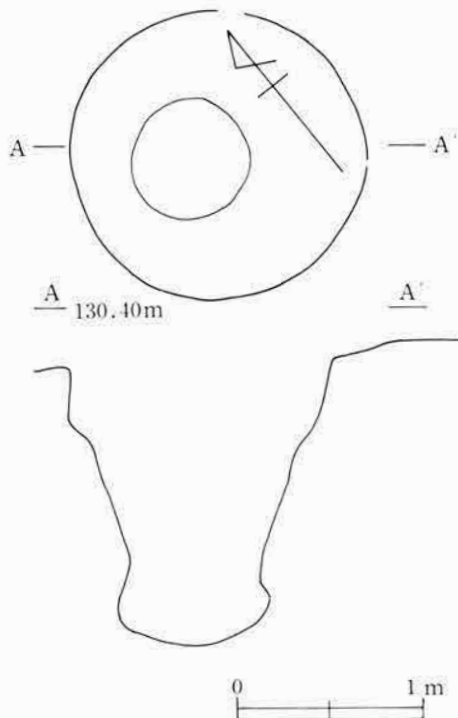


Fig. 28 第8井戸

(7) 第7井戸 (89土)

第III次調査区第6溝以東で検出された唯一の井戸であるが、調査中に第6井戸と同様に崩落してしまい、下部の調査は行えなかった。

掘り方は東西2.2m、南北2.5mの平面円形を呈する。調査部分の底面では木杵は検出されていない。深さ約2m、底面レベル約4m測る。

(8) 第8井戸 (II-6土)

第II次調査区検出の素掘の土壌であるが、底面レベル、他の土壌との形状の差などから井戸としてこの項に含めた。

土壌は径約1.6mの円形を呈し、深さ1.7m、底面レベル4.0mを測る。掘り込みはほぼ垂直になされ、下部でややふくらんでいるが、これは堆積している黄褐色砂が崩れたためと思われる。同形状の井戸(土壌)は鎌倉市内でも例が少ない。

遺物は5群のかわらけの小片、渥美甕小片、極く少量出土したのみである。本遺跡出土の遺構群のなかでは古い時期のものと考えられる。

以上、各井戸について説明を加えてきたが、先に述べたように、井戸が調査区内で若宮大路側に集中する傾向が把握できた。各井戸の年代については併出遺物の不明確な井戸が多いため断定はできないが、第6、第8井戸は鎌倉時代の比較的早い時期と考えられる。又、鎌倉市内では14~15世紀の層(あるいは面)から検出される方形隅柱横棧型が1例も検出されておらず、各井戸内からもそれに近い年代の遺物が少ないことなどから、すべての井戸は15世紀末には廃絶していたものとも考えられる。周辺の遺跡からみても方形隅柱横棧型の井戸の検出は少ない。

(斎木秀雄)

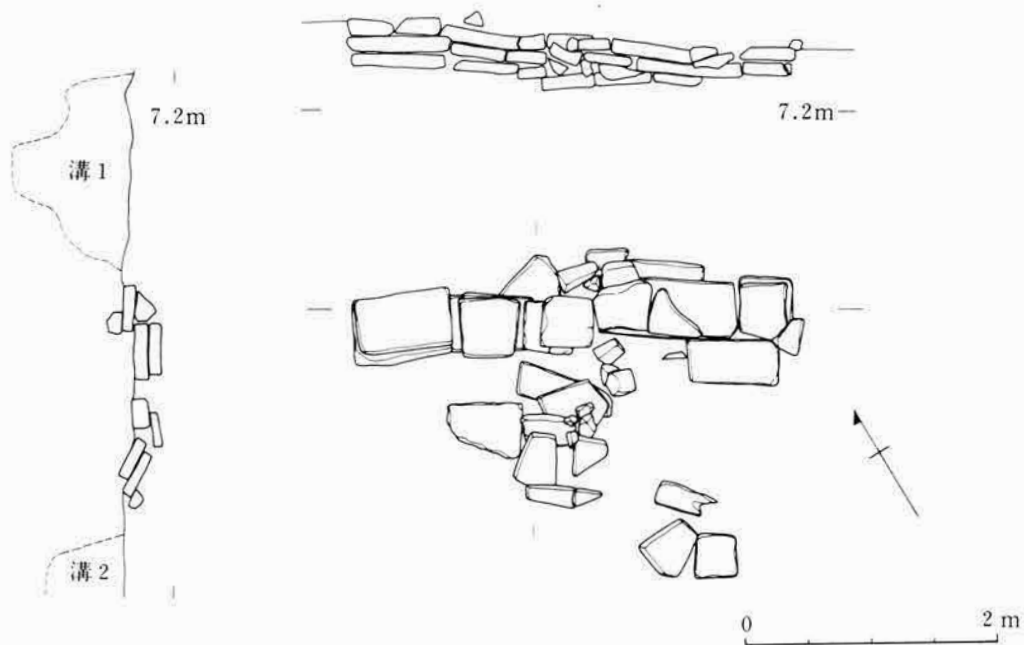


Fig. 29 石列

VII その他の遺構

前述の各主要遺構の他に石列(第1トレンチ)、土壌が検出されている。土壌は柱穴について多く検出されているが、形状その他に差異がみられ、性格も十分には把握されていない。

(1) 石列

第1トレンチ第1溝、第2溝との間で検出された。使用石材はすべて鎌倉石であり本地点石列で約30石を数えた。各石は幅45～50cm、長さ70～80cm、厚さ8～15cmを測り、旧状を保つものではすべてが長軸を東西(若宮大路と直交)方向に、2～3段に平積みされて検出された。さらに東・西に伸びていたものと思われる。

石列は検出状況及び付近の土層堆積をみると北側(第1溝側)に石積みの正面が存する。又、同様の鎌倉石は第III次調査第2溝覆土から多量に出土しており、同石列と第2溝との関係が考えられるところである。

未調査ではあるが、第1トレンチ北壁に同様の鎌倉石が多数確認(ボーリング調査)とされており、さらに何らかの遺構の存在が考えられる。

(2) 土壌

3次にわたる各調査区で多数の土壌が検出された。検出された土壌は平面で円形、方形、不整形に分かれ、さらに堆積土(覆土)では最下部に暗灰色の軟らかい粘土層の有無で分ける事が可能である。

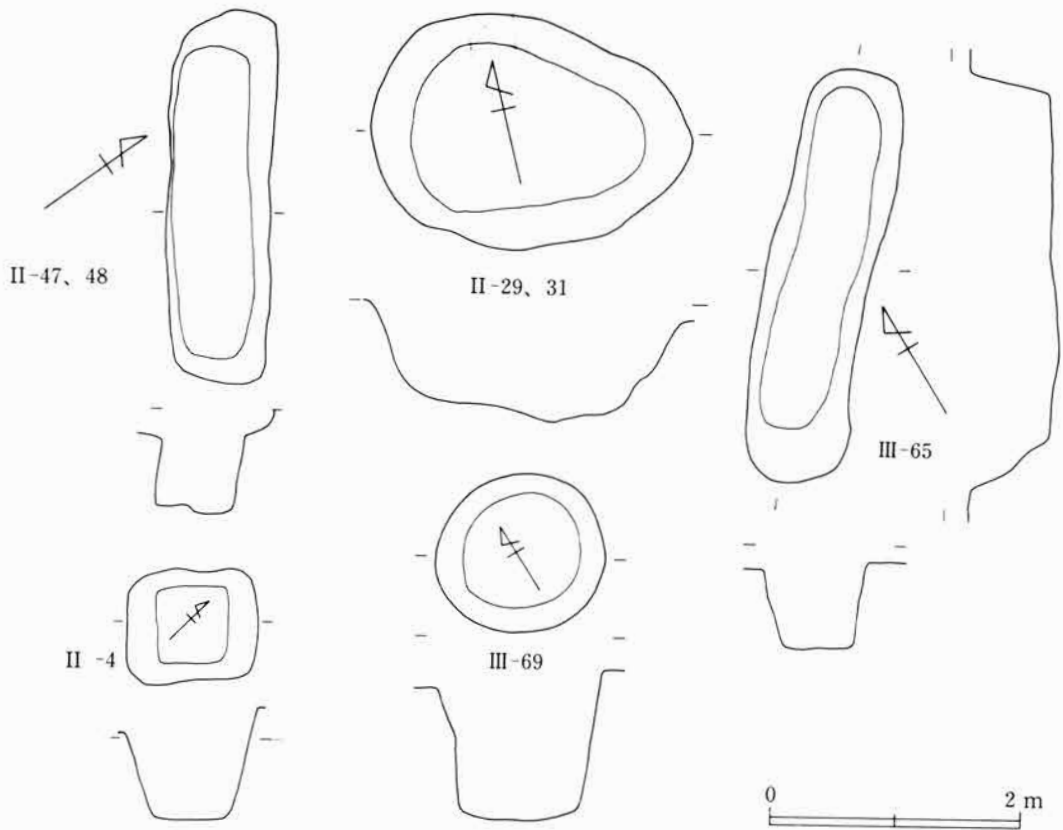


Fig. 30 土 坑

又、多くの土坑は壁に板痕（あるいは掘削時の工具痕）が認められ、それが掘り込み壁の内側2～5cmに検出されるものもある。これが仮に掘削時の工具痕であるとしても、調査時に明瞭に残っているということは、土坑の性格を考えるうえで非常に興味深い。本地点では、遺構掘削時と状況は異なるが、掘り上げて放置しておく（雨が降った場合）粘土層下の黄褐色砂層が崩れ、さらに上層の粘土層も崩落し、2～3倍の大きさになってしまう。

これらのことから、土坑は—内側に板組みがないとすれば—掘削して、ほとんど放置せずに埋めているものと考えられる。

土坑は市内の発掘調査では数多く検出されるものの、甕等の据えてあるものを除けば、ほとんどは性格も十分に把握されていない。土層下部に堆積している暗灰色粘土層の分析と共に構造・使用目的にさらなる研究が必要であろう。

（斎木 秀雄）

第4章 出土遺物

I. 先史・古代の遺物

先史・古代の遺物としては、30片ほどの土器片が出土したにすぎない。それらは中世遺物包含層に混入して出土しており、本地点において先史・古代の文化層が検出されたわけではない。出土した土器は縄文式土器と土師器、須恵器であった。

縄文式土器 (Fig.31-1)

地山直上層から出土したが、かなり水磨した破片である。胎土は粗く、粗砂大の白・黒色石粒を多く含み、黒褐色を呈する。焼成は良好で硬い。凸帯囲みの内部に縦位の太い撚糸文が付されている。縄文時代中期の加曾利E II式に属そう。

土師器 (Fig.31-2~4)

2は土師器壺の胴下部片である。粗胎で焼成あまく、もろい。黒褐灰色を呈する。器表は木口状工具でなでた後、軽く磨きが施されている。時代は判別しえない。

3は土師器甕の頸部片である。若干砂を交える粉質の胎土で、焼成は軟弱である。胎芯は暗灰色を、器表は黄灰褐色を呈する。器壁は厚く、内面には木口状工具による水平方向のなで痕が認められる。平安時代頃まで降るものではなかろうか。

4は甕の胴下部片である。胎土は良好な微砂質であるが、クサリ礫（土丹粒か）を多く含む。焼成は良い方で、胎芯は黒色を、器表は茶褐色を呈する。内面には弱く、外面には強い叩き痕が見られる。時代は判別しえない。

須恵器 (Fig.31-5~11)

5は坏蓋、6・7は坏の底部、8~11は甕の胴部片である。いずれも胎土、焼成とも一般的なものであるが、5は水磨が進行している。奈良・平安時代の所産であろう。

(河野真知郎)

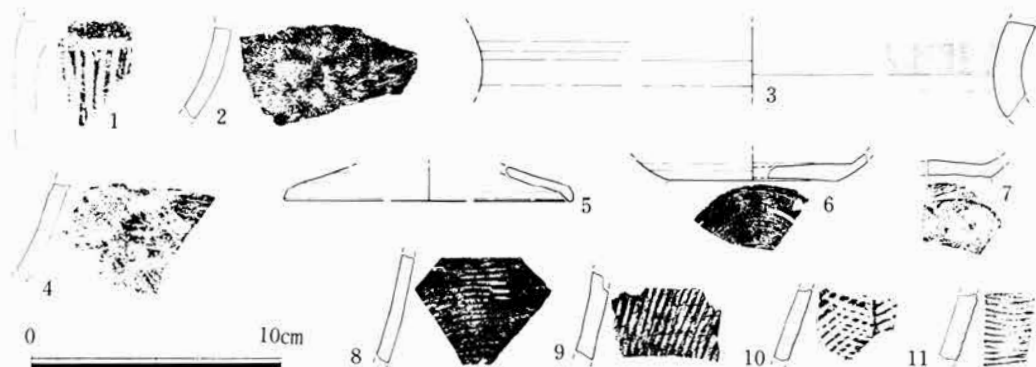


Fig. 31 先史・古代の遺物

II. 舶載陶磁器

青磁・白磁を中心として、青白磁、緑釉、黄釉、褐釉、高麗青磁などが出土している。以下順次述べていく。

(1) 青磁

本遺跡出土の青磁は碗が最も多く、その他に龍泉窯系を中心とする鉢に加えて、壺、瓶子、水注がある。

A. 碗

碗は同安窯系櫛描劃花文碗、龍泉窯系櫛描蓮弁文碗、劃花文碗1、2類（後述）、鎬・蓮弁文碗、無文碗があり、夫々の施文様式毎に細片を含めて約100片程が出土しているが、鎬・蓮弁文系が他に比してやや少ない。

a) 櫛描劃花文碗 (Fig.32-1~14, 21, 23, P L.34)

多くは遺構覆土内より出土する。釉は緑灰色から淡い灰黄色までの幅をもつが、傾向としては緑味の灰黄色が多い。疊付と高台内は露胎である。素地は概して粘りのある、黒色砂粒を混える灰色土であるが、Fig.32-1は粉っぽい淡黄色である。外面の櫛描条線は7乃至8本が最も例の多い単位である。施文にあたって、外面は溝の傾斜する櫛描きが、内面には口縁下に篋描き沈線が回り、その下方に櫛描きのジグザグ文様と篋描きの草花文が描かれる。

口径は約14.2cm~18cmであるが、満遍なく分布し、大小の分類はできない。高台は断面逆台形に削り出され、外側に於いてはほぼ直立するように高台全体が斜めになる。胴部は緩やかに立ち上がり、内湾するもの（1~9）と外反するもの（10, 11）がある。内湾する類は内面口縁下に施される沈線より稜をなして内湾し、外反する類は沈線が浅い（10）かもしくは全くない（11）。内湾する類では口縁形態より細分が可能である。①口唇が丸味をもつ（1~5）、②口縁が肥厚する（6）、③口唇が角張る（7~9）である。また23のように口縁が薄くなり、口端部で内側に折り曲げられる例が一点あった。

3は口縁に凹部が見られ、全体としてはわずかな輪花状を呈すると考えられる。13の見込みには目痕が2ヶ所に残る。

夫々の出土層位は2（II次6号土壙覆土内）、3（III次7溝覆土内）、4（III次69号土壙覆土下層）、5（II次30号土壙覆土内）、7（II次84号6号土壙覆土内）、8（III次287号土壙覆土粘質土層）、9（III次7溝覆土内）、10（III次37号、55号土壙覆土内）、11（II次土丹版築面下）、12（III次第1トレンチ1溝覆土）、14（III次8溝覆土内）、21（III次I区方形竪穴建築址覆土内）、23（III次5溝覆土内）である。他は表採及び攪乱より出土。

b) 櫛描蓮弁劃花文碗 (Fig.32-15~20, 22, P L.35)

やはり多くは遺構覆土内より出土する。釉は緑灰色から萌え木色である。淡緑色に発色するものが多い。高台脇まで施釉される。釉は17、22で透明度が高いが、他には細かな気泡が見られ、特に

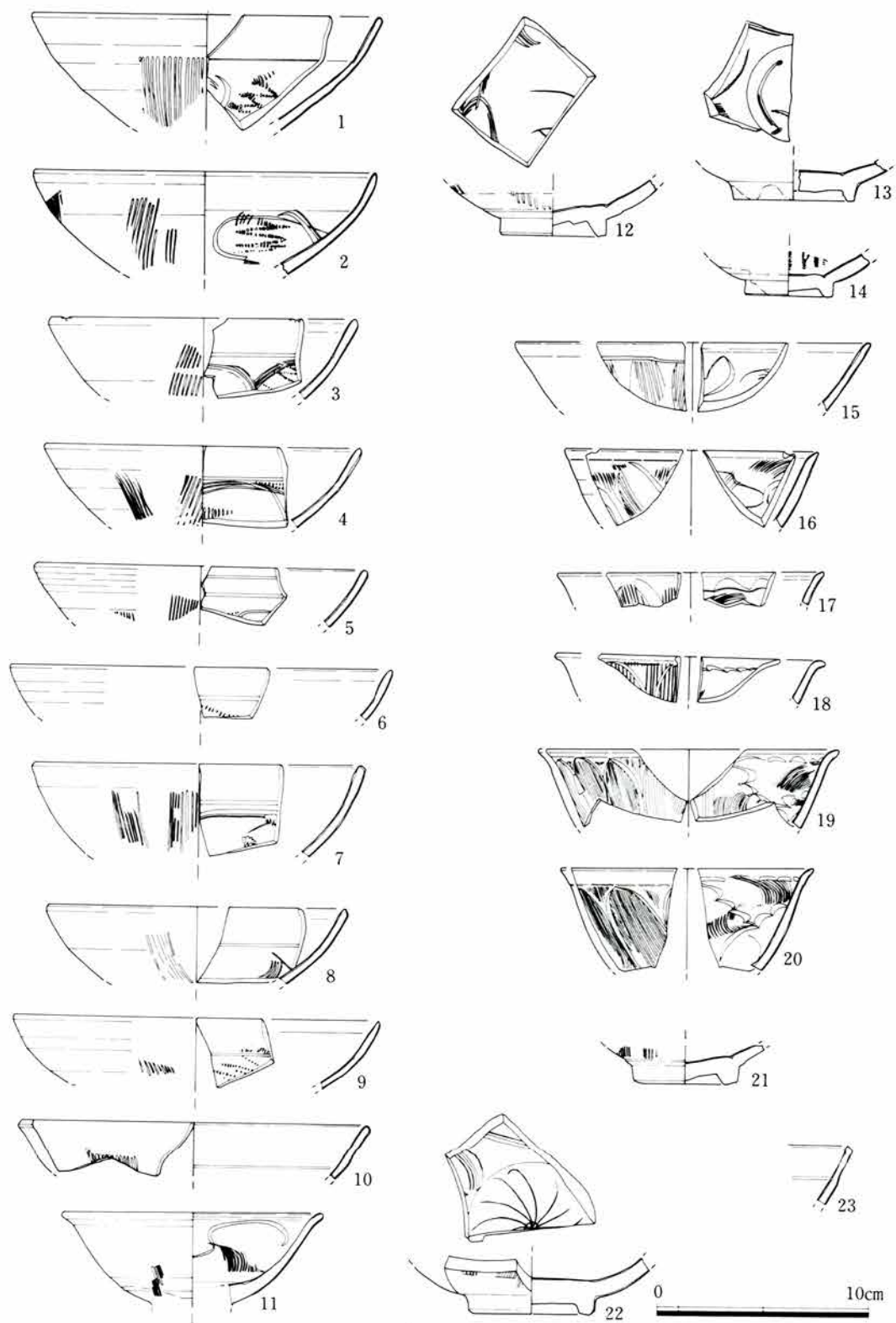


Fig. 32 青磁 1

19の内面は失透気味である。素地は黒色砂粒を含む灰色もしくは灰白色で粘りは概して強い。外面の施文は櫛描きの後に片切り彫りで蓮弁を描く。内面では口縁下に篋描き連弧文を巡らし、その下方にやはり篋片切りの葉状文乃至雲状文と櫛描きが施される。口径は約12~13cmの小型(16~18、20)と約17cmの大型(15)とに分けられよう。19は口径約14cmを測り、中型としえるかもしれない。小型と中型のものは胴部の立ち上がり之急で深い碗となり、口縁は外反する。中には水平に曲がるものもある(18)。大型では口縁の外反はない。両者共に口唇部は丸味を有する。

22は高台径約6cmである。高台は丁寧な削り出しによる菱形をなす。大型に属するものと思われるが、器壁は厚く、鉢になるかもしれない。見込みには丸彫りの花文が描かれる。

夫々の出土層位は15(II次土丹版築内)、16(II次39号土壙覆土内)、17(III次7溝覆土内)、18(III次地上山)、19(III次93号土壙覆土内)、22(II次62号土壙覆土内)、20(表採)である。

c) 劃花文碗

龍泉窯系劃花文は大きく2類の文様構成があり、内面に描かれる文様が放射状の篋描き線によって数区画に分けられるものと、そうでないものがある。後者をC-1、前者をC-2と分けて記す。

C-1 (Fig.33、P.L.36)

これは太宰府出土青磁分類による龍泉窯系青磁碗のI-2類とされるものに相当する。^(註1)本遺跡では遺構覆土上層、礎石建物面上や第1トレンチ土丹焼土面から出土する。釉調は薄緑色、青緑色から黄緑色、灰緑色になる。薄緑色、青緑色に発色する例(1、10、18)は少なく、他は黄緑色か灰緑色である。後者の内には細かな気泡を含む失透気味や、失透のものが多い(8、13、15、18)。施釉は高台脇まで行われ、高台内は露胎となる。釉層は全体に薄い。素地は概ね、白色と黒色砂粒を混える灰色土で、粘りは強い。Fig.33-9、13は粉っぽさを感じさせる薄茶色の胎土である。

篋描きの施文は内面に限られ、口縁直下に凹帯が一本巡り、それより下方に胴部全体を用いて大きな文様が描かれる。文様は草花文、蓮花文などで、それに飛雲文が組み合わされる。(Fig.33-1)。見込みには篋削りによる円圈が胴部とを画し、その内に草花文もしくは蓮花文が施される。劃花文は彫り巾の広いもの(1~7、10、11、13、18~20)と細く篋先で行われたもの(8、9、12、14~17)がある。

口径は約15~17.5cmを測り、15cm代と16cm以上とに分けられるが、それほど明瞭ではない。高台径は5.8cmと7cmである。Fig.33-1は高台径5.8cm、現存最大径16.2cm、現存器高6.2cmである。高台はざんぐりとした断面方形乃至面取りされた台形を呈し、低く大きい。底部はかなり部厚く1.5cm程ある。高台脇からは一度外方へ開いてから立ち上がる。腰はそれほど張らないが、胴部は大きく開きながら立ち上がり、その後は緩やかに口縁に至る。口縁は概してやや外反気味となり口端部も外方へ傾斜し、三角形に薄くなる。これらは胴部器壁の厚いものとなる。対して、口縁の外反傾向がなく直進する例の器壁は薄く、胴下位から口唇部まで均一で、口唇部は丸味をもつ(8、9、14~17)。この類は施文に於いて、篋先による細い劃花文が描かれるものであり、当項目内での劃花

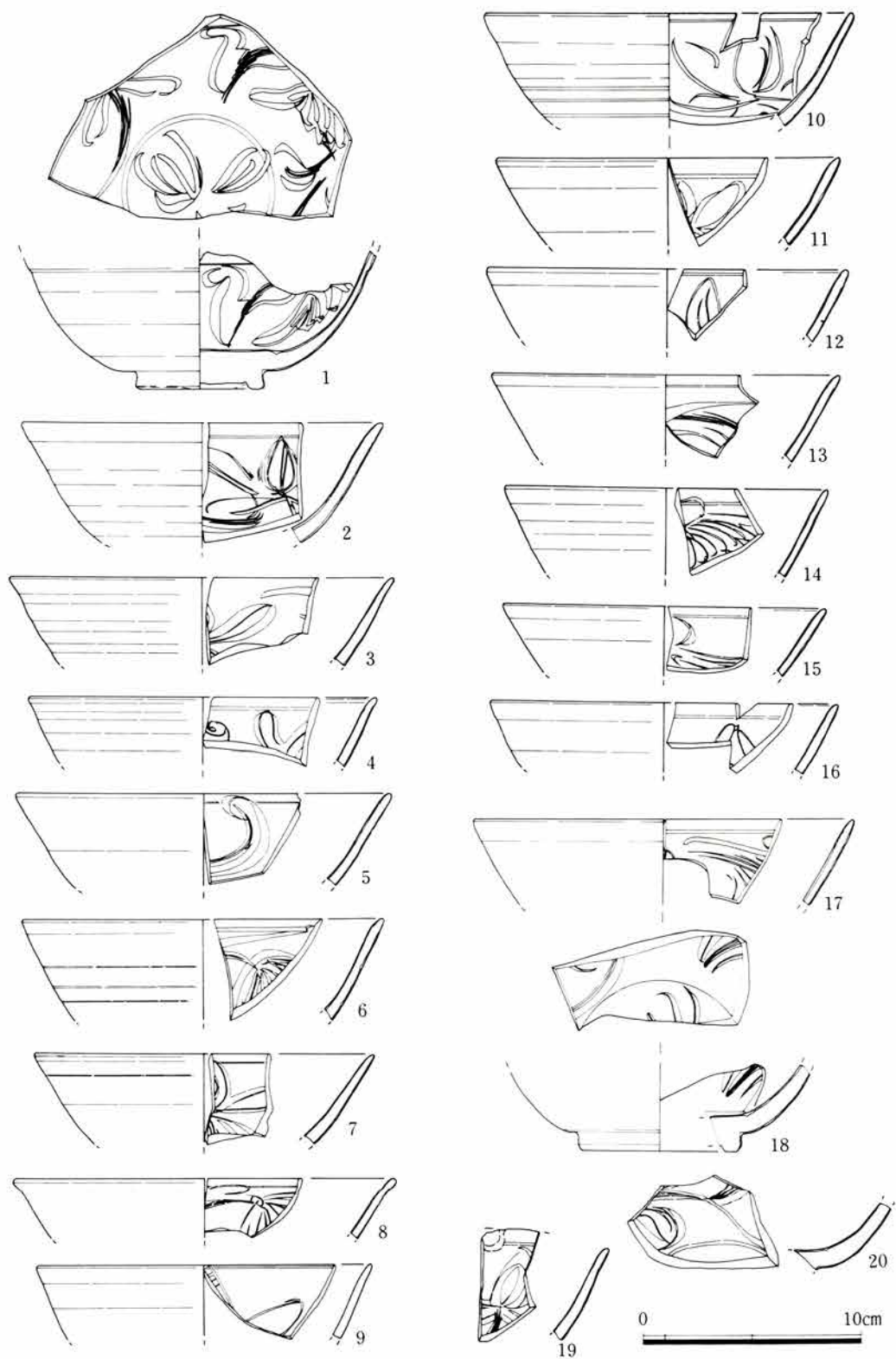


Fig. 33 青磁 2

文碗の細分類が可能であろう。^(註2)

夫々の出土層位は2(Ⅱ次6号土壙覆土内)、3(Ⅲ次86号土壙覆土上層)、5(Ⅲ次第1トレンチ108号土壙覆土内)、6(Ⅰ次3TP地山上)、7(Ⅲ次礎石建物面南)、9(Ⅲ次7溝覆土内)、10(Ⅲ次39号井戸覆土中層)、11(Ⅲ次第1トレンチ土丹焼土面上)、12(Ⅲ次302号土壙覆土中層)、13(Ⅲ次37号土壙覆土中層)、14(Ⅱ次89号土壙覆土内)、16(Ⅱ次62号土壙覆土内)、17(Ⅱ次2層中)、18(Ⅲ次Ⅰ区方形竪穴建築址覆土内)、20(Ⅲ次37号土壙覆土上層)である。他は攪乱壙内及び表採。

C-2 (Fig.34、P L .36、P L .37)

これらは先の青磁分類に従えば龍泉窯系青磁碗のⅠ-4類とされるものである。

遺物は本遺跡遺構覆土もしくは第2層中より出土する例が多い。釉は灰緑色から黄緑色、暗緑色にわたるが、青緑色乃至薄い緑色を呈するものが多くを占める。施釉は高台脇から高台内まで及び、高台内では釉の掻き取りがなされる。底部片のものに貫入が見られる。釉は細かな気泡を生むが、Fig.34-10、13を除いて、良く解け透明度は高い。15では底部方向に釉が縞状に流れ落ちる。素地は黒色砂粒を若干含む灰色乃至灰白色の精良土で粘りは強く、概して焼きしまりも良好である。

施文は内面に限られる。口縁直下に篋の片切りが2本巡り、そこから見込みに向かって内面を数区画に分ける様にやはり2本の片切りが引かれる。区画された単位画面に片切り彫り(片切りの角度が深く丸彫り状に見えるものもある)で飛雲文が描かれる。円圈を有し、周囲より少し高まった見込みにも飛雲文や風車様の花文が描かれる。

器型は断面長方形高台を有し、一度外方へ大きく開いた後に緩やかなS字を描きながら立ち上がって口縁に至る。Fig.34-12は輪花状を呈すると思われる。口縁は外反気味のもの(1~6)と、そうでないもの(7、10~15)に分けられよう。口径は約15cm~18cmに及ぶものの、大小の分類はできない。ただ、外反口縁をなすものは口径が小さく、外反の強くないものは口径が大きい傾向を有する。しかしながら、両者共に外面口縁下に段を持つため、口縁が外反を感じさせる玉縁状を呈する点もあり、分類が曖昧になるものがある(4、5、15)。

夫々の出土層位は1(Ⅲ次187号土壙覆土上層)、3(Ⅲ次2溝下層+93号井戸掘り方中層)、4(Ⅲ次68号土壙覆土内)、6(Ⅲ次Ⅰ区方形竪穴建築址覆土上層)、7、8(Ⅱ次3層中)、9、13、14(Ⅲ次2層中)、10(Ⅲ次Ⅴ区方形竪穴建築址覆土下層)、11(Ⅲ次8溝覆土内)、12(Ⅲ次69号土壙覆土下層)、17(Ⅲ次86号井戸覆土下層)である。

d) 鎬・蓮弁文碗 (Fig.35、P L .37)

外面に蓮弁文を施した青磁碗には、蓮弁文の作出が太い片切り彫りによる大型の鎬蓮弁文碗(1~6、20~22)と蓮弁が細く彫りの浅い鎬の目立つ鎬文(7~9、12~16、19、23)とに分けられる。

鎬蓮弁文碗の釉は灰緑色から青味の薄緑色で、淡い青緑色になるものが最も良く釉が解けきっている。Fig.35-10、17も鎬蓮弁文と思われるが、10では釉層が厚く、17では釉が白色に失透し、ほ

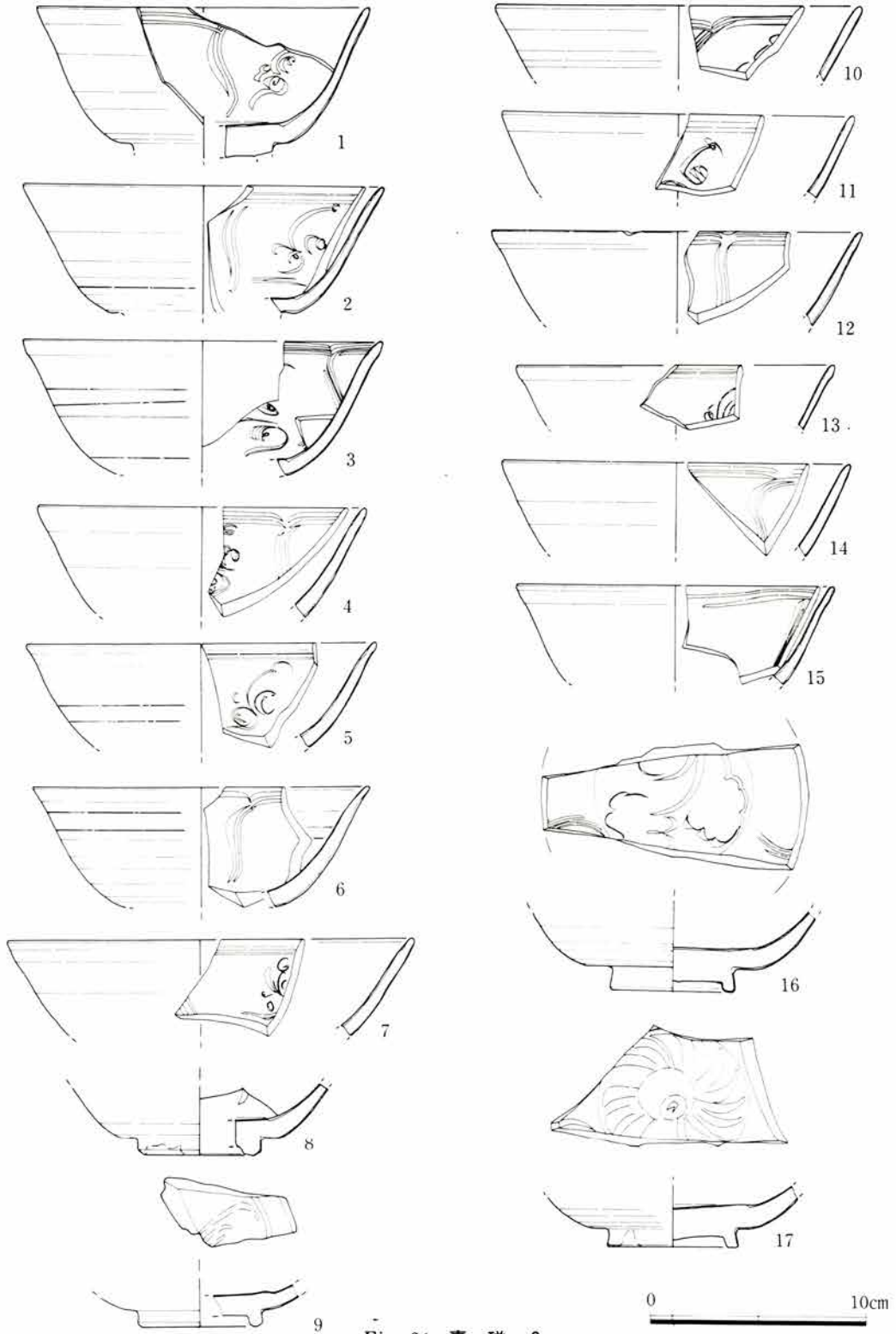


Fig. 34 青磁 3

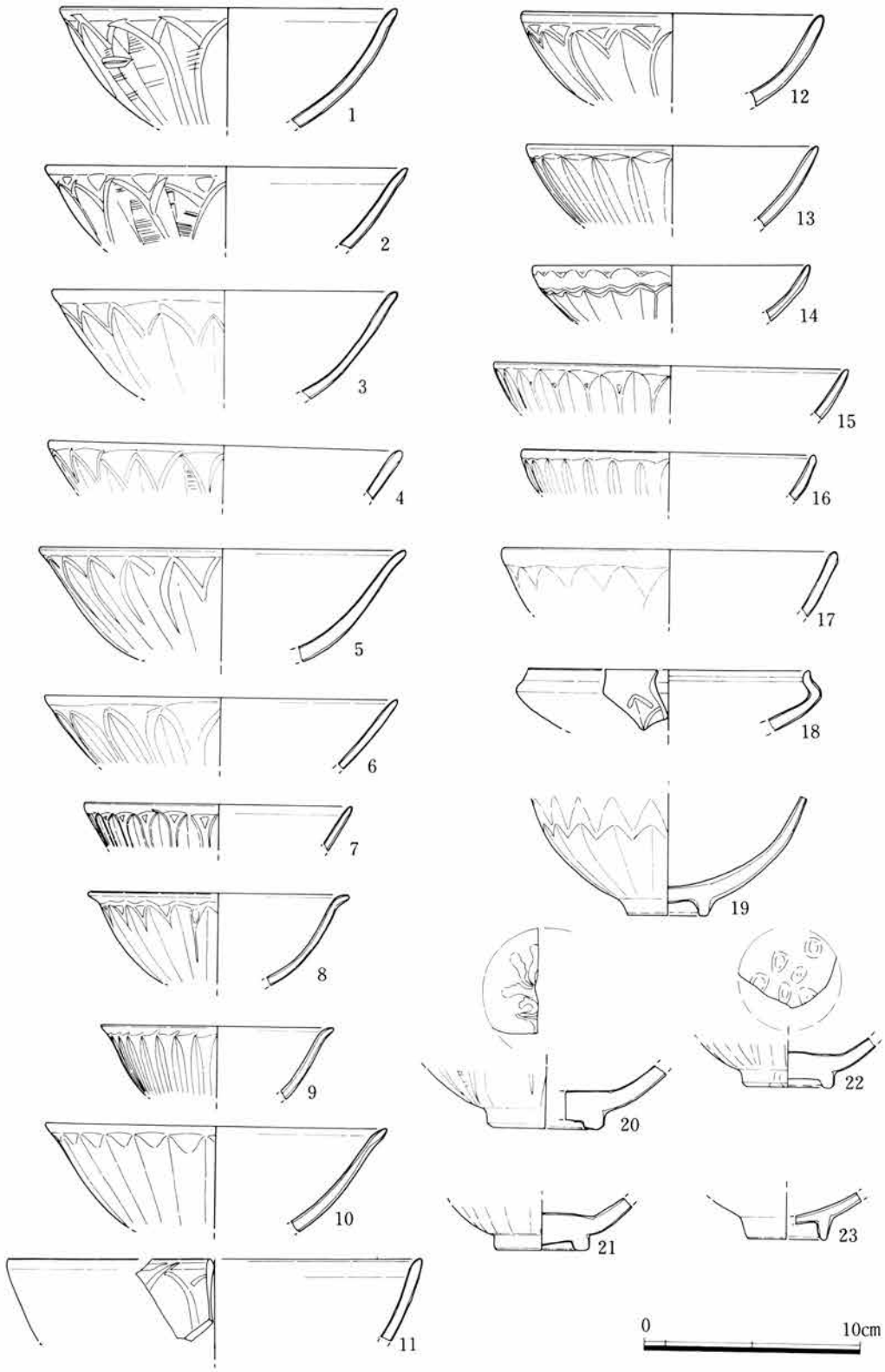


Fig. 35 青磁 4

とんど文様は見えない。釉は断面方形を呈する高台の畳付まで施される。素地は黒色砂粒を含む灰白色土で、粘りは強く焼成も良好である。21は砂質のザラツとした灰色土で粘りは弱い。

断面方形の高台は20では鋭角的な面取りがなされる。口径は約16～17cmと平均している。胴部は深く削り込まれた高台付根から丸く立ち上がり、口縁で劃花文2類の様に段を作って外反する。6は直進し、17は内湾する。見込み部はやはり、器壁の回転篋削りにより円圈を持つ。20の見込みには印花文が、また22では不整形、おそらく指頭の窪みが何ヶ所にもつけられる。22の外底には輪陶枕痕が残る。

鎬文碗の釉は灰緑色乃至淡い緑色を呈する。釉層には細かな気泡が多く入り、白濁して失透気味となる。施釉は内外面共に全体に行われるが、断面二等辺三角形もしくは側辺の長い台形の高台畳付部は掻き去られる。素地は黒色砂粒を少し混える灰白色土でややザラつき、粘りの弱いものと、Fig. 35-7、9、14、16の器壁の薄く、蓮弁の非常に細いものに見られる白色で粘りの強いものとに分けられる。

断面三角形の高台は高く削り出され、胴部の立ち上がりとの接点では鎬蓮弁文碗と同じく深く削り込まれる。丸味を持って立ち上がる胴部は口縁に至って、直進するもの(7)、強く外反するもの(8、9)、そのまま内湾気味となるもの(12～16)がある。三者とも概して器壁は薄い、先述の粘りの強い白色土を素地とするものは特に薄い。底部は胴部の曲線の延長のように中心に向かって内外底共に傾斜する。口径は外反するもので約11cmと12cm、直進するもので約12.5cmである。内湾する碗の口径は小型の約13～14cm(12～14、16)と約16cmの大型(15)とに分けられる。高台形は小さく、19、23共に約3.6cmである。

これらの他に、平板に蓮弁が彫られ鎬の全くないもの(11)と、口縁がS字状に大きく屈曲する坏様のもの(18)がある。11は口径約19cm、口縁の少し肥厚する碗である。黒色砂粒を含む灰白色素地に片切りの蓮弁が描かれ、釉は灰緑色を呈する。18は口径約13cmを測る。素地は灰白色で、粘りとしまり共に強く、くすんだ緑味の灰色釉がかかる。

夫々の出土層位は遺構覆土上層や、土丹版築面上乃至2層中が多い。1(Ⅲ次第1トレンチ1溝覆土内)、3(Ⅰ次3TP2層中)、6(3層中)、8、14(Ⅲ次2層中)、10(Ⅲ次287号土壙覆土内)、12(Ⅲ次167号土壙覆土上層)、15(Ⅲ次第1トレンチ井戸掘り方上層)、16(Ⅲ次3層下部)、17(Ⅰ次3TP第2土丹版築面上)、18(Ⅲ次3層上部)、20(Ⅱ次土丹版築面上)、21(Ⅲ次121号土壙覆土上層)、23(Ⅲ次Ⅰ区方形竪穴建築址覆土上層)。他は攪乱壙内もしくは表採。

e) 無文碗 (Fig. 36-1～16、P L 38)

ここには無文碗の他に遺存破片に文様がなく、他の文様類別に分けられなかったもの(5～16)をも含む。

Fig. 36-1と2は丸味をもつ碗の上半分である。1は口径約11cm、黒色砂粒を含む灰白色素地に淡青灰色の釉がかかる。素地は粘りがあり、焼きしまりも強い。口縁外面に厚く釉がたれる。Ⅱ次3

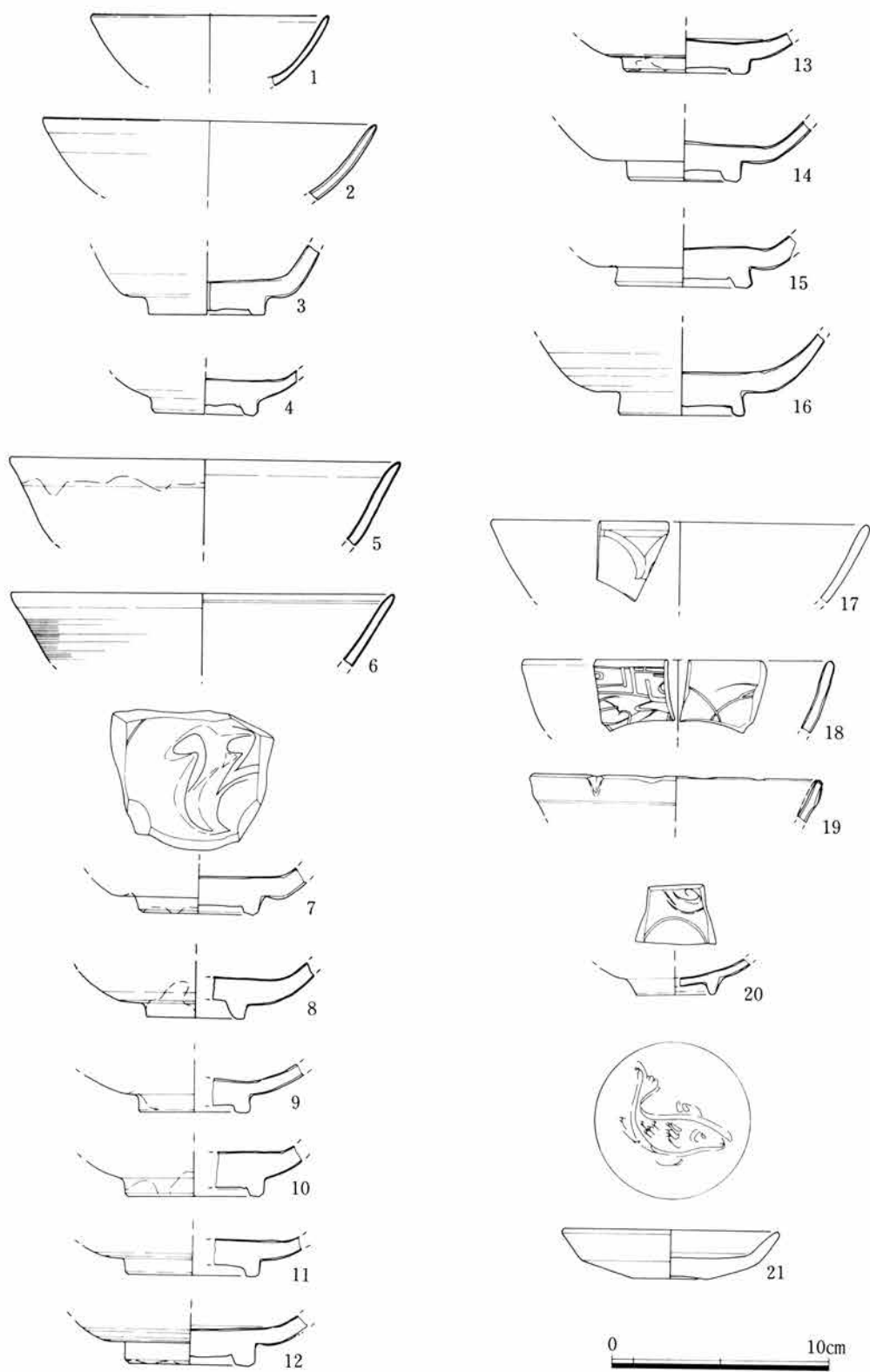


Fig. 36 青磁 5

溝覆土内出土。

2は口径約15.5cmを測る。灰白色の粉っぽい素地に青緑色の釉である。釉層は厚く、中に細かな気泡が見られ、貫入も入る。Ⅲ次第1トレンチ井戸内覆土貝層より出土。

3は腰の張った碗の下半である。断面方形の高台の削り出しは低く、分厚い底部となる。胴の立ち上がりは急である。黒色砂粒を混える灰色の素地に透明度の高い淡灰色緑色釉がかかる。素地の粘りは強いが、焼きしまりはあまい。施釉は高台内を除いて行われ、畳付の釉は掻き取られる。高台径約5.5cm。Ⅲ次3層下部より出土。

4は内底に円圈を有し、緩やかに胴の立ち上がる碗の下半である。粘りのやや欠けるものの、良くしまった灰色の素地に透明度の高い青緑色の釉がかかる。釉は高台内まで及ぶ。高台は面取りのされた断面方形で、削り出しはやはり低い。分厚い底部に対して胴部は薄い。高台内に輪陶枕痕が残る。Ⅱ次38号土壙覆土内出土。

Fig.36-5、6は細片からの復元である。口径約18cmと17.5cmを測るやや外反する浅い碗であろう。5は白色砂粒を多く混えるザラついた感じの粘りの弱い灰色の素地に黄緑色の釉がかかり、外面口縁下に釉だれがある。Ⅱ次87号土壙覆土上層より出土。6は黒色砂粒を含む粘りと焼きしまりの良い灰白色素地に貫入の入る黄味の灰緑色釉がかかる。内面口唇下に篋削りの凹帯が回る。外面には細かな条線の入る調整が行われる。

Fig.36-7~16は全て青磁碗下半部である。7は底部のほぼ全体を残すものである。面取りされた断面方形乃至台形の高台から強く腰が張り、全体に分厚い。見込みの円圈内に劃花文が片切り彫りで描かれる。胴の立ち上がりは丸味を持ちながら割合に急で、深い碗をなすと考えられる。萌え木色の釉は高台外面までかけられる。おそらくは劃花文碗(2類)の底部と思われる。Ⅱ次3層中出土。他のものも低い断面方形の高台に腰の張った胴の立ち上がりを見せ、円圈を有する見込みはやや高まり、底部は分厚い作りで、施釉は高台外側までである。また13は見込みの中央が盛り上がる弓状をなし、その胴部に移行する部分が注意される。更に高台内に目痕が残る。

夫々の出土層位は、8、9(Ⅲ次3層下部)、11(Ⅱ次20号土壙覆土内)、13(Ⅲ次70号土壙覆土下層)、14(Ⅱ次3層中)である。

f) その他 (Fig.36-17~20、P.L.39-1~5)

Fig.36-17は酸化焙焼による平板な彫りの蓮弁文碗である。素地は黒色砂粒を含み粉っぽく、橙色に焼け上がる。釉は非常に薄く透明である。器壁は薄い。口径は約17.5cmを測る。Ⅲ次65号土壙覆土内より出土する。

18は外面口縁下に雷文を付す口径約14.5cmの碗である。内外面に草花文を描く。内湾気味で、口唇は丸味を持つ。素地は黒色砂粒を少し含み、ザラっとした感じで、粘りは弱い焼きしまりの良い灰白色である。釉はやや失透気味の萌え木色に白色の斑点が浮く。Ⅲ次攪乱井戸内出土。

19は輪花口縁の碗である。口径は約13.5cmをなし、等間隔で口縁が内側へ押し出される。口縁下の三角形の鋭角的な肥厚部が段を形成し、口唇は溝状に窪む。素地は黒色砂を含む灰白色土。濡

れた様な感じで、粘り、焼きしまり共に強くない。淡青緑色の釉は厚く、細かな気泡がある。表採。

20は高台径約3.5cmの小さく、器壁の薄い碗の下半である。灰白色の素地は粘り、焼きしまり共に強く、灰緑色の釉が比較的厚くかかる。全体に及ぶ釉は断面三角形の高台の畳付部では掻き取られ、底部は胴部の延長のように傾斜する。こうした器型、施釉法は鎗文碗に似るが、見込みには篋先による円圈が作り出され、胴部内面に片切り彫りの劃花文が描かれている。Ⅲ次1号土壙覆土下層より出土する。

B. 皿 (Fig.36-21、P L.38)

青磁の皿は少なく、一点のみである。Fig.36-21は口径10cmを測る完品である。型作りによる器体は平底から真直ぐ斜めに立ち上がり、稜をなして口縁に至る。口縁内面はやや脹らみ、底部はかなり厚い。透明度の高い青緑色の釉は全体に厚くかけられ、後に外底面では篋で掻き落とされる。素地は灰白色である。見込みには篋描きの魚文が生き生きと描かれる。Ⅲ次39号土壙枠内最下底より出土。

C. 鉢 (Fig.37-1~6、9~12、P L.39)

鉢は無文の腰が張り稜をなすもの(1)、見込みに貼花文乃至印花文を付すもの(3~6)と外面もしくは内面に蓮弁を有するもの(9~12)がある。

Fig.37-1は高台径約4.2cmを測る。断面三角形に削り出される高台は高く、高台脇から胴部への移行部に強い稜をもつが、釉層が厚くシャープな感じはなくなり、ずんぐりしたものとなっている。灰白色の良くしまった素地に光沢のない淡灰緑色の釉がかかる。釉は畳付付近で薄く、全体に貫入が入る。当片は表採によるが、無文の類例の鉢は鎌倉では14世紀後半から15世紀に比定される層より数点出土している^(註3)。

2は見込みに片切り彫りにより何らかの文様が描かれる鉢である。口径約5.5cmを測り、高い断面長方形の高台を有する。灰白色の良くしまった素地に茶色味の緑灰色の光沢ある釉がかかる。畳付付近は露胎で赤褐色を呈する。薄い作りである。Ⅲ次2層中より出土。

3、4、6はいずれも見込みに貼花文を有する。3の貼花文は極く一部分であるが、4、6は共に魚文で、おそらくは双魚文であろう。魚文のスタイルは随分と異なる。3、4、6は共に高い断面長方形の高台を有し、透明度の高い緑灰色乃至緑褐色の釉が厚くかけられ、畳付付近のみ赤褐色の露胎となる。素地は概ね粘り、しまり共に強い灰白色である。3の高台はやや開き、見込みと胴部との移行部に他の磁器片が混入し、釉はその上からかかる。磁器片上の釉は青白磁様に発色する。高台径約6.5cm。Ⅱ次D人骨付付近より出土。4は底部が胴部に比して薄い。高台径約6.5cm。攪乱壙内出土。6はやや大きく、高台径約9.8cmを測る。高い高台は断面三角形に近づく。釉は明るい緑色を呈し、高台外面に厚くたまる。Ⅱ次2層中より出土。

5は見込みに印花の魚文と篋描きの円圈が描かれ、魚文はやはり双魚であろう。更に外面には蓮弁文を有する。高台は高く、断面三角形をなし、内側に傾く。粘りのかなり強く、良くしまる白色素地に青緑色の釉は厚い。魚文は簡素なデザインで6の貼花の様な生氣はない。器壁は貼花文鉢と

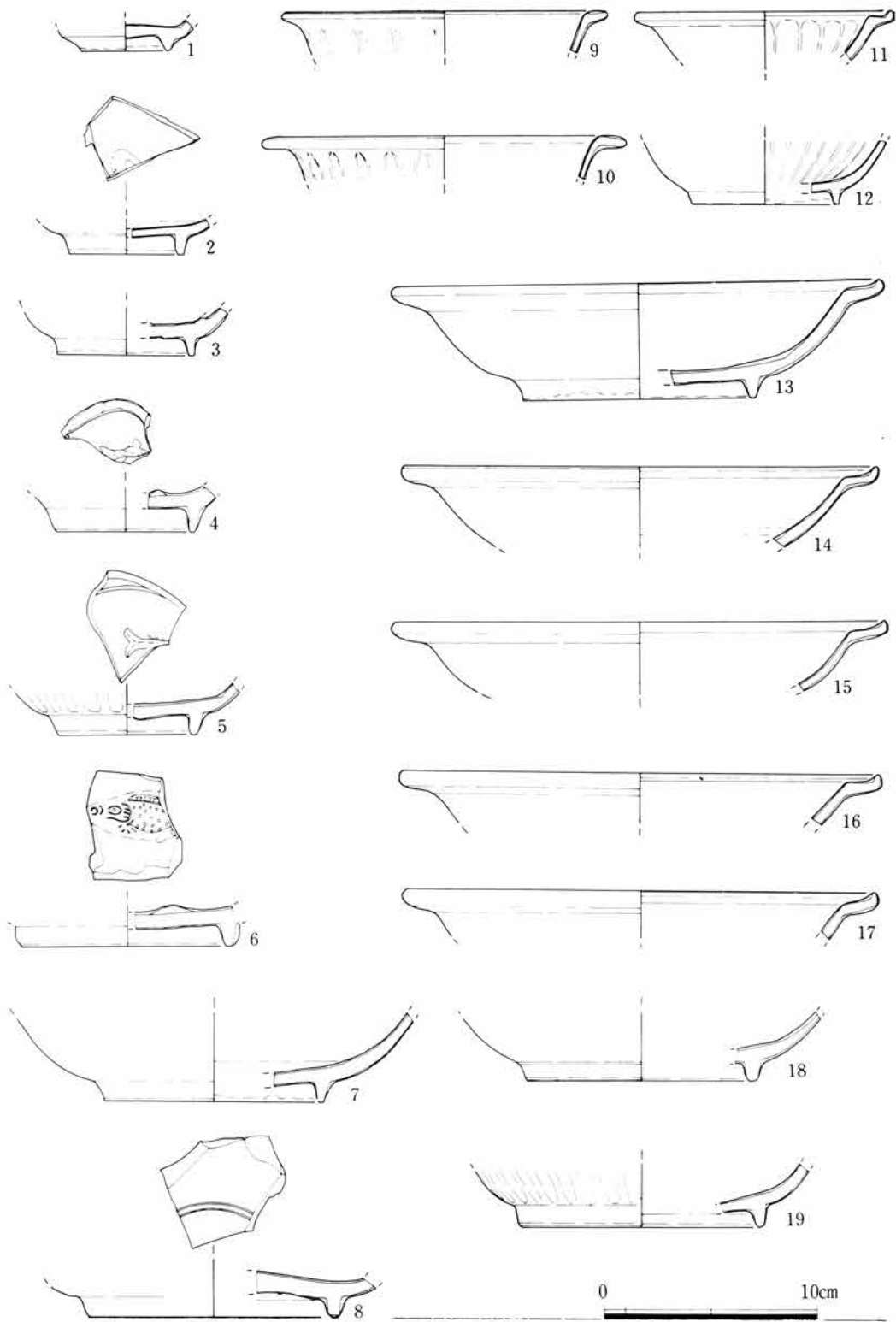


Fig. 37 青 磁 6

比べて薄い。高台径約6.5cm。表採。

外面もしくは内面に蓮弁を有する鉢は口縁が外方へ強く折れ曲がり、また更に上方へつまみ上げられた例もある。口唇は丸味を持ち、器壁は概して非常に薄く、釉層は厚い。そのためあつてか鍋のほとんど見られない蓮弁である。Fig.37-9はU字状の折れ縁に釉が盛り上がる。きめ細かな白色素地に淡緑青色の釉がかかる。口径約15cm。III次287号土壙覆土内出土。10は少し垂れ下がる様に折れる口縁を持つ。幾分ザラつく白色素地に透明度の高い淡緑灰色の釉。口径約17cm。11は上方へつまみ上げられた口縁をなし、器壁は厚めで、他より小型である。口径約12cm。灰白色の粘り、しまり共に強い素地に青緑色の釉には貫入が入る。III次257号土壙覆土内出土。12は蓮弁文鉢の下半である。断面方形の高台は貼花や印花のある鉢に比べて低いが、器壁の薄さにしては高い削り出しである。胴部の立ち上がりは急で、壺を思わせる程に深い鉢である。灰白色の焼きしまり堅緻な素地に淡青緑色の釉が畳付付近を除いて施釉される。高台径約7cm。III次第1トレンチ1溝最下層より出土。

D. 盤 (Fig.37-7、8、13~19、P L 39)

出土した盤は全て、口縁が外方へ折れ曲がり、更に上方へつまみ上げられる類である。本諸例は口径約22.5~23.5cm、高台径約10.5~11.5cmを測る。Fig.37-13では口径23.2cm、高台径10.8cm、器高5.5cmをなす。口唇部は丸味を持つもの(14、16)と尖るもの(13、15、17)がある。胴部は丸味を持ってゆっくりと立ち上がるが、7、13、14は胴部下位と見込みとの移行部に稜を作る。高台は断面長三角形をなす。素地は細かな白灰色土で、透明度の高い緑灰色乃至淡い緑色(18、19)釉である。釉層はかなり厚く、畳付付近は淡赤色の露胎となる。

Fig.37-8は他とはやや異なり、底部は重ね焼きの際に内側に湾曲し、高台は断面方形をなす。外底では中央部の釉を掻き落とし、そこに輪陶枕痕を残す。見込みに2本の円圈を持つ。

夫々の出土層位は、7(III次301号土壙覆土上層)、8(III次3溝覆土上層)、13、17(II次土丹版築面上)、14(III次I区方形竪穴建築址覆土内)、15(III次2層中)、16(III次第1トレンチ土丹版築焼土面上)である。

E. 壺、瓶、その他 (Fig.38、P L 39-7~13)

Fig.38-1は外面に細い鍋文を有する小壺である。高台径約6.2cmを測る。面取りされた断面長方形の高台脇より急な立ち上がりを見せる、鐙付蓋を持つ壺と思われる。素地は黒色砂粒を多量に含む灰白色土、粘りはあるが焼きしまりはあまい。釉は青緑色で、砂粒が付着する失透釉である。III次6溝覆土上層より出土。

2は大型の壺である。ガッシリした作りで、内外面共に削りは丁寧である。黒色砂粒を混えた灰白色の粘りもあり、良くしまった素地に薄く白色味の灰色釉が内面と高台を除いた外面にかけられる。露胎である高台内は淡い赤色に焼け上がる。高台径約10.7cm。III次I区方形竪穴建築址覆土内出土。

3は瓶子の下半である。全体に丸味を持つ。素地は黒色石粒を混える灰色の粗い土で、多くの気

泡が入る。釉は全体に施され、外面では灰褐色に、内面では緑色に発色する。丸い高台には5mm大の安山岩質の焼成台の一部が付着している。高台径約10.5cm。III次69号土壙覆土下層出土。

4は水注の口頸部と思われる。口端部は内傾し、轆轤目が高い。やや焼きしまりの悪い黒色砂粒混り灰白色素地に灰色に発色する釉がかかる。口径約6cm。III次I区方形竪穴建築址覆土上層出土。

5は花瓶の胴部片である。遺存最大径約9.5cm、下方の張った腰部径約6.5cmを測る。腰部に乳状突起が貼付され、胴部上方外面に2条の沈線が巡る。黒色砂粒を含む白色の、粘り、しまり共に強い素地に、気泡が多く、失透する暗緑色の釉が全体にかけられている。表採。

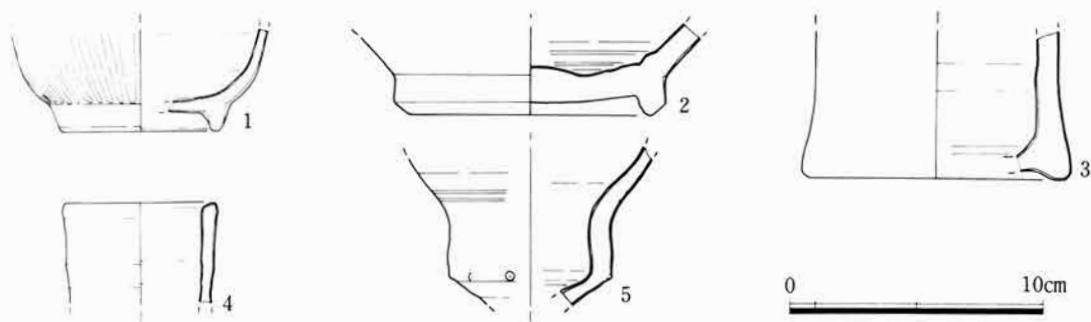


Fig. 38 青磁

註1. 横田・森田「太宰府出土輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」

【九州歴史資料館研究論集4】 1978年

註2. この篋先による細い劃花文碗は太宰府分類のI-2摘と相似すると思われるが、I-2摘は外反口縁とされており、異なるものと考えられる。註1と同じ。

註3. 光明寺裏遺跡に於いて、無本鉢は室町時代に比定される上層遺構とその下層にある黒色土層より出土している。北区鎌倉学園内遺跡発掘調査団編『光明寺裏遺跡』1980年

(宗 基 秀 明)

(2) 白磁

出土した白磁には壺(四耳壺)、水注、碗、皿、合子、小壺、小皿などの器種が認められる。出土量は青磁よりずっと少ないが、青白磁よりはやや多い。白磁の中で最も多いのは口元皿であるが、口元碗も伴なう。端反の碗、玉縁の碗も市内の他地点に比較すると、まとまった量が出土しており、しかも発掘調査の後半期——すなわちより下層——に多く出土している。その他、元代～明代に降る鉢、皿が少量出土している。

A. 四耳壺 (Fig. 39-1~13, 17)

大小の別はあるが、概して肩の張った卵形の胴部に、直立した頸部、外下方に折り反した口縁、小さめの底部とやや張り出す高台、という形のものである。耳は平たい粘土板を貼りつけたもので、3~4条の筋がつけられている。素地はほとんど白色に近い緻密なものであるが、ガス空隙を生じているものもある。釉も概して白色で透明度の低いものがかかけられているが、焼成の差が灰色、緑

灰色がかったものもある。胴内壁にはうすく釉がかかり、高台部は露胎となっている。高台を持って浸けがけしたものと思われる。口唇部の処理のしかたは、折り返すだけのもの（2～5）と、玉縁状に頸壁に付着させてしまうもの（1）の別が見られ、頸部と肩部の接合方法でも肩部に頸をはめ込むもの（8）と肩部上に置くもの（1、2、6、7）の別が認められる。白磁四耳壺は鎌倉時代の鎌倉市街地には一般的なものであり、これらの製作技法の僅かな差は使用者にとっては問題とされなかったようで、時期判定の目安にはなりえない。

13の高台内部は削り込まれたものだが、そこに墨書痕が認められた。「弓」の字に似た形であるが、その左方にも小墨痕が認められ、何が書かれたのかは判別しえない。

B. 水注 (Fig. 39-14~16, 18)

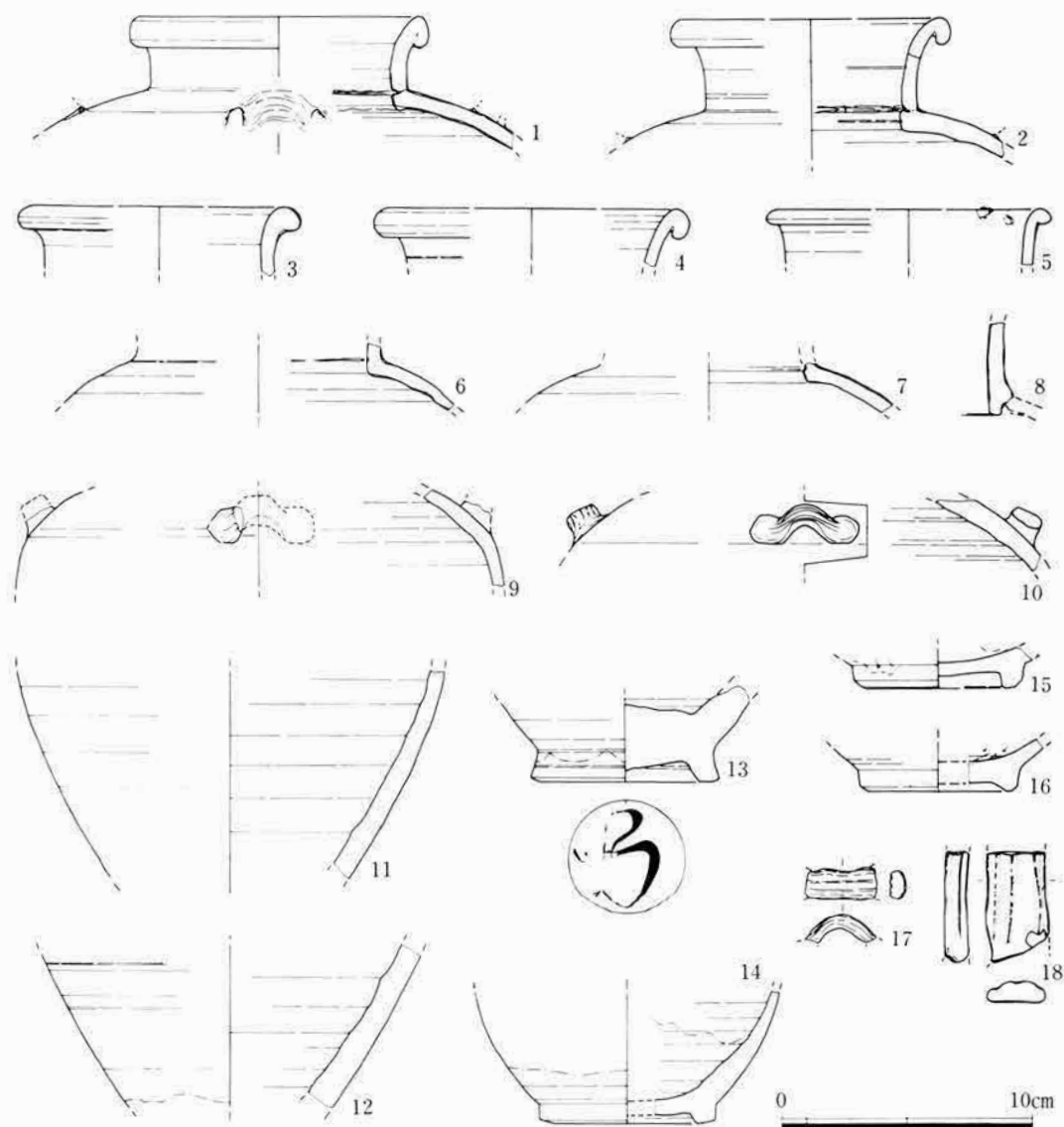


Fig. 39 白磁 (1) 壺・水注

14～16は四耳壺の底よりも胴下部の膨らむもので、内底に釉が流下し、高台の低いといった差異があるので、水注の底部ではないかと思われる。注口部は出土しなかったが、把手部片(18)が見られた。素地や釉調はほぼ四耳壺と同様である。

C. 白磁碗・皿類

白磁の碗・皿類としては少量の玉縁碗、端反の碗、高台付皿が出土している他は、圧倒的に口元の碗・皿が多かった。当遺跡の特徴として、前三者が後二者より下層に出土するとは言い切れず、中世当時における攪乱のためか層位的に器種構成をとらえることは難しい。

C-1 玉縁碗 (Fig.40-1～4、7)

1は素地白色緻密で粘性あり、釉は灰白色で半透明よりやや濁る。口縁はあまり膨れず、口唇部に再火を受けている。I区287土壙覆土出土品とV区地山上出土品が接合した。

2も1と同様のものであるが、素地にガス穴やや多く、釉は青灰味白色を呈する。口唇に再火を受けている。V区38土壙覆土上層より出土。

3は口縁がきわめて大きく膨らむもので、小破片からの復元実測なので口径に不安がある。素地

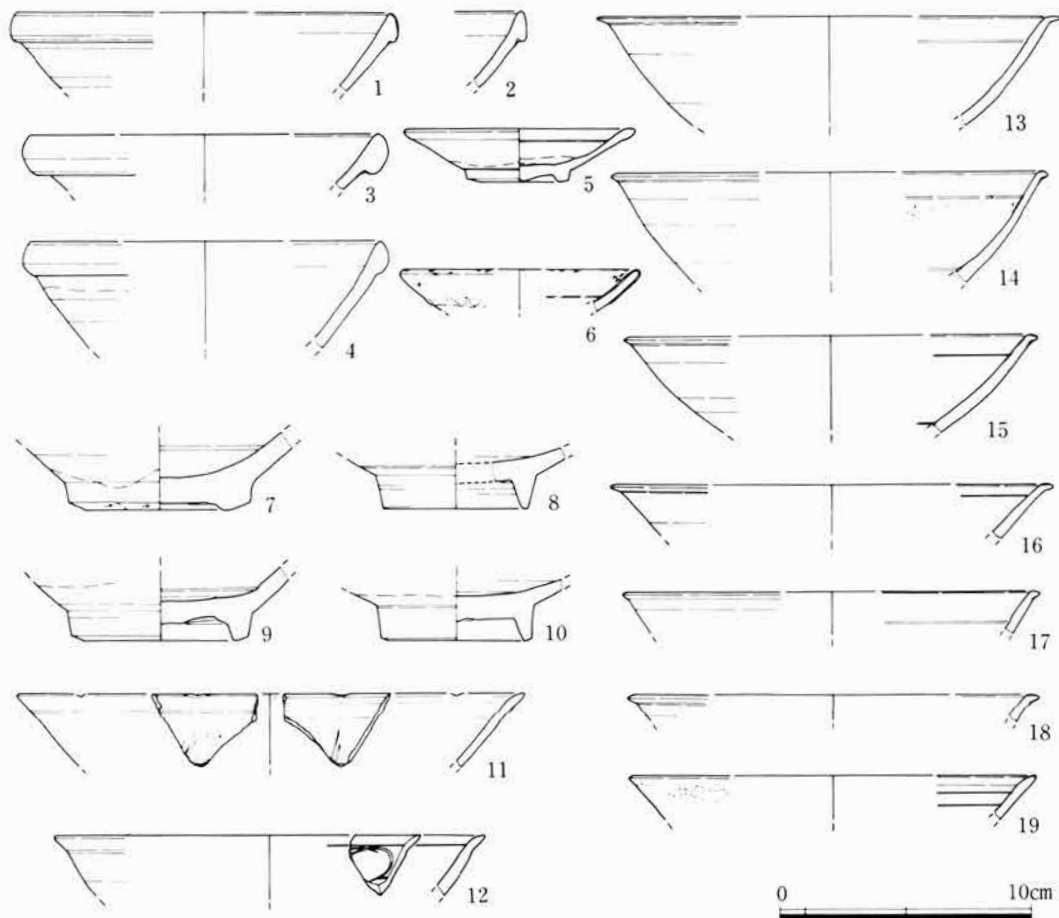


Fig. 40 白磁 (2) 玉縁碗・高台付皿・端反碗

は黄白色でやや粉状のザラつきを見せる。ガス穴も多い。釉は緑味灰白色を呈し透明感がある。内外面とも中位の貫入がある。概して火度不足の印象が強い。I区北半第3層出土。

4は素地褐灰白色で粉状のザラつきを見せ、ガス穴多く、釉は緑味灰白色でやや澄み、内外とも細かな貫入がある。口縁はあまり膨れず、外面はかなり高い位置から露胎となる。これも火度不足の感じを受ける。拡張区3層下部より出土。

7は低い高台の形状から見て玉縁碗の底部と思われるものである。素地灰白色でやや粗く、釉は青味灰白色で濁り、高台脇近くまでかかる。高台内外は雑な回転削りがなされ、畳付外周は大きな削りがさらに加えられている。高台の接地部分は使用のためか（砥石として使ったかもしれない）滑らかになるほど磨滅している。

C-2 高台付皿 (Fig.40-5、6)

5は博多などに多く出土するような皿であるが、鎌倉では珍しい例といえる。素地は明灰色でやや粗いが、粘性ありガス穴も多い。釉は灰白色でややポツテリとしている。高台内の削りは鋭く、中央片寄った所に高まりを残す。高台脇の削りも鋭い。口縁はやや外反気味で、口唇少し外へ膨らむ。内面には釉下に一沈線が巡らされ、見込周囲は蛇ノ目状に釉を削り去っている。外面下半は露胎である。第8溝覆土から出土した。

6は5と異なり、むしろ口元皿と似た印象の皿である。素地は灰白色で緻密だが、下半部は火度不足か灰黄色でザラつく。釉は灰青白色で不透明に近く、ごく厚くかけられているので流下溜りもできているが、溶けきらない感じである。口縁は肥厚せず丸まり、見込周囲の釉下に弱い沈線が巡る。外面下部は露胎となる。口唇周囲は覆輪をしたものか、タール状黒色物質が付着している。

C-3 端反碗 (Fig.40-8~19)

口縁端が外方へ引かれるように反る形をもつ碗の一群で、内面に沈線の巡るもの(13~19)と、内面に沈線の劃花文の入るもの(11、12)とがある。8~10は高台の高さから見てこれら碗の底部と思われる。これらの碗では、素地は概して灰白色で緻密であり、粘性も強い。釉の発色程度には差があるものの、安定した一群と言いうる。

11は口縁の数ヶ所に刻みが入り、口唇はあまり外反しない。内外面に櫛搔きふうの沈線文が見られる。釉は灰白色半透明。拡張区地山上出土。12は口縁弱く外反し、内面には沈線が巡り、それ以下に鋭い線による劃花文が釉下に見られる。釉は褐味明灰色半透明で薄い。第2次調査下層出土。

13は口唇鋭く外方へ張り出し、釉は青味灰白色でやや濁る。ポツテリとした厚味があり、部分的に溜りがある。VI区第2溝西側で出土。14は口唇の張り出しは小さく丸味をもつ。釉は褐味灰白色でやや濁り、内面沈線下に溜りがみられる。V区38土壌覆土上層出土。15も14とほぼ似たもので、二区60土壌覆土下部より出土。16は内面の沈線の位置高く、外反した口縁外面直下が二段に削り込まれている。釉は緑褐味灰色でごく薄く澄んでいる。第2次調査下層出土品とV区93土壌(井戸)出土のものが接合した。17、18は口唇の外反が小さく丸味のあるもので、ともに第2次調査下層出土。19は口縁端の外反がほとんど認められないが、作風として端反りの一群に近くここに入れておく。

釉は褐味灰白色半透明で、ややくすんでいる。釉下層に微気泡多く生じ、全体に厚めにかかりポツテリしている。第2次調査中層出土品と第3次調査36土壌覆土下層のものが接合した。

底部片の8は高台断面形が逆台形を呈し、鋭く削り出されている。内面は灰白色の釉があるが、外面は露胎。V区97土壌（井戸）覆土下層出土。9は見込周囲の釉を幅広に削り去っており、端反り碗の底部かどうか疑問が残る。高台内は鋭いが荒っぽ削りで部分的に大きくえぐれる。外面も鋭く削られ高台は高い。釉は内面と胴下部以上かけられ、青灰白色不透明のものである。高台接地部は幅狭いが、つるつるに磨滅しており、包丁砥ぎにでも使ったのではないかと思われる。III区65土壌覆土上層より出土した。10は8と似た品で高台は高く、内外とも鋭い伏せ削りとなっている。釉は青味白色で濁り、内面と胴下部以上かけられている。II区213土壌出土。

D. 口元碗・皿 (Fig.41)

口元皿には平底のものと同高台のつくものがあるはずだが、当遺跡では全体形のわかる高台付の資料は得られなかった。また器形の上でも口縁の外反するもの（1～13）としないもの（14～16）とがあるが前者の方が圧倒的に多い。外底近く以下が露胎（鉄分の発色はあるが）となるもの（19、20）もあるが、それは口縁外反しないものに限られるようである。外底まで釉がかかるものでも、

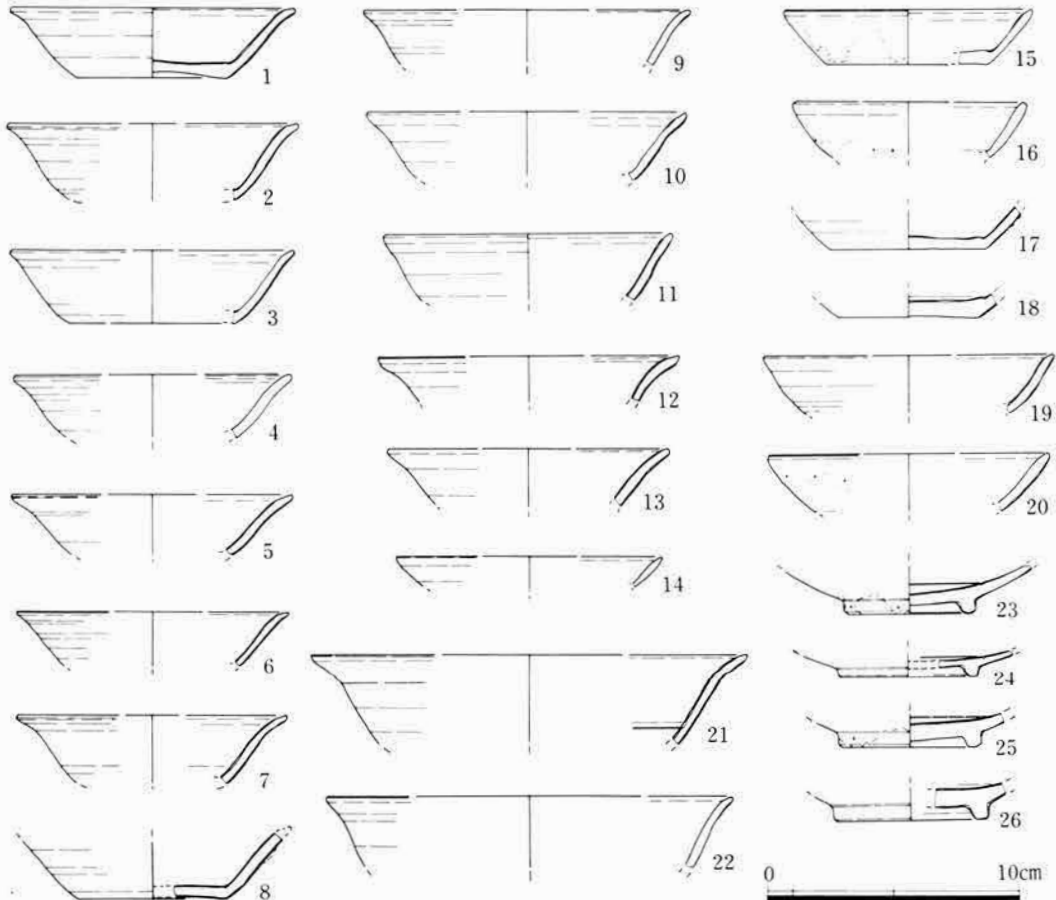


Fig. 41 白磁 口元皿・碗

大多数は底面の釉をザッと拭きとっている。

碗(21、22)は皿に比して出土量は少なく、図示し得たものも少ない。内面中位の釉下に弱い沈線を巡らすのが特徴ではないかと思われる。

底部片には平底で外面の釉を拭きとる先述のもの(17、18)の破片は多数出土している。いずれも内底周囲は沈線状の削り込み(あるいは接合痕か)があるが、釉によって埋められている。

高台をもつ底部(23~26)は、大きさから見て碗の底部ではないかと思われる。高台内まで釉がかかるものと、高台脇までのもの(25)とがある。いずれも見込み周囲の釉下に弱い沈線が巡る。

これら口元の碗皿類は、素地が白色ないし灰白色でごく緻密、粘性あるものに限られるようであり、釉の発色は灰白色や緑白色と若干の差はあるが、同一地方の窯の産品と考えられるものである。口唇端の釉の剥ぎとり方も3~4回(2~3稜)をなし、露胎部との境が黄褐色系の鉄発色をする点で共通している。鎌倉においてはごく一般的な器種であり、青磁鎚蓮弁文碗とともに当時きわめて多量に輸入されていたものと言える。

当遺跡における出土層位には特に傾向を見出せるものではなく、地山直上層や第3層に見られるし、新しい時期の瀬戸製品を含む第1溝の上層からも出土している。

E. 白磁小物類 (Fig.42)

白磁でも合子、皿、小壺類が見られた。これらは青白磁のものと製作技法的には変わらないので、単に釉色の違いではないかと思われる。

1は無文の合子蓋で、素地は緻密で粘性ある白色、釉は白色不透明なものがぼつてりと厚めにかけているが、内面下部と身に接する部分は露胎である。3区土丹版築層より出土。

2は上面周囲に蓮弁を捺し出した合子蓋で、素地は緻密で粘性ある白色、釉は純白不透明で貫入を生じている。3区401遺構より出土。

3は合子身で、1と同様無文のものである。素地は白色緻密だが粘性弱く、釉は僅かに透明感ある白色でのっぺりした感じである。蓋受けの凹状部と外底部付近は露胎となる。1区85土壌出土。

4は小壺の底部と思われる。粘性強い白色緻密な素地に、灰味白色でやや濁った釉がかけられる。型捺しによるとと思われるが、下部には凹線で同心状に表現された蓮弁が巡る。内面は施釉されているが、外底付近は露胎となる。拡張区166土壌の灰層上部から出土した。

5は型捺し作りの小皿で、見込み周囲に凹線で花卉文を表現している。素地は粘りある白色緻密なもので、灰味白色半透明の釉がかけられるが、高台周囲は露胎である。拡張区3層下部出土。

6も5と似た小皿で、見込み周囲は草花文(あるいは牡丹文)を型捺している。素地・釉ともに5と同様で外面下部は露胎になっている。第1トレンチの3層より出土。

7は合子蓋の天井部片であろう。型捺しによる鳳凰文が表現されている。素地は灰味白色でガス穴がありやや雑な感じ、釉はくすんだ白色でやや透明感がある。II区59土壌より出土。

8は口元の高台付皿の口縁部片で、内面口縁直下に雷文帯をめぐらせ、側壁部には花葉文を型捺しで表わしている。外面には回転削り痕が認められ、器壁は薄く仕上げられている。素地は白色緻

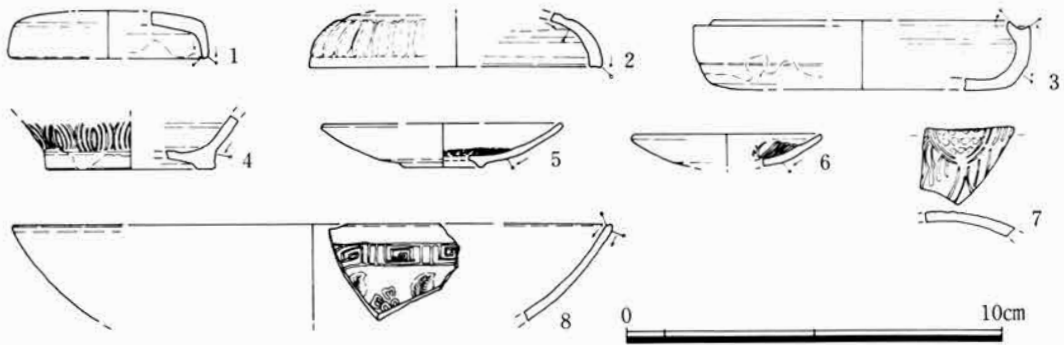


Fig. 42 白磁 (4) 合子・小壺・小皿

密で粘性強く、釉はわずかに緑灰味をおびた白色半透明のものである。口唇端は角張った削りで口兀とされ、鉄色を呈している。表土掘削中に出土したものである。

(3) 青白磁

本地点出土の青白磁には、梅瓶とその蓋、小型壺類とその蓋、合子、水注、碗、皿、小皿、水滴、器台などの種類がある。総量としては青磁には遠く及ばず、白磁よりも少ない。しかし、市内の他地点に比較してその内容は多彩・豊富であり、都市における高度な消費生活の様相をうかがい知ることにはできる。青白磁の出土層位については、本地点全体の層位的不明瞭さがあるため、器種等とからめた編年の把握は困難である。それは別の機会にゆずるとして、本書では出土青白磁を器種別に報告するにとどめる。

A. 梅瓶 (Fig. 43-1~6)

梅瓶の破片は100片ちかく出土したが、接合して全体の器形を知りうるようなものはなかった。個体数としては、本地点だけで10個体以上はあるように思われる。梅瓶の素地は概して白色緻密であるが、やや粘性弱く、口頸部では薄く底部近くでは厚ぼったくなる。内面はロクロ引きの水平凸凹を顕著に残し、頸部は別作りで肩部の上にのせるように接着している。

1は口頸部が全周残る破片であるが、肩部にのせるように頸部が接着されている。釉は透明度高い方で、沈んだところで青色が深い。

2は肩部破片で、頸部直下に空白帯をもち、2本の沈線を巡らした後、胴全面に渦文を刻むもの

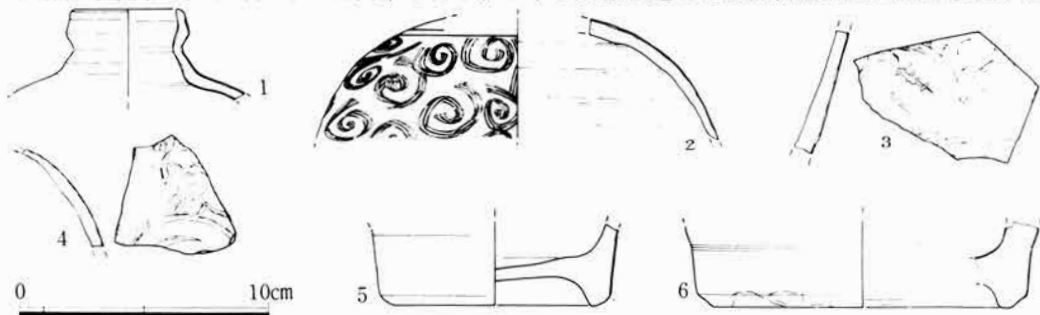


Fig. 43 青白磁 (1) 梅瓶

と思われる。渦文の刻み方は割合粗雑で、あまり深くない。各段ごとに渦の方向を交互に変えているのかもしれない。先端が3本にわかれた筧のようなもので刻んでいるのだろうが、渦の回転はややぎこちない。内面にはうすく釉がかかる。外面の釉はやや透明度のおちる灰色味があったものであるが、渦文の梅瓶では往々にしてこの傾向がみられそうである。

3、4は肩～胴部に唐草系の文様をきざんだ破片である。文様は浅く陽刻されたもので、葉間の沈んだ部分で青色が増す。内面はうすく透明釉がかかるのみである。3の外面はとくに釉の発色が美しい水青色を呈した優品であるが、陽刻の文様のある梅瓶の方が釉の発色は優れているように思われる。

5、6は底部の破片で、高台畳付部は釉がかけられないか、拭き去られている。高台周囲は無文であり、胴部施文面とは1～2本の沈線で限られている。また高台内部は削り込まれた上げ底となっており、釉はそこにまで及んでいる。6は底径からしてきわめて大型の梅瓶であったと思われる。高台畳付には焼台の痕が認められる。

B. 梅瓶蓋 (Fig.44-1~5)

それらしき破片は10片以上出土しているが、形がわかり図示しえたのは5点である。

1はきわめて大型のもので、上面に渦状の花文を削り出している。素地は灰白色で粘性あり、釉は水青白色半透明だが、再火を受け肌荒れしている。V区第2溝覆土下層より出土した破片と、IV区第3層出土のものが接合した。

2も大型の蓋だが、上面の文様は3本ずつが、ある間隔で配される浅い沈線による渦状花文である。素地は灰白色で粘性あり、釉は緑味灰青色の半透明なもので、全体に中位の貫入が見られる。内面は露胎で、一部に黒色物質の付着が見られる。V区第2溝覆土中層より出土した。

3は裾広がりやや大きめのものである。素地は灰白色で粘性あり、釉は水青色だが再火のため荒れて泡状になっている。下端部から内面は露胎である。

4は普通サイズの蓋で、上面の文様は花文であろうが、花卉は彫り込んだ凹面で表現される。素地は灰味白色で粘性弱く、内面側は酸化炎で、橙色となっている。釉は灰青色だがやや白濁し、中位の貫入が見られる。III区の3層下部出土。

5も普通サイズだが、上面には細い陽刻線の草花か鳳凰の文様が彫られている。素地は明るい灰白色で、やや粗く粘性弱い。釉は灰青色半透明で、細かい貫入がある。表面下端部から内面にかけるとは露胎となるが、表面側には鉄発色が見られる。II区第288号土壙覆土中出土。

C. 小壺類の蓋 (Fig.44-6~9)

小壺類には小型の酒会壺、短頸壺、無頸壺、水注などがあるはずだが、どの壺がどの器種のものか判定できないので一括して示した。他に図示しえなかった破片が若干あるが、数多くはない。

6は小型酒会壺かそれに似た短頸壺の蓋であろう。幅の狭い鑄蓮弁文が放射状に陽刻されている。素地は白色緻密で粘性あり、表面の釉は緑味青色で透明度高いが、再火に遭って肌荒れしている。身と接する受部は露胎で、内天井にはくすんだ灰青白色の釉が薄くかかっている。

7も6と似た製品であるが、花卉はさらに幅狭く本数も少ない。素地は6と同様だが、釉は水青



Fig. 44 青白磁 (2) 梅瓶蓋·小壺蓋·合子

色で透明感があり、ごく大まかな貫入がある。受部から内天井は露胎で、端部に鉄発色が見られる。II区第3層より出土。

8は型捺し作りの短頸壺の蓋と思われる。上面の文様は釉が銀化し不透明なため、どのようなものか不明。素地は明灰色で緻密だが、ガスによる空隙を多く生じている。釉は青味灰色。周縁端から内面は露胎。6区第24号土壌覆土中より出土。

9は水注の類の蓋でなかろうか。全体に分厚く粗い作りである。上面は内行弧文と4弁花文を組合せた文様が、型捺しであろうか細かい凸線で表わされている。素地は灰味白色でごく緻密、釉は灰味青白色で再火のため荒れている。周縁下端から内面は露胎で、粗い削り痕をとどめる。III区の地山面直上より出土している。

D. 合子蓋 (Fig.44-10~21)

合子の蓋はさまざまの文様を型捺しによって作り出しており、大きさも身と共にまちまちである。しかし双鳳文や菊花文のものは市内各地点で同範ではないかと思われるものも出ており、今後比較検討の余地を残している。概して素地は緻密であるが、火度不足のものはしまり弱く陶質で釉の発色も良くない。当遺跡では合子蓋片は数十片出土しているがほとんど小片で、図示できたものは少量だが、文様の異なるものをなるべく載せるようにした。

10はややしまり弱い焼きで、釉は灰緑色透明である。上面にはかなり崩れた双鳳文と思われる文様がある。下端部周辺は露胎である。1次調査第3テストピットの土丹版築南側溝中より出土。

11は素地緻密で釉は灰味青白色を呈し、やや澄んでいるが厚いため気泡を生ずる。梅花ふうの作りであるが、外周は6弁、次周は8~9弁、中央は5弁の花文である。VII区第1トレンチ出土。

12は菊花ふうの文様で、釉は青味緑灰白色でかなり澄んでいる。天井中央がやや凹む。下端露胎部は狭い。II区228土壌より出土。

13は素地緻密で釉は水青色半透明でやや厚い。肩部が角張り8~10弁の稜花状になるかとも思われるが、頂部の文様構成はわからない。IV区49土壌より出土した。

14も素地は良く、釉は灰青白色半透明で薄い。側面に蓮弁ないし菊花状帯をめぐらせ、頂部は平坦で草花文がある。内面は天井部のみ釉がかかる。第2次調査上層出土。

15は大ぶりの蓋の頂部付近だが、素地はしまりに欠けるもので、釉は灰味青白色半透明。再火のため肌荒れしており、文様は何だかわからない。II・III区境の3層下部出土。

16はあるいは酒会壺形の小壺の蓋かもしれない。素地は良く釉は緑灰味白色で透明感がある。中央に円を置く花弁文であろうが、弁間の筋が沈線となっている。V区38土壌より出土。

17は青灰白色半透明の釉で内面は露胎。花文と思われる。VII区第1トレンチより出土。

18は暗緑灰色の釉だが、再火で肌荒れしている。鳳凰文であろう。第2次調査中層出土。

19は素地良好で緑灰白色の澄んだ釉がやや厚めにかかる。上面の文様は草花文ではないかと思われるがはっきりしない。第2次調査中層出土。

20は灰味青白色のやや濁った釉で、再火のため光沢を失っている。大きな鳥の頭部のような文様

が見られる。I区3層の出土である。

21は青白色のかなり澄んだ釉で、枝葉文のようである。内面はかなり広く緑白色の釉がかかる。拡張区の3層下部より出土した。

E. 合子身 (Fig.44-22~28)

合子の身の方は蓋に比して文様の変化に乏しく、概して蓮弁ふうの側面が型捺しで作られている。蓋受け部と胴下半以下が露胎となるのが一般的である。素地・釉は蓋のそれと変わらない。

22は小型のもので側面の蓮弁はまばらである。釉は水青色だが再火で荒れている。第2次調査の表土層から出土したものである。

23は緑灰色半透明の釉に細かい貫入がある。蓮弁幅広く間は浅く凹む。V区81土壇覆土上部出土。

24は水青色半透明の釉で、側面下半は露胎となる。VII区第1トレンチより出土。

25は素地緻密で釉は水青白色半透明、少し気泡を生ずる。蓮弁はややまばらで間は凹まない。底はやや上げ底気味である。I区拡張部の第7溝覆土より出土した。

26の釉は水青色でかなり澄む。蓮弁はやや幅広い。II区5Gグリッド地山上層より出土。

27は素地良好で灰緑白色半透明の釉はかかっている部分が少ない。蓮弁は幅狭いものが密につけられ、蓋受けは立つ。I区288土壇より出土。

28は無文の身で、低平な器形である。素地やや粗く、釉は緑灰色で半透明だが細かい貫入がある。側面には回転削りの如き弱い一段がある。第2次調査下層に出土した。

F. 碗・皿類 (Fig.45)

鎌倉市街地の遺跡では青白磁の碗・皿類はどこでも出土するものであるが、当遺跡ではその量がかなりまとまっており、図示し得たものの他にも同種の破片数十片がある。

1~3は口縁の外反する碗で、かなり大ぶりのものである。口縁近くの内面は無文だが、器壁が薄いことから、内面下半に文様が型捺しされる可能性を捨てきれない。いずれも素地は白色緻密なもので、釉は緑味ないし灰味青白色で半透明よりやや澄む。1はII区110土壇より、2はIV区34土壇より、3は第3層より出土した。

4は口唇外反する小皿で、おそらく高台のつくものと思われる。素地は白色だがやや軟質で、釉は緑灰味青白色半透明、中位の貫入が全面にある。IV区112土壇出土。

5も口唇外反する小皿であるが、器壁がきわめて厚い。白磁の高台付皿と似た器形である。素地は灰白色でやや粗いが粘りあり、緑味灰白色半透明でわずかに白濁した釉がかかる。高台脇近くは露胎で、内面中ほどの釉下に沈線がめぐる。III区66土壇覆土中位より出土。

6は小碗の底部と思われる。素地は白色でやや粗いが硬い。釉は澄んだ水青色で気泡を多く生ずる。高台内は鋭く削り込まれ露胎である。III区64土壇覆土上層より出土した。

7は皿の底部であるが、その口縁の形態は想像がつかない。素地は灰味白色緻密で粘性強く、釉は灰味水青色を呈するが再火で肌荒れしている。見込み周囲には沈線が巡り、高台は外方に開く小さなものが削り出されるが、畳付を越えて内側まで施釉されている。拡張区3層下部出土。

8は内側に雷文を型捺した碗で、直線的に開く器形をもつ。素地は白色緻密で、釉は透明感ある灰味青白色で内面がやや厚い。Ⅲ区南半3層出土。

9～10は内型捺し作り口元の小皿である。いずれも素地は白色緻密で粘性強い。口唇端は釉を削り去るため角張っており、鉄発色を示す。底部までは残存しないが平底であると考えられる。9では雷文帯の下に鱗（樹木）文があり、青白色半透明の釉がかかる。底面に蓮池魚文のあるものであろう。112土壙より出土。10では雷文帯のかわりに二本の凸帯が巡り、その下に草花文がある。釉は灰緑白色で透明度高い。第2溝を切る近年の井戸攪乱土中より出土。11は雷文帯の下に具象的な牡丹唐草文ふうの草花が表わされている。釉は青味白色で澄んでおり、美しい光沢を持つ。拡張区166号土壙覆土上層より出土した。

12～17は高台付の小皿である。いずれも内型作りで外面と高台は削り出しと思われる。素地は白色緻密で粘性強いものである。12は中央に菊花文を配するが、各花卉は凸線で表わされ、おそらく16弁あると思われる。底ちかくは露胎だが、灰味青色半透明の釉は内面で美しく外面は白濁している

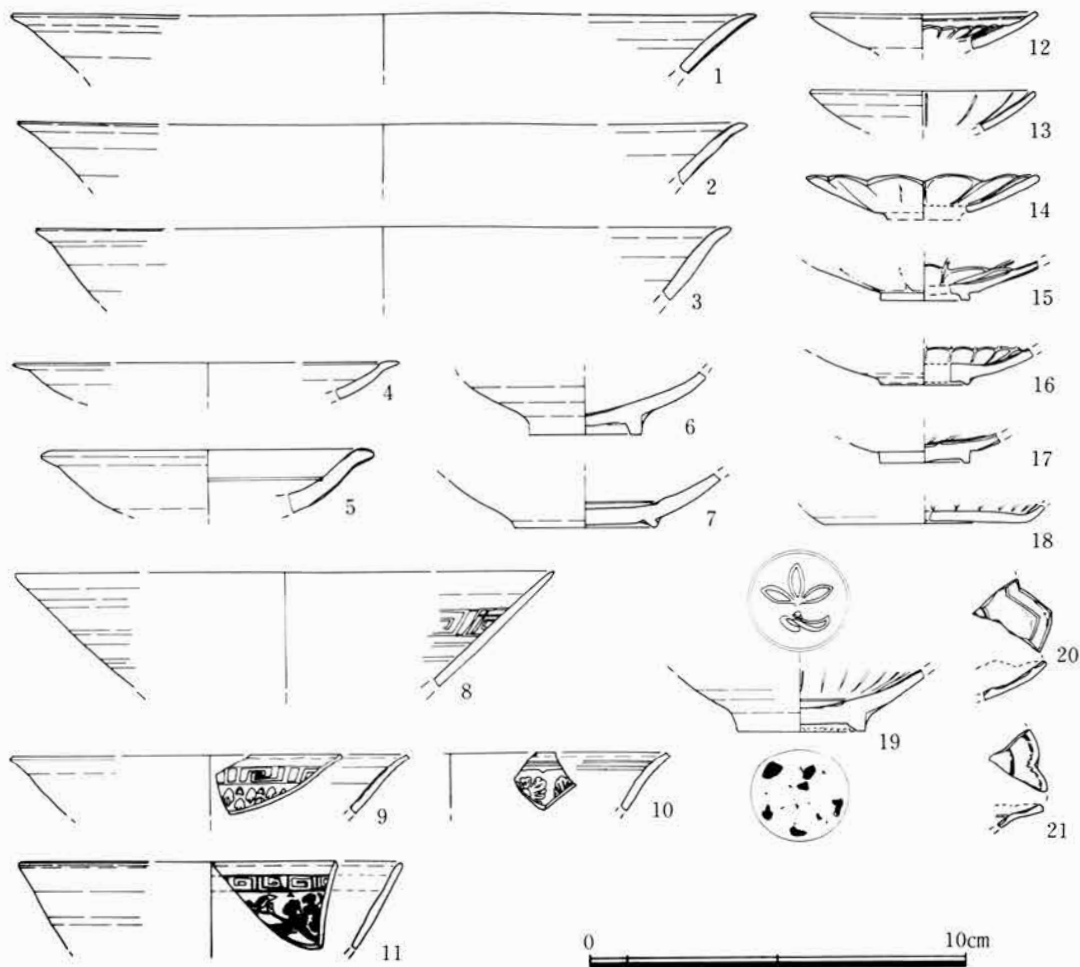


Fig. 45 青白磁 (3) 碗・小皿

る。Ⅶ区3層より出土。13区では篋でつけた放射線が花卉状の効果を出している。釉は褐味白色だがかなり透明に近い。拡張区3層下部出土。14は12弁輪花状の小皿で、花卉の縁は凸線状になり内部は凹む。高台脇は露胎となる。釉は水青色半透明で、表面には銀化光沢が見られる。第6方形竪穴建築址(拡張区166土壌)覆土上部出土。15も輪花状になると思われるが、8弁で花卉は二段構成になっている。高台脇近くからは露胎で鉄発色が見られる。釉はほぼ透明な緑味青白色で、花卉内部は厚いので気泡を多く生じている。Ⅲ区65土壌覆土下層より出土。16も二段構成の花弁をもつ輪花皿で、おそらく24弁あると思われる。高台内は露胎であるが、器体下部と高台脇の間でも釉を削り去っている。釉は水青色でくすんだ濁りを示す。拡張区167土壌覆土上部出土。17は底部のみでよくわからないが5弁輪花形になるらしく、中央には小円がある。高台脇は鋭く削り込まれるが、高台内は深くない。釉は灰味緑色で澄んでいるが全体に厚く、気泡を生じている。第3溝覆土第1層より出土。

18は平底の小皿であるが、やはり型捺し作りで体部内面には放射状凸線がある。素地は白色緻密で釉は明るい水青色に澄んでいる。重機掘削排土より出土。

19は小碗底部で、型捺し作りである。見込みには凸線で蓮華文が表現され、体部には放射凸線がある。高台は鋭く削り出したが、内部はそう深くない。素地は白色緻密で、釉は透明度高い水青色で微気泡を多く生ずる。高台畳付内周部は細かい打ち欠きを加えられ、高台内には何かをとりつけたのか黒漆の付着が認められる。見方によっては「大」字を漆書したようにも思われる。第2次調査の下層出土である。

20は稜花小皿だが小片のため何弁かわからない。花卉外縁は二重凸線で、中央寄りにもう1本の凸線も認められる。素地は良好で釉は澄んだ水青色を呈する。Ⅲ区北半3層下部出土。

21も輪花ないし稜花形の小皿で、口縁端は外へ開く。素地良好で釉は澄んだ灰緑白色で、厚いところで微気泡を生ずる。Ⅱ区3層下部出土。

G. その他の青白磁 (Fig.46)

青白磁には以上の他に、水注、小壺、水滴、器台などが出土している。その量は決して多くないが、他遺跡にはまれな優品が含まれている点を見逃せない。

1は大型の水注の肩部付近であろう。おそらく大きな把手と湾曲した注口の付くものと思われる。素地は灰味白色緻密で、釉は灰味青白色を呈しやや澄んでいる。内面はロクロ痕をよく留め、下方から透明釉が逆流している。Ⅶ区第1トレンチ出土。

2は小型の水注の注口部である。別作りの注口を、穴をあけた器壁に接着している。素地は灰味白色緻密だがやや粘性弱く、釉は澄んだ緑味青白色で気泡を多く生ずる。内面は露胎でやや鉄発色を呈する。第6方形竪穴建築址(拡張区166土壌)より出土。

3は小型の瓜形水注の把手部である。型作りされた瓜形の谷間部に粘土板の把手が接着されており、把手外面には3本の沈線が付される。素地良好で釉は青色ないし青白色で澄んでいる。再火のため一部肌荒れしている。Ⅲ区第1溝覆土下層より出土した。

4～9は小壺類である。この器種は鎌倉市街地でもそうしばしば出土するものではなく、高級指

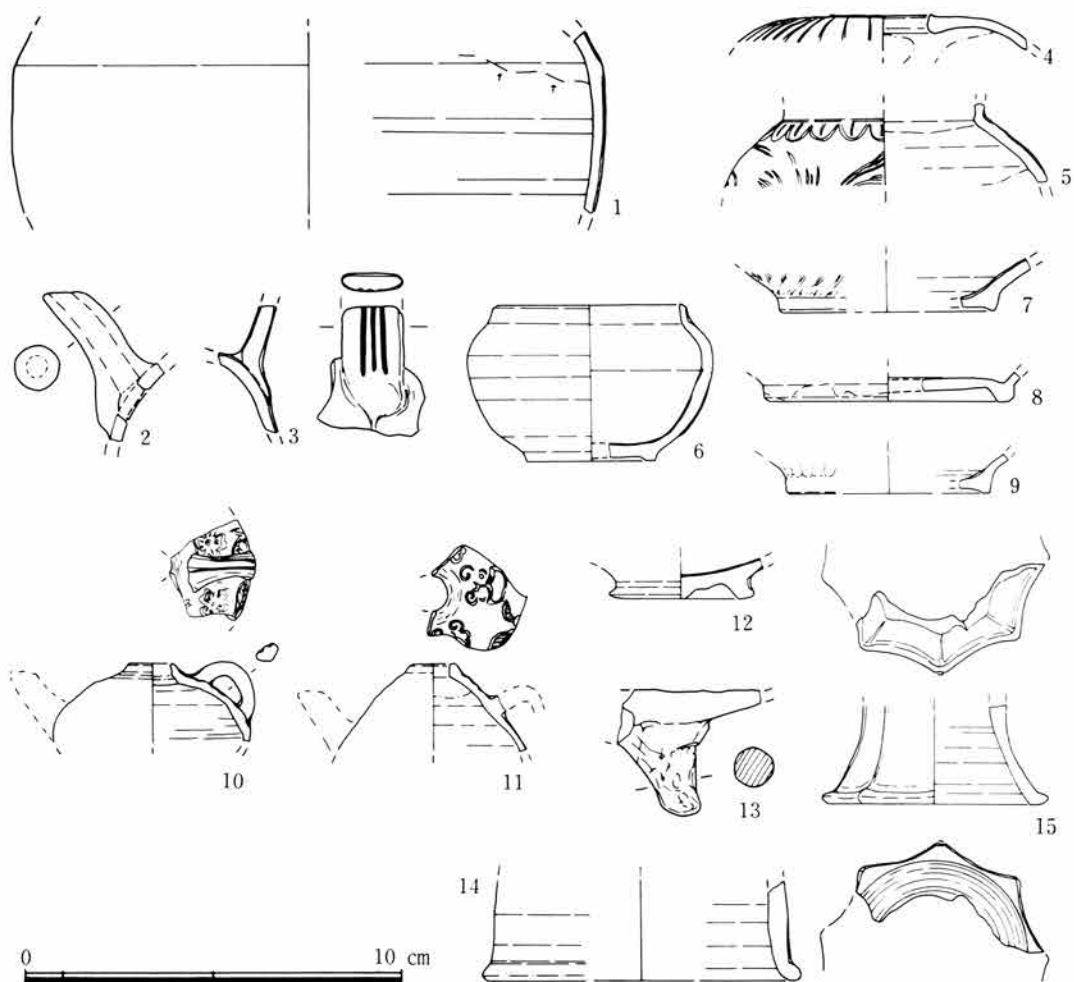


Fig. 46 青白磁 (4) 壺・水注・器台等

向の装飾性の高い器と言えそうである。当遺跡では胴部小片を加えると10個体以上がある。

4は無頸のもので、あるいは水注かもしれない。瓜形を気取るような筋が沈線で付けられている。素地は灰味白色緻密で釉はやや濁った緑味灰白色で、内面に流下がある。VII区第1トレンチ出土。

5は短頸の小壺で、頸下に下向蓮弁が、肩にかけて草葉文(?)が型捺して表現される。素地良好で釉は緑味青白色半透明である。II区北半の2層より出土した。

7は小壺の底部で、胴の文様を出すため外型に粘土を押し込んでいるので、底部脇に粘土のしぼれた痕が認められる。底は上げ底状になる。素地良好で釉は緑味青色半透明のものが内側のみに厚くかかる。I区北半の3層上部より出土。

8も小壺の底部と思われる。外型に粘土を押し込んださいに高台上部の部分も押し込まれて凹んでいる。素地は明灰色緻密でへき開性を示す。釉は灰青色不透明のものが高台脇までかかる。内底には油質の鉄分が茶褐色の飛沫として見られる。外底には生乾き時に棒でつけた直径方向の一線刻があるが、窯印のごときものかもしれない。第3次調査東半部の2層までの浅いところで出土。

9も7と似た底部で、素地良好、釉はほぼ透明な水青色、外面露胎である。第2溝出土。

10、11は小型の水滴である。上半部と下半部を別々に外型で作り、これに注口と小さな把手を接着して作っている。ともに素地はごく精緻で、釉はかなり透明な灰緑白色を呈し、口縁内側までかけられている。10は肩以上に花文と葉文をあしらったもので、I区北半の2層より出土。11では葉文と花のような崩れた文様を表現しており、II、III区間の3層下部より出土した。

12は碗か壺かわからないが高台のある底部。素地良好で、釉は緑味青色～青白色を呈し、外面では半透明、内面では白濁している。高台内は露胎で鉄発色を見せる。高台内の中央は渦状の高まりとして残される。第1次調査第3テストピットの2層より出土。

13は香炉か何かの脚部である。ロクロ作りと思われる底部に、粘土塊をひねって作った脚を接着し、ザッとナデつけている。素地は明灰色緻密で粘性強く、釉は梅瓶のものに似た灰味青白色半透明で大まかな貫入があり、脚の根本までかかり一部飛散する。内底は露胎。V区1溝より出土。

14は器台脚部と思われる。素地は明灰白色緻密で粘性強い。釉はかなり澄んだ緑味水青色で、接地部から内側は露胎となる。I区北半の3層より出土。

15も器台か花器脚部と思われる。八稜形の外型に粘土を押し込んで成形し、内部は回転削りして整えたものと思われる。素地良好で釉は青白色を呈するが、再火のための肌荒れ著しい。接地部より内側は露胎となるが、黒くすすけている。II区北半3層出土品と2層出土品が接合した。

(4) 緑釉陶 (Fig.47)

緑釉陶としては、二彩・三彩をも含む泉州窯系の盤と、窯地不詳の壺、稜花皿が出土している。破片数は40片ほどでそう多くはないが、黄釉陶よりは多い。鎌倉市街地へは、黄釉陶にやや遅れて流入したように思われるが、当遺跡においては地山直上層からも出土している。

盤(1～10)は、灰色ないし褐灰色の素地に石粒を多く含む胎土で、粗っぽい感じではあるが焼成良好で硬い。口径30cm強ほどのもので、口唇部は玉縁状に肥厚し、胴はややふくらみ、底は砂底という共通性がある。1～3は表土ないし2層からの出土で、肌荒れや銀化が見られるものの緑色不透明の釉が内外にかけられている。4～7の口縁部片も断面形状に微妙な差はあるものの、ほぼ同類の品である。4はIII区20土壇、5は第2層、6は拡張区3層下部、7はV区38土壇より出土。8～10は底部片で、外底面は露胎砂底だが指頭押しナデ整形を加えている。内面の釉には銀化と灰の付着が認められる。8はI区3層下部、9はVII区第1トレンチLグリッド部、10はV区38土壇より出土した。11、12は同一個体の破片と思われるが、二彩の盤の底部である。素地に弧状の沈線文が加えられ、黄色と緑色の釉が内面にかけられている。素地・焼成は緑釉のみのものと変わらない。11は東部ピット列のピット中より、12はIV区11Dグリッド地山直上層より出土している。

13は稜花皿の折縁部片である。素地は胎芯で褐灰色、表層で灰色を呈する混入物のない緻密な精製土で、焼成も良く粘性もある。磁器とは思えないが良質の陶器といえる。釉はウグイス色に近い明灰緑色不透明のもので、灰の付着と銀化光沢とが認められる。稜花形をなす折縁上面部には、型捺しによるブドウ文が表現されている。本資料は攪乱表土中から採集されたものであるが、類似の

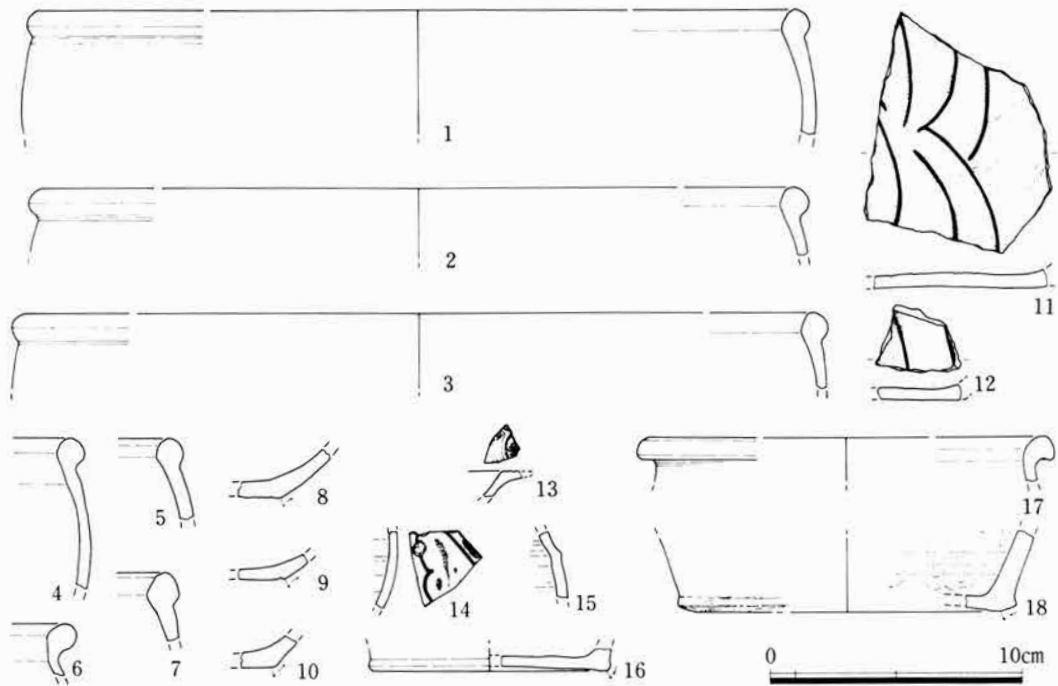


Fig. 47 緑釉・二彩

品が当遺跡に南隣する郵便局用地の調査で出土している。中国元代の製品であろう。

14は三彩の壺類の胴部片である。素地は芯で褐灰色、次層黒灰色、表層灰色を呈し、緻密な土に白・灰色の石粒を混入している。焼成はごく良好で硬く、石粒が溶けかかっており、粘性もある。器表には沈線による連弧文が付され、大部分にやや透明な緑色の釉がかけられている。緑釉のかからない部分は透明感ある黄白色釉、さらに斑状に赤褐色の釉がかけられ、三彩になっている。内面は基本的に露胎なのであろうが、緑釉の飛散・流下がある。

15は緑釉の壺の肩近くの破片である。素地は14と似た土であり、胎芯灰褐色、表層灰色を呈する。内面は露胎であるが、表面にはやや澄んだ緑色釉がうすくかけられている。灰の付着多く、部分的に白くなっている。II次調査3区第1版築面上出土。

16は緑釉壺の底部である。素地は黄褐色の緻密な上に少量の微砂と褐色クサリ礫をわずかに含む。外底側では灰色を呈するが、焼成は良好で軽く硬い。外底面は砂底だがナデつけられており、露胎である。内面も露胎でロクロ痕を留める。釉は緑色不透明のものがうすくかけられているが、明暗の斑状に発色差がある。釉表面は銀化し、着灰も少し認められる。

17、18はやや大ぶりの緑釉の壺で、あるいは同一個体かもしれない。素地は黄褐色ないし橙褐色の土に白色粗砂大石粒を多く交える粗質のものである。しかし焼成良くしまり硬い。釉は明るい緑色でやや澄んでいるが、17では黄白色の斑部があり、18には灰付着が多い。18の内面と外底は露胎で、内面には緑釉の流下が、外底には砂底をナデつけた痕が認められる。17はVI区21Fグリッド所在遺構の上層より、18はVI区97土壙（井戸）の下層より、さらに18と同一個体片が第1トレンチの

第2層より出土している。

(5) 黄釉陶 (Fig.48)

黄釉陶は十数片出土したが、すべて泉州窯系の盤の破片と思われる。大部分は鉄絵が内底に描かれたようであるが、絵の全体構成を把握できるような資料には恵まれなかった。鎌倉へのこの手の黄釉陶の流入は、同種の緑釉陶よりやや先行するようと思われるが、当遺跡では層位的な結論を導き出せない。

1は盤としては小ぶりなもので、最大径24.5cmにすぎない。やや上げ底状の盤形で口縁は肥厚し断面菱形に近い。胎土は黄灰色の緻密な素地に赤、黒、白の粗砂大石粒を多く含むもので、粗雑な印象もあるが、焼成は良好でかなり硬い。釉は内面では黄褐色半透明でわりに落ちついているが、外面は刷毛による雑な塗り方で、濁ったウグイス色の釉帯となっている。鉄絵の有無は不明。口唇上面には重ね焼きの際の付着物が認められる。外底面は砂底であるが、一応ナデ整形している。本資料は3区2層中から2片、3区19土壙覆土上部から1片が出土したものである。

2も1と似た素地であるが、釉は内面でもウグイス色を呈する。口縁は内側へ角張って張り出す形となっている。VII区第1トレンチのIグリッド部検出の井戸状土壙覆土上層より出土。

3も同じような素地で、釉は黄灰色ないし黄褐色を呈する。口縁の肥厚は顕著で、断面角形を呈する。V区1溝の19Bグリッド部の覆土上層より出土。

4は底部に近い破片で、釉はウグイス色ないし褐灰色で、暗茶褐色の鉄絵条線文が描かれている。外面は露胎である。4区49土壙出土。

5は底部片で緑味灰褐色の地に暗茶灰色ないし黒褐色で螺線文、線文、円文が描かれている。外底面は砂底だがザッとナデられている。1区2層出土。

6も底部片であるが、5までのものと異なり胎土への石粒の混入が少なくサラッとした感じの素地をもつ。釉は黄土色の地に褐色ないし黒褐色の鉄絵を描く。外面は露胎で、底面には回し押しナデ痕が認められる。第6方形竪穴建築址(拡張区の166土壙)より出土。

(6) 褐釉陶 (Fig.49)

褐釉陶としたものは、比較的に陶質で茶褐色系統の釉をかけたものであるが、大型の壺類が主となるようである。破片数としては数十点あるが、図示しうるものは少量にすぎない。

1、2は同一個体と思われる壺(四耳壺の可能性あり)の頸部と底部である。素地は灰色~橙味

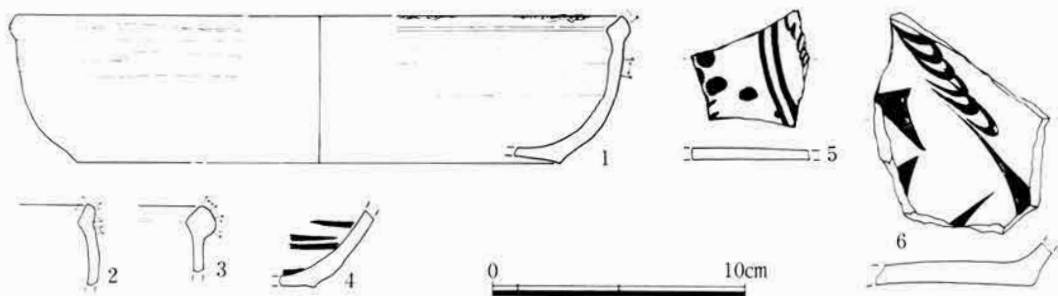


Fig. 48 黄釉(鉄絵)

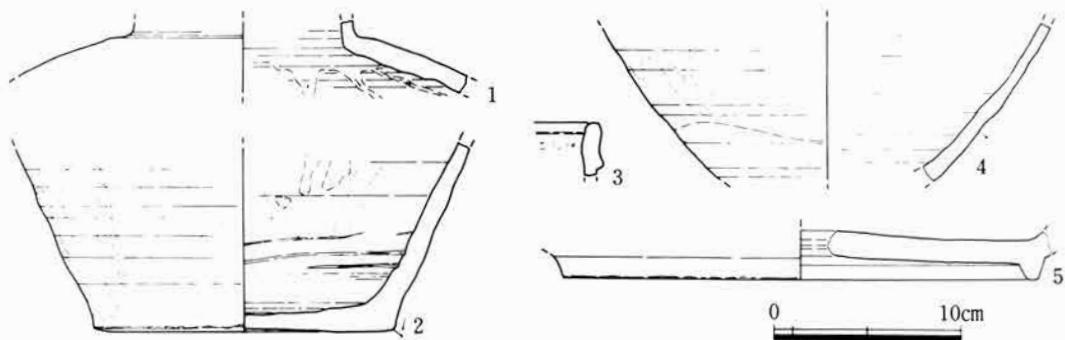


Fig. 49 褐 釉

肌色のきめこまかな土に、少量の微砂と石粒を交え、割れ口には流紋が認められる。焼成は炎のムラによって各部で異なるが概して良くしまり、肩部では石粒が溶けかかっている。釉は茶褐色でわずかに透明感あり、うすくかけられるが、下部では濃淡の流紋を見せる。外底は砂底露胎で内面も露胎だが、釉の飛散流下が見られる。全体にロクロ痕が顕著だが、内底とその近くには螺線上に上昇するシワが認められる。1、2および同一個体の破片10片が、2次調査1～3区の第1～第3土丹版築面を中心に散乱状態で出土している。

3は長胴壺の口縁部片で、褐灰色の緻密な素地に粗砂大石粒を少し含み、石粒が溶けかかるほどよく焼き締ったものである。釉はやや赤味のある茶褐色で薄く、暗紫色などの濃淡斑を見せ口縁内側にも及ぶ。

4は呂宋壺形の胴下部片である。素地は褐灰色でごく緻密、白色粗砂大石粒とえんじ色石粒を交え、割れ口には練りの流紋が見られる。焼きしまりきわめて硬い。釉は外面で、茶褐色ないし黒褐色の釉が浸けがけされ、底近くは露胎になるが鉄分の差で橙褐色から暗紫褐色を呈する。内面は白色に黄褐色、黒褐色の斑点の散る白濁釉がうすくかかっている。同一個体片は12片ほど認められるが、VI区92土壇、同56土壇、同57土壇、IV区123土壇、II区南3層、V区地山上、VI区2層などきわめて広い範囲に散らばって出土している。

5は炆器質無釉の植木鉢底部で、褐釉陶には含まれないものである。紫味褐灰色を呈する素地はまったくの石質で、粘土より碎石分の方が多くくらいである。きわめて硬く焼きしまっており、重い。高台内は削り込みで、底中央に径3cmほどの孔があげられている。高台外縁周には使用時にぶつけたような欠けが目立つ。表土掘削時に出土したものであり、類例もないので、生産地・時代ともに不明な品だが報告だけでもしておく。

(7) その他の舶載陶磁器 (Fig.50)

これまで見てきたような磁器、陶器類の他にも、種別にまとめ得ないくらいの少量ずつの舶載品が出土している。新旧あるいは出土状況なども様々であるので、以下逐次説明を加えておく。

1～3は白磁の鉢である。同一器形でサイズに差のある3個体で、他に胴部片1点が出土している。素地は灰味白色を呈する微粉質のもので、磁器としてはきめ細かさにやや欠け、粘性弱い。釉

は白濁した不透明のもので薄くかけられ、こまかな貫入があり、釉下に灰色のシミが見られる。内面は全面施釉されるが、外面は胴中位以下露胎となる。口縁は上端で外方へ張り出し、蓋受けというほどではないが上端面は僅かに凹む。底面はいわゆる碁笥底状に削り込まれ、高台状部脇の立ち上がりも削り面の屈曲がシャープに作られている。1と3はIII区65土壌より、2は第2次調査3区第1版築面より出土した。このような白磁は鎌倉ではこれまでに出土したことがなく、どこの産品か不明であるが、釉調などから見て漠然と元末～明代のものではなかろうかと思う。

4～6は白磁の高台付皿で、明代のものである。素地は灰味白色の粉状でしまり弱く、陶質の印象を受ける。釉は黄褐色味を帯びた白濁釉で、細かい貫入がある。口縁は内湾気味に開き、端部は肥厚せずやや角張る傾向を見せる。高台は削り出しでありあまり高くはなく、胴下部以下は露胎である。4は第3溝の上層より、5はVII区第1トレンチ西側溝覆土下層より、6は第6溝の上層より出土しており、いずれも層位的には新しい時代のものであっておかしくない。この手の白磁皿は鎌倉では、来迎寺北遺跡（『鎌倉市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』）や建長寺法堂前（未報告）など室町時代層に類例の出土を見ている。

7は褐釉の小壺である。素地、釉ともに「茶入れ」と呼ばれているものと共通する。素地は暗灰色でごくきめこまかく、均一で粘性があり、きわめて硬く焼きしまっている。磁器の印象がある。釉は暗い茶色を呈し、半透明よりやや澄み光沢をもつ。全体にロクロ成形のようで、外底には糸切り痕を留め、器壁は2mm程度と薄い。口縁は外反して開き、端部は丸味をもつ。外面下部は露胎である。第2次調査2区第2土壌より同一個体の口縁片と底部片が出土したが、胴部片はみつからなかった。

8は黒褐釉をかけた小鉢と思われるものである。素地は茶入れに似た土で、黄褐色味灰色を呈しごく緻密で、硬く磁質である。釉は内外ともにかけられているが、口縁付近では拭き去られ鉄発色を

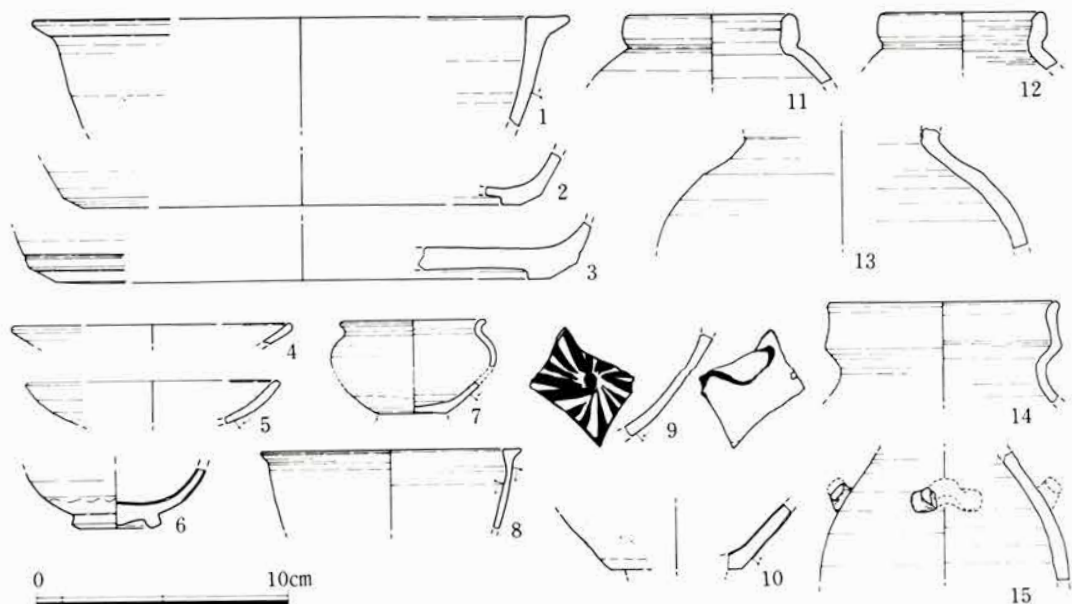


Fig. 50 その他の舶載陶磁器

呈している。釉色は黒褐色で不透明である。口縁端部が広がった平坦帯をつくり、その釉が拭き去られていることからすると、蓋をもつ器かもしれない。II・III区にまたがる176土壌より出土。

9は白磁鉄絵鉢の胴部片である。素地は褐味灰白色緻密で粘性がある磁器質のもので、釉下には白泥による化粧がけがなされている。化粧土は褐黄味白色を呈し不透明であり、その上に暗褐～黒褐色を呈する不透明な鉄絵が描かれ、さらに透明釉がうすくかけられているようである。鉄絵は筆描きでのびのびとしている。内面には花文を、外面には文字のくずし文様を配しているように見受けられる。僅かな残存部でみると、胴下部は露胎となるようである。VI区21Eグリッド所在92土壌覆土より出土した。本品は鎌倉での白磁鉄絵の初出土例であったが、その後、千葉地遺跡、浄明寺稻荷小路遺跡、諏訪東遺跡、向荇柄遺跡などで類品が出土している。生産地は磁州窯とも吉州窯とも言えず未詳である。

10は天目茶碗の胴下部片である。素地は褐味灰色で緻密であり、粘性強い。釉は褐味黒色～暗灰褐色を呈し、ポツリと厚くかけられ、つややかな光沢があり部分的に禾目が見られる。高台部につながる外面下部水平面の削りは鋭い。調査初期の重機による掘削排土中出土のものである。

11～15は褐釉か青磁釉の長胴壺類である。この種の壺類は博多に多く出土しているようであるが、鎌倉でも近年少量ずつ出土することが知られるようになってきている。概して鎌倉時代前半の遺物を出土する地点での検出が多いようである。

11は黒褐釉壺で、素地は橙赤褐色のごくきこまかな土であるが、茶入れほどには硬くなく、軽くして陶質である。釉は黒褐色で光沢のない汁のような感じのものが外面に薄くかけられているが、口縁内にも流入しており、外面でも流下の濃淡が認められる。VII区井戸覆土の貝層上層より出土。

12～15は青磁釉ふうの釉のかけられた壺である。12の素地は紫灰褐色～紫灰色を呈するごく細かな土に径1mmほどの白・黒色の混入物を含んでいる。軽くしまった硬い焼きである。釉は緑褐灰色の濁ったもので、口縁内にも流れている。第1トレンチ西側溝より出土。

13は赤紫褐色の砂質土に白、赤色の砂粒を交えた陶質の素地だが、きわめて硬く焼きしまっている。釉は緑味暗赤褐色を呈しているが、本来は青緑色系のものであったろうと思われる。濁っていて白濁斑点が多く認められ、再火を受けたものかもしれない。内面はロクロ痕をよく留め、内面にもうすく釉がかかっている。破片よりの復元実測のためはっきりしないが、15のような四耳が付くものかもしれない。III区北部3層下部出土。

14の素地は細砂含みであるが緻密で、よく焼きしまり硬く、褐味灰色を呈する。磁器ふうである。釉は緑褐味灰色を呈し不透明な青磁釉ふうのものであり、釉薬中に混入していたと思われる石粒が肌に浮いている。口縁のつくりが他のものと異なり、肥厚せず屈曲によっている。VII区第1トレンチより出土。

15はナデ肩で四耳のつく壺である。素地は灰色～黄褐灰色の微砂質で輝砂を少し交える。しまりの弱い焼きで、割れ口のザラつく陶質のものである。釉は褐緑色を呈し濁っていて、内外面ともにかかる。四耳は粘土紐の貼りつけである。IV区第2溝より出土。 (河野真知郎)

III. 国産陶磁器

(1) 瀬戸窯系陶器

本遺跡出土陶磁器総数の中に瀬戸窯系製品の占める比率は長勝寺遺跡^(注1)、光明寺裏遺跡^(注2)など鎌倉郊外の山寄りの地に比してかなり多い。こうした状況は近年整理作業を進めている旧市街地地域の調査でも認められる。

本遺跡瀬戸窯系製品の中では壺、瓶子類は少なく、洗、盤や鉢などの折縁皿系と卸皿の皿類と碗が多い。加えて仏花瓶、天目茶碗の出土もある。

A. 壺、瓶子 (Fig. 51、P.L. 50)

壺、瓶子類は20個体程が出土するが図示できるものは少ない。

Fig. 51-1～3は共に四耳壺の口頸部片である。内面頸部から外面に灰緑色の灰釉がかけられる。粘土巻上げ成形により、頸部と肩の接合部に指頭圧痕が残る。

Fig. 51-2は丁寧な作りである。口縁部の折り曲げは鋭角的で頸部に密着する。頸部は直線的に内傾し、肩は強く張る。器壁は薄く、回転篋削り調整の頸部外面と、内面頸部、肩部の接合部には稜が作り出されている。3本溝を有する耳は大きく、高く取りつけられる。古瀬戸前期乃至第2段階のものと思われる。細かな気泡の入る灰白色胎土で焼成は良好である。口径約9.5cm、III次I区方形竪穴建築址覆土内出土。

Fig. 51-1は全体に作りが雑で、器壁も厚くぼつりとしている。口縁部は折り曲げられるが、強くはなく玉縁状を呈し、内面ではナデ回しによるなだらかな凹部を作る。頸部はU字状にゆつくと内傾し、肩の張りはない。灰色胎土で、焼成は良好である。口縁部の釉には吹き上がりが目立つ。口径約10.2cm。III次2層中出土。

Fig. 51-3は1と同工のものと思われる。口縁部は玉縁状をなす。釉は淡い茶色の釉が薄くかかり、部分的に厚い部分は緑味の白灰色を呈する。胎土はきめ細かく、良く焼きしめる。口径約11cm、III次287号土壙覆土下層出土。

4は四耳壺の底部片である。高台径約10cm。貼り付け高台は外へ大きく開き、側面観は「く」の字となる。内底部には円を描く溝があり、釉がながれ、中央部は割れ口状に荒れて無釉である。施釉は高台畳付脇以上に、薄く行われ、淡い緑灰色に発色するが、所々に吹き出し部がある。胎土は本体では硬くしめる灰白色土、高台部でやや軟質の黄色味の白灰色土である。III次3層下部出土。

5、6は瓶子の底部である。共に底部円板に巻き上げ技法を用い、粘土帯継目より割れる。胴部から底部まで施釉される。5は梅瓶形である。底径約10cmを測る。外底面にスノコ痕を有し、内壁は回転ナデの後、指頭ナデ上げが行われる。外面では篋ナデがなされる。きめ細かな良く焼きしまった灰白色胎土に淡黄褐色の極く薄い釉がかかる。III次191号土壙覆土内出土。

6は腰折れ形である。底径約10.5cmを測り、器壁は厚い。内面は横ナデ、外面ではナデ上げがなされる。淡い緑灰色の釉は内面にも流れ込んでいる。胎土は黄色味の白灰色で硬く焼きもしめるが

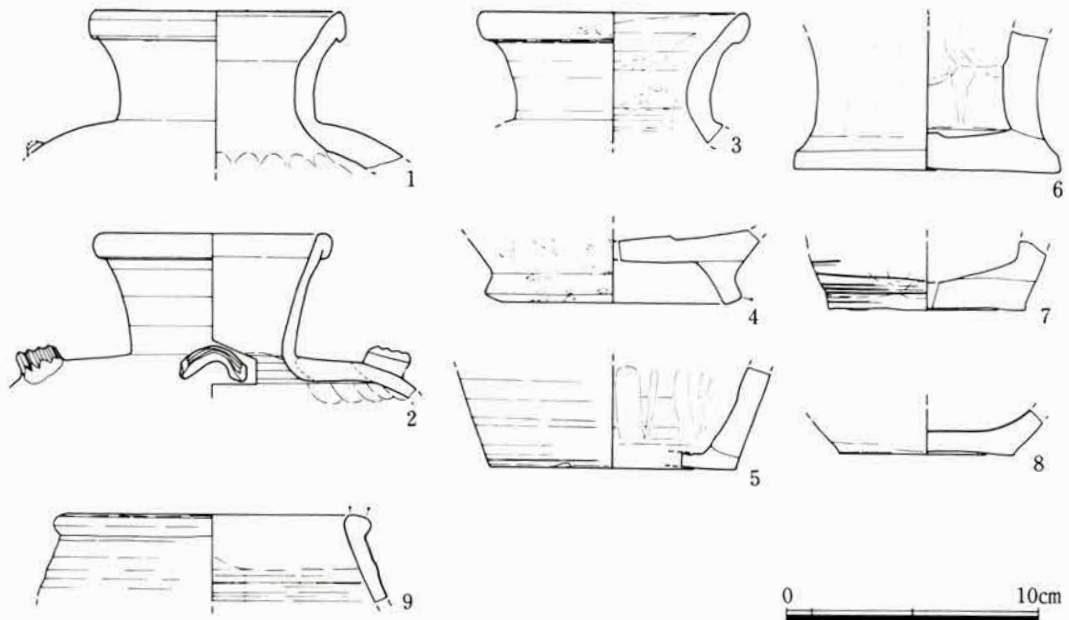


Fig. 51 瀬戸 1

所々に吹き出しが見られる。III次第1トレンチ出土。

7、8は鉄釉のかかる壺もしくは水注の底部と思われる。7は砂底水挽成形で器面調整の雑なものである。胎土は淡い黄灰色の粉っぽい土で、外面に緑褐色の施釉がなされ、内面にも斑点状に飛ぶ。底径約8cm。表採。8は器壁薄く、底部は篋削りによる。やや粗くざらつく灰色胎土に、内面に緑褐色の釉が、また外面には灰色に発色する斑点状の釉がかかる。底径7cm。III次55号土壌覆土内出土。

9は広口壺と思われる。口端部を除いて内面頸部から外面に黒褐色の鉄釉がかかる。口唇は丸く肥厚し、頸部は回転ナデがなされる。胎土は黄白色で比較的硬い。水指しであるかもしれない。口径約12.5cm。表採。

B. 洗 (Fig.52-1~3、PL51)

洗は胴部が丸く立ち上がり内湾気味となるものとした。

Fig.52-1と2はほぼ同工、同大のもので、口端部がやや異なる。1は口径約30cm、器高は7~8cm位であろうか。口唇は尖るものの丸味をもって外方へ曲げられる。良く焼きしめる灰色胎土に内外面共に刷毛塗りの褐色味の緑黄色灰釉が施釉される。III次I区方形竪穴建築址覆土下層出土。2は上半分ほどを残すのみである。口唇部は尖る。胎土、施釉、釉調共に1に似る。III次3層中出土。

3は口縁がやや外に張り出し、口縁内側は窪み、溝状となる。器壁は1、2と比べて少し厚い。口径約23cm。白灰色胎土に透明度の高い緑黄色の釉が刷毛塗される。III次3層中出土。

3例共に刷毛塗りの釉の剥落が目立つ。

C. 盤 (Fig.52-4~10, Fig.53-1~7, P L.52)

盤は折縁深皿と呼称されるのを含めて大型の深皿様で、見込の平坦なものを言う。見込みに櫛描文もしくは劃花の円圈を有するものが多く認められる。

Fig.52-4は典型的な折縁深皿と呼ばれるものである。ややゆがんだ底部から直線的に立ち上がり、その後稜をなして外反し、口縁部では外方へ開いてから上方へ向かって玉縁を作る。見込みには4本の溝が巡る。胴下部は回転篋削りで、上部は回転ナデが行われる。この調整法は、胴上部が外反するか、その逆に丸味を持つかの差異はあるとしても、以下の盤でもほぼ同様であり、施釉の薄い刷毛塗りも共通する。胎土は白色石粒、黒色微砂を混える明灰色でよくしまる。刷毛塗りの釉は緑灰色に鈍く、また斑に発色する。口径22.7cm、底径13.5cm、器高13.5cm。表採。

5の口縁は外反せずに直進し、外へ鏢様の突起をなす。洗と器型が似る。平底で内面口縁付近に水挽きの轆轤目を残す。白色粒を含む、黄色味白色の焼きしまった胎土である。緑灰色の釉は外面で垂れ流れている。見込みには、2本の円圈内に劃花文様が描かれるが、一部分であり不詳。Ⅲ次第1トレンチ石敷下出土。

6、7も同様のものであろうが、外面胴部には刷毛目調整がなされる。6は表採、7はⅢ次65号土壌覆土上層より出土。

8~10は見込に円圈もしくは櫛描文を有する底部片である。底径は夫々約12.5cm、14cm、19.5cmを測り、10はかなり大型の盤である。胴部の立ち上がりはいずれも一部分を残すのみであるが、9は急に、8、10はゆるやかであろう。見込みの円圈と文様は8、9は中央部に、10は比較的外側になされている。9の施釉は外底面にもなされている。出土層位は夫々8(Ⅲ次第1トレンチ1溝覆土下層)、9(I次2TP第1版築面下)、10(Ⅲ次66号土壌覆土中層)である。

Fig.53-1~7は見込みに文様、円圈の認められなかった折縁の盤である。Fig.53-1を除いて、口端の引き上げは顕著でなく、垂れ下がるような口縁もしくは玉縁状に盛り上がる口縁をなす。Fig.53-1、2の口径約16.5cm、19cmの小型、Fig.53-3~6の口径約24.2cm、24.5cm、24.5cm、25.6cmの中型、Fig.53-7の口径約37cmの大型と分けられる。ちなみに3の中型は底径約14.5cm、器高約7cmを測る。底部には目痕が残り、胴下位に篋削りによる段が生じている。胴部は全て、丸く湾曲する形態をなし、小型から大型へ、立ち上がりの傾向はゆるくなる。つまり、口径に比して器高が低い器型となるのであろうと思われる。釉は大方が黄色味の薄い緑に発色し、4、7では胴下部が無釉となる。灰釉の解けは不良で、泡状に吹き上がり、剥落が目立つ。胎土は白色石粒を混える白灰色土で、時折り黒色石粒をも含み、中型、大型品の中には淡橙褐色の胎土が用いられている(Fig.53-5、6、7)。

夫々の出土層位は2(Ⅲ次2溝覆土下層)、3(Ⅲ次2層中)、4(Ⅲ次3層上部)、5、6(Ⅲ次66号土壌覆土上層)、他は表採である。口端の上方へ曲がり気味のものは遺構覆土中より出土し、垂れ下るものは2層乃至3層上部より出土する傾向を持つ。

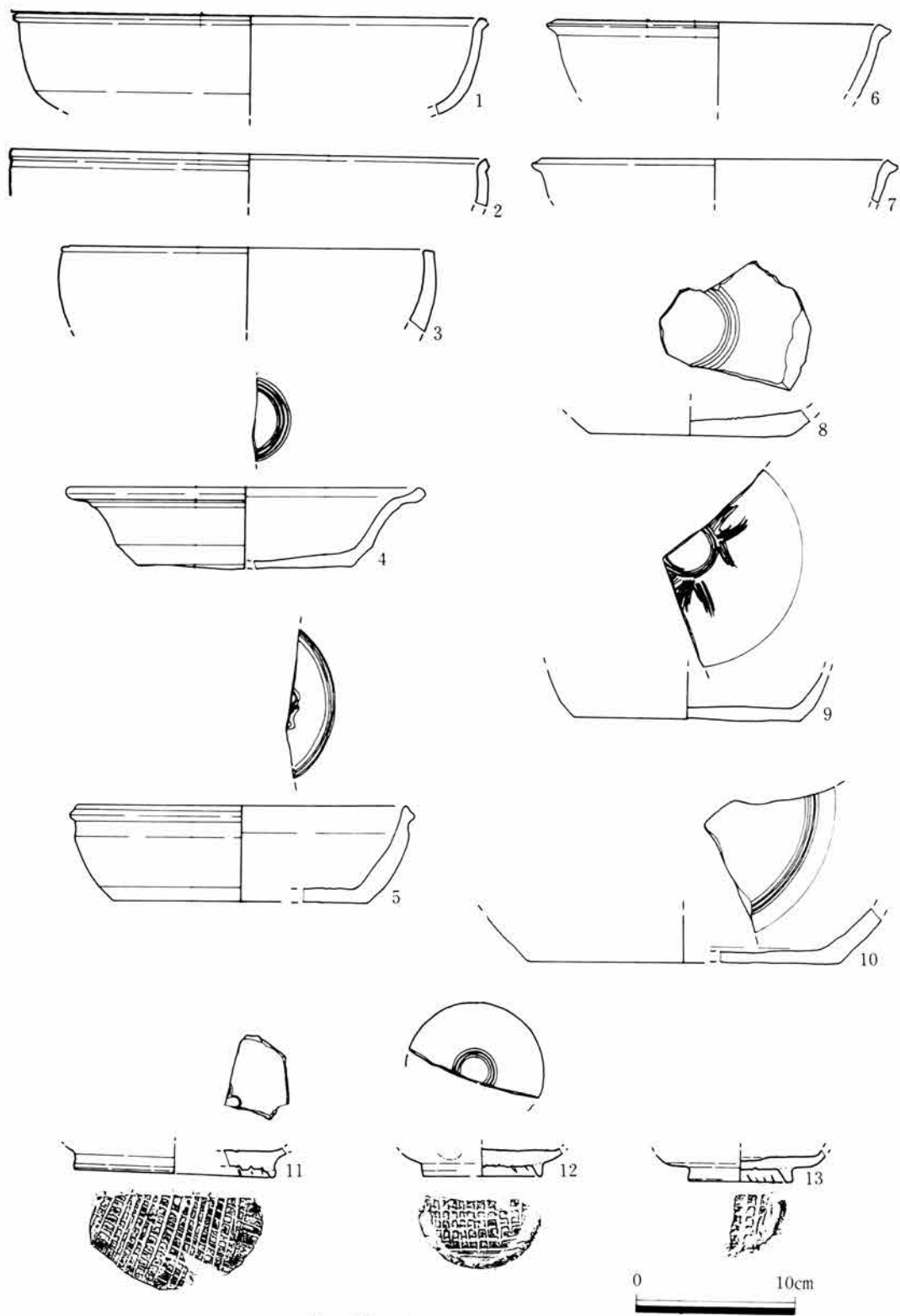


Fig. 52 瀬戸 2

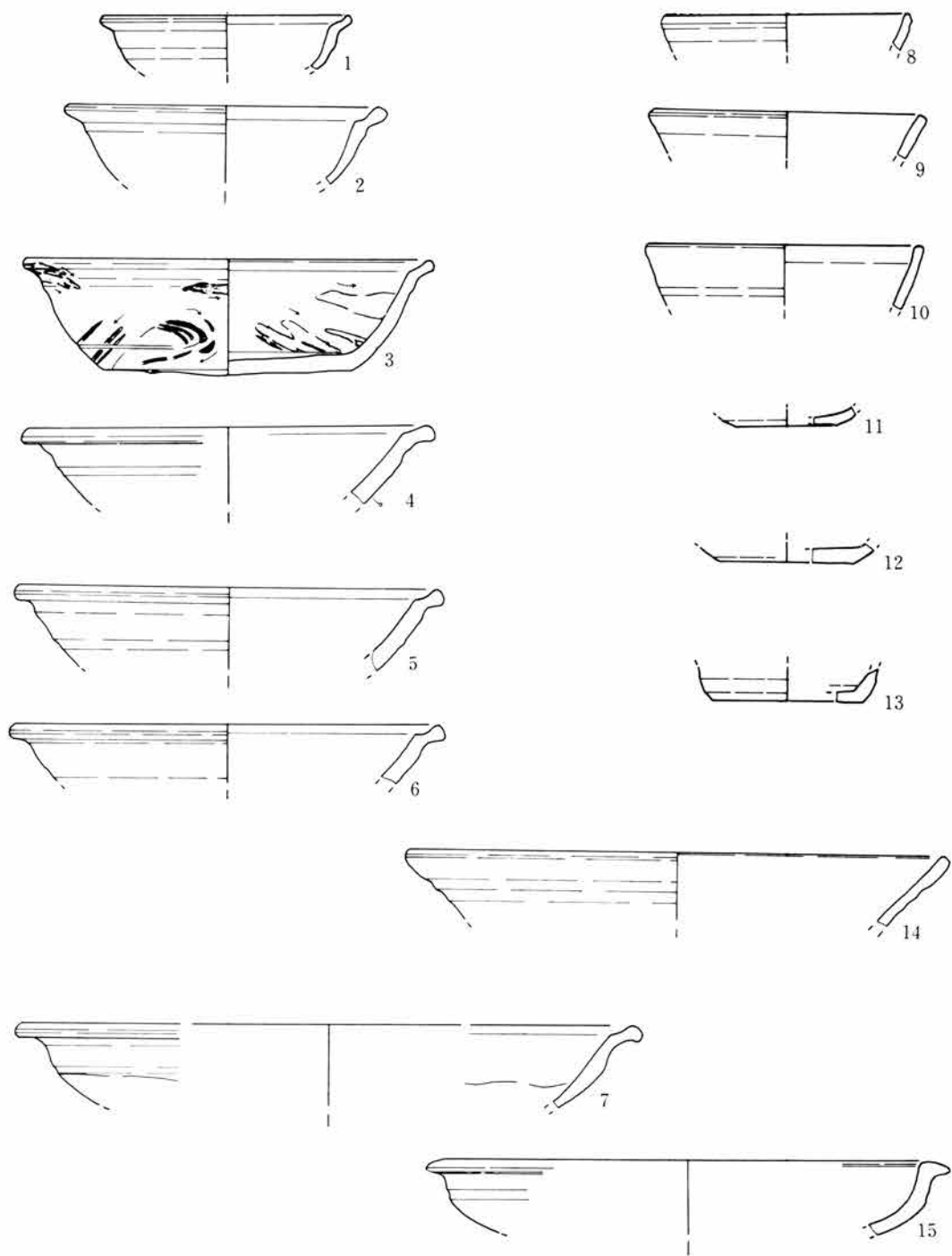


Fig. 53 瀬戸 3

0 10cm

D. 鉢 (Fig. 53-8~14, P L. 51)

口縁の直進する鉢である。口縁部片と底部片が夫々数点出土している。口径は約15cm~16.5cmの小型と32cmの大型がある。底径は6cm、8cm、9cmを測る。大ききの割に器壁は厚い。口縁形態は内湾と外反に分けられる。

Fig. 53-8は傾斜する口端部下に凹部が作られる。薄い草色の釉は内外面共にかけられ、内面では吹き上げによって失透している。II次土丹版築北2層より出土。施釉の部位、有無は夫々に異なり、7は内面のみ、10では口端部に自然釉が見られるのみである。10の口唇は水平。9はII次2層、10はII次土丹版築面上より出土した。

14は大型の鉢である。大きさに比して器壁は薄い口縁部は肥厚する。茶色味緑色釉の釉層は薄く、内面上半分から外面に施釉される。外面では白色の斑らになっている。やはりII次土丹版築外2層より出土。

底部は回転糸切りの平底である。胴部は直線的な立ち上がりなし、刷毛目調整が加えられている。釉はやはり薄い草色で釉層は薄い。11、13は外底面を含めて全体に、12では外面胴部だけに施釉され、内面には自然釉が降る。出土層位は11(III次第1トレンチベルト中)、12(III次3層下部)、13(III次2層中)である。

胎土は灰白もしくは灰白色に時折黒色砂粒を混じえ焼成は良好である。

E. 底卸皿 (Fig. 53-11~13, P L. 52)

高台内に卸皿と同様の加工がなされる鉢様の皿である。底部は厚く、回転糸切りである。断面長台形の高い付け高台貼付の後に卸目に加えられ、櫛描きの卸目は高台内側の壁にまで達する。胎土は灰白色精良土 (Fig. 53-11) の他は荒めの灰色土であるが、焼きしまりは共に堅緻である。内底には花卉様の印花 (11) 乃至櫛描きの円圈 (12) が配される。施釉は草色の釉が内面に厚くかけられ、内底と胴部の境には釉だまりをなす。12は失透する。外面は13の畳付と外底中央部を除いた施釉の他は胴部上半までであろうと思われる。12の内底と13の高台内に目痕が残る。11はIII次1溝覆土内、13はIII次第3層中より出土する。

F. 卸皿 (Fig. 54, 55, P L. 52, 53)

卸皿は瀬戸窯系施釉陶器の中で最も多くの個体数を出土し、60個体近い。多くは第3層と2層より出土している。

全形を復元しえたものはないが水挽き成形の後にナデ調整が行われ、底部は回転糸切りである。口縁形態より大きく4つに分類できる。

Fig. 54-1~5は外反気味口縁の器壁がやや薄くなり、断面方形の口唇は外へ斜傾する。底径と口径の比は1:2をなし、腰が強く張り出してから胴が立ち上がる。胴部外面は、水挽き成形後のナデ痕が強い稜を作る。見込みの卸目は比較的丁寧で目が深い。黄緑色に発色する釉は主に胴部に刷毛塗りされるが、2、4は外底にも、5は卸目にも施釉される。4の底部にスノコ底が残る。夫々の出土層位は、1(III次第1トレンチ1溝覆土内)、3(III次66号土壙覆土上層)、4、5(III次3

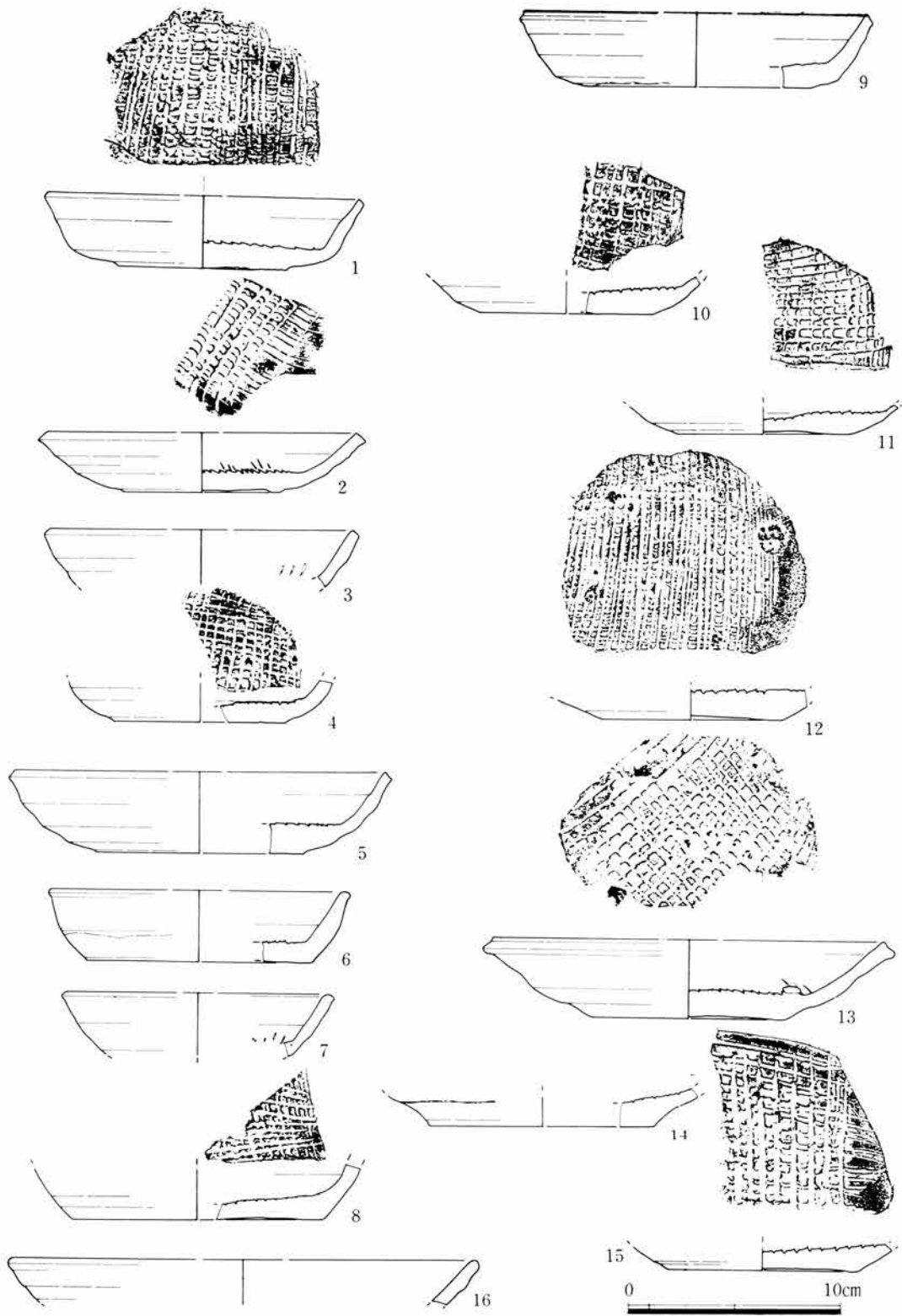


Fig. 54 瀬戸 4

層中) である。)

Fig.54-6~9は口縁が少し薄くなりながら直進し、口唇が丸く外へ張り出す。胴部の立ち上がりは急で、底径と口径の比は2:3位である。底部脇は篋ナデが施され直線的な立ち上がりとなる。器壁は口縁下で最も肥厚する。底部は比較的薄く、広く平坦であり、そこに浅い卸目がつく。9の口端はやや平たい溝縁状を呈する。刷毛塗りの施釉は卸目にも行われ、6は外底にも及ぶ。底部は回転糸切りであるが9にはその後、篋によるナデつけがなされる。夫々の出土層位は、8(Ⅲ次287号土壌覆土内)、9(Ⅲ次5溝覆土上層)、10(Ⅲ次3層中)である。

Fig.54-10~16は直進口縁が外へ斜傾して肥厚し、端部に凹所を作り溝縁となる。底部は概して厚く、胴部は薄く、くびれながら立ち上がる。そのために、台付皿様の器形となる。底径と口径の割合に比して器高は低いと思われ、13では底径9cm、口径約19.5cm、器高3.7cmを測る。16は口径約22cmを測る大型である。直進する口縁端は丸く整えられたままであるが、胴部の開き方は、この類に近いものと思われる。見込みの卸目は浅く、目が荒い。多くは胴部にまで目が刻まれる粗雑な作りである。この類は焼成も他に比してあまく、赤褐色に残る。卸目上に重ね焼き目痕が残り(13、14)、おそらく四点支持によったものと考えられる。施釉は外底を除いた全体に薄く刷毛塗りされる。夫々の出土層位は、11、14(Ⅲ次2層中)、12(Ⅲ次3層中)、15(Ⅱ次2層中)、16(Ⅲ次

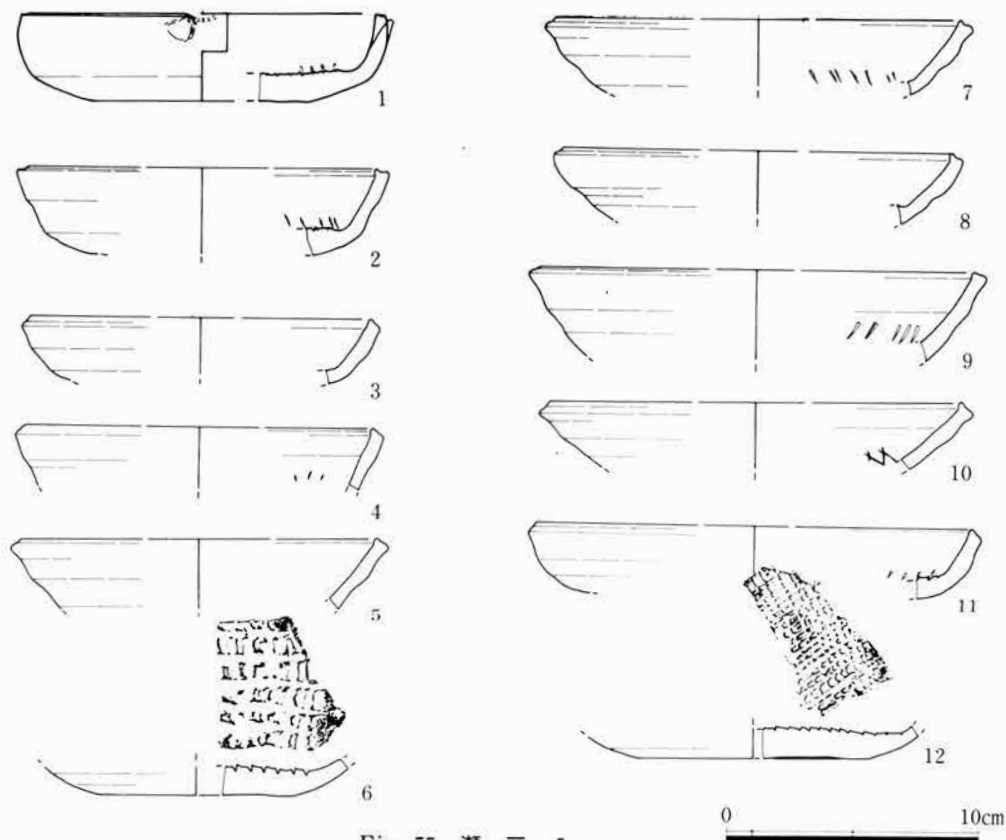


Fig. 55 瀬戸 5

120号土壙覆土内)である。

Fig.55は胴部が丸く内湾して立ち上がり、口縁は肥厚し、端部は内側に張り出すと共に凹部を作り溝縁となる。卸皿の中で最も多く出土している型である。全形を復元しえたものは1点に止まるが、底径は小さいものの腰が非常に強く張り出すために、外観の上では底径と口径比は小さく安定した形状である。片口につくFig.55-1では底径約8.5cm、口径約14.5cm、高器高約3.5cmであるけれども外観は底径、口径比ほぼ1:1のように見える。作りは全体に丁寧で、焼成も良好である。施釉は外底部を除いて、刷毛塗りが1、4、5、6、10、12にされている。他は無釉で、内面と溝縁に自然釉が降っている。夫々の出土層位は1、2(Ⅲ次3層下部)、3(Ⅲ次2層)、5(Ⅱ次1溝覆土内)、6(Ⅲ次1溝覆土上層)、7(Ⅱ次土丹版築面上)、8(Ⅲ次第1トレンチ下層)、11(Ⅱ次2層)である。

以上の卸皿は型式的にFig.54-6~9は古瀬戸前期後半、Fig.54-10~16は後期前半を、他は鎌倉後期から南北朝にかけての古瀬戸中期とされよう。この中で後期前半に相当する直進溝縁口縁の卸皿の多くが2層中より、また5溝覆土上層から出土している。

G. 灰釉碗 (Fig.56-1~8、P L 54)

灰釉のかけられた碗は少なく、10個体程である。大きさによって大小に分けられる。大型は口径約16cmもしくは17cmである(1~3)。Fig.56-1は口径17cm、底径4.5cm、器高6.2cmを測る。回転糸きり底に篋で高台を削り出す。篋削りは高台の内と外に行われるだけであり、高台は非常に低い。胴部器壁は大きさに比して薄く、口縁下に稜を作って外反し、口唇は丸い。2では口縁の外反は見られずに、器肉が薄くなるだけである。釉層は薄く、緑を基調とするが、1は白く斑らになる。施釉は内面と外面上半に行われる。

小型碗には口縁の直進するもの(4、5)と外反するもの(6~8)がある。口径はおおよそ、10cm~12cmである。外反口縁となる類はゆるやかなS字を描いて外反し、口唇は大型と異なり、やや肥厚する。釉調はやはり灰黄色であるが、施釉範囲が大型より小さく、4では口端から内面のみ、5、7では口縁部内外面のみである。胎土は大型が灰黄色の粉っぽく、焼きしまりもあまいのに対して、灰白色のきめ細かな土でしまりも良い。

ほとんどが遺構覆土内より出土している。1、7(Ⅲ次第1トレンチ1溝覆土最下層)、2(Ⅲ次1溝覆土内)、3(Ⅲ次6溝覆土内)、4(Ⅲ次66号土壙覆土上層)、5(Ⅱ次1溝覆土内)。

H. 合子 (Fig.56-13~18、P L 54)

Fig.56-13~15の3点共に水挽きの糸切り底である。Fig.56-13は底径3cmを測り薄手の作りである。内底は指痕が渦状に残る。胎土は白色味の淡黄色で、草色の釉は内面と外面胴部中位までかけられる。14も同様の作りであるが、釉は胴部外面全体に行われ、灰色の胎土である。また、15は内底に渦状の凸凹を残さず、胴部立ち上がりも、一度内側へ湾曲してから外へ開く。灰色の胎土。無釉である。Ⅲ次I区方形竪穴建築址覆土上層より出土。

Fig.56-16は合子の蓋である。最大径4.7cm、底径(口径)2cmを測る。上面に鉄釉がかかるが

均一でなく、斑らになっている。胎土は黄色味灰白色で粉っぽい。焼きしまりも良くない。整形も雑である。底部は回転糸切り。II次G人骨墓墳内出土。

Fig.56-17は口径約7.5cmを測る。胴部中位で最も肥厚し、尖るように薄くなって口縁に至る。灰黄色の粉っぽい土でしまりもあまい。器表には水挽きの轆轤目が高く残される無調整のままである。轆轤目の間には白色の降灰が見られる。III次2溝覆土内より出土する。

18は輪花状になる入子である。白灰色の胎土は精製され、貼り付けの断面三角形高台付近や全体の成形も丁寧である。輪花は指の押し当てにより作り出される。内面に細かい貫入があるものの透明な緑色釉がかけられる。外面、特に高台内では長石の吹き出しが激しい。II次69号土壙覆土内出土。17、18は入子と思われる。

1. 灰釉不明品 (Fig.56-19、P L 54)

本例は器形不明製品の口縁部破片である。小型の壺であろうと思われる。口径8.2cm、現存最大径は9.5cmを測る。丸く内湾する頸部は口縁へ向けて内湾の角度を強め、端部においては内側に折り曲げられて内壁と一体化する。内壁との接合部や内面及び口縁外面は丁寧な篋ナデが施される。胎土は黄色味の灰白色で、砂はあまり含まず、焼きしまりは良い。釉は自然釉かとも思われるが、

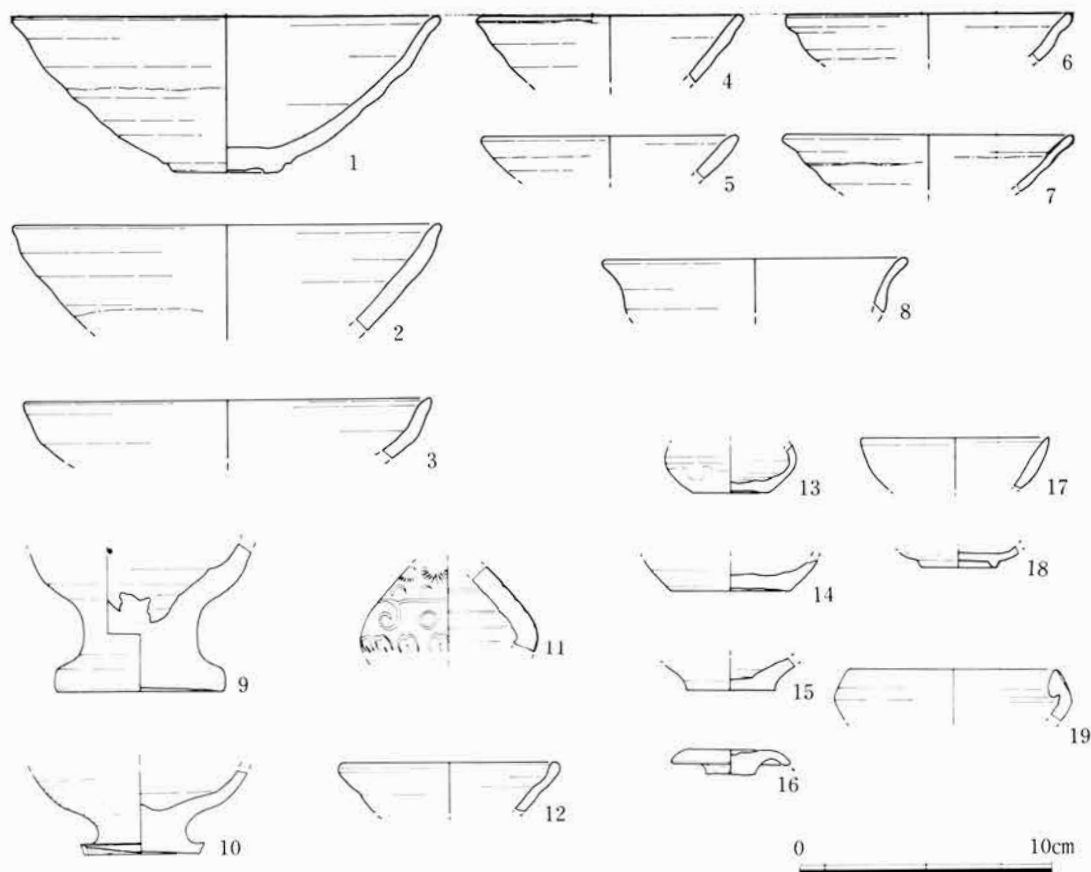


Fig. 56 瀬戸 6

光沢がある。口縁部外面では釉が泡状に吹き上がっている。II次黒褐色粘質土層出土。

J. 仏華瓶 (Fig.56-9~11、)

Fig.56-9は外面に緑色の釉がかけ流される。底径6.6cmを測る。脚台は高く、器壁も厚く、どっしりした作りで重く焼きしまる。内壁は水挽き時の稜線を強く残し、内底には窯壁の一部が附着し、自然釉が降る。胎土は黄色味の灰白色で、黒色石粒を混える。底部は回転糸切り。III次第1トレンチ1溝覆土下層出土。

10の外面には茶褐色の鉄釉が施される。底径約4.5cmの小さく、低い脚台である。施釉は胴上半に行われ、他の内外面には黄灰色の自然釉が所々に見られる。胎土はきめの細かい黄色味灰白色で、底部はやはり回転糸切り。III次3溝覆土上層出土。

11は紫味黒褐色の鉄釉のかけられた仏華瓶胴部である。最大径約7cm位と思われる。外面には菊、唐草、蓮弁の印花文がびっしりと施されるものの釉が厚くたまるために、印花文は不鮮明に沈む。内面の轆轤目は高く残る。胎土は黄色味白灰色で焼きしまり良く硬い。II次土丹版築面北2層出土。

K. 徳利型瓶 (Fig.56-12、)

口縁部片が出土している。口径約9cm弱を測り、S字を描いて頸部へ向かってすぼむ。口縁は丸く、やや肥厚して上方へ引き上げられるが、それほど強くなく、なだらかに立ち上がる。灰色の胎土に施釉は行われず、内面に自然釉が見られる。14世紀前後のものであろう。III次第1トレンチ土丹版築焼土面上出土。

L. 天目茶碗 (Fig.57-1~5、)

天目茶碗は8個体が出土している。全形を知りえる例はないが、5点が図示できた。胎土はFig.57-2が灰色の堅くしまるのを除いては黄灰色のザラツとした土で割れ口が荒れる。釉には光沢がない。1は口縁が上方へ直立し、胴部も直線的に立ち上がる。釉は黒味の赤褐色の単味である。III次3層下部より出土。2~5は口縁が上方に直立した後外方へ折れ、胴部は丸味をもって立ち上がる。釉は口縁部が赤褐色、胴部が黒褐色に移移するものであるが、4は黒褐色の単味である。5の高台は断面方形をなすものの、カンナによる削りが浅く、明瞭な高台とならずに脚台状を呈する。畳付には糸切り痕を残し、胴部は回転篋削りで調整される。1は古瀬戸後期後半、2~5は古瀬戸中期後半の南北朝から後期前半の室町初頭頃のものと思われる。2(不明)、3・5(III次第1トレンチ2溝覆土内)、4(III次地山上)出土である。

M. 鉄釉碗 (Fig.57-6~10、)

5個体が出土した。釉は赤褐色の単味で、胎土は概して黄灰色の粉っぽい土である。Fig.57-6は底部を欠く、丸く立ち上がる丸碗様の深い碗である。口縁下で最も肥厚し、口唇は丸い。胴下半は無釉となる。口径12.4cm、III次65号土壙覆土内出土。7は小碗もしくは皿と思われる。口縁部の

みに厚く施釉され、外面に垂れ流れる。内外面に水挽き痕を残し、口縁下の最も器壁の厚い所よりくびれて断面方形の口縁に至る。Ⅲ次2溝覆土内出土。8も同工のものと思われるが器壁は非常に薄い。2次焼成のためか、釉は荒れている。Ⅱ次土丹版築面上出土。

9、10はおそらく碗であろうと思われる。9は底径約5.5cmを測り、粘土の貼り付けが行われている。内面に厚くかかった釉は茶色、黄褐色、黒褐色の斑点状に発色している。底部は回転糸切りである。Ⅲ次1溝覆土上層出土。10は幅の一定しない高台が削り出されている。底径は約5cmである。見込みの釉は黒色と茶色に発色し光沢はない。また外面には煤が付着し、高台内にも至る。Ⅲ次2層中出土。

N. 鉄釉皿 (Fig.57-11~16、)

7個体が出土している。施釉は全て、口縁部のみである。Fig.57-11は口径10.8cm、底径6cm、器高3.2cmである。胎土は淡黄色の粉っぽい土で、焼きしまりも良くない。水挽き成形の後、胴下半では雑なナデつけがなされ、底部は回転糸切りによる。施釉は口縁部のみに行われ、表面は茶色だが、釉断面では光沢のある黒色である。

12は口縁がややくびれて外反し、口唇が角張る。釉は赤褐色に黒色が斑点状に混じる。黄灰色の良く焼きしまった胎土である。Ⅱ次溝覆土内出土。

13は灰白色の精良土に黄黒色の釉がかけられ、長石が所々に吹き出す。強く外反する。14は口径15cmの大型の浅い皿である。全体に鉄釉が刷毛塗りされ、口縁近くは黒色、見込み付近は緑褐色を呈するが、再火を受けたのか器表は荒れる。Ⅲ次155号土壙覆土内出土。

15、16は底部片である。共に水挽き痕を残す。15は底径約4cmを測り、灰色の一見山皿風の硬い

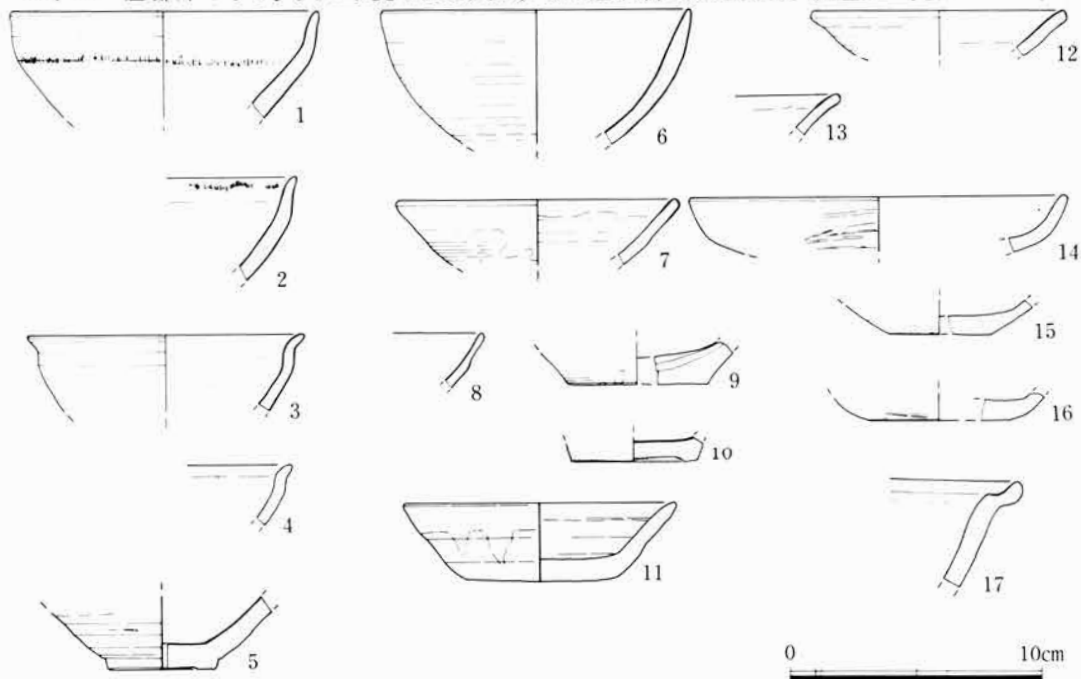


Fig. 57 瀬戸 7

焼き上がりである。内外面共に非常に薄く釉が刷毛塗りされ、所々に茶色の釉が飛ぶ。底部は回転糸切りによる。胴部は直線的に立ち上がる。Ⅲ次1溝覆土上層出土。11は焼きしまった淡黄色の粉っぽい胎土である。底径は約5.5cm。内外面に茶色の釉が飛ぶが、外底に付着する釉は重ね焼きによるものではないか。胴部は丸味をもって立ち上がる。

O. 片口 (Fig.57-17、P L.54)

破片が一点のみ出土している。14世紀中葉頃のものであろうと考えられる。内面口縁には灰緑色の、胴部には茶褐色に発色する釉がかけられている。外面では口縁下に黄褐色の釉が一部に残るがほとんど剥落している。胎土は黄色味の白灰色で焼きしまりは少しあまい。Ⅲ次地山上出土。

P. 黄瀬戸 (Fig.57-14、P L.51)

口径31cmを測る大型の盤ないし、皿である。ゆるやかに大きく開く胴部は稜をなして急激に立ち上がり、口縁は下方にやや下がり気味に外へ折れ曲がる。口縁部が最も肥厚する。黒色粒を多く含む淡黄色の粉っぽい土であるが、焼きしまりは非常に堅緻であり、たたくと金属的な音を発する。釉は白濁した灰黄色をなし、上方へ流れる縞目を出し、折れ縁下に釉だまりができる。ふせ焼きであろう。Ⅲ次3層下部より出土する。

註1.『長勝寺遺跡—中世鎌倉の民衆生活を探る—』1978年

註2. 北区鎌倉学園内遺跡発掘調査団編『光明寺裏遺跡』1980年

Q. 入子 (Fig 58)

(宗 莖 秀 明)

瀬戸無釉の入子は小破片が100片近く出土しているが、図示し得るものは僅かでしかない。とくに輪花型のもは復元実測が困難なので図示しなかったが、量的には輪花2に対し丸形3といった割合になるものと思われる。いずれも瀬戸に通有の微砂質の胎土で、焼成は概して良好で硬い。色調は灰色で口縁部に緑灰色～灰白色の自然釉ないし降灰を見ることが多い。

1は実測できた数少ない輪花形のもので、ヘラで外方から口縁部を押し込んで8弁の輪花形になっている。ロクロ成形であるが、底部は数回にわたるヘラ削りである。Ⅳ区2層出土。

2も輪花形のもので、底近くの外面にヘラ押し時のキズを留める。底部はやはり数回にわたってヘラで削っている。Ⅳ区第2溝の上層より出土。

3以下は丸形のものである。3の底部はヘラ削りされている。攪乱層より出土。4は糸切り後に粘土塊を付けて三脚にしている。内底面がかなり磨滅している。5の底部は糸切りで、2次調査2層出土のものと第3次調査表土層出土のものが接合した。6は底部が厚く残るように糸切りされて

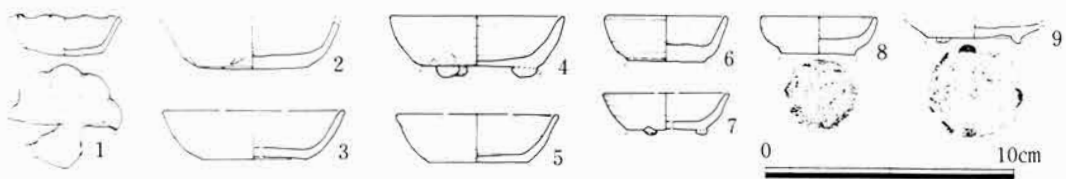


Fig. 58 入子

いる。第3溝覆土上層より出土。7は糸切り底で粘土小玉を貼り付けた三脚をもつ。第2溝18C・Dグリッド部出土。8もやや厚い底を残す糸切りで、I区南半部3層出土。9は底部糸切り後、爪で粘土を掻き起こして三脚を作り出している。II、III区間の2層より出土した。

(2) 山茶碗窯系陶器

A. 山茶碗・山皿 (Fig.59、60)

鎌倉のような消費都市においては、生産地の窯址のようにこまかくこの手の碗・皿を弁別することは、たいへん困難である。無釉の碗・皿に関して「山茶碗」「山皿」と呼びならわしてきたものの、鎌倉においては二つの大きな群にこれを分ける。すなわち、胎土に石粒を多く含む厚手の一群(Fig.59)と、水簸された精良な胎土で薄手の一群(Fig.60)である。前者については瀬戸南部から常滑、渥美方面の窯の産品と、漠然と想像しうるが、胎土や製作技法に細かな差異があり、複数の産地のものが鎌倉へ搬入されたことが考えられる。その細分は今後の課題となろう。後者の一群は瀬戸北部から美濃方面のものと思われるが、やはり胎土の精粗などに差があり、いくつかの窯系のものが混在していると思われる。

粗胎の山茶碗・山皿 (Fig.59)

胎土は砂質で白色石粒の混入が目立つ。割れ口はザラついたり板層状になつたりする。焼成は還元炎によるもので割合硬く、色調は灰色を基調とする。口縁部に灰白色や緑灰色の降灰自然釉がかかることも多い。碗皿ともに重ね焼きの痕跡を留めるものもある。

碗は底部近くに丸味をもって立ち上がり、口縁は直口ないし外反し、口唇肥厚するものもある。全体にロクロ成形で、外底部には糸切り痕を残すが、切り離した後粘土紐で高台を貼り付けている。高台は断面形が低い逆台形か逆三角形の粗末なもので、一般に朽痕が付いているが、13のように幅

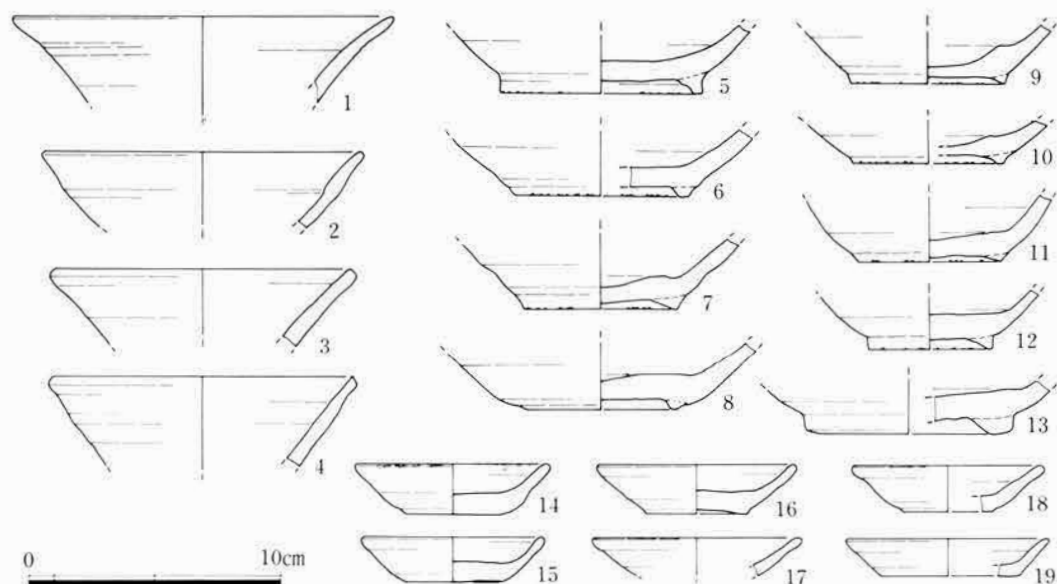


Fig. 59 山茶碗・山皿(粗胎)

広で刃の付かないものもある。

皿は口径と器高の比が4対1前後の浅いものが主で、底径は割合小さい。ロクロ成形で外底に糸切痕を留める。口縁は外傾したまま丸く終るものが多い。

碗・皿ともに内底面の磨滅したものが多く、また出土量が青磁や白磁の碗皿類ほど多くないことから、食器としてより調理用具として、こね鉢やおろし皿の補助に使用されたのではないかと思われる。また14のように灯明皿に転用されたものもある。

6、8、11は排土または攪乱土中の出土。2、17、19は3層出土、16は3層下部出土、1、10、15は地山直上層より出土した。他は遺構出土で、3は第1溝上層、4はII区溝中、5は拡張区7溝、7は第II次調査版築面群南方土壌、9はII区110土壌、12はIV区3溝、13はIV区1溝上層、14はV区39土壌（井戸）木枠上層からのものである。

精胎の山茶碗・山皿 (Fig.60)

胎土は水簸された良質土で、砂などの混入はほとんど認められない。焼成も良好で良くしまっており硬く、粘性さえ感じられる。色調も灰白色で時に鉄分によって赤褐色を呈する部分もある。口縁から内面にかけて灰白色や緑灰色の降灰を見ることもある。また重ね焼きの痕の認められるものもある。ただし、11、13などは胎土やや粗く灰色を呈するので、上述のものとは別の窯系のものかもしれない。

碗は底から丸味をもって立ち上がり、口縁はわずかに外反し(時には肥厚し)、口唇端部が縁帯ふうになるものもある。全体に手慣れたロクロ成形で器壁はごく薄く、外底面には糸切り痕を留める。切り離し後に細い粘土紐を貼りつけて高台を作るが、伏せてナデまわすためか高台脇と内部外周は滑らかで、高台端が外へ張った逆三角形の断面を示す。畳付部にはやはり刃痕を残す。

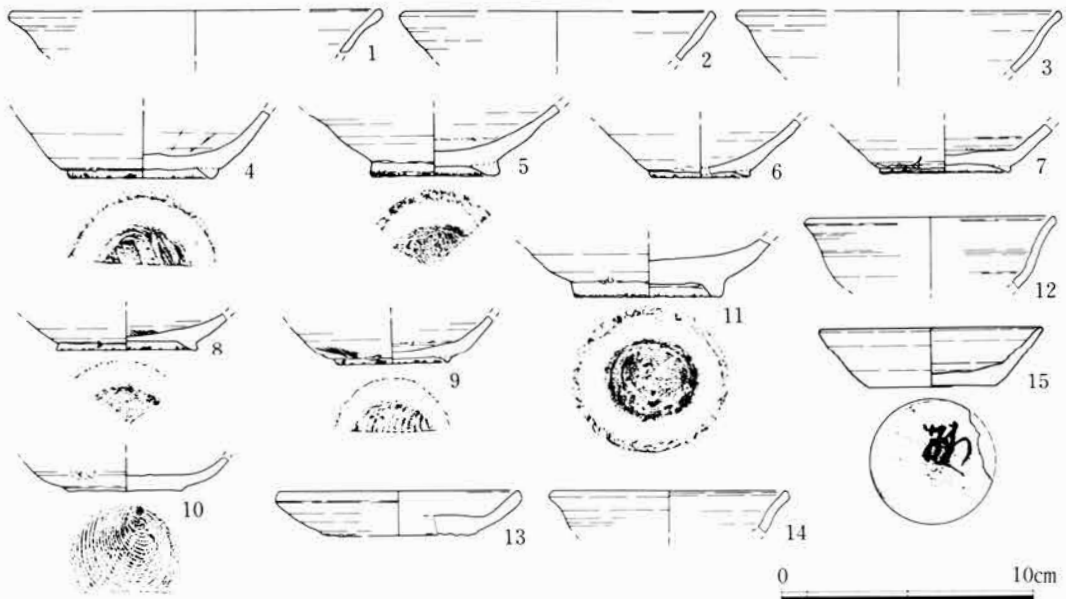


Fig. 60 山茶碗・山皿(精胎)

皿はやはりロクロ成形で底部糸切りとなっている。器形的にやや深く、口縁はやや外反し、口唇端が立った面をなす点など、碗と共通のものがある。器壁も薄い。15は胎土こそ他と共通しているが口縁外反せず、やや異なる印象のもので、底面に花押しきものが墨書されている。

精胎の碗皿においても内底面の磨滅は認められ、精胎のものと同様の使われ方をしたと考えられる。ただし皿において灯明皿に転用されるものはないように思われ、碗では外底に墨書をもつものがままた見られるので、粗胎のものより「白い器」として大事にされることがあったかもしれない。ただし、粗胎と精胎のもの出土比率は調査地点ごとに一定ではなく、購入使用者側の事情によるところが大きいのではなからうか。

1は表土層、2、4は2層出土。13は同一個体が2層と3層にまたがって出土。5、8、15は3層、10は3層下部、3は地山上から出土。14はIII区地山上と拡張区164土壌出土のものが接合。6はII区228土壌、7、12は拡張区164土壌より、9は拡張区166土壌、11はVI区2溝下層より出土した。

(河野真知郎)

B. 山茶碗窯系捏鉢 (Fig.61)

山茶碗窯系こね鉢は破片数ではかわらけ、常滑の甕について多量に出土しているが、小片が多く口径、器形の復元できるものは少ない。胎土はほとんど変化が認められず、小石粒を多量に含む粗いザックリした胎土で、暗灰色あるいは灰白色を呈している。器形は底部から口縁部に向かって直線的に開き、外底面には断面三角形の貼り付け高台を有するものが多い。口縁部は丸く肥厚するものが多く見られるが、観察すると大きく4種類に分けられるようである。^(註1)

A類 口縁端部がやや内湾し、内面に強いナデが一周する。

B類 口縁端部が外反し、外面口縁直下に強いナデが一周する。

C類 口縁端部を丸くしている。

D類 口縁部をつまみ上げているため口縁天部に沈線状のくぼみが一周する。

1は口径31.5cm、器高14cm、高台径14.8cmを測る。外面下部に横方向のヘラ削り痕が残り、高台は付け高台、内底面は頻繁に使用していたため、極度に磨滅している。2は口径27.6cm、3は口径30cm、4は32.2cm、5は27cmを測る。

6は口径27.8cm、口縁の一部を指で外方に押し出した片口が付く。片口部外面両側には指頭による調整が加えられている。7は口径30.3cm、8は口径30.9cm、器高14.2cm、高台径9cmを測る。高台は貼り付け高台、内底面の使用による磨滅はさほど激しくない。9は口径23.2cm、器高7.2cm、底径11.2cmを測る。外底面はヘラ切りのままで貼り付け高台はみられない。小型である。10はやはり小型の捏鉢、口径21.4cm、器高8.8cm、高台径9.8cm、高台は付け高台である。11は口径24cm、器高8.7cm、高台径11.2cmを測る。

12は口径31.3cm、6と同一技法による片口部がみられる。13～17と胴下部片である。それぞれに外底面に貼り付け高台を有し、外面胴下位には横方向のヘラ削り調整がなされている。内底面の磨滅は14は激しいが他はさほどではない。高台径は13から14.8cm、16.2cm、12.4cm、14cm、12.7cmを

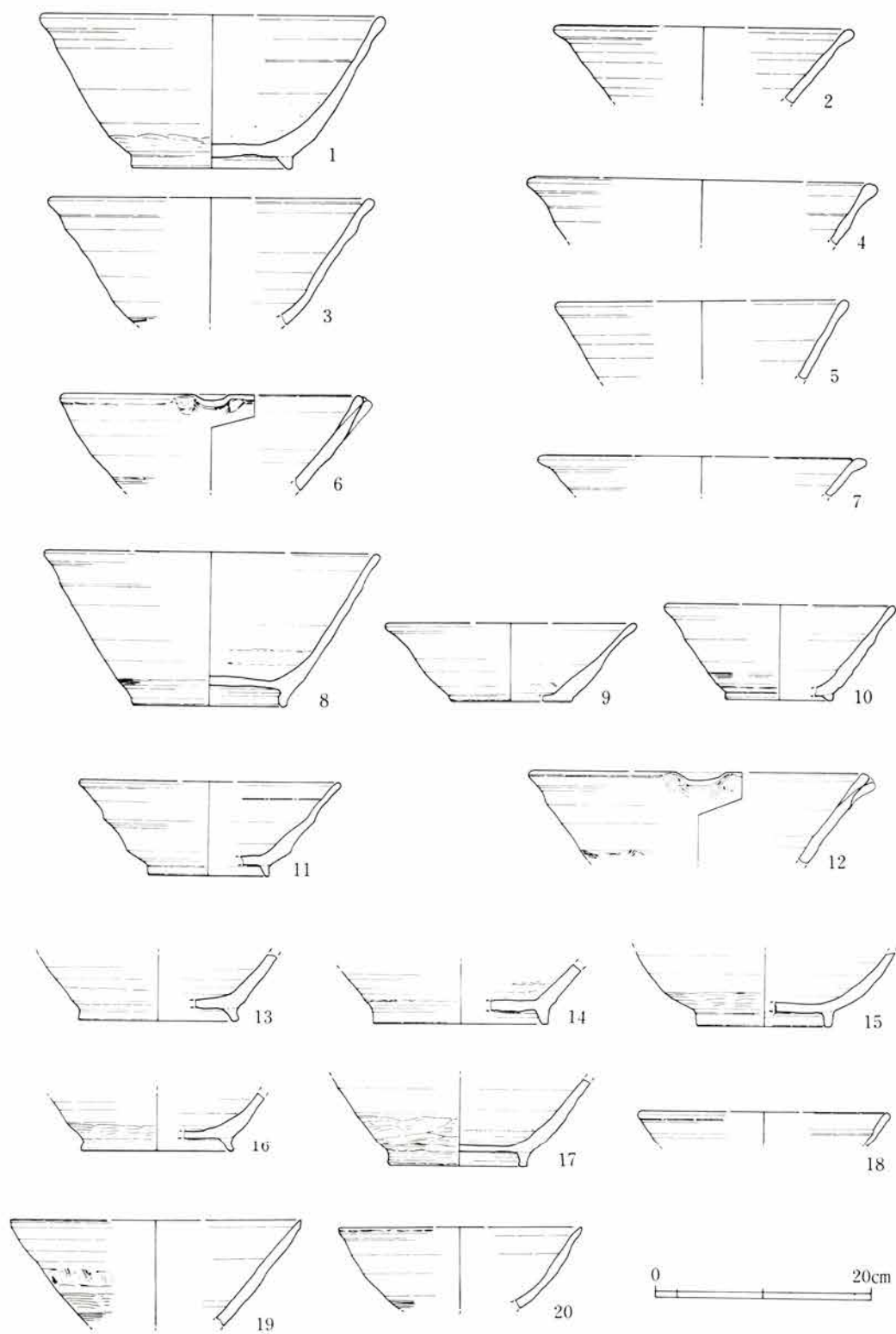


Fig. 61 山茶碗窯系こね鉢

測る。15の胴部立ち上がりは丸味が強い。

18は23.2cm、胎土は粗くなく良好。口縁部はやや肥厚するが丸くなく四角形を呈している。内側口縁下約2cmの位置にはやや強いナデが一周している。19は口径26.8cm、胴部から口縁部へ至る間は直線的であるが、口縁端部は外方に鋭く削りおとされ端部断面形は三角形を呈す。外面胴下位は横方向のヘラ削り、上部は横ナデであるが両者の間に指頭整形痕が残る。20は15に似た側面観を持つもので口径22.4cmを測る。口縁端部は19に似る。外面胴下位は横方向のヘラ削り。

以上、図示した各捏鉢について説明を加えたが、18以下の製品はその胎土・口縁形態の違いから生産地に違いがあるとも考えられる。文中に示した口縁形態の違いによる4分類については、各群の出土層位に明確な区別が把握できない。

注1.「千葉地遺跡」1982年 千葉地遺跡発掘調査団 P.122 (6)山茶碗窯系こね鉢の項でも触れている。

(齋木秀雄)

(3) その他の陶器

A. 信楽 (Fig.57-12、P L .65)

信楽と思われるものは一点のみで、胴部から口縁にかけての破片である。口径約16.5cm程の広口壺と思われる。黄色味の黒灰色土で、粘りはかなり強い。焼きしまりは堅緻で石ハゼや吹き出しが見られる。外面は回転ナデが行われるものの、内面には指の押し当て痕が残される。口唇部は溝縁状をなす。当片の口唇には指切りと押し出しによる小さく、簡単な注口が作り出され、外側では、押し出された粘土が盛り上がり残されたままである。口唇から外面には光沢のある茶褐色の釉がかり、口端付近では緑色が斑に発色する。

割れ口にはタールが付着しており、破損後に修復を行っていたのであろう。III次3層中出土。

B. 志野 (Fig.62)

志野皿は口径12.2cmを測り、ほぼ全形を知りえる。黒色緻砂を含む淡黄色の細かな粉状土で焼きしまりは良好である。所々、石ハゼをおこしている。高台は削り出しにより外面調整も明瞭な稜を作り出す回転篋削りが行われる。口唇部の一部に煤が付着する。高台内には高台脇の三方に目痕が残り、そこにも煤が付着する。

内面に褐色顔料(鉄絵)で蓮花様の花文を描き高台内まで全体に透明釉をかけている。花文は太筆により大胆に描き出されている。III次第1トレ

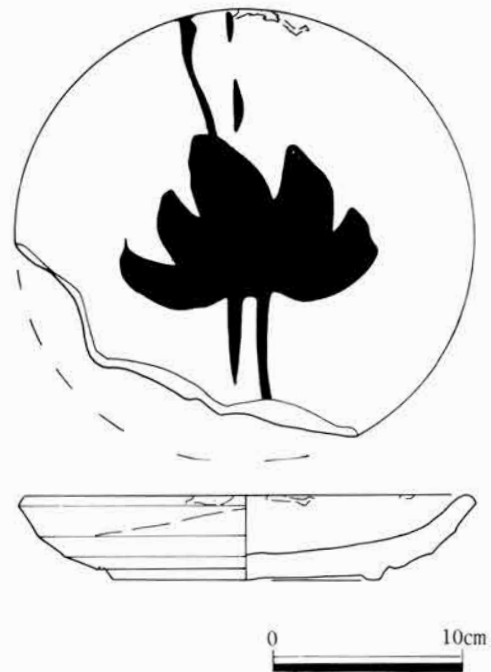


Fig. 62

志野

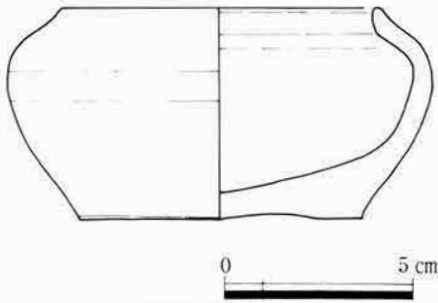


Fig. 63 産地不明品

底部は糸切りである。口縁外面と内面胴下部から内底面にかけて緑味の灰白色のザラザラした自然釉がかかる。III次第1トレンチより出土。

ンチII B層中より出土 (P L.)。

C. 産地不明品、壺 (Fig.63、P L.64)

背の低い広口壺である。底径7.5cm、口径8.5cm、器高5.6cmを測る。黒色粒を混える白灰色胎土はザラッとしているものの焼きしまりは堅緻であり山茶碗窯製品の土と焼きを思わせる。水挽きによって、緩やかに立ち上がる胴部は、上位で大きく湾曲して直立する口縁に至る。口唇は丸味を持つ。

(宗 堇 秀 明)

(4) 炆器

出土した炆器類は渥美窯系を含めて多量の破片と数点の完形品が得られた。その中で、常滑系のものが多く、遺物箱に15箱ほどである。先ず常滑焼から記すこととする。

A 常滑

常滑窯系では、甕、壺と鉢がほとんどである。常滑系製品の大まかな編年は甕・壺類の口縁と頸部形態の形式分類より行われ、5段階乃至3時期が設定され、大要は認められているところである^(註1)。よって、実側図の配置も口縁形態を主な分類基準としたが、大窯業地である常滑地域の窯毎での使用胎土の相異と、甕・壺類と捏鉢とのセット関係が示唆されており、本遺跡出土常滑系製品についても記述説明は胎土の差異によって行うこととする。

a) 甕 (Fig.64、P L.60、61)

初めに器型による分類を記しておく。本遺跡出土品には第1段階のものは認められず、第2段階から第5段階までのものを含む。その中でも第2段階後半から第4段階を主としている。

第2段階前半はFig.64-1、14。1には口縁の凹帯が発達して後半への移行が穿われる。

第2段階後半はFig.64-2、3、7~9、14~20。長胴形のもの(7~9、14、16、18、20)と肩の張るもの(2、3、15、17、19)とがある。多くはII次土丹版築地業面下、1溝覆土下層、地山上より出土する。

第3段階はFig.64-4、5、11、12、21、23~25)。この内、長胴形は11と21。II次土丹版築地業面、III次2溝覆土上層、第5方形竪内建築址覆土内より出土するものが多い。

第4段階はFig.64-26~31。III次2溝覆土上層もしくは3層中より出土する。

第5段階はFig.64-32。3層中より出土する。

A類 (Fig.64-6、8、14、16、20、24、31、Fig.65-5)

胎土は灰白色を呈し、黒色と白色の細かな砂粒を含む。やや砂っぽさも残るが、割れ口は岩石質

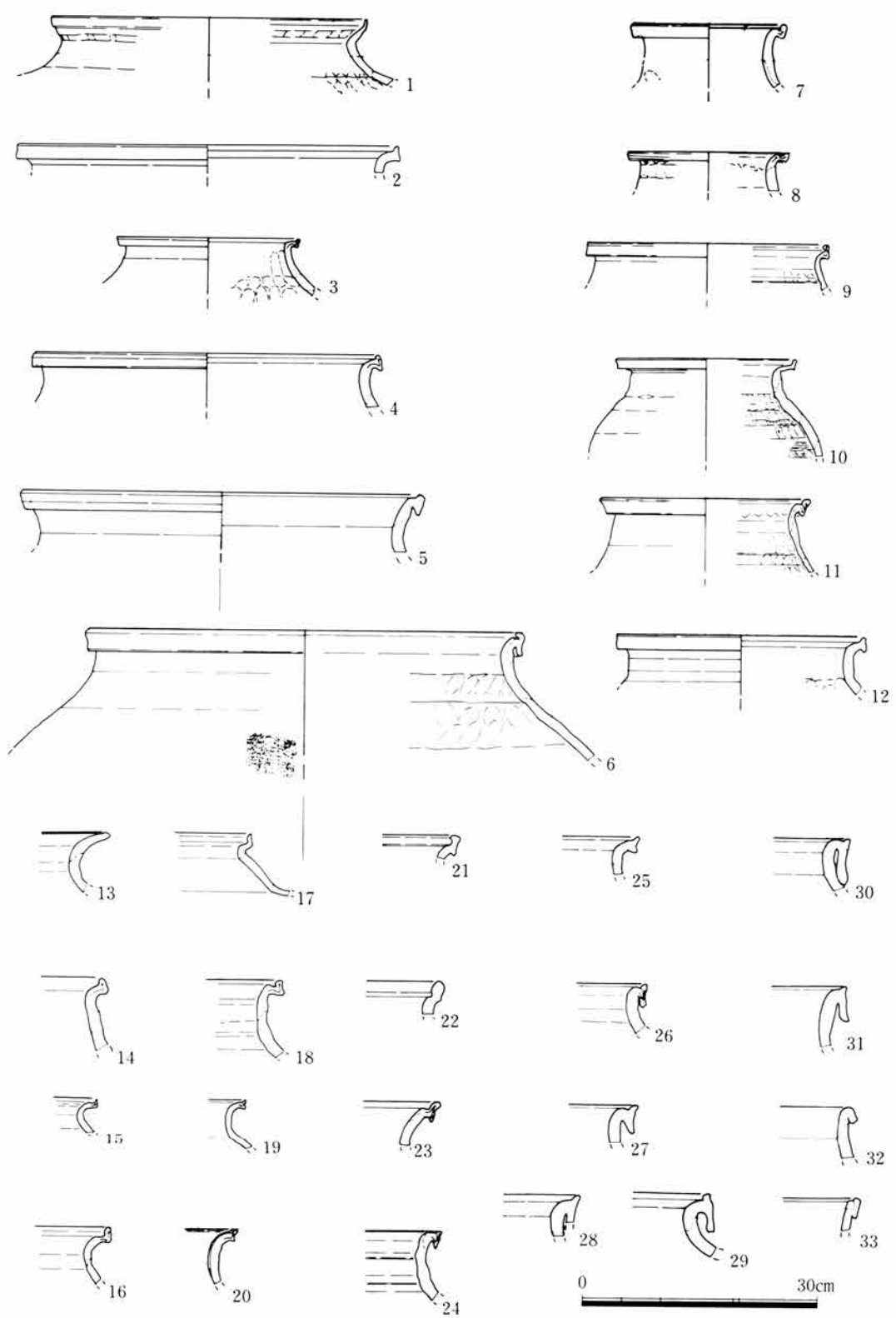


Fig. 64 常滑 1 變

を呈し、粘り気があり、濡れたようなものすらある。輪積成形時の段を残すものもあるが、横ナデ整形は丁寧に行われる。口縁の折り曲げでは、稜を形成して湾曲するものと、ぼつりとしたもの (Fig.64-14、31) がある。第2段階後半に属する例は全て長胴形であり頸部が明瞭に作り出される。また縁帯製作時の指押えが口縁下に残される。焼きしまりは良く、施釉が頻繁に行われ、口縁部と肩部以下に厚く施される。5の内面には胴部まで自然釉が見られる。

B類 (Fig.64-4、5、15、17、19、23、25)

胎土は暗灰色、細かな白色砂粒を含む。粘り気があり、割れ口は岩石質を呈する。器表は黒から黒褐色となる。焼きしまりは堅緻である。Fig.64-5は口径約52cmの大甕で、ぼつりとしている。横ナデ整形は丁寧なもの、頸部から肩部へかけての内面には亀裂が生じる。外面肩部では篋のナデ上げが認められる。他の例は丁寧な横ナデにより整った形状を呈し、口縁は平たく外方へ開き、その後縁帯に至る。これらの中で、強く肩の張る器型をなすと思われる15、17、19は最も厚い所でも器壁は1cmに満たない薄手作りであり、小型の甕であろう。整形はB類の中では粗雑な感じを与え、4、5、23が自然釉であるのに対して、この薄手作りの小甕類は薄く緑黒色の釉が口縁内外と肩部以下にかけられる。

C類 (Fig.64-2、3、12、13、18、26~28、Fig.65-2)

胎土は黒色もしくは黒灰色に焼け上がり、白色砂粒を多く含み、少しザラザラした感じである。胎心は黒色に残ることが多い。

Fig.64-2は口縁部のみの破片で、復元口径約50cmを計り、焼きしまりは不良である。3~12は小型の長胴形の甕であろうと思われる。3は口径約23.5cmを測る。輪積部には指押しの痕が残り、内面ではその後の整形を行っていない。全体に薄く白色の自然釉が飛ぶ。12は口径約32cm。指に粉がつくような胎土であり、口縁の折り曲げや輪積部にはやはり指押しの痕を残す雑な横ナデが施される。第4段階の26~28は重量感なく焼け上がり、長石や小礫の吹き出しが多い。

Fig.65-2は砂底の外胴部に刷毛目が上方に向き、器表はザラつく。

D類 (Fig.64-7、9、10、Fig.65-1、3、6、7)

胎土は淡い橙色。白色砂粒と石英粒を混じえ、見た目に粉っぽさを感じさせる。器表は黒色になる。施釉はされないが、自然釉が斑らに見られる。

Fig.64-7、10は共に頸部が立ち、口縁が平たく開く長胴形をなす。7は頸部の立ち上がりが高く、口縁の開きは小さい。対して10は頸部はなだらかに立ち上がるものの口縁の開きは大きく端部のつまみ上げも明瞭となる。胴部内壁の整形は指のナデツケと荒い篋ナデが併用されるが、胴部から頸部への屈曲部では指押え痕が高い稜をなして残される。

砂底の底部片は外面のナデ上げと内底の荒い指押えと底部円板と胴部との接合部にナデ回しが行われる。概して口縁部片同様の雑な整形である。Fig.65-1にのみ内底に篋の掻き上げがなされる。

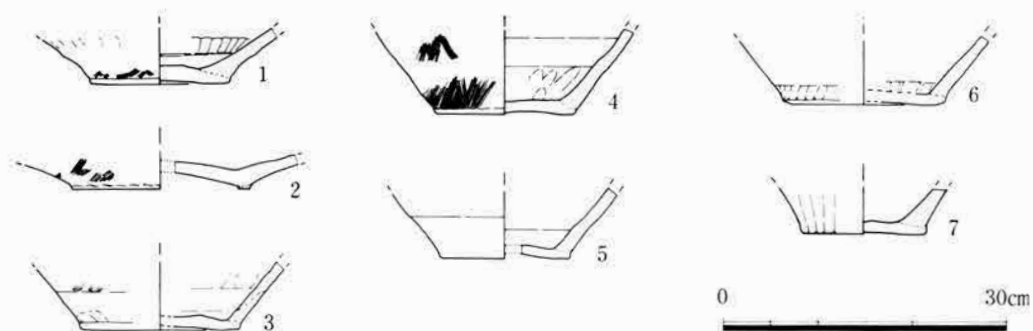


Fig. 65 常滑 2 甕

E類 (Fig. 64-1)

胎土は灰色の精良土。割れ口はコンクリートのように非常に堅緻である。

Fig. 64-1は口径に比して薄い作りにより、輪積部に段を有するものの、丹念な指押えと横ナデが施される。口径約40cm。II次1溝覆土内出土。

F類 (Fig. 64-11、21、22、29、30、32、33、Fig. 65-4)

黄灰色の胎土。白色砂粒、石英粒を含む。流文を見せ、少し濡れたような粘り気がある。器表は黒色となる。他の類に比して重量感のある焼き上がりである。

Fig. 64-11は長胴形の小型の甕と思われる。整形は雑で、輪積部には遊離が見られ、特に内面には小礫の吹き出しや亀裂が入る。口縁内面から外面全体に緑色味の灰白色釉がかかるが、外面は二次焼成のため泡状に吹き上がっている。29、30、32、33はぼつりと縁帯が垂れ下がる。口縁の整形は丁寧であるけれども、急角度に下向する縁帯は口縁との間に亀裂を生む。

底部片のFig. 65-4は外面にナデ整形の後に木口状工具による整形が施され、外底面にも及ぶ。

b) 壺 (Fig. 66、Fig. 69-1、P L. 61、62)

50片程が出土し、およそ20個体分位である。口縁形態では玉縁状に外へ巻き込むもの、外方に斜断したように折る第4、第5、段階のものが多い。蔦口壺の比較的多くの出土がある。

中型壺 (Fig. 66-1~5) ではFig. 66-3の外反口縁に凹帯を作る他は玉縁状口縁となるものが多い。1、2は夫々口径11cm、底径13cm、口径10.5cm、底径15.5cm程のC類とB類である。1は比較的丁寧な内面の整形を行い、赤褐色に焼け上がる。一方2は部分的な遺存であるが、底部付近に雑なナデつけと肩部の直線的な笥ナデが見られる。肩と頸部の間には笥による段が2段がつけられ、そこに三角形に並ぶ珠文が配されている。器表は黒色に焼け、手にザラつく。II次85号土壌覆土内出土。3は頸部内面から外面に厚い緑色の灰釉がかかる、焼きしまりの良いE類である。III次第5方形竪穴建築址覆土内出土。4の頸部にはぐるりと指押えによる窪みが明瞭に残る。F類。III次第1トレンチ土丹築焼土面出土。5は1と同様な器型をなすと思われる、頸部には4と同様な指頭痕が残り、稜が作られている。口縁から頸部内面に自然釉が見られる。A類。

小型壺(Fig.66-6~13、Fig.69-1)では蔦口壺が目立つ。I次I TPの土壌中からは外反口縁が溝縁となる蔦口壺の完形品が出土している(Fig.69-1)。口径6.5cm、底径7.8cm、器高9.6cmを測る。粗砂と石英粒を少量含み、焼成は堅緻であり、部分的に石粒のはぜが見られる暗紫褐色から茶褐色を呈するB類の胎土である。口端から胴部最大径部までと内底に緑白色の自然釉が飛ぶ。軽く指押しでのナデつけを行う砂底の外側は篋掻き上げの後に回しナデが行われ、全体は水挽きによって成形される。注口は篋による押し出しで、比較的深く、口縁から頸部全体が押し出される。

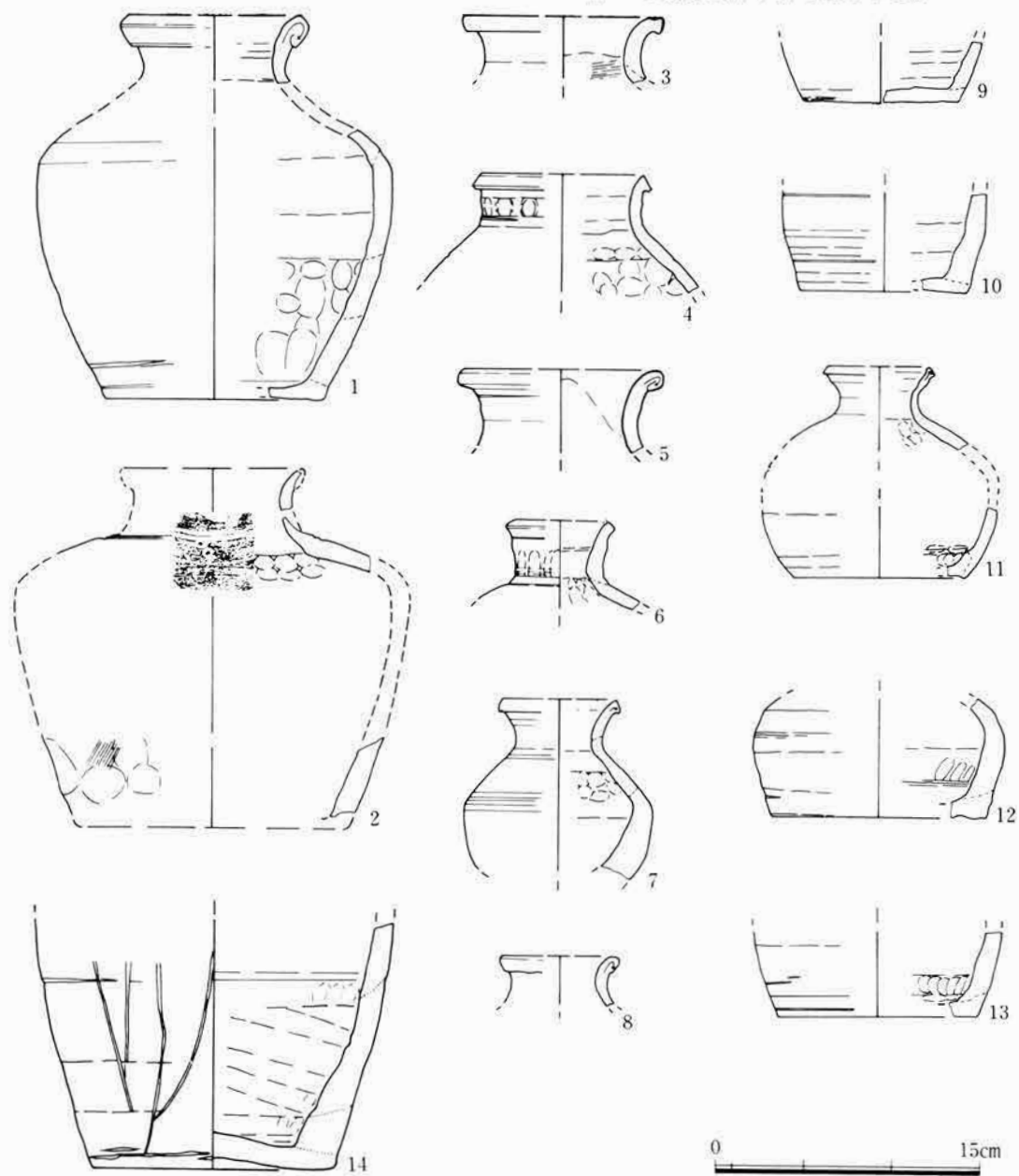


Fig. 66 常滑3 中型・小型壺

これと似たFig.66-11は上半と下半の一部分であるため注口の有無は明確でないが、やはり鳶口壺であろう。口径6.4cm、底径9.8cm器高はやや高く11~12cm位であろうか。頸部から口縁にかけて押えとナデにより微妙に屈曲し、薄い作りであるのが注意されよう。細かな灰色胎土に黒灰色に焼け上がるE類。砂底の脇はナデ回しと篋掻き上げにより、輪積接合部には丁寧な押えとナデつけが施される。口端から肩にかけて自然釉が飛ぶ。III次第1トレンチ1溝覆土下層出土。12、13もやはり鳶口壺の底部であろう。共にA類である。12は底部に融着物のつく砂底で、外面下半はナデ回し、上半は篋の回しナデ(削り)による。III次2溝覆土内出土。13は丁寧な作りで、砂底に、篋の回しナデによる。III次3層出土。共に外面には薄く透明な釉がかかり、特に13では底部にもかかる。9も鳶口壺であるかもしれない。9の底部にはスノコ痕が残り釉がかかる。B類の非常に堅緻な器壁内面は黒色となる。II次2号土壙覆土内出土。10は石英粒を多く含むB類で、焼きしまりは不良

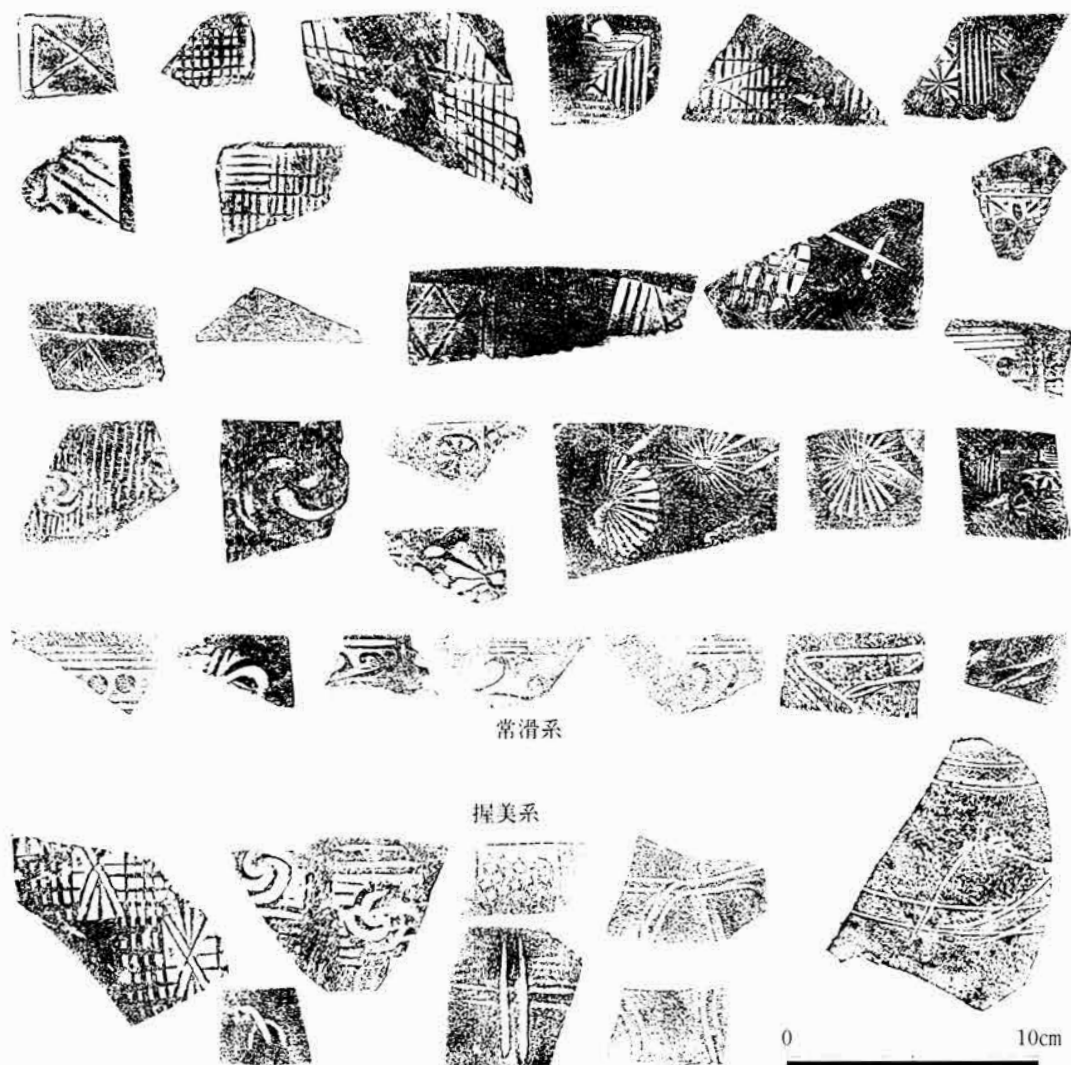


Fig. 67 妬器類押印描拓影

良である。胴下半には回し篋ナデ（削り）痕が明瞭に残る。内面では段を作るように回しナデがなされ、胴下半から内底面に自然釉がかかり、内底には融着物も見られる。Ⅲ次2溝覆土内出土。

以上、常滑系壺甕を器型と胎土によって分類して記してきた。図示できたものには押印文があまり見られなかったが、胴部、肩部片には多くがみられた（Fig.67上段）。

註1. 赤羽一郎「常滑一知多半島古窯址群」 世界陶磁全集3（日本中世） 1977年常滑市教育委員会『高坂古窯址群』1981年

註2. 北区鎌倉学園内遺跡発掘調査団編『光明寺裏遺跡』1980年

c) 捏鉢（Fig.68）

捏鉢片は甕に次いで出土量が多く、個体数でも甕と同じ位になるかもしれない。その多くは内底面から内面下半にかけて研磨される使用痕を残している。

捏鉢は他の山茶碗窯系や渥美窯系と共に都市居住者の生活に深く浸透した雑器として、当時の食生活の一端を良く示している。

口縁を指頭で押し出した口は1つのみのものだけが復元できた。器型は口縁形態の他に、成形・調整の差を良く示す、高台付と平底のものにと大別できる。

14、19は断面三角形の貼り付け高台をもつ。14は口径23cm、高台径12cm、器高9.8cmを、19は高台径13cmを測る。

高台付捏鉢はゆるく内湾気味に立ち上がる体部をなす。強い回転ヨコナデによる成形は回転台上で行われたと思われる。19の口縁は外反し、口唇は丸くおさまる。底部は高台脇のナデツケの他、直径方向のナデがなされる。

平底捏鉢は底部板に胴部を巻き上げる手法と考えられ、砂底である。高台付のものと比べて、比較的大型のものが多いようである。

底部脇と口縁にヨコナデの調整が行われるが、胴部は指頭押しナデの後に篋もしくはナデの掻き上げがなされる。そうした成形技法のため底部からの立ち上がりは、外反もしくは真直ぐに開き、口縁はやや内湾気味となる。

口唇は斜めに角張るものが多い。4、6、20の口唇は内外に張り出している。20は口縁が碗状に内湾し、口唇が角張って張り出す特異な器型をなす。口径23cmを測る。

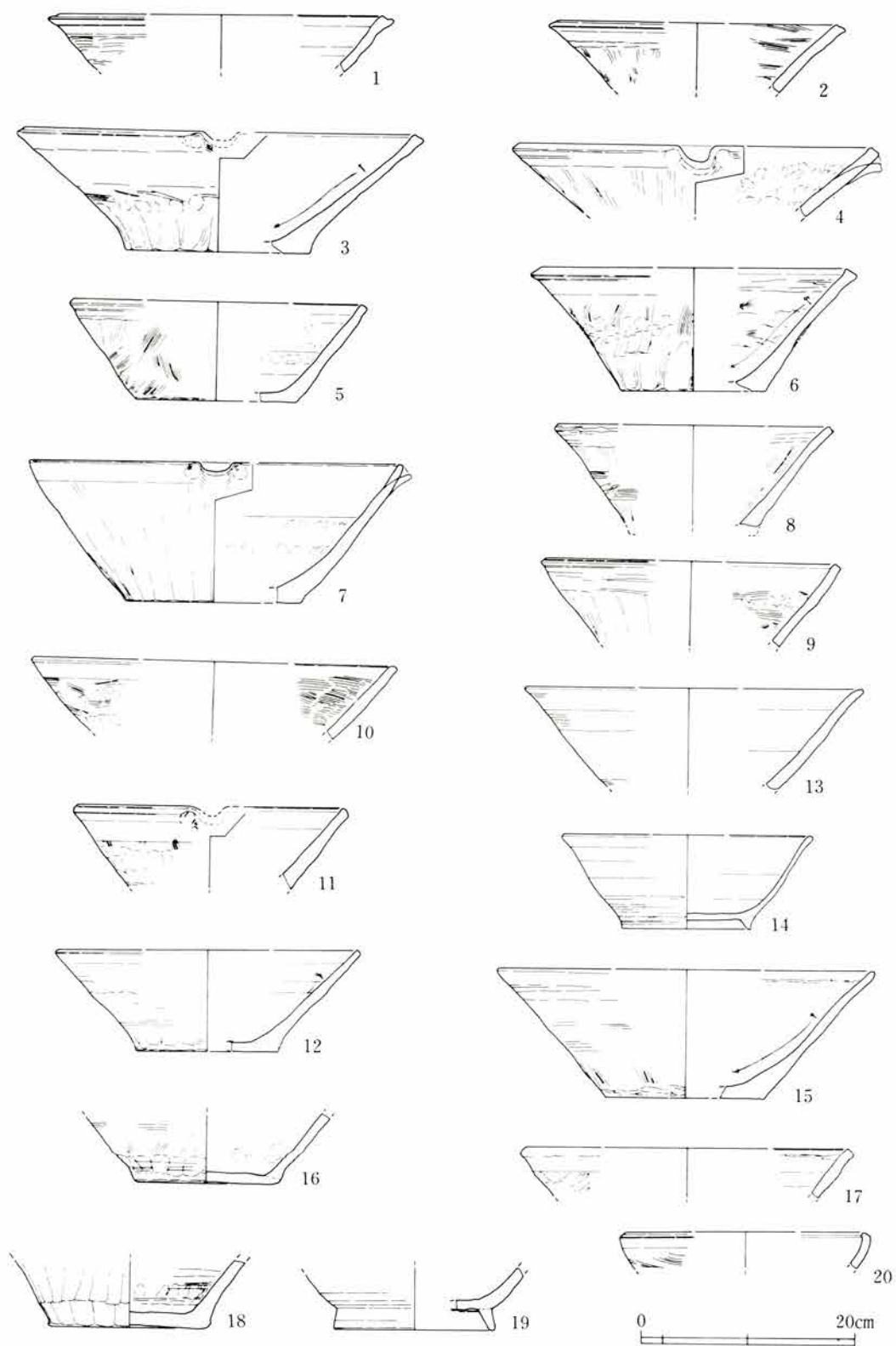


Fig. 68 常滑4 捏鉢

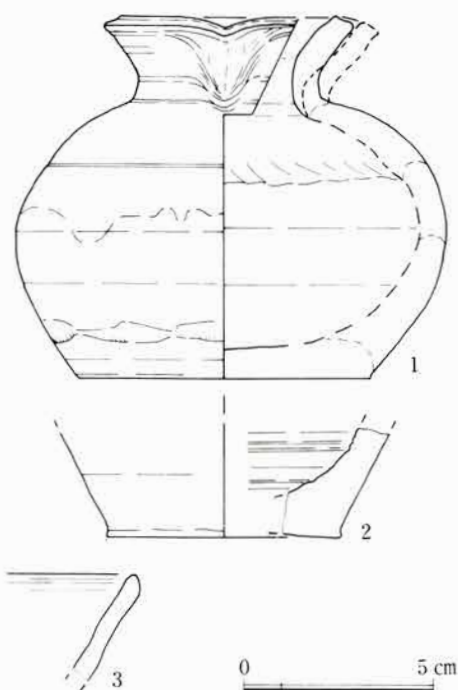


Fig. 69 常滑 5

B 渥美

渥美系炬器類は常滑系に比べて、その出土量は少なく、遺物箱に2箱分程である。しかしながら、これまでの鎌倉市内の調査で得られた渥美系製品資料は壺・甕がほとんどであったのに対して、旧市街地の中心部にあたる本遺跡からは鉢類の出土が目立つ。

a) 壺・甕 (Fig.70-1~5, 7~16, P L.63)

壺・甕は本遺跡にあってもやはり最も出土量が多い。甕では器型復元の出来るものはなかったが、口縁部片を図示できた。壺類では小壺の胴部が多い。Fig.70-1はほぼ全形を残す壺である。微砂を多く含み、手にやや粉っぽさを感じさせるが、焼きしまりは良好で、灰色に焼き上がる。口径12cm、底径8cm、器高22cmである。底部は歪み、全体に少し傾く。口縁から肩にかけて緑灰色の灰釉がかけられ、下方に垂れ流れて、所々白っぽくなる。軽くナデつけを行う底部近く外面は円周方向と縦位のナデつけが行われ、胴部から頸部内面までは回転ナデである。内面は肩部の指押えと胴部の荒い横ナデによる。内底面には自然釉がたまる。胴部外面には2本の沈線が巡り、部分的に3本の沈線となる。所謂、三筋壺の流れを汲むものであろうか。沈線は縦方向にも見られる。また、肩には三又状の窯印が篋描かれる。同様の窯印は甕にも見られた(Fig.67下段)。明確な出土位置、層位は不詳である。Fig.70-2~5もやはり壺の口縁部と底部であろう。2は口径19.2cmを測る。黒色砂粒を混える灰色の砂質土で良く焼きしまる。頸部はやや開き気味に真直ぐ立ち上がり、口縁部は強く外反し縁带状となる。横ナデ整形の口縁部は丸味を持つ。内面頸部から外面に黄味の黒灰色釉が薄く塗られ、内面には降灰も見られ、灰青色に吹き上がる。

(6) 常滑窯系その他 (Fig.69)

Fig.69-2は底径6.2cm程を測る常滑窯系の壺ではなかろうか。白色砂粒を多く混る淡橙色の粘りある胎土で、器表は黄色味の黒灰色を呈する。水挽き成形により、内面には轆轤目が高く残る。底部は糸切りである。III次225号土壌覆土内より出土する。

Fig.69-3は広口碗の口縁部と思われる。黒色と白色石粒を含む砂質の明橙色胎土である。器表はやや黒ずむ。器壁は薄く、口唇は丸く直進口縁である。成形是水挽きによる。外面には褐色に水色の斑点が飛ぶ灰釉が施される。

3は底径10cmを測る。おそらく器高は低く、片口の付く薦口様の壺と考えられる。灰白色の細かく緻密で堅緻な焼きしまりであるが、上半の粘土帯には焼成時に亀裂が入り、そこに煤が付着する。底部は磨滅しているが、篋のナデつけ痕が残っている。底部脇は円周方向の強い篋ナデ（削り）が施され、上位の横ナデ部とは稜を作る。外面には薄く灰白色の灰釉が塗布される。

4は底径10cmを測る。暗灰色土に1～3mm大の黒色粒を混え、良く焼きしめる。砂底に近い外面は円周方向の篋ナデ（削り）と横ナデによる。内面は雑な押えとナデが施される。Ⅲ次63土壌覆土内出土。

5は白色粒を混える細かい黒灰色で良くしめる。底径10cmの胴部の開く小壺様の壺であろうか。やはり底部脇は篋ナデが行われ、概して雑な整形である。内底面とその周囲には煤が付着する。

甕口縁は強く外反し、口縁端に凹帯を作り出すものが多い(Fig.70-7～16)。頸部の明瞭な分化は見られず、肩から大きく湾曲して口縁に至る。頸部から口縁は一気に一枚の粘土帯により成形、外反させられるが、より下方との継ぎ合わせ部には段が残される。強く外反する頸部外面には指押えと横ナデ痕が残されるものの、全体的な頸部と口縁部整形には回転ナデが用いられる。

外面口縁部と肩もしくは頸部下半以下には薄く透明度の高い黄灰色もしくは黒灰色の釉が塗布される。口縁内面には時折り、青色が斑に入る黄色の自然釉がかかる。Fig.70-9では厚く灰釉が刷毛塗りされる。胎土は概して白色石粒を混える灰色から黒灰色の粗めの土であるが、焼きしまりは堅緻である。粘りのある流紋を見せる例もある。Fig.70-7はⅢ次64号土壌覆土上層、9はⅢ次93号土壌覆土内、10は7溝覆土内出土である。

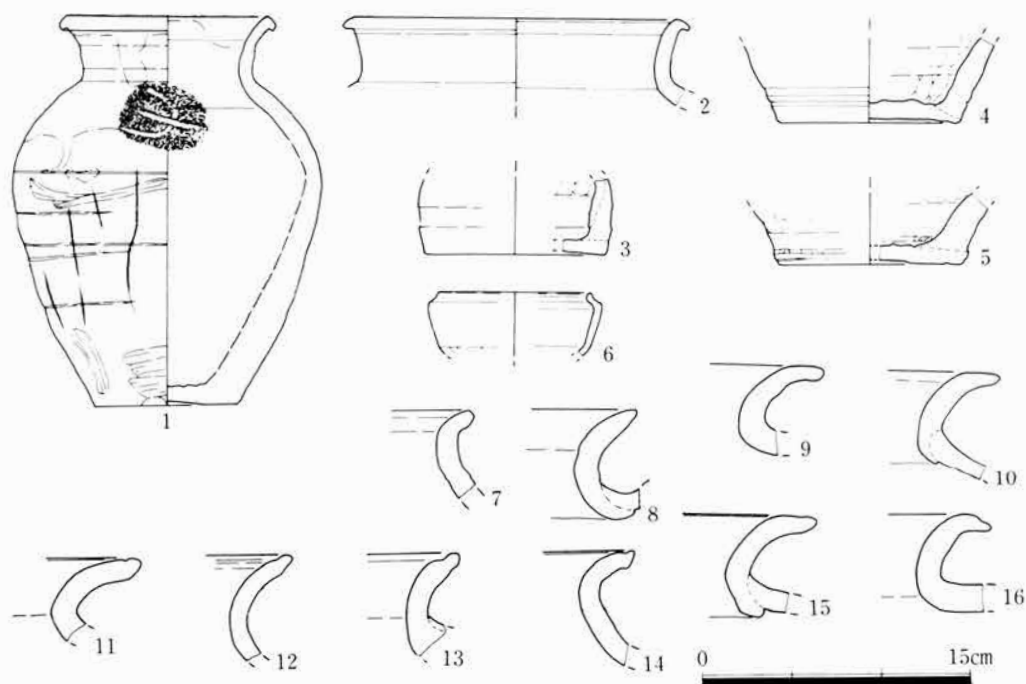


Fig. 70 渥美1 壺・甕・坏

b) 坏 (Fig.70-6、P L.64)

1点のみ出土した。灰白色の砂っぽさを残す細かな土であり、焼きしまりは良い。口径8.5cm、最大径9.5cmをなす口縁の内側へくびれる坏もしくは碗である。口縁のくびれは鋭角的で玉縁状の口唇は直立する。底部に近い所にナデつけ痕が見られ、他は水挽き痕を残す。外面の鋭角的な屈曲部から内面全体に緑灰色の釉が施される。III次3層中より出土する。

c) 鉢 (Fig.71-1、2、P L.63)

鉢は2点図示できた。出土量も多くはない。共に無釉の口端部の鋭角的な平鉢である。Fig.71-1は口径約34cmで、良くしまった灰色胎土の大平鉢で轆轤目の高い水挽き成形による。口唇部内側はナデにより丸味を持つ。2は口径26.5cmを測る。珪石分を多く含む粗い砂質灰色土で、黒灰色に焼け上がる。内外面の口縁付近は回転ナデにより、以下は押えと横ナデによる。III次36号土壙覆土下層より出土。

d) 渥美窯系捏鉢 (Fig.71-3~11、P L.63)

8点を図示できた。全体としてもそれほど多くはない。渥美窯系器は壺・甕で見たように、出土量の少なきもつだって胎土の差異がそれほど明瞭でなく、胎土分類は現時点では慎重さを必要とするであろう。大まかには、細かな灰色の精良土、1~3mm大の黒色砂粒と石粒を混える灰色もしくは暗灰色土、それに石粒を含む青灰色土に分けられようか。一応、以下の記述にあたっては夫々A、B、C類としておく。

一方、器型では貼り付け高台を有するものと、平底とに大別され、成形技法も異なると思われる。よって、器型を基準として以下に説明を加えることとする。全形を復元しえたものはなく、全て部分的な復元に留まった。

I類 高台付捏鉢 (Fig.71-3~6)

Fig.71-3は片口を有する口径約23cmの捏鉢である。以下に記すように内湾しながら立ち上がる胴部は高台付捏鉢の特徴である。やや粉っぽさを感じさせるB類胎土で、焼きしまりは良い。水挽き成形により、胴下部外面にはその後横ナデが施される。指押し出しの片口部と共に口縁部全体も丁寧に外反させられる。口縁付近に薄く灰緑色の自然釉が降る。II次2号土壙覆土内出土。

Fig.71-4~6は夫々底径約14cm・A類、16.5cm・C類、17cm・B類である。全体的にやや粉っぽい。焼きしまりは良好である。水挽きの後に、外面下半は回転篋削り、上半は篋ナデ、もしくは横ナデで仕上げる。胴部の立ち上がりは篋削りにより、外へ直線的に開くように見えるが、全体としては大きく緩く丸味をもつ。高台は断面台形をなし、やや外へ開くように貼り付けられる。高台と外底面高台付近には回転ナデが行われるが、外底面中央は砂底状のまま未調整で残される。ただ、6は高台内壁と外底面に篋削り整形がなされ、6の器面整形には篋整形が多用される。

内底面と内壁は使用による磨滅が顕著であり、重ね焼きの痕跡はないものの、高台畳付には靱痕

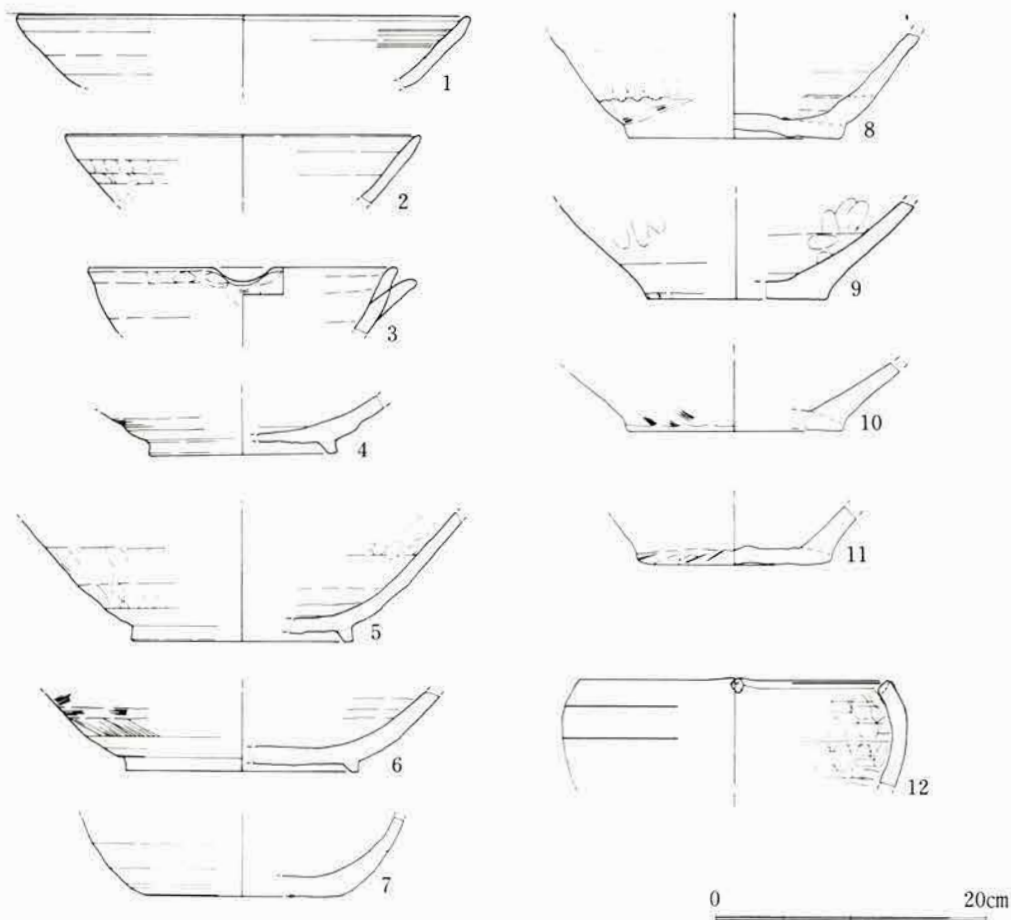


Fig. 71 渥美2 捏鉢他

が残る。

II類 平底捏鉢 (Fig. 71-7~11)

平底の捏鉢は底部の円板に粘土帯を積み上げ、ナデつけの後に回転ナデの整形を行う。底部脇は篋のナデ上げがなされる。外底面は篋押しや掻き取りによって凹凸にされたり、内側へ押し出されている。これらは焼成時の重ね焼きに対する配慮であろうと考えられる。内底面を中心に内壁には自然釉がかかるが、内底面に輪状に釉のかからなかったものや目痕を残すものがあり、外底面の状況を反映している。作りは全体にぼつりとしたもので、底部から大きく開く形状を呈する。しかしながら、7だけは他の平底捏鉢と異なり、外底面の外周から胴部まで回転篋ナデ整形が施され、器型も内湾を指向している。

Fig. 71-7は底径15cm・B類、III次93号土壙（井戸）堀り方中層出土。8は底径約14cm・B類。9は底径約14cm・B類、III次287号土壙覆土内出土。10は底径約16cm・A類。11は底径約15cm・B類、III次第1トレンチ1溝覆土最下層出土。

(5) 播鉢

播鉢は量的に少ないものの、播鉢の生産を特徴とする備前焼を中心として瀬戸焼きも小片が出土している。

a) 瀬戸系播鉢 (P L .64)

瀬戸播鉢は2点出土したが、共に細片であり、復元図示はできなかつた。出土した細片は底部近くの胴部片であろうか。胎土は焼きしまりの良くない粉っぽい灰黄色を呈し、焦げ茶色の鉄釉がかかる。櫛描の条線単位は不詳である。

b) 備前系播鉢 (Fig.72、P L .64)

出土片総数は21点、内個体数は18程と思われるが図示できたものは7点に留まる。

Fig.72-1は口径30.5cm、器高14cm内外と思われる。胴部は少し内湾気味に立ち上がり、口縁端を外方斜めに切り落としたような器型をなす。黒灰色から青灰色を呈し、少し石英粒を含む瓦質に近い胎土と焼きである。素地の練りと焼きしまりは不良で少しボソボソする。斜めに傾斜する口端から外面には黒色の釉がかかる。器体外面には粘土帯積み上げの指押しえ痕が残り、内面は横ナデ整形が施される。櫛描の掻き上げ条線は7条単位である。また口縁破損部にはタールが付着しており、多少の破損は修復して再使用したのであろう。表採。

2は口径31.5cm、底径10cm、器高13.5cmを測る。胴部の内湾気味立ち上がりと、口径・底径比は1とほとんど変わらないが、口縁部は内外に少し張り出し肥厚する。黒色砂粒を多く含み灰色から茶灰色のしっとりとした胎土で、焼きしまりは良い。器表は備前焼特有の茶褐色を呈する。外面口

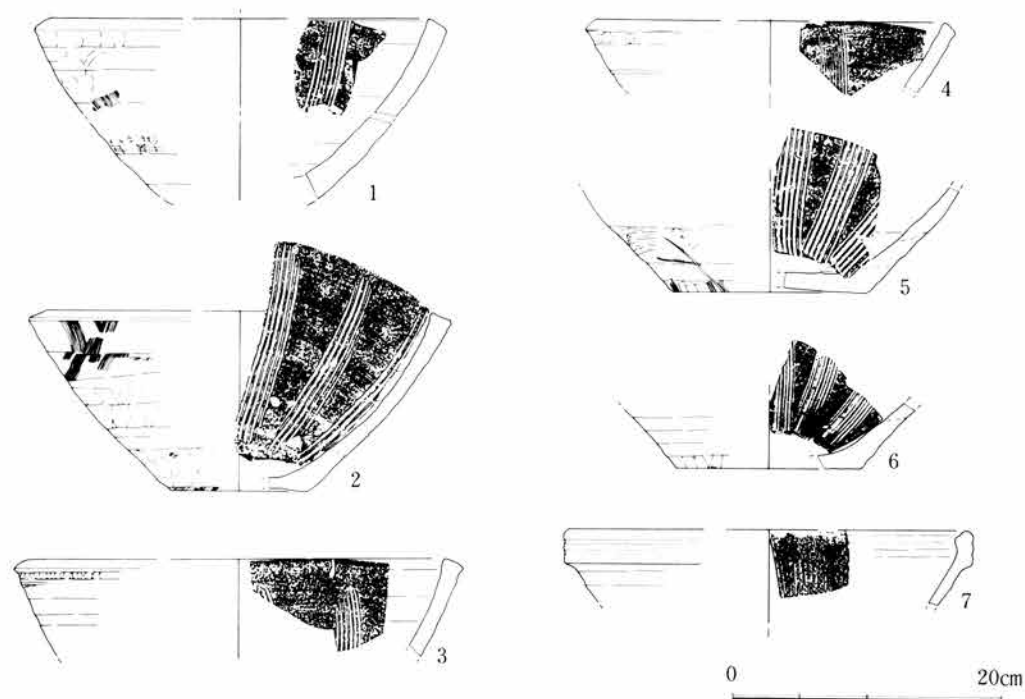


Fig. 72 播鉢

縁下に刷毛目状の篋の掻き上げがなされ、底部に篋起し痕が残る。条線は太めの5条単位である。表採。

3は口径約33.5cmを測り、2と同型をなす。口縁下には口縁つまみ出し時の指頭痕が明瞭に残される。胎土は白色粒を多く含み、胎心は茶赤色を、器表は黒色を呈し、ザラザラした感じを与え、焼きしまりはあまい。内面の条線は口端よりかなり下った所で止まり、6条単位である。Ⅲ次2溝覆土内より出土。

4は口径約27.5cmを測る。口縁の内外への張り出しは小さく、直線的に開くが、1～3と似る。口縁下には3と同様に指頭痕が強く認められる。また胴部には篋ナデ回しがなされる。内面の条線は細かく、緊密な9条単位である。表採。

5は底径約14.5cmの大型である。黄色砂粒を含む黒灰色で焼きしまりは良い。粘土帯の積み上げ部周辺の外面にはナデつけと篋ナデが周到になされる。底部は篋起し。内面には黒灰色の釉が斑点状に飛ぶ。見込みには円周方向の使用による磨滅が認められる。条線は太い6条単位。表採

6は底径13.5cm程を測る。黒色粒を少し含む灰色の胎土は粘り気を感じさせ、焼きしまりも良い。器体は轆轤整形、底部篋起しである。内面には大きな斑点状の自然釉が飛ぶ。内面の条線は9条単位。表採

7は口径約30cm。焼きしまりは良好で、器表は光沢のある赤褐色となる。胴部は外方へ直線的に開き、口縁は直立する。直立する口縁外面は串団子条となり、稜を幾段も作る。轆轤成形により、外面は回転篋削りがなされる。内面の条線溝は細かいものの間隔は広い9条単位である。表採

16世紀後半、桃山期に比定できる7を除いて、他は鎌倉後期から南北朝期にかけてのものが多く、器高が高くて環元焰焼成気味の青灰色を呈する1や、轆轤成形の6など、もう少し上下の中を考えても良いだろう。一方、瀬戸播鉢は小片であるため、詳細は不明であるが、瀬戸窯系播鉢の焼造は室町期以降とされる。

(宗 堇 秀 明)

(6) 東播地方産須恵質捏鉢 (Fig.73)

近年盛んになってきた中世地方窯の研究の中で、鎌倉における出土品にも魚住窯を中心とする東播磨地方の製品が混じっていることが明らかになってきた。当遺跡においても、東播系の須恵質捏鉢(片口鉢)が10個体分程出土している。中でもFig.73-1に示したものは口縁の一部を欠く他ほぼ完形で、鎌倉における好資料といえる。

この一群のものは、胎土に粗砂や石粒をやや多く交え、山茶碗窯系捏鉢よりは密だが古代の須恵器より粗い土を使用している。還元炎焼成によって全体に暗灰色に焼き上がるが、割れ口に墨を長したような暗色部が認められるのが特徴である。底部は砂底となるので、成形は輪積み後回転台整形といった手法によると思われる。焼造地の窯址では壺甕や瓦なども焼いていたことが知られるが鎌倉においては捏鉢以外の器形のものほとんどみられない。捏鉢にしても、器形的には直線的に外反した側壁を有し、口縁肥厚して縁帯を形作るものが圧倒的である。ただし、本遺跡の資料Fig.

73-5や千葉地遺跡の出土品例では、口縁の縁帯が発達しないものが見られる。窯元での編年によれば、5のような形は鎌倉時代13世紀後半に、その他の形のものは南北朝時代14世紀中頃に比定されている。

本遺跡の資料は、1が第Ⅲ次調査のⅢ区175号土壌より出土した他、以下は溝覆土や包含層中の出土であり、層位的変遷は把み得ない。ただ4が第3層上部より出土しており、鎌倉時代以降のものであることは確かで、産地から鎌倉への搬入時期は13世紀末から14世紀を中心とした時期とみなしうる。

(7) 亀山風(格子叩目)陶器 (Fig.74-1~5)

亀山窯の製品についてはその内容があまりはっきりしていないが、格子叩目をもつことが一つの特徴とされているので、そうしたものを載せた。

1は胎土が灰色微粒質で中砂を若干含む土器質のもので、焼成も土器よりやや硬い程度でしまりに欠ける。器面は内外とも黒色を呈する。外面は格子叩目、内面は木口状工具によるナデ掻きである。甕の胴下部片であろう。表土層より出土。

2は須恵質ないし柘器質と言えるもので、胎土は紫灰色で、緻密な粘土に灰色・白色の細砂を若干交える。焼成はきわめて硬く焼きしまり、胎土が結晶したかのような割れ口を示し、練りの流紋も認められる。器表は内外とも紫味灰色を呈し、内面は掻いたようなナデ、外面は格子叩目である。胴の膨らむ甕の頸部下にあたる。Ⅱ区北半2層より出土した。

3の胎土は灰色良質で粗砂を若干交える。焼成はしまりに欠け、土器的である。器表は黒色を呈する。外面の叩きは格子目ではなく、内面は剥落著しく整形痕不明。いわゆる亀山というよりは産地不明の土器質陶器というところであろう。第Ⅱ次調査1区版築面北方2層の出土。

4は良質の粘土に細砂を若干交える胎土で、胎芯は黒色、表層は灰白色を呈する。焼成は土器的だが、ややしまり、土器よりは硬い。器表は外面黒色、内面白灰色を呈する。外面には格子叩目、内面には大まかな同心円叩目が残る。Ⅰ区北半3層より出土した。

5は4と似た土だが粗砂大石粒を若干交える。胎芯暗灰色、表層灰白色を呈する。器表は外面が

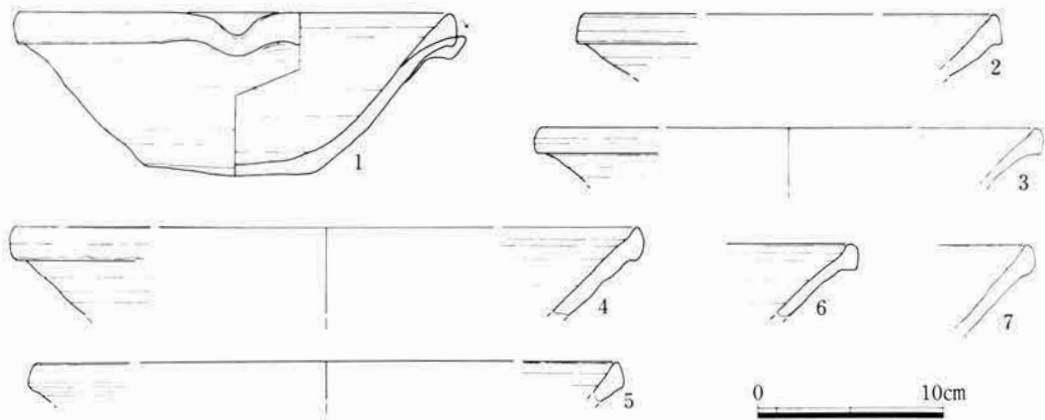


Fig. 73 東播地方産須恵質捏鉢

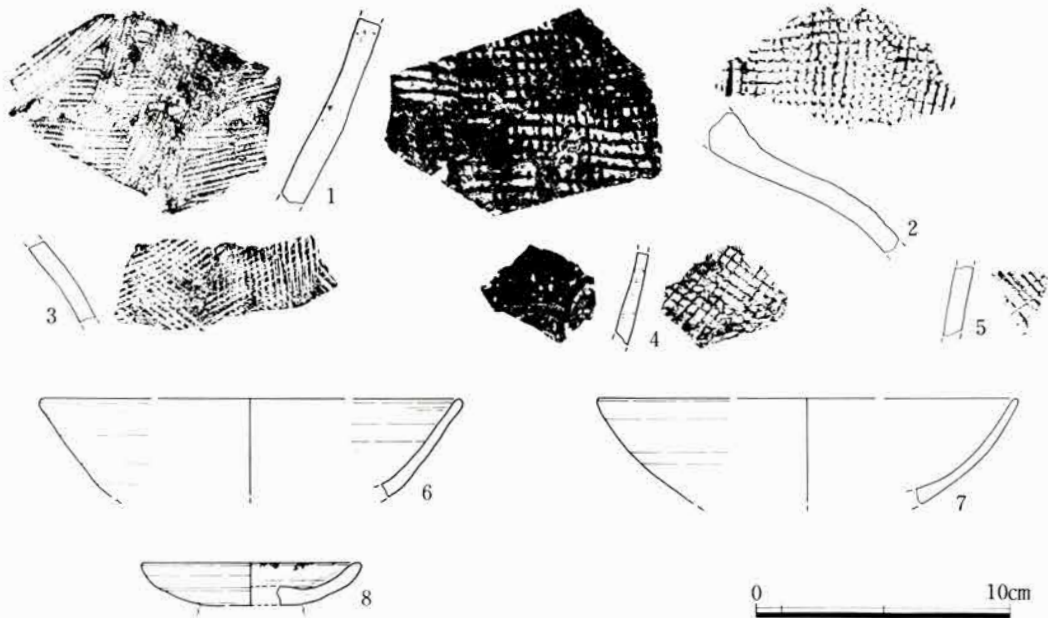


Fig. 74 亀山風陶器・須恵質陶器

炎のムラで赤褐色ないし灰黒色を呈し、格子叩目であり、内面は暗灰色でていねいなナデ整形となっている。II区地山上より出土。

(8) 須恵質陶器 (Fig.74-6~8)

古代の須恵器とは印象の異なる産地不詳のものである。必ずしも中世のものとも言えないので、あえて別項を立てた。

1はロクロ成形の碗ないし鉢である。胎土は細砂大の石粒を焼き固めたような炻器質で、青味灰色を呈する。焼成はよくしまりきわめて硬く、一部にへき開性が見られる。口唇部には灰白色の降灰があるが剥落している。器表は外面口縁部が暗紫褐灰色を呈し、下部は灰色を呈するが、自然釉の光沢をもつ。内面は灰色だが金光沢がある。第II次調査2・3区間の2層より出土した。

2も1と同形の碗だが口唇形態わずかに異なる。胎土はきめ細かく微量の砂を交え胎芯で暗灰色表層青味黒灰色を呈する。焼成は火度が高いのかよくしまり、硬い。口唇には白っぽい降灰が見られ、内面にも及ぶ。第II次調査4区64土壙出土のものと、同2区版築面構成土中出土のものが接合。

3はロクロ成形の小皿である。胎土は微粒質で少し粘性を示す。焼成は良好できわめて硬い。炻器的といえる。口唇には降灰があるが剥落しており、内面では銀青色の自然釉が流れはじめている。全体に暗灰色を呈し、外底は糸切りである。口縁に煤が付着しており、灯明皿に使われたことがわかる。第II次調査4区35土壙より出土した。

(河野真知郎)

(9) 土師質・瓦質雑器

A 手焙り

a) 火舎 (Fig.75-1、P L.67)

四脚つきの火舎（手焙りまたは火鉢）であろうと思われる。表面黄褐色で、胎心は灰黒色を呈する。胎土には黒色砂粒を多く含むが、粉っぽさが強く、表面では滑らかである。脚は損欠しているため不詳であるが、面取りされた低い円柱状のものと考えられる。脚の周囲に円孔は見られない。胴部の立ち上がりは緩く、上半でくびれて、口縁が外へ開く。内面の横ナデ回しは丁寧であるが、外面下半は荒いナデつけによる。火熱を受けた痕跡は内面に限られ、内底では赤くハゼた痕を残し、胴部には煤が付着している。Ⅲ次3層下部より出土する。

他に面取りされた円柱形の脚が一点出土しており、脚底面から器面へ向かう円孔が見られた。

b) 土器質手焙り (Fig.75-2、P L.67)

この類の本遺跡からの出土は少ない。胎土には石粒を多く含み、黄褐色に焼け上がる瓦質に近いものである。内湾気味に立ち上がる胴部は口縁で肥厚しながらくびれ、外方へ張り出す。Ⅲ次3層中出土。

c) 輪花手焙り (Fig.75-3、4、P L.67)

20個体程が出土している。胎土は砂、石粒を少ししか含まない精良な粘りある土であり、器面は良く磨かれて黒色や紅灰色となる。

Fig.75-3は灰色を呈する。口径は約39cmで、丸味をもってほぼ真直ぐに底部に至ると思われる。輪花をなす胴部は底部脇より内側に押し出され、それらの間に押印花文が3つずつ配される。器面の磨きは外面ではほとんど目立たない。内面では口縁付近は円周方向に、それ以下では縦に掻き上

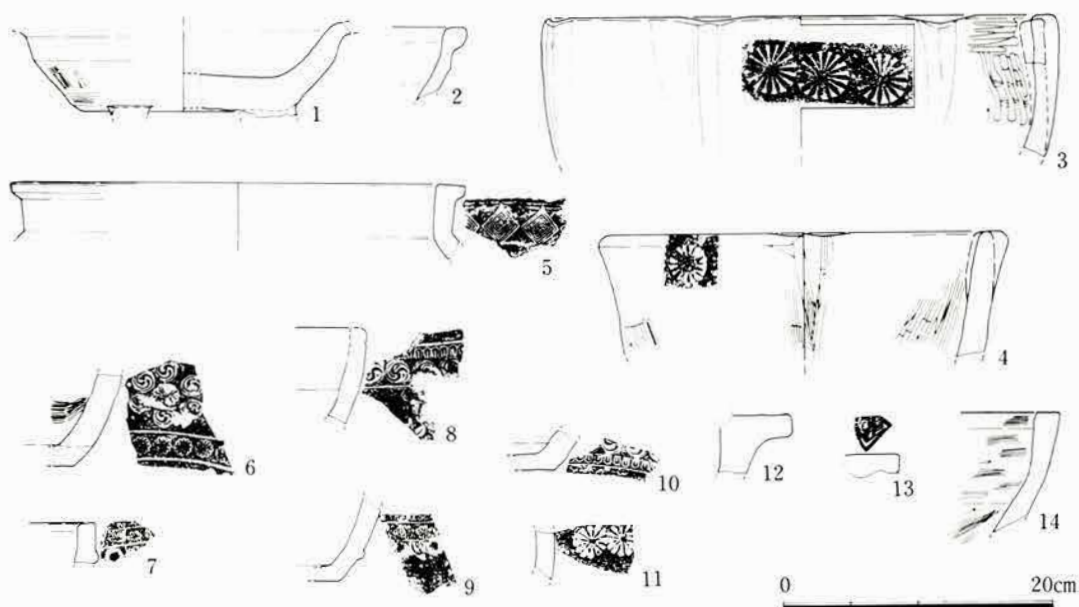


Fig. 75 手焙り 1

げるが、概して雑である。他の類例とは一見して異なり、戦国期以降に降るものではないか。出土層位は不詳である。

4は口径31cmを測る。口縁下でくびれながら若干外反する。輪花は口縁付近を指で内側に押し出したもので小さい。口縁直下外面に押印の菊花文が配されるけれども、内外面共に口縁付近は強い火熱を受けて赤色にハゼてしまっている。II次土丹版築面上出土。本例のように器体が赤色や淡紅色になり、ハゼたものはFig.75-9、13の他に3個体ある。

d) 瓦器質手焙り (Fig.75-5~14, P L.67)

5は口径約34cmを測る。口縁が鐙状に外方へ張り出し、口縁下に頸部を作り、胴は外へ張る。器表は光沢ある黒色となり、頸部外面に方形の雷文が連なって押印される。押印具はかなり硬質であったと思われ、外へ張り出す口縁の一部を鋭く切り込んでいる。

この他に口縁部片、底部片が多く出土している(6~14)。砂底の底部から内湾気味に立ち上がる胴部は口縁に至り、ほぼ直立し、口唇は水平になるのであろうか。口縁部は14で肥厚する他は肥厚しない。鐙のつく12では胴部よりかなり薄い。また、これらは底部脇から鐙部、口縁まで、押印が繁縷になされ、多くは雷文、剣頭文、菊花文と珠文の組み合わせである。13の鐙上面には扇文様が押印される。II次土丹版築面とIII次2層、3層中より多くが出土する。このD類は手焙り類の中でも遅く現われ、鎌倉市内では室町期以降の層より出土しているが、5は器形や作りから見て、さらに時期的に降るものと思われる。

e) 瓦質鉢形手焙り (Fig.76, P L.67)

器高が低く、底部から直線的に開いて、口縁の肥厚する鉢形の器である。底径と口径の比が小さ

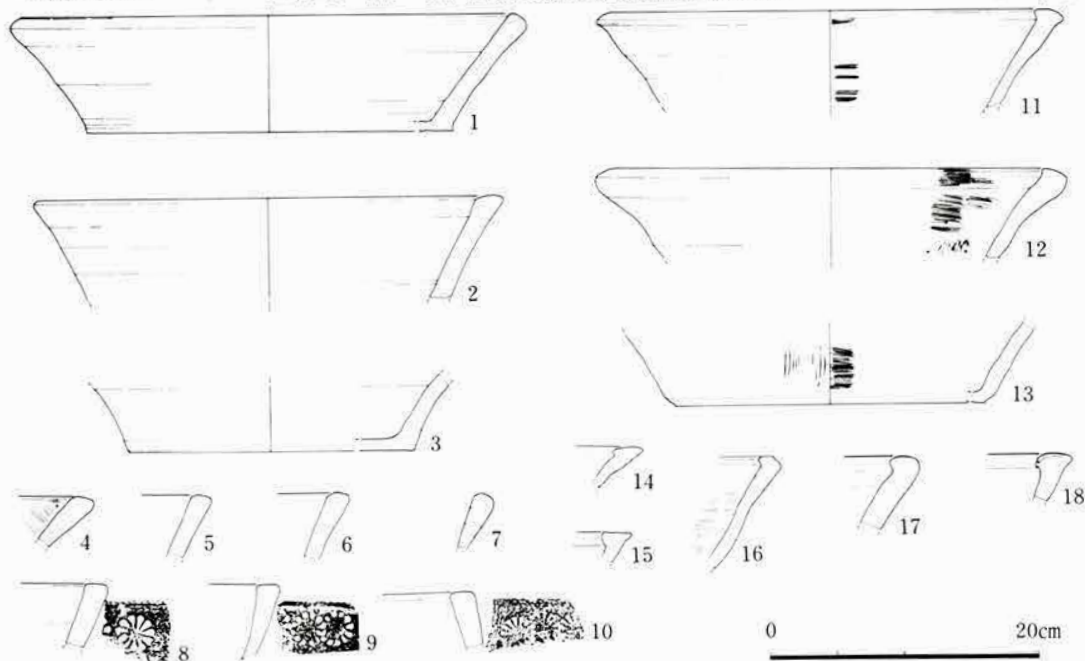


Fig. 76 手焙り 2

く、器壁の薄い作りである。口径は35~38cm、底径22~27cm。底部は薄い円板で砂底となるが、篋ナデやスノコ痕の残る例もある。胴部内面には概して丁寧な回転ナデが施され、外面ではナデツケと櫛掻きがなされる。

口縁は肥厚して終束するもの(1~10)と、肥厚した端部が内側に引き出されるもの(11~18)がある。前者の胎土は砂粒を多く含み、橙色味の黒灰色を呈し、中にはザラついた軟質のもの(5~10)がある。8~10の口縁外面には押印文が配され、口端部と外面に篋ナデがなされる。輪花をなすものかもしれない。後者は砂粒の混入は少なく、灰色ないし橙色の堅い焼きしまりである。口縁付近の回転ナデ痕は高く、胎土の細かさを示し、胴部外面には縦位の櫛目がつく。

このE類は底部も薄く土鍋であろうともされるが、すでに手焙りへの転用が想定されているように、本遺跡出土品でも2、4~6、(8~10)、11、12の内面に火熱を受けている。この類は鎌倉市内の他の遺跡同様に、本遺跡でも暗褐色の中世地山上や、そこに掘り込まれた遺構内より出土しており、手焙りとされる器種の内でも早い時期の器形であると考えられる。この瓦質鉢形手焙りは土鍋からの積極的な転用もしくは当初より併用されていたものであり、その中で、A、B、C類とD類が専用形態とし生み出されてゆくと考えられる。(宗 碁 秀 明)

(10) 伊勢系土鍋 (Fig.77-1~11)

三重県齋王宮跡をはじめとして、伊勢方面に出土する土鍋とよく似たものが鎌倉においても少量ずつではあるが広く出土する。鎌倉では中世前期には煮沸形態の土器はまず見られないのだが、この“伊勢系土鍋”と我々が呼称する土器は、市内各所で数個体ずつながら普遍的と言って良いほどよく見られ、注目に値する。

本地点では合計10個体程度と思われる破片が出土している。胎土はいずれもきめこまかな粘土に粗砂(輝粒あり)をやや多く交えたもので、胴・底部の器壁はごく薄く作られている。器形としては、つぶれた球形の胴部からくびれた頸部をもち、口縁は外反するが口唇は内方へ折り返されて内壁に接する形となる。輪積み成形、ヨコナデ整形を基本とするが、胴下部の内外はヘラ削りによりごく薄く仕上げられているようだ。外面には木口状工具による擦痕も多く見られる。焼成は概して良好であり、胎土が粗っぽい割には硬く仕上がり、肌色~灰褐色~暗褐色を呈する。外面には火にかけたことが判然とするほど、煤が付着している。また器壁の薄さのため剥落も多く、それゆえか全形を知りえる資料は少ない。

口縁形態には若干の差異が認められ、Fig.77-3~10のように丸味をもった断面形がもっとも多いが、Fig.77-1のように断面菱形に角張るもの、同11のように端部をつまみ上げるものの三通りがある。これらが形式的な変化をするかどうかは、本家の伊勢方面の編年にかかわってこよう。鎌倉におけるこの手の土鍋は、層的には十分に把握されていないものの、鎌倉時代後期を中心に存在するだけで、その前後の時期にはまず見られないようである。このことから、また胎土の質が在地土器とは著しく異なることから、現時点では伊勢系土鍋はまさに伊勢方面から鎌倉へ搬入されたものと考えている。

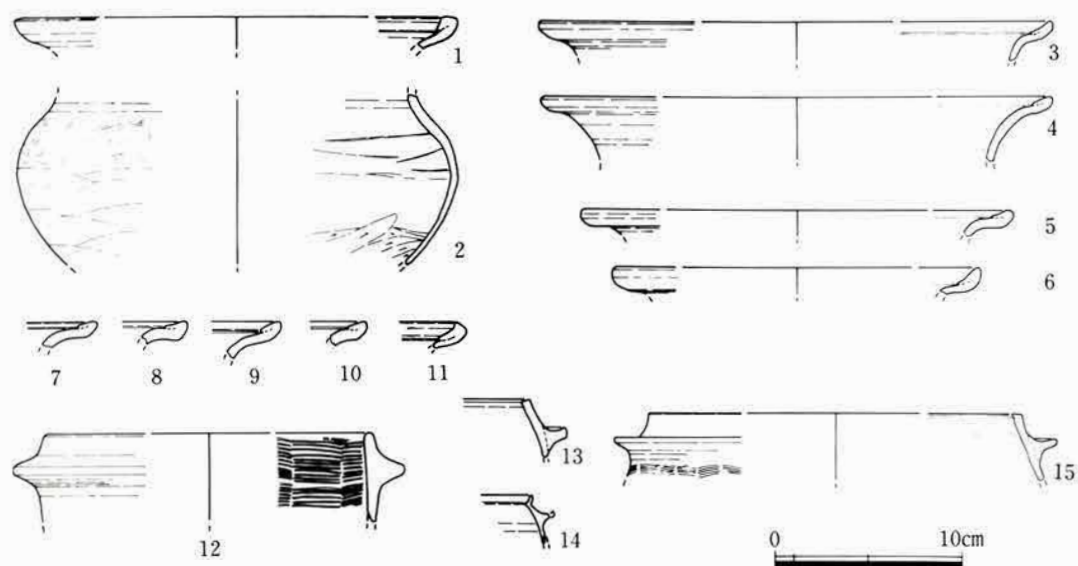


Fig. 77 伊勢系土鍋他

(11) 羽釜 (Fig.77-12)

粗胎の土器で、直立に近い口縁の外縁直下にほぼ水平方向に張り出す鏝を付けたものである。胴・底部がどのような器形になるかは、破片もなくよくわからないが、古代の羽釜ほど深くはないと思われる。胎土はかわらけと似た土で、やや粉質の粘土に中砂を多く交える。焼成もかわらけ程度であまり硬くない。おそらく輪積み成形で、外面はヨコナデ仕上げ、内面の口縁直下には叩目帯がめぐる。全体に肌色～褐色を呈し、外面鏝以下はやや煤けている。

この手の羽釜は、伊勢系土鍋に比してさき少量しか出土しないが、次項の鏝釜よりは鎌倉市内の各地点で出土している。帰属する時代はまだ確定できないが、伊勢系土鍋より後出で、鏝釜より先行する時期を中心にするのではないと思われる。本地点のものは第2層より出土している。またこれがどの地方の産品かもはっきりしない。胎土をみた限りでは鎌倉在地のものとも言えるが、それにしては出土量が少なすぎる。器形的には畿内の中世土鍋類の中に似た形を求めうるが、土器としての質がまるで異なっている。東国の中世土器がいまだよく把握されていない現状では、いずれのものとも決しかねる。

(12) 鏝釜 (Fig.77-13~15)

土器ではあるが胎土精良で、器壁のごく薄い一群のものである。Fig.77-13はやや粗胎のもので粗砂を多く交え、焼成も硬さはあるがしまりに欠けてもろい方である。肌灰色～褐灰色を呈する。口縁は内傾し、鏝はやや上反りで、口唇は角張りやや内上方に引かれる。14はほとんど砂のまじらぬ微粒の胎土で、焼成は軽い仕上がりでよくしまっている。肌褐色～灰肌色を呈し、鏝はやはり上反り気味である。口縁は内傾し、口唇は独特の形で外上方に引かれる。15はかろうじて復元実測したもので、器形的には13に似る。胎土は13より良く、金雲母粒を交える。肌色～暗褐色を呈し、

内面はいぶしたような紫味黒色を呈する。鏝似下の胴部には叩目あるいは木口状工具擦痕が見られるが、小片のためどちらとも決しかねる。口縁や内面はヨコナデされる。

この手の鏝釜は、鎌倉においては中世の最上層に見られるもので、本地点に隣接する島森書店用地内や松風堂ビル用地からも類品が出土している。また東国の中世遺跡から散発的にはあるが出土している。時代を特定することは现阶段では難しいが、鎌倉においては上限を15世紀においておかしくないと考えられる。またその変遷としては、口縁の内傾が大きく鏝の上反が顕著になり、やがて側面観でほとんど口唇の見えなくなるものへ、という道筋が考えられるが、今のところ粗い想定にすぎない。本地点出土品も、13、15は第2溝より、14は若宮大路近くのVII区の上層からと、時代的に降る層に属している。

(13) 瓦器・瓦器質土器 (Fig.78)

畿内産の瓦器碗・皿(1~5)と、生産地未詳の瓦器質土器(6~11)が出土している。

1~5の瓦器碗・皿は、京都に出土するものと同類の楠葉系のものと思われる。胎土は水簸された微質の土で、内型成形なのか外面下半から外底は指頭による押しナデ痕をそのまま残す。口縁部は横ナデ整形され、碗では内側面に横位の暗文が入り、見込みにも花文を主とした暗文が入る。皿は「内折れかわらけ」と同形の、口唇部内向きのもので暗文は見られない。当遺跡出土の瓦器碗・皿は破片総量からみても15個体までではない。1はおそらく5弁輪花状を呈するもので、口縁外面にも2条ばかり暗文がつく。IV区34土壌出土。2も5弁輪花形であろうが外面の暗文はない。第II次調査2区第1版築面上出土。3は14弁菊花文の暗文が見込みにあるものだが、その描き方は鍵形を連ねる形式であり、14世紀初頭まで下るものと思われる。拡張区3層下部出土。4も花文が見込みにつけられるが、幅広の弁数はわからない。III区120土壌出土。5は第2次調査3区3層より出土。図示できなかった破片の中には、碗の見込みに一筆描きの平行条線(グジャグジャとした文様)の見られるものもあり、出土層位も遺構中、2層、3層等一定しない。

6は三脚のつく小型羽釜である。胎土は微粉質で微砂を含み灰白色ないし桃灰色を呈する。焼成はしまり弱く軟弱で、表面の仕上げの良さで保っているようなものである。器表は鏝以上で良く横

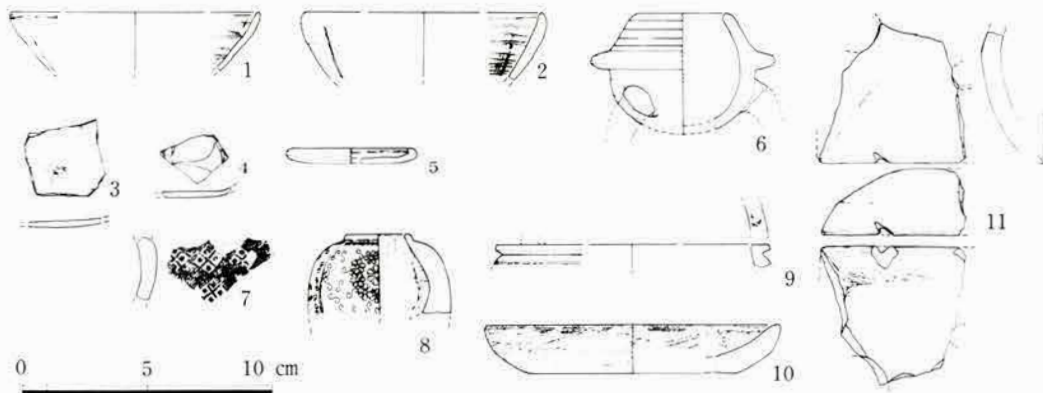


Fig. 78 瓦器・瓦器質土器

位に磨かれ、5本の沈線が巡り、全体に黒ないし黒褐色を呈する。口縁の内傾状況から見て、畿内の産品である可能性が高い。VI区地山上より出土。

7は香炉の類の胴部片。胎土は灰色微砂質で細砂・中砂をやや多く交える。焼成は軽いがしまりに欠けている。器表はみがきに近いナデ整形できれいに仕上げられ、黒色ないし黒灰色を呈する。外面には割菱のようなスタンプ施文がある。IV区5溝出土。どこの産品かは未詳。

8は瓜形の小壺である。胎土はやや粉質の細かい粘土に中砂を少し含み、桃色～桃灰色を呈する。焼成はしまり弱く軟かい。器表はよく磨かれ光沢さえあるが、内面はヘラと指のナデのみで粗い。ともに黒色を呈する。器壁は分厚く、凸面は4面あると思われるが、中央に1個その周囲に8個の5弁花文スタンプが捺され、頸部下と胴各部にS字状スタンプが捺されている。このような瓦器質小壺は千葉地遺跡などでも出土しているが、とにかく類例が少なくどこの産品かわかっていない。IV区2溝覆土上層より出土した。

9は把手の付く香炉か鼎形の土器と思われる。胎土は瓦器碗のものと似ており、芯は白色で表層で灰色を呈する。しまり良く硬い焼きで、表面は黒色で良く磨かれ光沢をもつ。口縁のくびれ下には雷文帯がスタンプの連続押捺で付けられる。把手は口縁上端面に角棒状のものがつけられた痕跡を留める。IV区1溝覆土上層より出土。

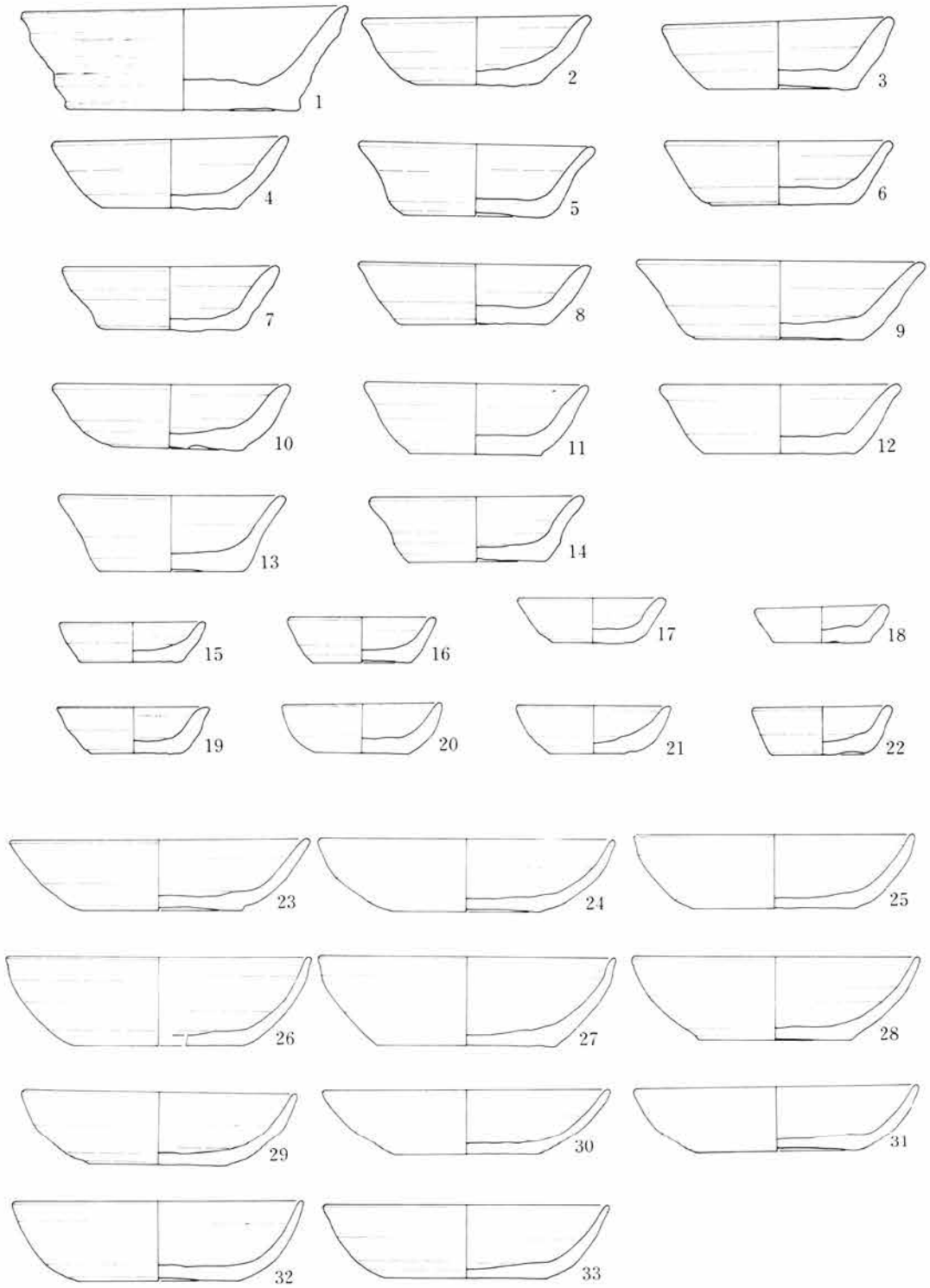
10は分厚い皿であるが、瓦器の仲間に入れてよいかどうか疑問の残るものである。胎土は細・中砂を多く交える土で、芯は明灰色、表層は暗灰色を呈する。焼成はしまりに欠け、割れ口はザラつくが、器表の仕上げ良いので、硬く感じられる。表面は丸棒状工具でむやみやたらに磨かれ、黒色ないし銀灰色を呈する。外底もヘラでナデられている。口縁には煤が多量に付着しており、灯明皿として使用されたことがわかる。このような土器は類例がなく、産地・系譜ともに不明である。IV区で溝覆土上層より出土。

11は角形の火鉢か香炉の蓋と思われる。胎土はきめ細かな粘土に中砂を若干交え、桃色～柴灰白色を呈する。焼成はしまりに欠け軟質だが、表面仕上げ良好のため硬い感じがする。外面はヘラで軽く磨かれ滑らかで、黒色～紫灰色を呈するが、内面はヘラおさえと粗いナデで桃色ないし黒色を呈し、滑らかとは言えない。コーナーから中心に向かう対角線は稜をなしており、最高部に近い両側に径1-2cmの孔が焼成前にあけられている。角形の火鉢は鎌倉では少量出土しているが、蓋の方は例がなく、どこのものとも知れない。VII区第1トレンチ西側溝覆土上層より出土した。

(河野真知郎)

(14) かわらけ

最も多量に出土した遺物である。これらのかわらけは、一部手づくね整形のものを除いて、一般に右回転ロクロを使用した回転糸切り底を持つ。胎土・整形共に粗いものが多いが、観察を加えると、器形・胎土・整形に多くの変化が認められる。これらの変化を分類すると、おおよそ7群の分類が可能である。以下各分類の「群」の概要を記すが、分類にあたっては可能なかぎり使用時のセット関係(大・小あるいは大・中・小)を把握することを心がけた。又各群のかわらけは「型式(タイプ)」ではなく、「群」として扱ったため、さらに数型式に分類が可能な「群」もある。しかしこ



1 : 3

Fig.79 かわらけ 1

ここでは、かわらけの基本的な変化を把握するにとどめ、それらについては文中で述べることにした。

第1群 (1~22)

第2溝・第5溝を中心に出土した。胎土は細かく粘性が少ない。そのため手に取ると粉末状に剝落するものが多い。口径では13~14cm、10~11cm、6~7.5cmを中心とする3種に分れる。器形は大型、中型ともに同一傾向を示すようで、側壁が「逆八字」形に直線的に開くもの、側壁中位に強い曲折点を持ち、そこから開く角度が強くなるものがみられる。後者のばあいは曲折点内側に稜線が形成されている。口唇端部は丸く仕上がっているのが普通である。小型のものも、大型、中型のもの、胎土・整形・器形の変化は認められない。側壁は中位に曲折点を持ち、さらに開くもの、直線的に開きぎみに立ち上がるもの他に、下位に曲折点を持ち、そこから直立ぎみに立ち上がるものも少量出土している。内面整形は、内側を回転ナデした後に見込み部に指頭横ナデを施している。

1はやや整形、胎土を異にするが、1点のみの出土であり、この群に含めた。側壁はロクロ水引きの後ナデを施さないため、水引き痕が明瞭に残っている。胎土はやや粘性の少ない粗い土で、粉末が手に付着するようなことはない。内面、内壁はナデ整形が施されているが、見込み部には施されていない。本群のなかではやや古い時代のものと言える。II次調査、E墓壙出土。

第2群 (23~56)

胎土にやや砂を含むが、粒子が細かく、焼成も良好である。又、器肉は底部・側壁ともに薄く仕上がっている。口径は13~14cm、10~11cm、7~8.5cmを中心とする3種に分れる。これは第1群と同様である。この群のかわらけは、市内他遺跡でもほぼまとまって出土しており、さほど型式分類は出来ないと思われるが、大・中・小それぞれに、器高の高いもの、低いものがあり、これらは分類可能である。

器形は大型のものでは、直線的に外反するものと、側壁中位あるいは下位に曲折点を持ち、そこからの上上がり直立気味に立上がるものの口唇部が外片に引かれるものがある。直線的に外返するものは、器高の低いものに多くみられる。中型・小型の器型も大型のものに比較して変化はみられない。この群のかわらけは同一口径のかわらけでは、他の群のものより最も容量が大きい。

第3群 (57~77)

胎土が粗く、手にざらつく感じを与えるものである。口径は13cm、11cm、8cmの大中小3つに分れる。大型のものは、外面の側面感と内壁の立上りがやや異なっている。すなわち、外面はゆるやかな曲線で立あがるが、内面は直線的に立上がっている。内面整形は比較的丁寧に施されており、特に見込み外周の指頭ナデが強く、内底面が広がっている。こうした技法は4群のものにもそのまま使用されている。

第4群 (78~85)

口径12~14cmのものと同径8~9cmのものに分かれる。胎土は砂を多く含むが焼成良好、堅微である。色は他の群(1~3群)と同様の赤褐色を呈するものがほとんどであるが、橙色の焼成む

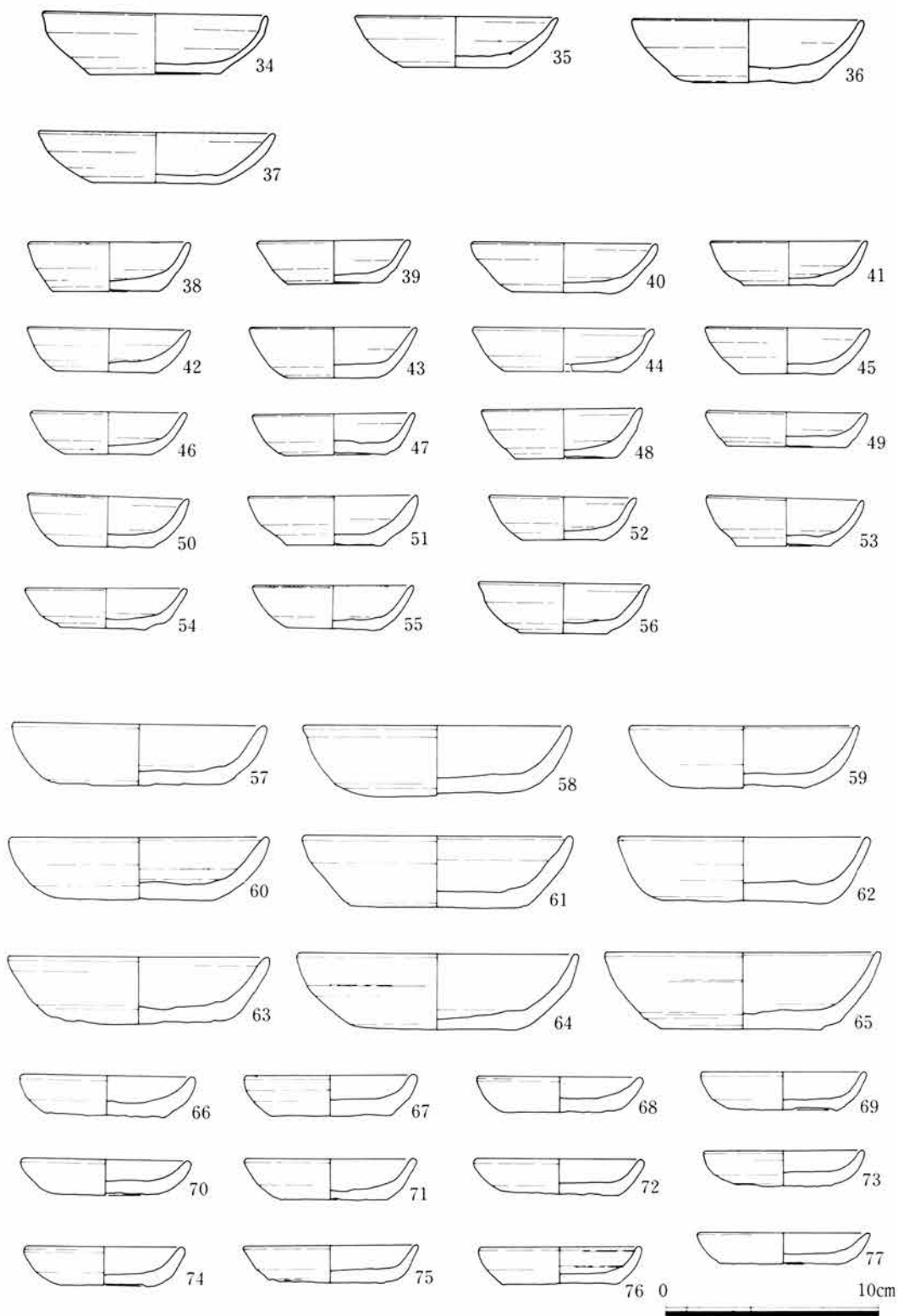


Fig. 80 かわらけ 2

らのある赤褐色のものも少量みられる。この群の特徴としては口径に比して器高が低く、底径も大きいことと、外底面に残る回転糸切り痕に静止糸切りに近い状態のものがみられることである。

器形は大型のものでは底部から直線的に外反するものがほとんどであり、胴部にやや強いナデが一周し底部近くにやや弱い曲折点をもつものもある。小型のものでも大型のものと同様の側面観をもつものが多いが、胴中位に強い曲折点の見られるもの(81)もある。内面整形はロクロ引上げの後に内面ナデ、その後に見込み横ナデが施されている。

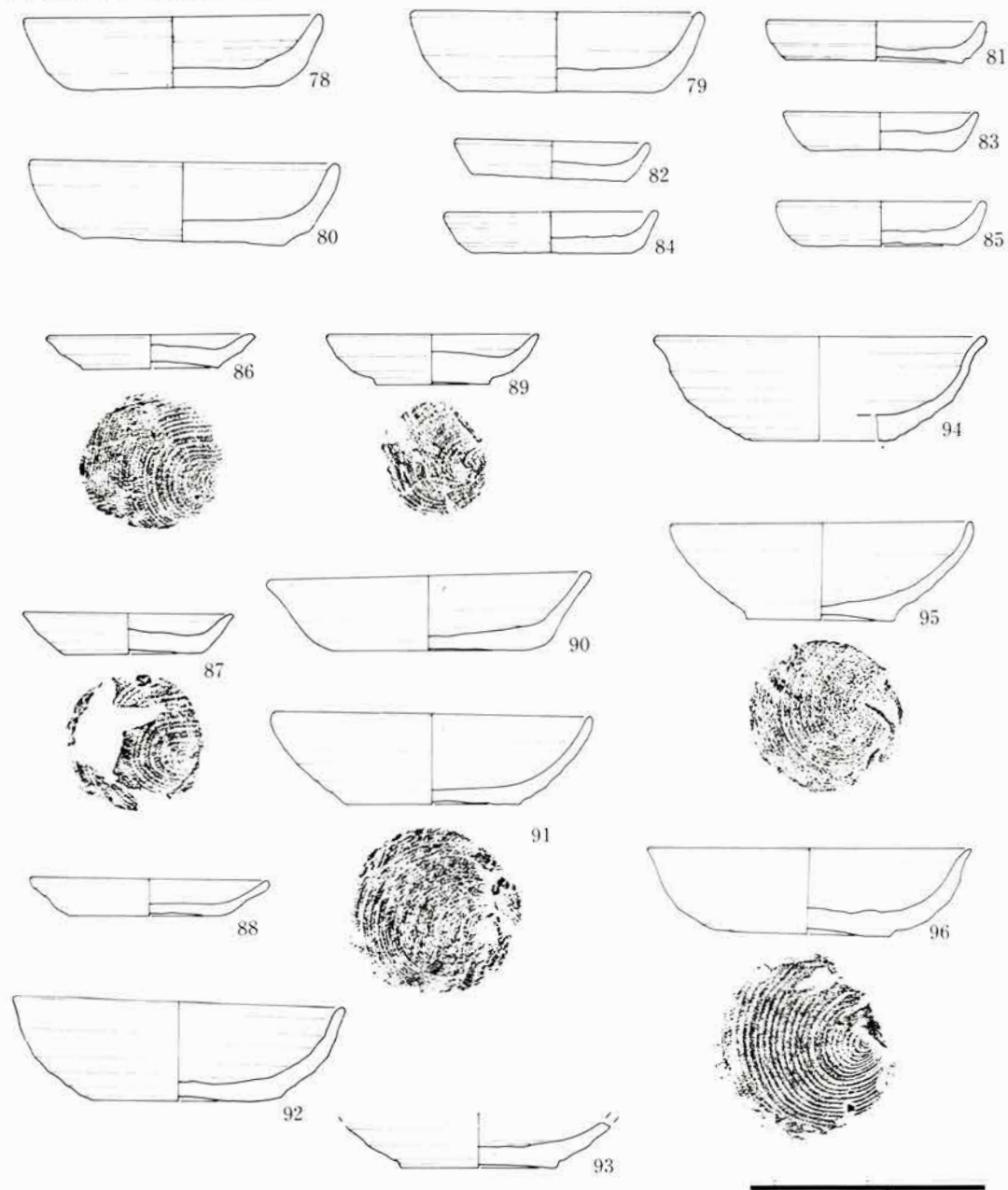


Fig. 81 かわらけ 3

第5群 (86~96)

口径13~14cm、9cmの大小2種に分かれる。胎土は砂が多く含まれているが、焼成良好・堅微である。色調は橙色の焼きむらのある赤褐色、あるいは黒褐色を呈するものが多い。大型のものでは側壁外面にロクロ水引き痕を明瞭に残すものも多く、又、器型に若干の変化がみられ口縁部直下にやや強い曲折点を持ち、口縁部が外反するものと、曲折点をもたず口縁部がやや内湾するものがある。口唇端部は丸味をおびるもの、引き上げられ細くなるものが見られる。見込みはロクロ水引きの後、指頭などによる横ナデは全く施されていない。外底面に残る糸切り痕は糸と糸の間隔が広く、ゆるい回転での糸切りあるいは静止糸切りであると考えられる。小型のものでは色調は赤褐色のものがほとんどで、それぞれに橙色の焼きむらが見られる。器形では大型のものとは異なり底部がやや高台状に肥厚し(1.3~1.5cm)、側壁はやや張った腰部から直線的に立ち上がるものがほとんどである。この中には口唇部がわずかに内湾するものも少量見られる。側壁内外面には轆轤水引き痕はほとんど残らないが見込みの横ナデは施されていない。又外底面の糸切り痕は大型のものと同様にゆるい回転であることを示している。

第6群 (100~124)

手づくね整形のかわらけをすべてこの群に含めた。現在、手づくねと呼称しているが、各個のかわらけを観察していると外面に粘土板はり合わせの痕が残っているものがある。このことなどから本群のかわらけは内型を使用した可能性も考えられる。しかしここではその可能性を指摘することとどめた。

この群のかわらけは一般にやや丸味のある底部から直線的あるいは口縁内湾気味に立上がる胴部上位の指頭整形と横ナデ整形間に稜がみられるもので、個々にみると稜線の強、弱、口縁端部形、胎土等に変化が認められる。これらの変化のあるものは時代的な変化として把握されているがほとんどは、現在の所、不明である。

胎土は精良で他の群のかわらけとは異なる。しかし100、103、114、116、119などは胎土粗く作りが粗雑である。口径は大型のもので13~15cm、小型のもので8~10cm、器高はそれぞれ3~4cm、1.5~2.2cmを測る。

第7群 (125~134)

内折れかわらけと呼称するものをこの群に含めた。器形は底部から立上がった胴部が立上がるとすぐに内側に折れ曲がるもので「コースター型土器」とも呼称され、瓦器、白かわらけ、瀬戸に同形状のものが知られている。口径、器高は大小さまざまで最小の128では口径3.4cm、器高0.7cm、最大の133では口径9cm、器高1.6cmを測る。整形では底部回転糸切り、手づくねの両者があり、口径などとの関係を見ると前者の方が口径がより小さく小型化しているようである。第1群から第6群までのかわらけの時代的変遷からみても、第6群(手づくね)は鎌倉では14世紀には残らないものであり、又、この群のかわらけは関西地方(京都)からの搬入品(当初は)と考えられており、当初は関西の影響を受けて作られていたものが、用途が変化するなどして、徐々に小型に変化した

がら器形のみが残ったものとも考えられる。

以上、各群のかわらけについて述べてきたが、分類した「群」は主に同時期存在したと考えられる遺溝覆土内出土のものをまとめたもので—第5群については概成の八幡宮境内出土かわらけの編年等にみられない、古い時代の要素をもつものを遺構に関係なく描出したものである—ほぼ同時期の使用であると思われる。各個の群内のかわらけはさらに細分も可能であり、今後の資料の増加・研究が必要であるが、ここでは、同一期に近い時期の使用セットであるとしておきたい。

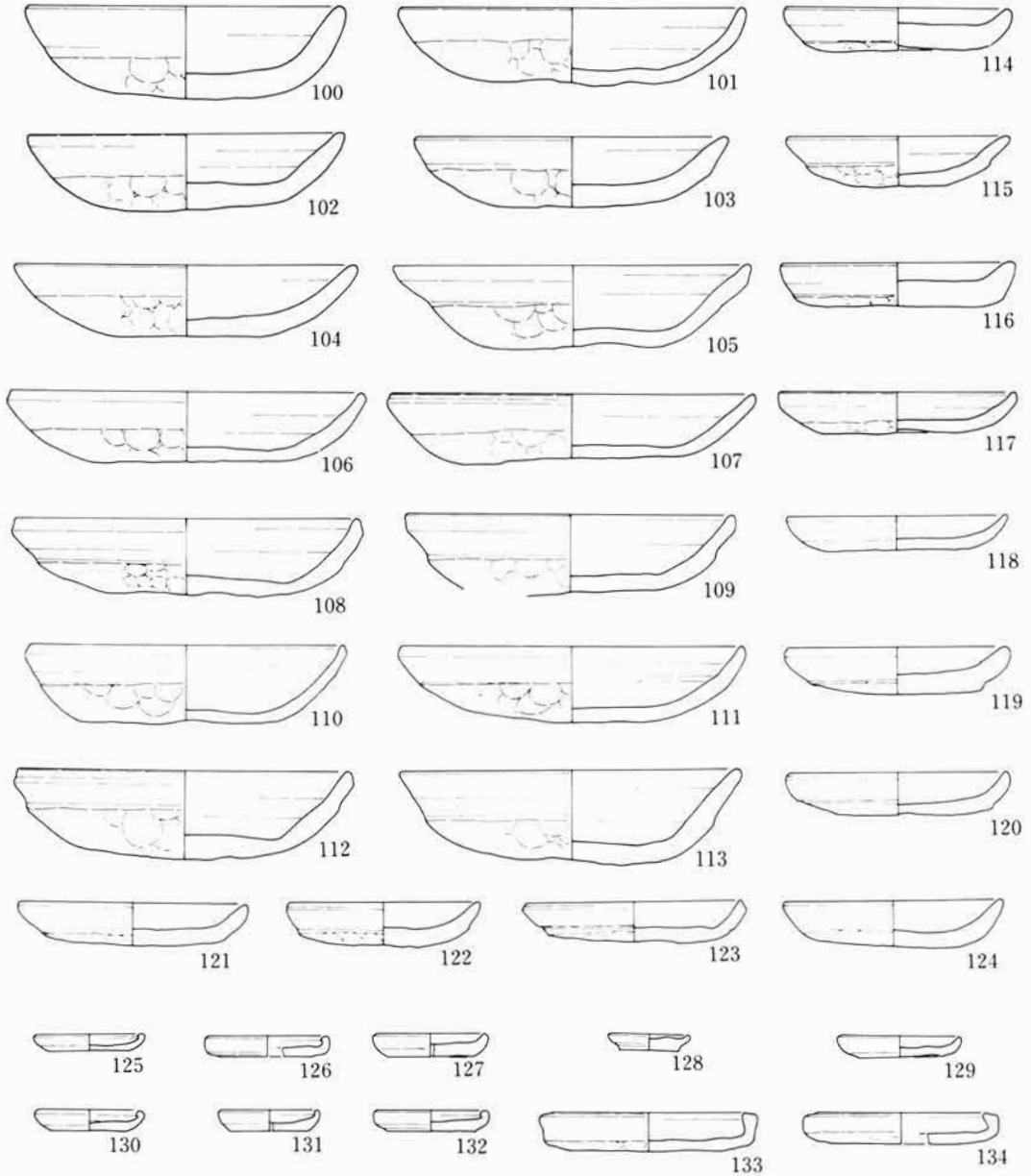


Fig. 82 かわらけ 4

各群のかわらけの年代であるが、明確な時代決定遺物が出土していないため、不確定な要素が多いが、すでに報告されている市内の遺跡内出土かわらけとの類似性を求めると第1群は玉縄城本丸跡(1は長勝寺遺跡16号土壇墓出土のものとの多くの共通点を持っている)、第2群は鶴岡八幡宮境内研修道場用地第2面、千葉地遺跡第2面、第3群は鶴岡八幡宮境内研修道場用地第2面、第4群第6群は同第3面かわらけ溜り出土のかわらけと類似している。第5群については報告例はほとんどないが、89は鶴岡八幡宮境内研修道場用地第4面7溝(同宮創建時の三方堀と考えられている)出土のものとの類似している。又未報告であるが向柄花遺跡中世最下層出土のかわらけとも類似している。

それぞれの年代は玉縄城本丸跡が城の存続年代から16世紀代、千葉地遺跡、鶴岡八幡宮境内、研修道場用地第2面が14世紀後半から15世紀前半、研修道場第3面は13世紀中頃、同4面7溝は12世紀末～13世紀初頭と考えられており、本遺跡の各群もそれに近い年代が与えられる。

(斎木 秀雄)

(15) 白かわらけ (Fig. 83)

白かわらけとは文字通り白色のかわらけであるが、赤褐色系のかわらけとはまったく異った胎土のものである。白かわらけを大別すると、手づくね成形のもの(1～21、27～32)とロクロの成形のもの(22～26)に分けられる。当遺跡では確実な層位的前後関係を見出せないが、他遺跡の例と考え合わせると手づくねの方が先行するようである。しかし両者は接統関係ではなく、一部併行する時期もあるように思われる。

手づくね成形のものは器形から三つに分けられる。口径11～12cm前後の大皿(1～12)と、8～9cm前後の小皿と、口縁が内方へ折り曲げられる「内折れ」形の皿である。

大皿は手づくねないし内型による成形で、外面下半から丸底の底面にかけて指頭による押しナデ痕を留め、口縁部から内面は水つけナデ整形される。内面のナデは底部では直径の一方のものとなっているが、その整形順として一般には最後に見込みナデを行なう。しかし、1、5、12などでは口縁に続く回しナデを後から行なっている。胎土は一般にきめ細かい粘土に微細砂を若干交え、ときに橙色石粒を混入するもので、割れ口は板層状を呈する。しかし中には砂をほとんど含まない粉質の胎土のもの(7、9)や、瓦器に近いもの(8、12)もある。他遺跡では微砂質でごく白いものも出土している。色調の点でも、肌色ないし桃白色を呈するもの(1～6)と、かなり白色に近いもの(7～12)とがあり、細かな差異が随所にある。鎌倉の白かわらけは平安京の白色土器を模して生産されたと思われるが、上述の差異は、京都の製品そのものが混在しているか、あるいは鎌倉に供給する工房がいくつかの系列に分れていたのか、といったような問題を考えさせる。今後の検討によっては興味深い事実を指摘できるようになる。

出土位置は、1がIV区2溝下層、2がII区67土壇、3が第II次調査4区2土壇、4がII区南2層、5が第II次調査3区22土壇、6、12が第6方形竪穴、7がV区2土壇覆土上層、8、10が第II次調査1区71土壇、9が第II次調査2層、11が第II次調査第一土丹層下である。

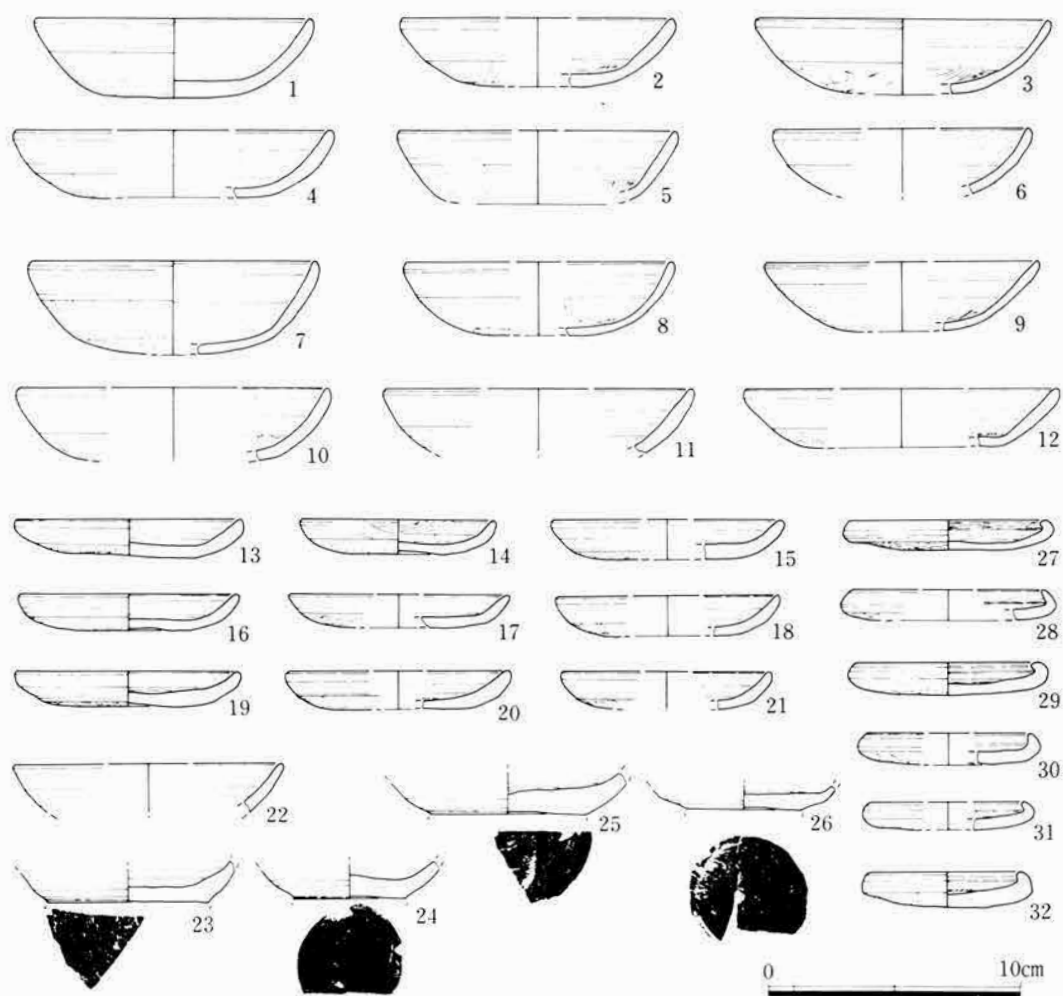


Fig. 83 白かわらけ

小皿の成形、整形技法は大皿とほぼ同じであるが、器高の低い浅い形をしている。16、19、20は見込みナデが側面まわしナデより先行している。胎土の差は大皿ほど顕著ではないが認められ、類例の増加を待って系列関係を検討してみたい。

出土位置は、13がIV区6溝、14がIII区64土、15がII・III区間257土壌、16が第I次調査第4テストピット第1版築面上、17が第II次調査3区北半2層、18がIV区123土壌、19が第II次調査2区土丹層中、20が第6方形竪穴、21が第II次調査2区67土壌となっている。

内折れ小皿も基本的な成形・整形技法は大皿・小皿と変わりがないものと思われるが、底部の厚さがまちまちなので内型は使用されなかったかもしれない。口縁は回しナデの段階で内側へ折り込んでいる。見込みのナデ整形も行なわれている。最大径にバラつきがあることは赤褐色系のかかわらけと同様であるが、大皿・小皿との数量比では白かわらけ内折れ小皿はかなり多いと言いうる。

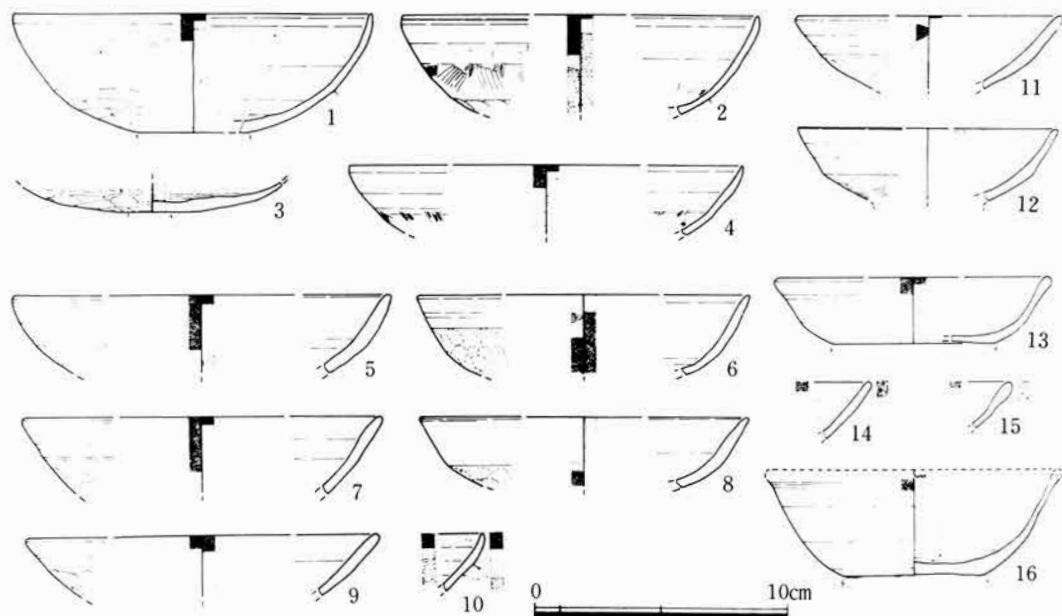


Fig. 84 瓦器質黒縁皿類

出土位置は、27が第II次調査2区89土壌、28が第I次調査第3テストピット第II版築面外方、29が第II次調査第1版築層中、30が第II次調査2区第1版築面南外方と同1区溝南肩出土品が接合、31が第II次調査3区貝殻層上、32が第II次調査4区5土壌である。

ロクロ成形の白かわらけはごく少量しか出土していない。口縁部片があまり見当たらないが、底径から考えて大皿(23、25)と小皿(22、24、26)の二者があったものと思われる。赤褐色系のかかわらけでは糸切底の内折れ小皿も存在するのだが、白かわらけではその例を知らない。大小ともに胎土は微粉質ないし微砂質で、手づくねのもののような差異はほとんどない。成形・整形技法は赤褐色系のかかわらけ(糸切り底のもの)とほとんど同様で、底面には糸切り底を残す。ただ糸切り後の板圧痕がほとんど認められず、見込みの一方向ナデも1~2回と弱い点が、赤褐色系とは異なる。当遺跡出土例は底部の厚みがかかなりあり、体部への移行もかなり立っているのも、14世紀後半までは降らないものと思われる。

出土位置は、22が第2次調査3区2層、23が地山上、24が第2次調査2区第1版築面上、25が同3区20土壌、26が3層となっている。

(16) 瓦器質黒縁皿類 (Fig.84)

標記の名称でまとめたものは、実は多岐にわたる内容を含んでいる。すなわち、①ロクロ成形の瓦器ではないかと疑われるもの(1~4)、②白かわらけと類縁性がある焼成法が異なるのではないかと疑われるもの(5~10)、③山陽方面で早島式と呼ばれていたもの(11、12)、④須恵器の形に似たロクロ成形で口縁のみ黒色のもの、である。これらは図や言葉で区別するのは困難で、実物を見慣れた時には簡単に区別がつくので始末が悪い。以下、上述の類例の内容を報告する。

A ロクロ成形の瓦器質碗（1～4）

胎土は精良で僅かに砂を含み、灰白色を呈する。焼成は良好で、しまりがあつて軽く硬い。成形はロクロによるもので、底面中央に糸切り痕を残し、内面と口縁部はそのままである。しかし外底は横位ないし斜位のヘラ削りによって丸底に近いまでに整形され、外面中位はロクロ目とヘラ削りの境を縦位のナデで滑らかにしている。全体の色調も独特で、口唇部は黒色を呈し、内外面ともその下位に白色部が帯状に入り、下半部は灰色を呈する。器形的には内湾気味の体部が口縁端でまた少し内に寄るといふ傾向があり、どこかの地域で生産開始された瓦器である可能性が強い。現在までのところ類例を知らない。1はI区南半2層とI区北半3層上部出土のものが接合した。2は2層出土、3はII・III区間63土壌覆土より出土、4も同63土壌出土である。

B 白かわらけ類似の黒縁皿（5～10）

胎土は微砂質で、白色小石粒と微細な輝粒子を少量交え、暗灰色を呈する。焼成はあまり硬くならず、ややしまりに欠ける。割れ口は板層状を呈する。成形は手づくねか内型によるものらしく、外面下半以下は指頭押しナデ痕を留める。外面上部から内面にかけては、ていねいな横ナデが施されるが、ナデの最後の抜き方を見ると左手で持って逆時計回りにまわしながらナデたものと思われる。器表の色調は黒、白、灰色が帯状に現われるが、その配列は一定しない。7、9のように口縁黒色で以下灰色のものもあれば、6、8のように口縁部白色を呈するものもある。これは色帯部が水平でなく、器面のどの部分に炭素吸着のチャンスがあつたかで変わるようである。すなわち焼成のさいの重ね方等に問題があるだろうが、もう少し類例を調べてみないことには断定的なことは言えない。また将来この群が細分される可能性もあろう。10は胎土良質で、色調は①の群に近いが、手づくね成形なのでこちらに入れておいた。5はVII区第1トレンチ出土、6は第8溝出土。7は拡張区の焼土・土丹版築層上出土品と拡張区3層下部出土品が接合した。8はIII区北半3層下部より、9はIV区土壌覆土上部より、10はIV区2溝より出土した。

C 早島式類似のもの（11、12）

胎土は細砂質で、白色・灰色の小石粒がわずかに混入する。全体に肌色ないし灰色を呈する。焼成はしまりに欠けるが軽く、硬さが感じられる。手づくねか内型による成形で、外面下半には指頭押しナデ痕が残る。外面上半から内面はよくナデ整形が施される。破片下端の状況から高台が付くものと思われる。11は黒色、灰色、白色、暗灰色部分が入り乱れたような色調で、焼成法に問題がありそうである。口唇端は丸い、拡張区168土壌出土。12は黒色部が認められず、口唇端が面取り状に板かヘラでナデ回しされている。I区北半第2層中の土丹・炭溜りより出土した。

④ ロクロ成形の須恵器的な黒縁皿（13～16）

胎土は微細質で、細砂を多く含むため、割れ口はザラつく。全体に灰白色を呈する。焼成はややしまりに欠けるが軽く、カサカサした感じに仕上がっている。ロクロ引き上げ成形で器壁は薄く、口唇やや肥厚する。底部は糸切りのままであるが、内底に再調整のナデを施すものもあり、整形法は更なる検討を要する。この群では口縁部のみが黒色を呈するのが特徴で、しかも黒色部は外側に

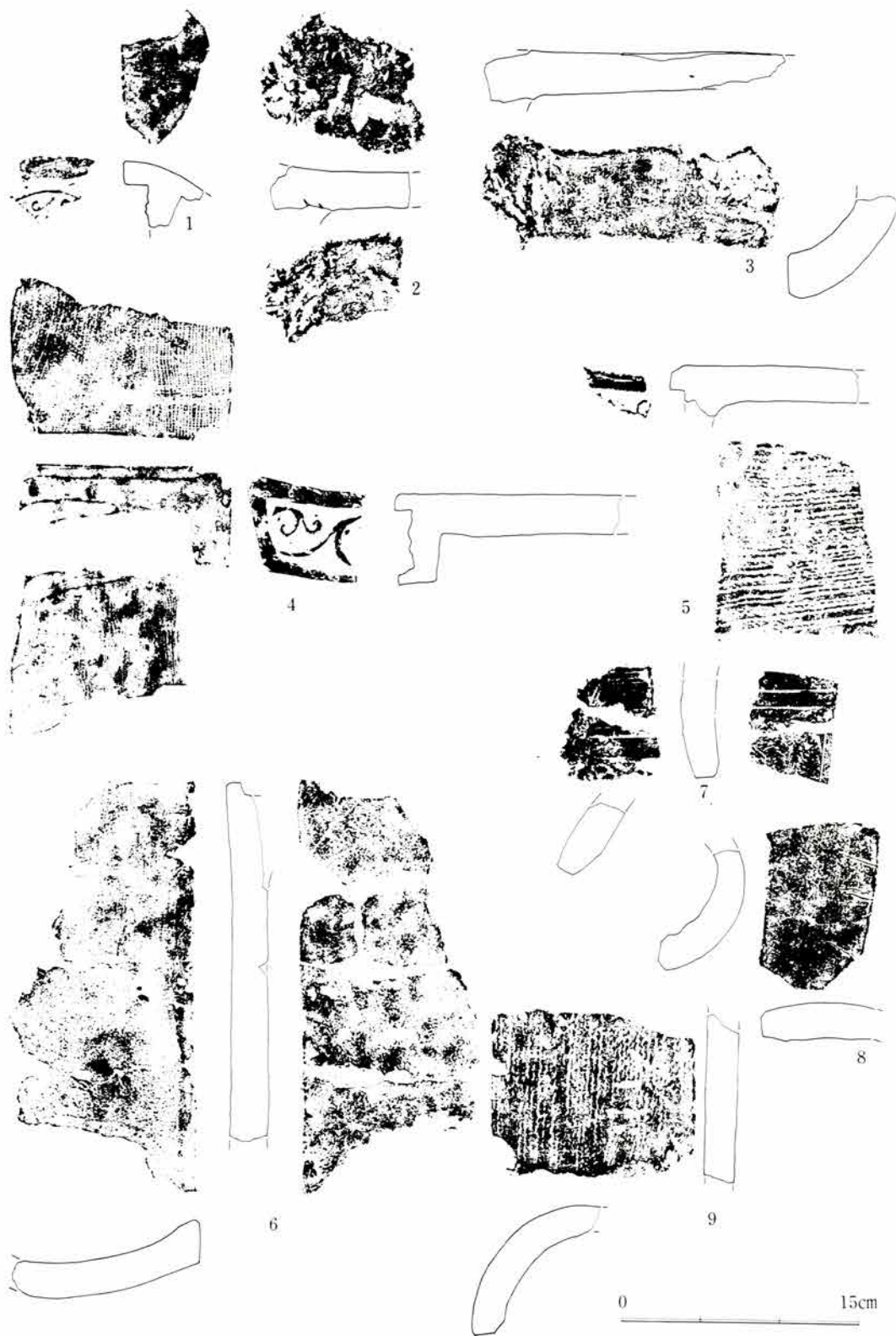


Fig. 85 瓦 1

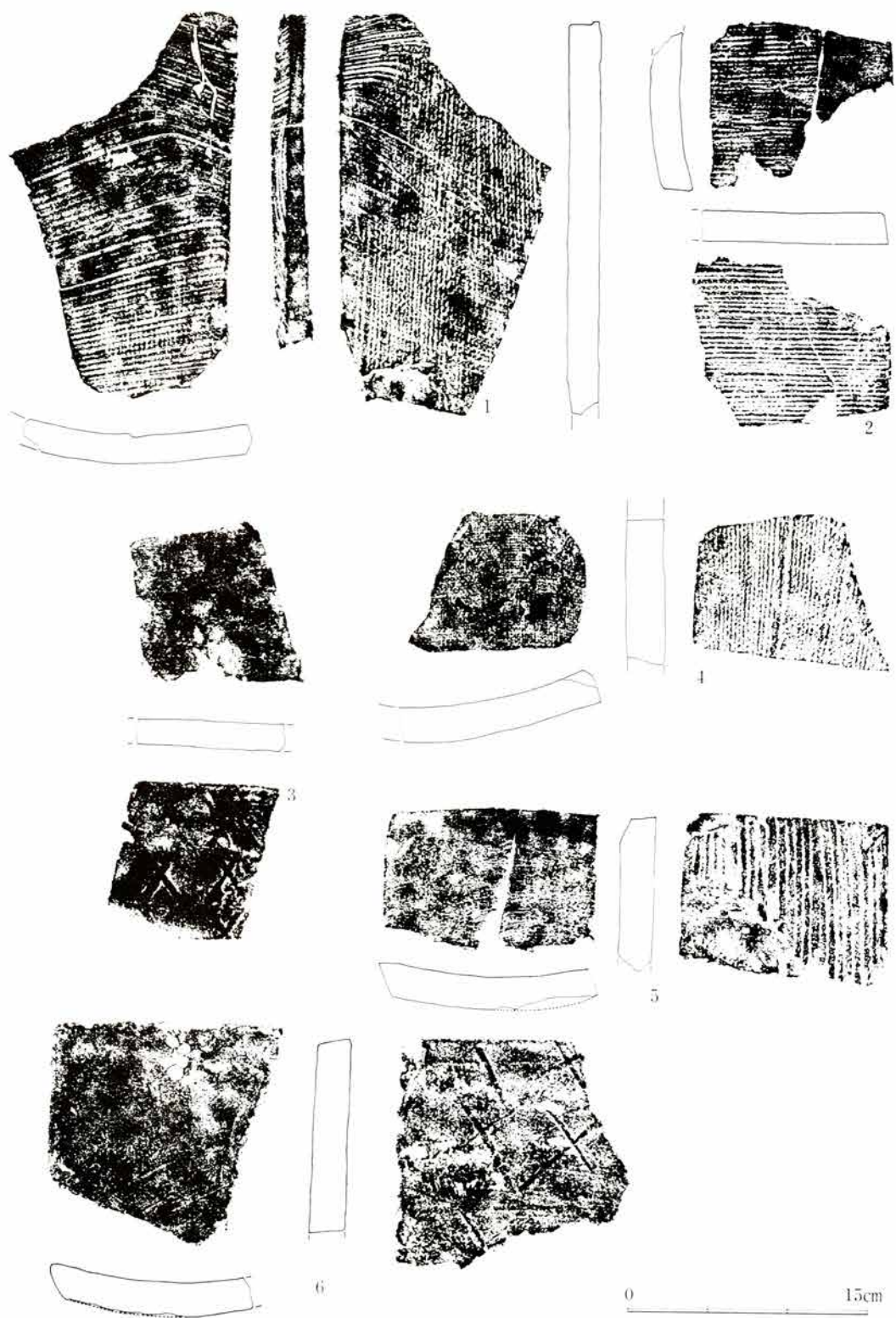


Fig. 86 瓦 2

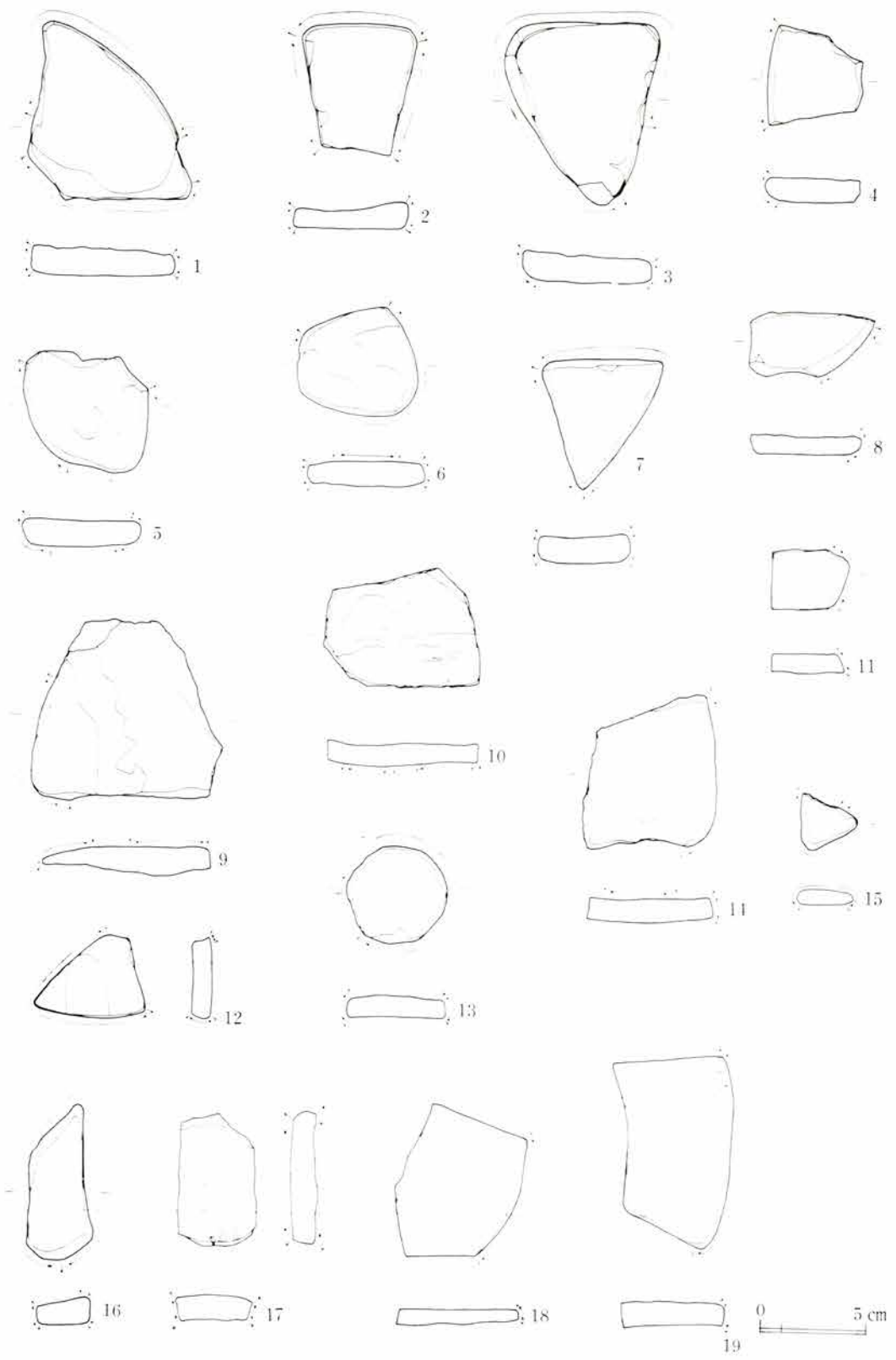
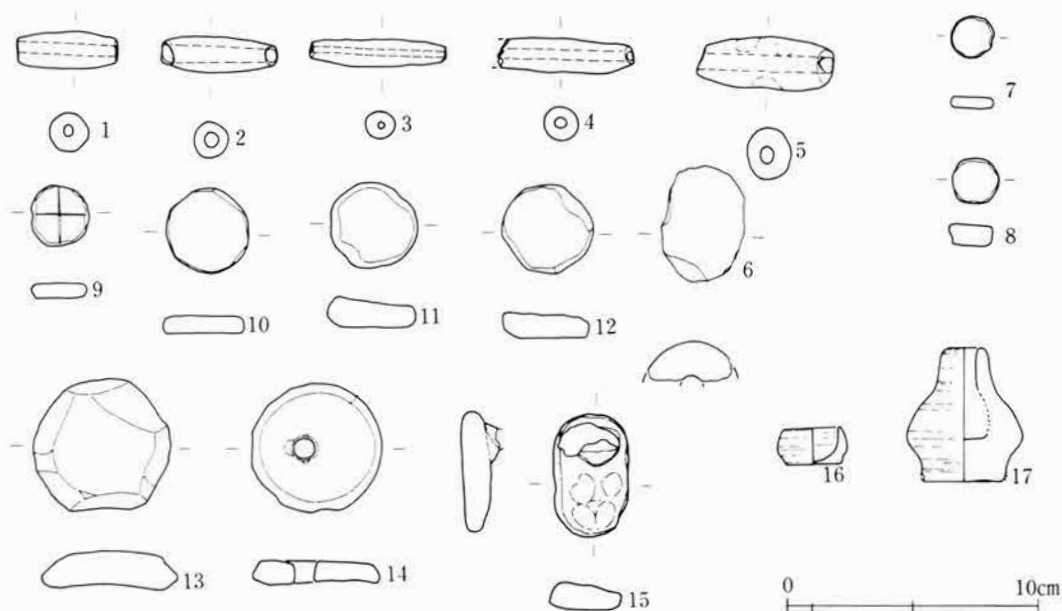


Fig. 87 研磨痕のある陶片



土製品 Fig. 88 土製品

広い。これは重ね焼きのさい、露出している部分に炭素吸着があったことを示している。先の③群と同様、播磨・備前あたりの山陽方面からの搬入品ではないかと思われるが、現在のところ確証がない。13は第2溝覆土上層より、14はV区37土壌より、15はI区北半2層より出土した。16は第II次調査2層の出土である。

(河野真知郎)

(17) 瓦

約70点の瓦が出土したが、攪乱層および遺構確認中の出土のものを除けばほとんどが第1井戸、第1溝、土丹敷遺構周辺の出土である。その他、包含層出土の瓦には目立った出土状況は認められなかった。出土したのは軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦であるが、極く小片の磚が第1溝（第II調査区）から出土している。

(18) 土製品

かわらけ質小型異形品の他に円板、土錘などが出土している。又、陶器片等の周囲を磨いた研磨痕のある陶片も出土している。これは転用品であり土製品とは言えないが、ここでは頁数の都合もありこの項に含めた。

土製品では土錘6点、かわらけ円板8点、不明1、小型仏華瓶等が2点出土した。円板は小型のもので径1.7cm、大型のもので5.5cmを測る。9は上面に「十」字型の沈線が刻まれ、14には孔がみられる。

かわらけ質異形品は光明寺裏遺跡で「人形」が出土しており、千葉地遺跡では本遺跡と同形状の仏華瓶なども出土している。

研磨痕のある陶片は19点出土している。ほとんどは常滑焼などの炻器質の陶片を利用しているが、舶載磁器片を利用したもの2点（18、19）、瓦片を利用したもの2点（16、17）が含まれている。舶載磁器片を利用したものは市内検出例をみても稀である。

(斎木秀雄)

IV 石製品

(1) 硯 (Fig. 89)

硯は16点出土した。形状は方形で材質は、粘板岩製、陶製、滑石製の3種類である。大きさによる分類をすると、横×縦が5×10cm以内(1~6)のものと、それより大きいもの(7~14)とに分けられる。

A. 粘板岩製

1の材質はきめ細かい小豆色がかかった暗褐色紫色粘板岩の両面硯で、表面は滑らかである。大きさは横幅4.7cm(上幅)、4.2cm(下幅)、縦幅8.4cm、厚さ1.2cmである。図左側の面は海側の側縁が欠損し、陸部中央には線刻状の傷がある。陸部端には刃物で表面を削った跡が見られる。側縁はやや外傾し、又陸と海の境目辺りの側縁には両側に刃物で切断しようとした跡が伺える。図右側の面は陸部右側側縁が欠損し、四隅の側縁上面には野書きの線と思われる跡が見られる。又硯面と側縁の境目には左側から陸の端にかけて溝状に刃物の跡が見られる。

12の材質は黒色粘板岩で石の目は荒い。大きさは横幅5cm、縦幅8cm、厚さ2cm。硯面は四枚の花弁状に象られ、四隅の側縁上面には刃先による線刻が施されている。陸部は平滑で1mmの比高差をもってゆるやかに海側へ傾斜する。側面は僅かに膨らみを持ち、又、側面及び裏面には整形時の刃物による削り跡が見られる。

2の材質は黒褐色粘板岩で表面は滑らかである。大きさは横幅4.8cm、縦幅不明、厚さ1cm。海、陸共に面は平滑であり、側縁は外傾している。裏面は剝離が激しい。

3は拡張区第166土壌より出土。材質は灰色粘板岩で部分的に淡い灰緑色が混ざる。大きさは横幅4cm、縦幅不明、厚さ0.6cm。陸部は凸状にゆるやかに盛り上がりを示し、端近くには表面を削った跡が見られる。裏面は部分的に剝離する。

4の材質はきめの細かい暗褐色粘板岩である。陸側左隅部分の破片で、側縁と裏面は剝離が激しい。陸の表面は滑らかで、摩滅により海側へ向かって下がる。側縁はやや外傾する。陸と側縁の境目には溝状に刃物の跡が見られる。

5は第64土壌より出土。材質はきめの細かい黒褐色粘板岩である。陸側左隅部分の破片で、表面は残りが良いが裏面は全て剝離する。陸の表面は滑らかで、割れ口付近に磨滅によるへこみが見られる。陸端の側縁には外側の角を削った跡が見られる。

6は第122土壌より出土。材質はきめの細かい灰色粘板岩である。大きさは横幅6cm、その他不明。硯面側破損のため裏面を再利用したもので凸状の側縁はなく、中央部がゆるやかなへこみを持ちこの部分を硯面にしたと思われる。このへこみの陸は滑らかで、中央部に墨の残りが見られる。表面右側には弧を描くように刃先による線刻状の傷がある。元の硯面側は全て剝離している。

7の材質はきめの荒い黒色粘板岩で、大きさは縦幅12.2cm、厚さ2cm。硯面はざらつきがあり陸部には刃先によるひっかけ傷が見られる。左側縁上面には約5.5cmにわたって野書きの線刻が走り、

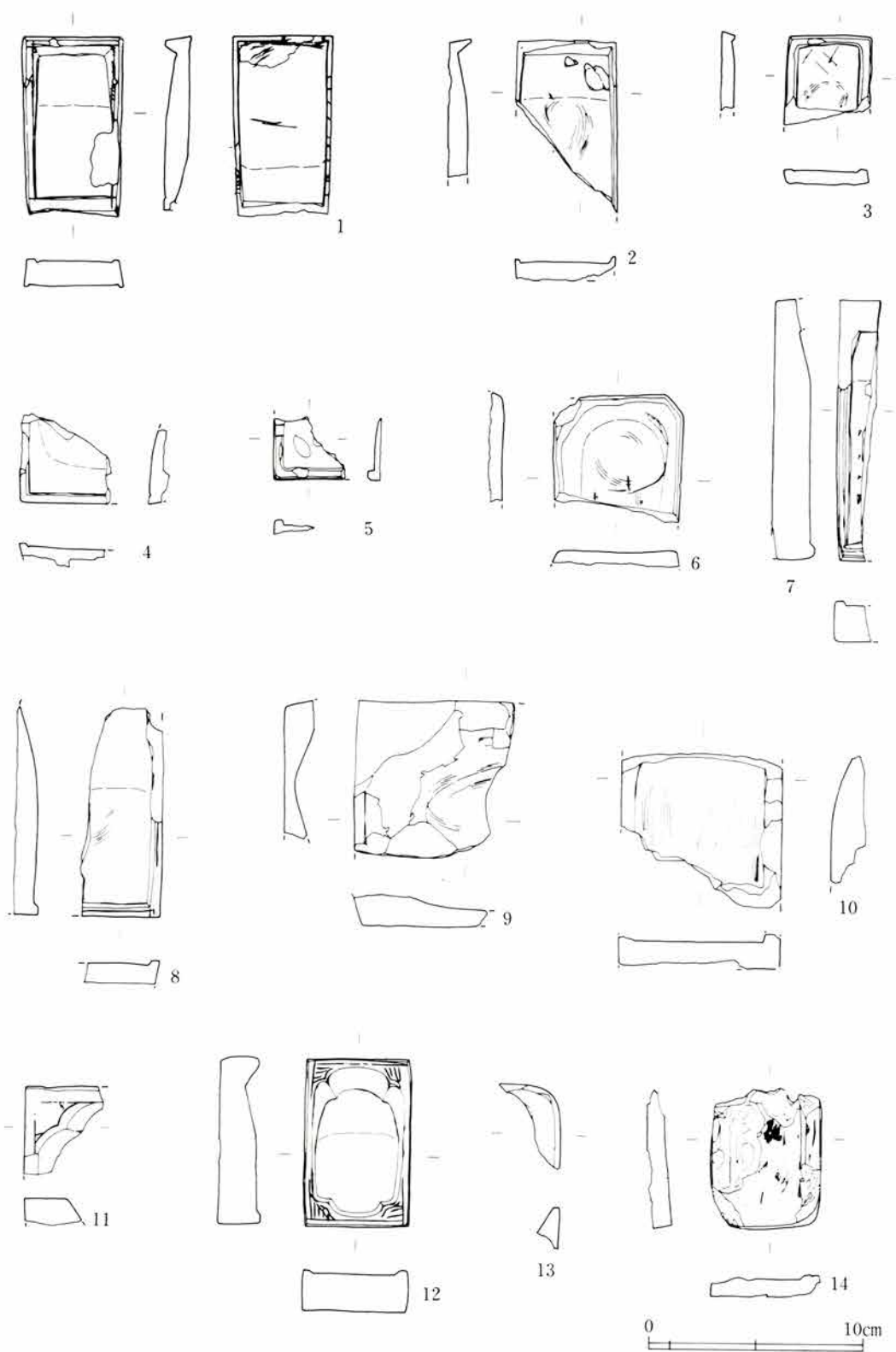


Fig. 89 硯

硯面と側縁の境目には溝状に刃物の跡が見られる。側面は僅かに膨らみを持つ。

8の材質はきめの細かい黒色粘板岩で、右隅付近の側縁部に凝灰質石粒が固まる。硯面は滑らかである。側縁はやや外傾し上面には野書きの線刻を有する。裏面は全て剝離する。

9の材質は黒灰色粘板岩で一部赤褐色を有する。裏面と側面の残りは良いが表面の剝離が激しい。陸の中央部は大きくへこみ、落ち際から最低部までの比高差は1cmである。へこみ斜面上に傷跡が無数に残ることから、このへこみは磨滅によるものと思われる。裏面には楕円状に傷跡があり墨も残ることから、表面欠損のため裏面を再利用したと思われる。

10の材質はきめの細かい黒紅色粘板岩である。大きさは横幅7.5cm、厚さ1.6cm。裏面、側縁共に剝離が激しく硯面のみ良好に残る。陸部には線刻状の傷が多く見られるが平滑である。海部には側縁寄りに墨の残りが見られる。

11の材質はきめの荒い黒色粘板岩で海側左隅部分の破片と思われる。側縁上面には刃物による線刻の飾りが施されているが野書きの可能性もある。形状は○と同様の四枚の花弁状になるとと思われる。

B. 陶製

13は第2溝より出土。胎土、表面共に暗灰色を呈し砂や石をほとんど含まない。渥美焼風の陶硯である。海側左隅付近の側縁部である。他に二ノ鳥居西遺跡で常滑焼片の転用硯が出土している。

C. 滑石製

14は第70土壌より出土。剝離面が藤色がかかった滑石製の硯である。表裏共に剝離が激しく表面には陸と側縁が部分的に残り、裏面も部分的に整形面が残る。陸は海側へゆるやかな傾斜で下っており、中央部には墨の残る部分が見られる。陸の終了部には凸状の側縁は見られず、陸の左右を平行に側縁が走っていたと思われる。刃先による直線的な傷が多く、陸面や側縁、側面にわたって見られる。

他に2点ある。その1つの材質は暗灰色滑石できめは荒いが全体的に滑らかである。本来石鍋であった口縁から胴部にかけての破片の転用品であり、断面はほぼ同じ厚さを持って湾曲している。大きさは横幅約5cm、縦幅7.4cm、厚さ1.5cm。硯面全体に刃物で削った跡や無数の線刻状の細かい傷が見られ、図上部から左にかけてはL字状に凸状の側縁が囲んでいる。側面は割れ口の凹凸を雑ではあるが刃物で削って平らにした跡が伺え、右側面中央部には孔の跡がある。裏面には刃物による線刻状の傷や細かい無数のすり傷が見られる。

他の1つも同様にきめは荒いが滑らかな暗灰色滑石製石鍋の口縁から胴部にかけての破片の転用品である。断面は口縁側がやや薄くわずかに厚さを増しながら湾曲する。大きさは横幅8.5cm、縦幅11.2cm、厚さ1.1cm（口縁付近）、1.7cm（胴部）。硯面には全体に刃物で削った跡が、又中央部には円を描くように無数の細かい傷が見られる。縦に亀裂が走りその口縁寄りには直径6mmの孔があく。側面は前者に比べ丁寧に刃物で平らに加工しており、角も表裏両側とも削られている。裏面には刃物による削り跡や線刻状の傷跡が多く見られる。

(2) 砥石 (Fig.90-91)

出土総数は77点である。材質により6種類に分けられ、形態は方板状か方柱状で、断面が扁平方形になるものが多い。

凝灰岩質 (Fig.90-1~5、Fig.91-3)

石のきめは細かく、形態はほとんどが方柱状を呈し、Fig.91以外は断面も方形になる。砥面は磨滅によるゆるやかなへこみが見られる。

泥岩質 (Fig.90-6~9、Fig.91-4)

きめは粗く、砥面には凝灰岩と同様に、磨滅によるゆるやかなへこみが見られる。形態はFig.91-4を除き、断面が扁平の方板状である。Fig.90-6左面の上半には格子状の線刻があり、砥面には艶があるが、下半の面は荒く艶がない。図右面の下半には鉄錆が付着している。Fig.91-4は八角柱状の形態を示し、砥面は平滑であるが、砥面の剝離が激しい。

粘板岩質 (Fig.90-10~12)

非常に堅い石で、砥面は平滑であり、仕上げ砥に使用されたと思われる。形態は全て方板状で扁平の断面をもつ。

砂岩質 (Fig.90-14、Fig.91-1、2)

きめは粗くざらついた感触を受ける。砥面は磨滅が甚だしくFig.90-14、Fig.91-2は大きなへこみを持ち、荒砥に使用されたと思われる。形態も不整形である。

玄武岩質 (Fig.90-13)

きめは粗いが砥面は滑らかである。砥面は磨滅によるゆるやかなへこみが見られる。

安山岩質 (Fig.91-5)

きめは粗いが砥面は滑らかである。角錐形を呈し、四面が砥面に使用されている。磨滅も激しく荒砥に使用されたと思われる。

刃物を研ぐ工程で荒砥、中砥、仕上げ砥と大きく分けられるが、石の砥面が平らであったり凹面を示したりするのは、このような用途別に応じて使い分けられていたからではないかと思われる。

(3) 軽石 (Fig.92-1~3)

出土総数は29点で、材質は流紋岩質又は安山岩質である。1、2は片面中央部に刃物で溝状に加工した跡が見られ、その反対側にも一条の窪みを呈した加工跡が見られる。研磨跡は見られない。3は隅丸三角形を呈し、三角形上部に5~7mm大の孔が貫通している。表裏両面と図下部の底面に研磨跡が伺えるものが多い。

(4) 碁石 (Fig.92-4~6)

出土総数は3点で、いずれも自然石を加工して利用したものである。

4は緑灰色安山岩質で、直径約16mm、厚さ6mmで、表面は滑らかである。黒石として利用されたのであろうか。

5は黒色安山岩質で、直径約18mm、厚さ6mmで、表面は滑らか且つ艶があり、図示した面には線

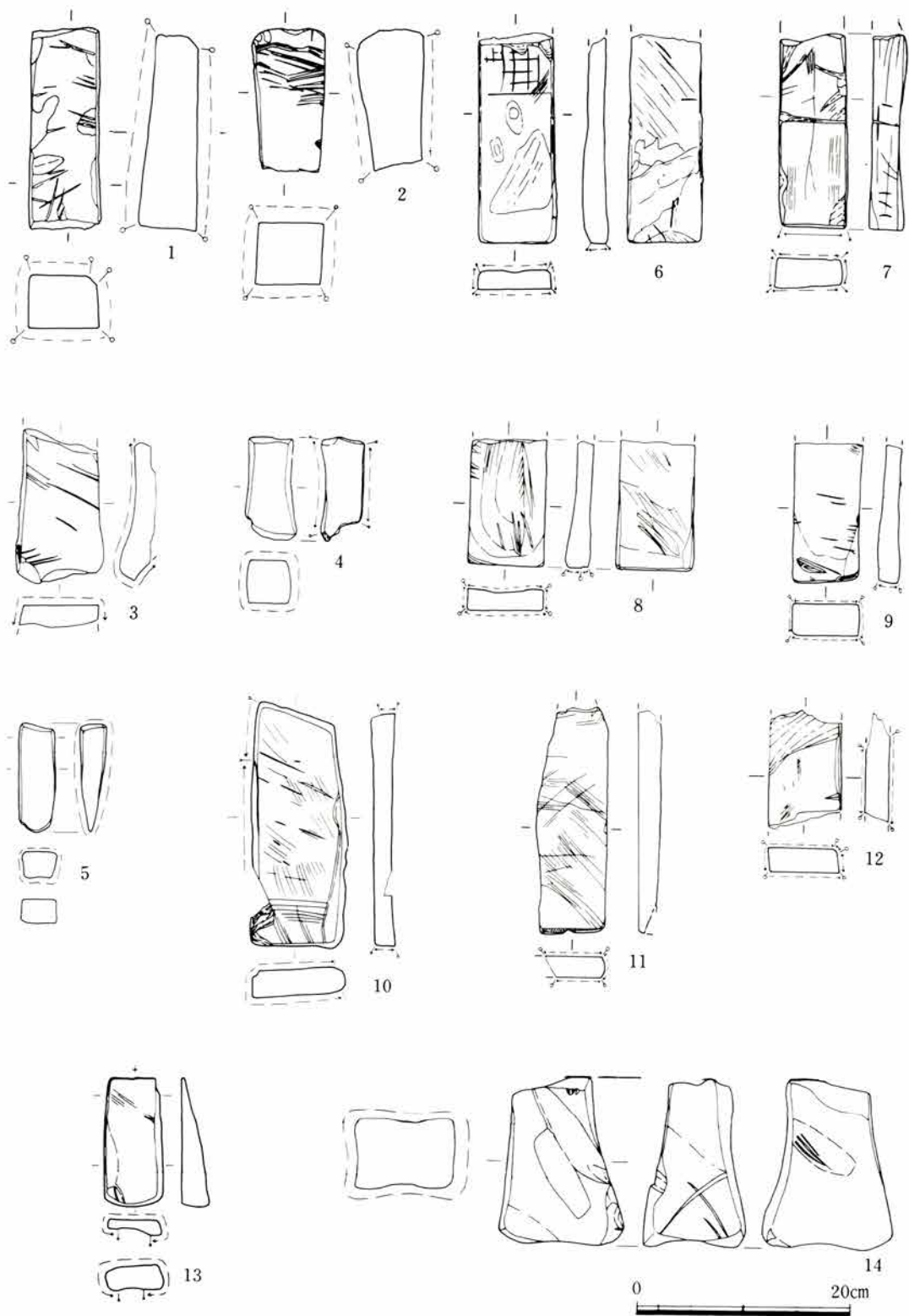


Fig. 90 砸石 1

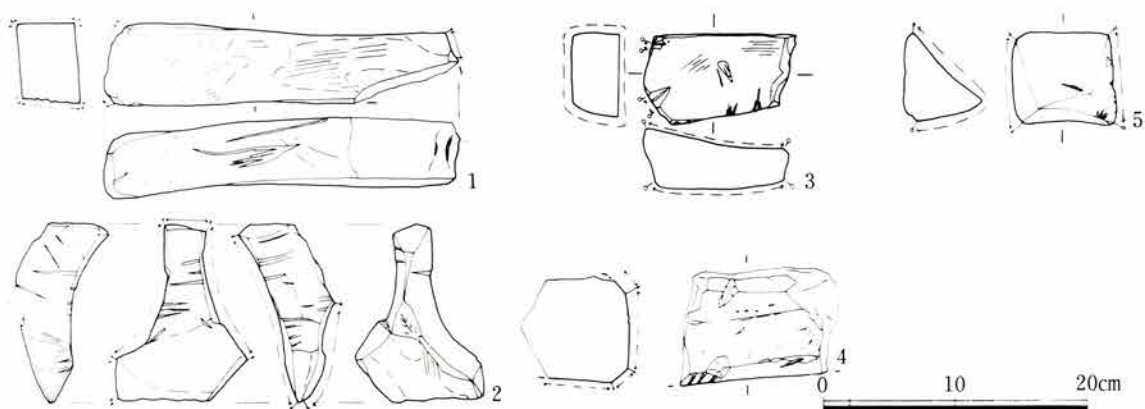


Fig. 91 砥石 2

刻状の傷を持つ。

6は白色凝灰岩質で、4、5の材質に比べ柔らかい。長径20mm、短径17mmの楕円形を呈し、厚さは6mmである。表裏共に刃物による無数の線刻状の傷を有する。

(5) 燧石

燧石に使用されたとと思われる石片の出土総数は20点である。いずれも敲打痕を残し、大型のもので長さ約100mm、幅約30mmから小型の小片のものまで各種出土している。石質とその出土数は、白色不透明の石英3点、白色半透明の石英5点、赤褐色のメノウ質4点、青黒色で灰白色の斑入りチャート片8点である。燧金と使用したりしたのであろう。(小 沢 隆 幸)

(6) 滑石製品

A 石鍋 (Fig.93)

滑石製石鍋の鎌倉や東国地域での特徴的な出土状況はすでに長勝寺遺跡の報文で述べられたところである。^(註1)

本遺跡からは11点が出土し、個体数としても10点程であるが、図示できたのは8点に留まり、全体を復元できたものはない。

器形は大きく、やや丸味をもつ口縁の下1.5cm程の所にぐるりと巡る鏝を持つものと鏝のないものとに分けられる。鏝のある諸例は鏝のつく角度や形態と胴部の立ち上がりに夫々差異が認められる。

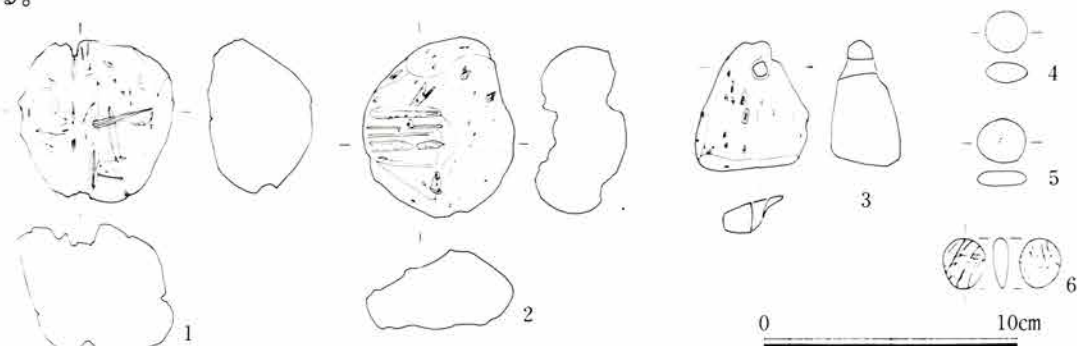


Fig. 92 軽石 他

Fig. 93-1は鏝がなく内湾する。口径24cm。外面には4mm巾のノミ状工具による横位の削りが、口端部では使用による擦痕が見られる。口端から1cm程下に直径5mmの一方向揉み針穿孔の円孔をもつ。内外面の円孔付近に放射状の凹部があり、何らかの吊り下げ用具が装着されたのではないかと考えられる。ただ、小片のため円孔の数は知られない。破片横面の各所には切断痕やノミ状工具の加工痕が、内面には無数の擦痕が見られる。鍋としての廃棄後は砥石への再加工がなされたものと思われる。III次3層中より出土。

2は最も小型の石鍋であり、口径約19.6cmを測る。鏝は丸味のある凸形をなし、体部全体は内湾する。鏝と口縁部の接する部分では、鏝の削り出しが強く少し窪む。鏝以下の胴部外面に煤が付着するが、そのほとんどは削り落とされ、またノミ状工具の削りが不鮮明になる程の横位の擦痕が顕著である。内外面の削りは縦位になされるが、内面は6mm巾であるのに対して、外面では4mm巾である。おそらくは煤落しのための作り直し品ではなからうか。III次92号土壌覆土内より出土。

3は口径約24cmを測る。口縁下を巡る鏝は一辺の長い不整形形を呈する。鏝より上方はやや内湾気味ではあるが、全体としては少し外へ開く器型である。器壁の厚さが目につく。外面の削りは口縁部で広く5mm巾、胴部で3~4mm巾である。内外面共に円周方向の擦痕が著しく、良く使い込まれている。煤の付着はない。III次287号土壌覆土内より出土する。

4は口径約22cmを測り、外面鏝上方は直立し、全体として口が開き、鏝は一辺の長い不整形形をなす。外面の削りが明瞭に認められる。口端から鏝にかけては3~4mm巾の、以下の胴部ではやや広い5mm巾の削りが縦位に施される。鏝部の削りは横位になされ、鏝の上下面の削りは細かく非常に丁寧である。煤の付着は認められない。III次70号土壌覆土上層より出土。

5は最も大きく、口径約26.5cmを測る。鏝は器壁に比して幅広く、下方に垂れ下がるような不整形形を呈する。口縁部はほぼ直立し、胴部は大きく開き底径に比して口径の大きな形となる。内外面共に円周方向、もしくは斜め上方への擦痕がひどいが、外面では縦位に3~4mm幅の、内面口縁部に円周方向の削りが認められる。煤が鏝の最も広った所より下方に付着する。III次第1トレンチ301、302、303号土壌覆土の夫々より小片が出土。

6はかなりの歪みを持つ底径およそ19.5cm前後である。煤は厚く外面全体に及び、長い間、火にかけて使用されたものと思われる。底部中央付近に直径4mmと3mmの2孔を持ち、その周囲と胴部

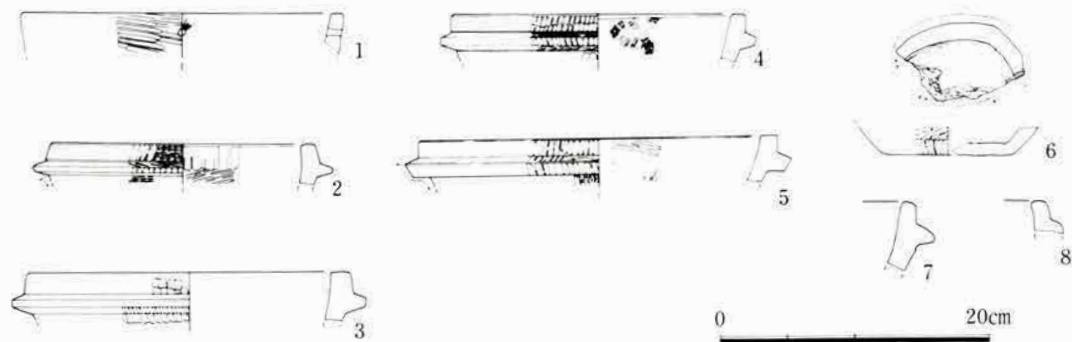


Fig. 93 滑石鍋

の割れ口にタールが厚く付着する。破損後に、残存する2孔、おそらくはもう1口か2口の孔で割れた底部を継ぎ合わせ、タールで接合し、再使用したのであろう。内湾するタイプと思われる。出土層位不詳。

7、8は細片であり、復元はできなかったが、Fig.93-3と同様のものと思われる。内外面共に円周方向の擦痕が著しい。共にII次土丹版築地業面上より出土する。

以上のものは、そのほとんどが地山に掘り込まれた土壌の覆土内、もしくは地山を覆う第3層中より出土し、廃棄の時期はそれほど隔たるものではなかったと考えられる。Fig.93-3、4は鎌倉では光明寺裏遺跡より多くが報じられ、13世紀後半から14世紀初め頃とされる。^(註2)1、2、7、8はそれらより先行し、5はやや遅れるものと思われる。^(註3)

註1. 大橋几士「石鍋」『長勝寺遺跡』1978年

註2. 河野眞知郎「石鍋」『光明寺裏遺跡』1980年

註3. 木戸雅寿「草戸千軒町遺跡出土の石鍋」『草土千軒』No112PP. 1~4、1982年

森田 勉「滑石製容器——特に石鍋を中心として」『仏教芸術』No148PP. 135~148 1983年

B 滑石加工品 (Fig.94-1~10, P L.)

石鍋の項で記したように石鍋を再加工したものや、その他の加工品が出土している。

Fig.94-1は石鍋の鏝部破片を擦り切ったものであり、2、3は底部付近と鏝部破片の一部を砥面としたものである。4~9は滑石片に切断と削りを加えている。5、6、7は砥石に利用されているが、他のものを含めて、全てが細長い板状を呈している。切断には鋸が相対する方向より用いられる。1はII次土丹版築地業面北2層中より、4、6が同じく土丹版築地業面より出土し、3はIII次38号土壌覆土中層より、他はII次2層中より出土する。

Fig.94-10は黒色粒を多く含む滑石片で、石鍋などには見られない石質であるが、やや反る側面観はやはり、石鍋の再加工品であるかもしれない。角に丸味のある三角板状を呈し、頂点と底辺以外は磨かれてツルツルしている。II次土丹版築地業面より出土する。

C 滑石製スタンプ (Fig.94-11~13)

滑石の平滑面に加工を加えて文様を描き出すものである。鎌倉では長勝寺遺跡より23点もの数が報じられ、形状、文様等より分類されているものの有効な分類基準はない。^(註1)

本遺跡からは3点が出土している。全てが石鍋の一部を転用したもので、形状、文様や文様の描き方は様々である。

Fig.94-11は石鍋胴部を利用したものである。断面及び側面観は方形を呈するが、文様面は不整形である。文様はシダ様の草木がのびやかに陽刻される。文様は遺存状態で完結するものと思われる。文様面の形状を生かきった描き方がされている。滑石片は場当り的に利用され、それに合わせた文様もしくは描き方がされたようである。これには2孔が穿たれる。1つはほぼ水平に穿孔さ

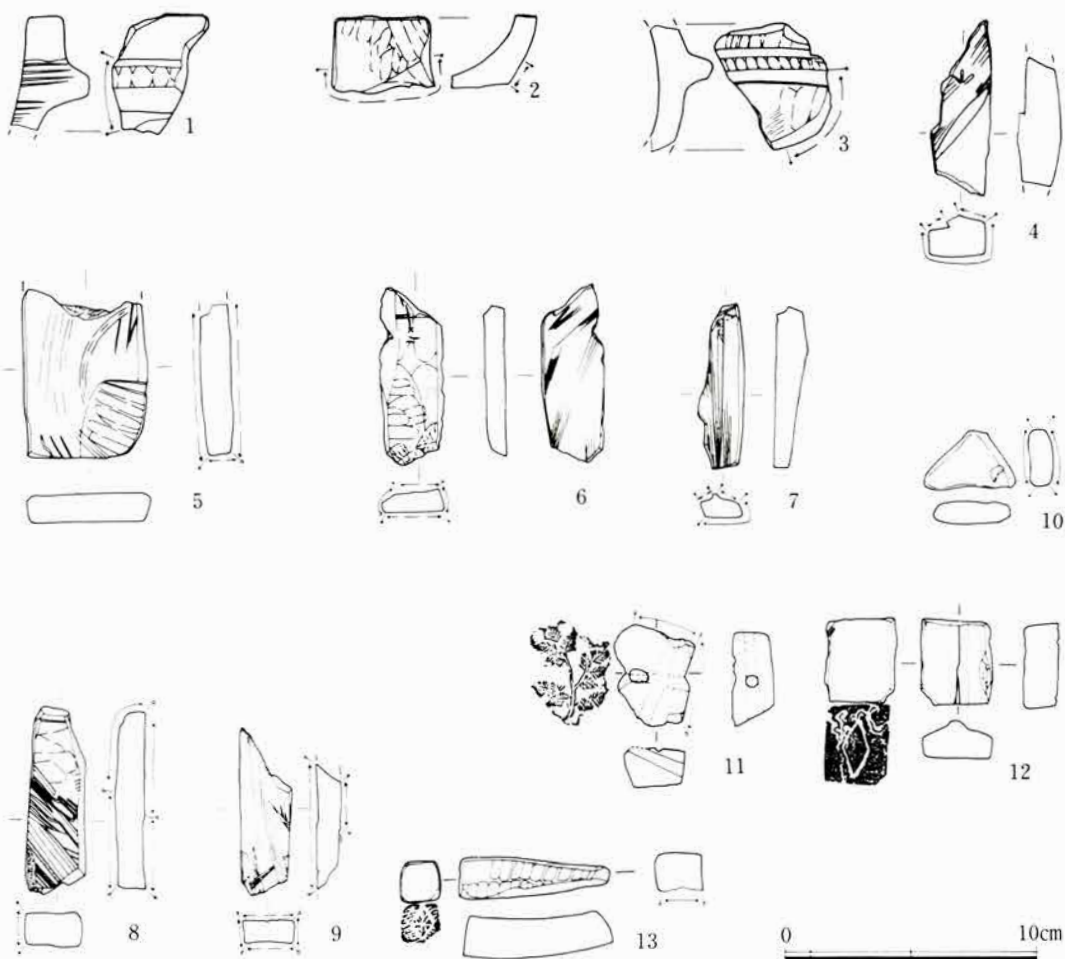


Fig. 94 滑石製品

れ、他方は側面から文様面へ斜めに抜け、両円孔は滑石材の中央部にて、きっちりと連通する。III次3層下部より出土する。

2は石鍋口縁付近を転用し、鏝部を背面のつまみとする。方形板状を呈する。長方形の石鍋内面の文様面には陰刻によって菱形とその一部に接して唐草ないし飛雲文が描かれる。文様配置からして未成品であると考えられ、何らかの理由により製作途中で廃棄されたのであろう。III次2層中より出土。

3は石鍋口端部を利用した方柱状のもので、その一方の端面が印面とされる。文様は陰刻により、菱形と菱形内を埋める放射状線刻とその外にも2方行斜線が細く線刻される。III次138号土層覆土内より出土。

滑石製スタンプの用途については不明な点が多い。文様は具象文と幾何学文の双方が併用され、石材利用にあっても場当り的であることも見られる。ところが、スタンプに穿孔やつまみ部の設置などと、加工頻度の高さと石材選択もなされる。こうした相反する様相を呈する滑石製スタンプはある一つの用途に限られたものではないと考えてもよさそうである。また他項でも記される戯画の

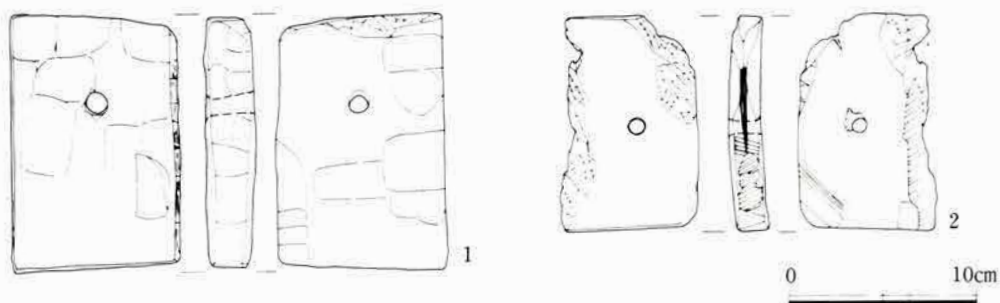


Fig. 95 温石

ある滑石鍋片も考慮に入れる必要もあろうか。

註1 手塚直樹「滑石スタンプ」〔長勝寺遺跡〕1978年

D 温石 (Fig. 95)

本遺跡からは方形板状をなす滑石製品は3点が出土し、内2点に円孔が穿れており、所謂温石であると考えられる。共に発掘廃土山より採集されたものである。

Fig. 95-1は大型で分厚く、かなり厚い。一部欠損するものの、ほぼ全形を留める。四周は幅広いノミ痕を残し、表裏面にも若干の整形痕を見せる。円孔は左右中心線上を一方（おそらく上方）によった所に斜めに穿たれる。

2は滑石鍋の胴部を転用したものである。一辺と一隅を欠くが、Fig. 95-1と平面形は相似形をなす。円孔は中央に穿たれ、図上右下に花卉状の陰刻がなされている。穿孔は1と共に2方向からの揉み錐の後に、周壁を整形する。

他は一辺に丸味をもつ方板上半分を欠損する。表裏面と長側縁に縦位の擦痕を有し、砥石として使用されているが、後に記す滑石製の砥石や他の再加工品と形状が異なり、温石から砥石へ転用されたものではないか (Fig. 95-5)。

(宗 莖 秀 明)

V. 金属製品

出土地については遺構に伴うもののみを記した。

(1) 鉄製品

A くさび形鉄製品 (Fig.96-1~4)

下部の先端が扁平のくさび状の製品の出土総数は4点である。

1は全長115mm、胴部断面12×40mmで、図上部は側面で見ると三角形を呈し一方に三角形の底角が突き出すようにしてひっかかりがある。

2は全長80mm、胴部断面8×7mmで、頭部は一部欠損しているが平らであったと思われる。

3は全長62mm、胴部断面12×8mmで、頭部は平らになっている。

4は現在長58mm、胴部断面12×8mmで、頭部欠損のため頭部形態は不明である。第166土壌より出土。

B 釘 (Fig.96-5~46)

出土総数は1,470点にのぼるが、残存状態の良好なものは限られた。断面は全て方形の角釘である。

頭部の形態は折り曲げ式のものほとんどで、その種類は今までの鎌倉出土の釘の例^(註1)を見ても大まかに3種類に分類できる。I類 そのまま折り曲げたもの(5~16)、II類 平たく敲き伸ばし、その部分を直角に折り曲げたもの(17~30)、III類 平たく敲き伸ばし若干広げ、それが頭部を覆うように折り曲げたもの(31~36)。又この類例に漏れるものも少数ではあるが存在する。37~39は折頭式ではなく、そのまま上から敲かれたと思われる。40~42はII類やIII類の前半の行程である平たく敲きのばされたものではあるが、折れ曲がってはならず上方へ開いた状態になっている。43、44はI類ともそのまま上から敲かれたものとも考えられる。釘は二次的作用によって変形することがあることからこのようなバラエティが見られるものと思われる。

次に長さの測定可能なものについて長さの分類をすると、2寸(66mm)以下のものは183本(5~13、16~23、25、31~34、37~39、41~46)と最も多く、次いで2寸~3寸(66~99mm)のものは57本(14、15、24、26~29、30、35、36、40)、3寸(99mm)以上のものは6本(いずれも腐食ひどし)であった。又2寸以下のものでも45、46のように長さが25mm以下と極端に短い小釘も見られた。

C 鉄鍋 (Fig.97-1~5)

出土総数は6点で内5点を図示した。口縁部4点(1~3)、胴部から底部にかけての部分2点(4、5)である。

1は口径486mm、厚さ4.5mm(口唇部9.5mm)で、口唇部から次第に薄くなりやや湾曲しながら胴部へ伸びていく。

2は口径300mm、厚さ2mmで口唇部は2mmほど器内部へ折れ曲がり、胴部は口唇部から下へ20mm

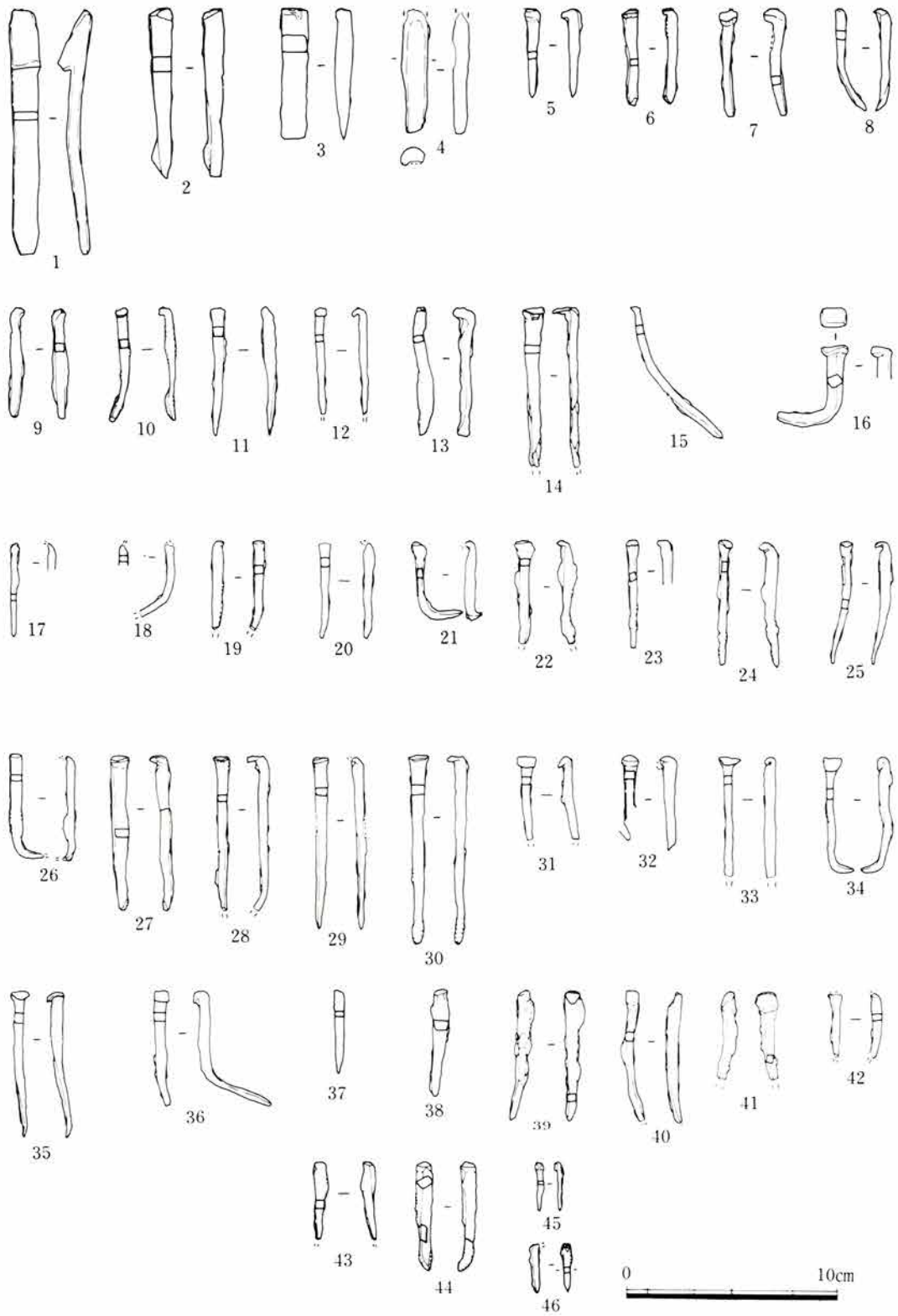


Fig. 96 鉄製品

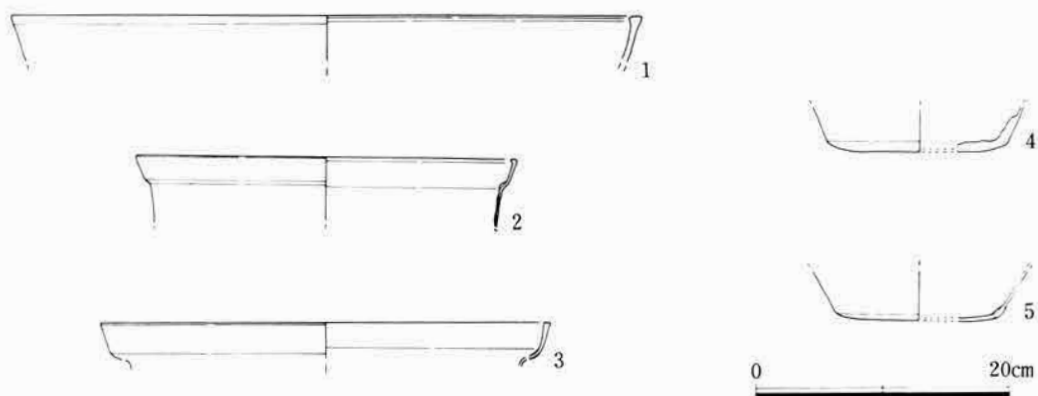


Fig. 97 鉄鍋

のところで1回内側へ屈折し、すぐ真下へ屈折する。

3は口径354mm、厚さ3mm（口唇部6mm）で1と同様に口唇部から次第に薄くなっていく。口唇部から25mmのところ、内側へ屈曲する。おそらく2と同様にもう1回下へ屈折する器形になるのではないかとされる。第59土壌より出土。

4は推定底径125mm、厚さ2mmである。胴部から底部にかかる屈折具合から推定して底部はやや湾曲した形になるのではないかとされる。第166土壌より出土。

5は推定底径140mm、厚さ2～2.5mmで胴部から底部にかかる屈折具合から4と同様湾曲のある底部になるとされる。

D 刀子 (Fig.98-1～16)

出土総数は17点である。全て欠損品であった。棟から刃までの幅により2種類に分けられる。幅20mm以上のもの（1～7）とそれより小型のもの（8～16）である。

1、2は鋒部で1は幅24mm、厚さ（棟）4.5mm、2は幅24mm、厚さ（棟）3mmである。共に第20土壌より出土。

3は刀身から茎へかけての欠損品で両区を有すると思われ、茎には木片が付着する。現在長149mm、幅20mm、厚さ（茎棟）2～3mm、（刀身棟）3.5mmで第47土壌より出土。

4、5も刀身から茎へかけての欠損品で片区があると思われる。4は現在長110mm、幅24mm、厚さ（茎棟）2mm、（刀身棟）2mmである。5は現在長131mm、幅20mm、厚さ（中央部の棟）3mmで第38土壌より出土。

6、7は刀身部分で、6は現在長120mm、幅23mm、厚さ（茎側）5mm、（鋒側）4mm、第20土壌より出土し、7は現在長85mm、幅21mm、厚さ（棟）4.5mm、第287土壌より出土。

8、9は刀身から茎へかけての欠損品で片区がある。8は現在長75mm、幅（茎）10mm、厚さ（茎棟）2mm、（刀身棟）3mm、第166土壌より出土。9は現在長66mm、幅（茎）5.5mm、（刀身）11mm、厚さ（茎棟）1.5mm、（刀身棟）2.5mmである。

10～14は先端を欠くが鋒より刀身にかけての欠損品である。10は現在長94mm、幅14mm、厚さ（棟）3mm、11は現在長64mm、幅14mm、厚さ（棟）3mm、12は幅14mm、厚さ（棟）3.5mm、第290土壌より

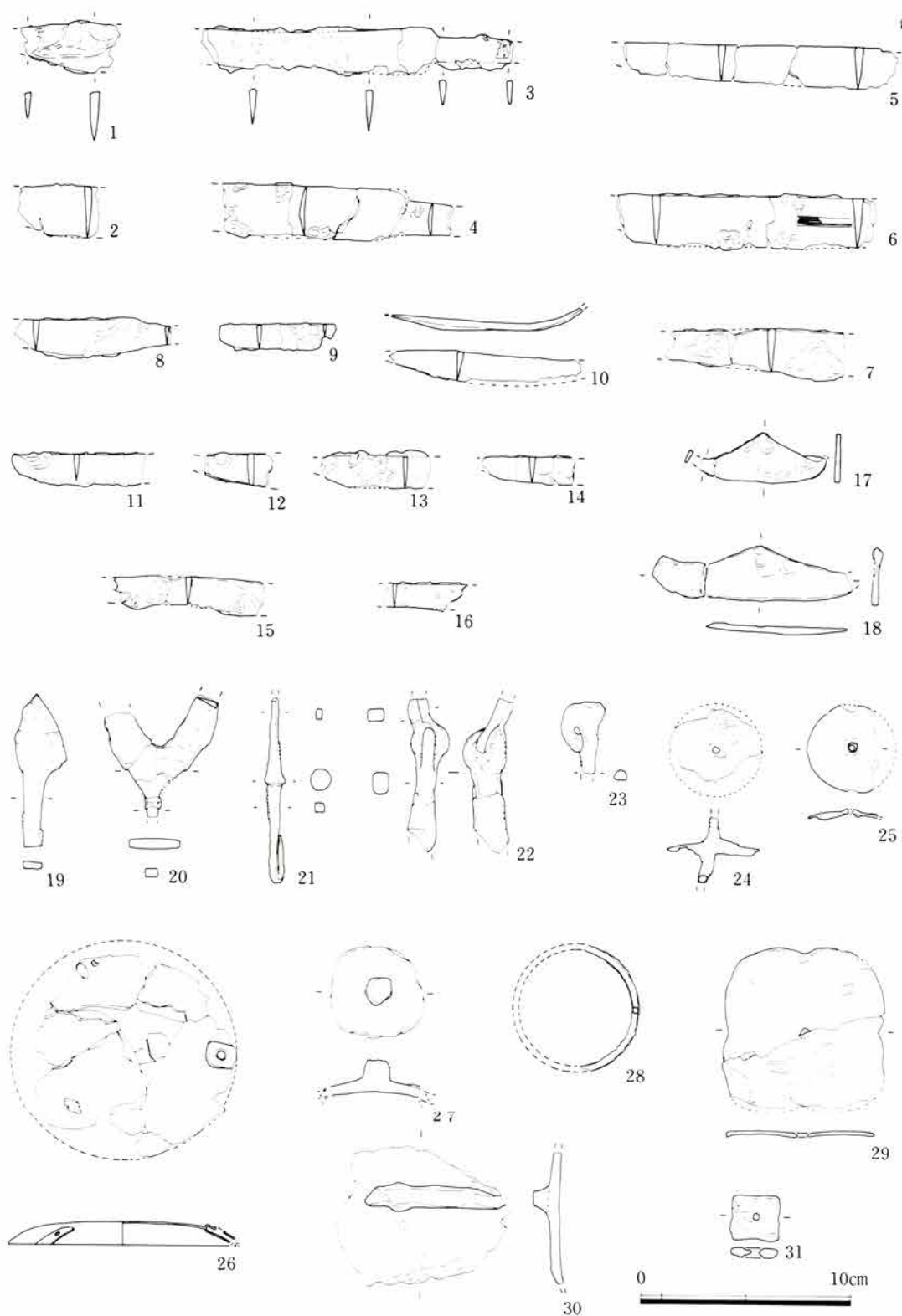


Fig. 98 鉄製品・刀子他

出土、13は現在長53mm、幅15mm、厚さ（棟）2mm、14は現在長45mm、幅12mm、厚さ（棟）3mmである。

15は刀身部分で現在長72mm、幅14mm、厚さ（棟）3mm、第140土壌より出土。

16は刀身部分であるが茎の可能性も考えられる。幅12mm、厚さ（棟）2mm、第290土壌より出土。

刀身の反り具合については錆化が著しく、又欠損品のための判別不能であった。

E 燧金 (Fig.98-17、18)

出土総数は2点である。長勝寺遺跡においても出土したが、2点共それより簡素な作りで両端が欠損している。把り部中央上部に三角形に張り出した部分に孔があると思われるが、錆化が著しく確認には至らなかった。17は現在長60mm、中央部幅23mm、厚さ2mmで第1土壌より出土。18は現在長94mm、中央部幅25mm、厚さ2～2.5mmである。

F やりかんな (Fig.98-19)

先端に鋭さを持つしゃもじ状を呈す製品で第20土壌より出土。上半は錆化が著しく断面の様子は不明であるが、やや湾曲していると思われる。下半に伸びる柄の部分は4×9mmの扁平の方形を呈す。

G 鑄矢 (Fig.98-20)

Yの字状の形を呈する製品で鑄矢の矢先と思われる。両先端と柄の部分が欠損する。先端付近の断面は刀子の断面のように片側が鋭くなっており、二股の付け根付近は4mmの厚さを持つ。柄は4×5mmの方形を呈す。長勝寺遺跡でも似たような製品が出土した。

H 棒状鉄製品 (Fig.98-21)

中央に瘤部を有し断面は直径10mmの円形である。瘤部の両端には方形の角柱が伸び上部は3×5mm、下部では5×5mmで現在長149mmである。下部は19mmの長さで折れ曲がり、先端は先細りして尖鋭になっている。

I 掛け金 (Fig.98-22)

頂部に環を有する二つの金具が環で連結する製品で第299土壌より出土。環の下に伸びる胴部の断面は上部が5×7mm、下部が7×10mmと方形を示す。環の連結部には隙間が見えない程錆化が進んでいるが、上部金具胴部に合わせ目の線が見られる事から、一本の角棒状を折り曲げて有環金具にしたと思われる。諏訪東遺跡からも出土し、鶴岡八幡宮境内遺跡から良好な資料が出土している。

J 頂部環状金具 (Fig.98-23)

4×6mmの楕円状の断面を持つ鉄棒を「？」状に頭部を折り曲げている。掛け金の可能性も考えられるが判断しかねる。第66土壌より出土。

K 紡錘車 (Fig.98-24、25)

出土総数は2点である。

24は円形の断面を呈す芯棒が残るが、傘部の周囲はほとんど欠損している。傘部の推定直径44mm、厚さ1mmで、芯棒断面の直径は3mmである。

25は傘部のみ残り一部欠損する。推定直径42mm、厚さ1～1.5mmで中央部に芯棒を通す2mm大の孔を有する。第96土壌より出土。

L 鉄蓋 (Fig.98-26、27)

鉄蓋と思われる製品の総出土数は2点である。

26は破損が酷く周囲はほとんど欠損している。推定直径は108mm、厚さ1mmで皿状に湾曲を示す。上面には三方に把手の掛け付け部が取り付けられており、一ヶ所にその形状を良く残し、他の二ヶ所には欠損してその跡だけが残る。三方の掛け付け部に紐等を通して蓋の把手としたと思われる。第287土壌より出土。

27は傘部、把手ともにしっかりしているが傘部の周囲が欠損する。傘部の厚さ4～6mmで把手部は径12mm、高さ10mmの円柱状をなす。第68土壌より出土。

M その他不明鉄製品 (Fig.98-28～31)

28は断面が直径2～3mmの円形を呈す鉄環で、推定外形60mmになる。用途については不明で第87土壌より出土。

29は縦×横80×80mm、厚さ2～3mmの鉄板で、四枚の花弁状の形を呈す。図左下部には表裏に木片が付着し、中央部には孔を有した可能性がある。用途不明で、第84土壌より出土。

30は厚さ5mmのやや湾曲した鉄板に鋳状に張り出した7×7mmの細長い方形棒が付く。方形棒には溶接跡が伺える。鍋か釜のようなものと思われるが、類例が少なく他に光明寺裏遺跡でも同様のものが出土している。第166土壌より出土。

31は22×22mm、厚さ5mmの方形の鉄板で、中央に2mm大の孔を有する。用途不明で、第82土壌より出土。

(2)銅製品

銅を加工して作られた製品が15点、溶解して銅塊となったもの2点が出土した。

A 鋌 (Fig.99-1～3)

頭部に傘を有する鋳型の製品が3点出土した。

1は全長19mm、軸長16mm、軸銅は5×4mmの方形を呈し、先端付近には1.5mm大の孔を有する。頭部は直径16mmの円形を呈し、厚さは2～2.5mmである。第2溝より出土。

2は現在長13mm、軸長11mm、軸銅は18×25mmの方形を呈し、頭部に金を付けている。釘の可能性も考えられる。第2溝より出土。

3は全長20mm、軸長16mm、軸銅は2×2mmで、頭部は直径約6mmの半球形である。

B その他不明銅製品 (Fig.98-4～11)

4は全長97mm、断面は3×15mmの扁平の銅板で、「フ」の字状に曲がる。下部は次第にすぼまり鋭くなっていく。第1土壌より出土。

5は全長50mm、断面は1～2×0.5mmで、元隅丸長方形の銅環であったろうと思われる。第101土壌より出土。

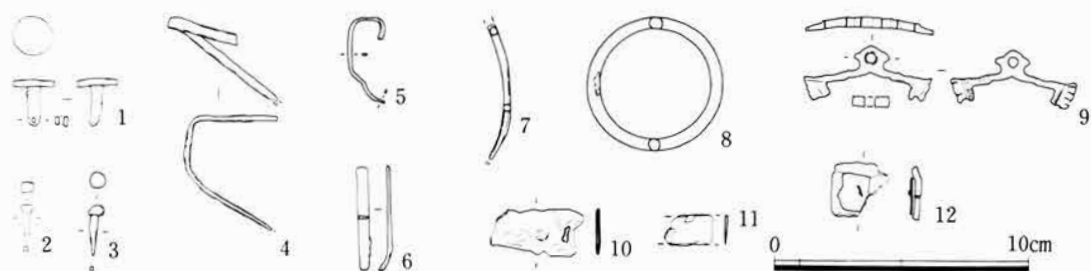


Fig. 99 銅製品

6は全長42mm、断面は1×5mmの扁平の銅板で下部は弧を描くように折れ曲がる。

7は弧を描くように湾曲しており、図上部では直径3mmの円形の断面を持つが、半ばから3×3mmの方形となり下部で先細りとなる。

8は断面が直径5mmの円形で外径53mmの铸造された銅環である。図左側には銅片が付着しており、何かと接触していて付着したのであろうか。

9は全長50mm、高さ22mm、厚さ2～4mmの左右対称のやじろべえ状を呈し、中央部は3枚の花弁があしらわれた部分が出ており、そこに直径4mm大の孔を有す。何らかの装飾品と思われる。

10は両端が欠損し、厚さ1mmの銅板片である。刀子の茎の可能性も考えられるが想像の域を出ない。

11は現在長18mm、厚さ1mmの銅板片で断面から刀子の可能性も考えられる。第290土壌より出土。

12は現在長2×22mm、厚さ2mmの銅板片と現在長13×14mm、厚さ1mmの銅板片とが合わさり目釘でとめられている。性格については不明である。

(小 沢 隆 幸)

(3) 銅銭

第I～第III次調査の各面、各遺構覆土から36種567枚の銅銭が出土した。各調査区ごとにみると第I次調査(試堀第1～第5トレンチ)6枚、第II次調査92枚、第III次調査471枚である。以下各調査区内での出土状況を見る。

第I次調査

第3テストピット3枚、第4テストピット3枚の計6枚が出土している。判読できるものは4枚、2枚は不明である。開元通宝(唐)1枚、元祐通宝(北宋)2枚、太平通宝(北宋)1枚。

第II次調査

92枚の銭が出土している。土壌墓に伴うもの8枚(うち6枚は寛永通宝)、土壌覆土検出のもの55枚、残りはすべて遺構確認中の出土である。

出土した銅銭は一寛永通宝は除いて一、唐の開元通宝、南宋の詔定通宝を除く他はすべて北宋銭である。北宋銭は景祐元宝、元豊通宝、景德元宝、熙寧元宝、咸平元宝、宣和元宝、紹聖元宝、皇宋通宝、大觀通宝、政和通宝、天聖元宝、祥符元宝、聖宋元宝、嘉祐通宝、至和元宝、至道元宝の

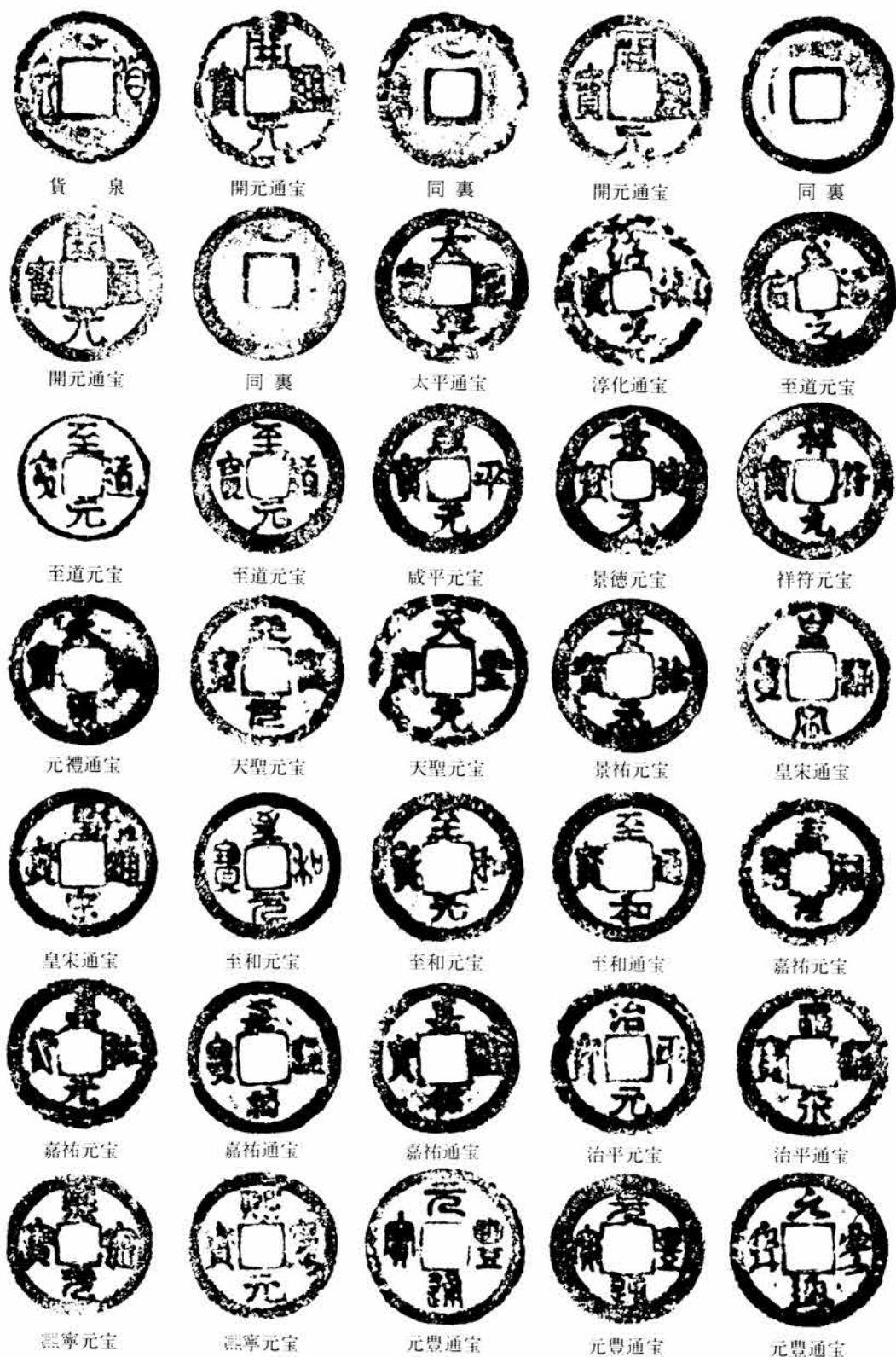


Fig. 100 出土古錢拓影

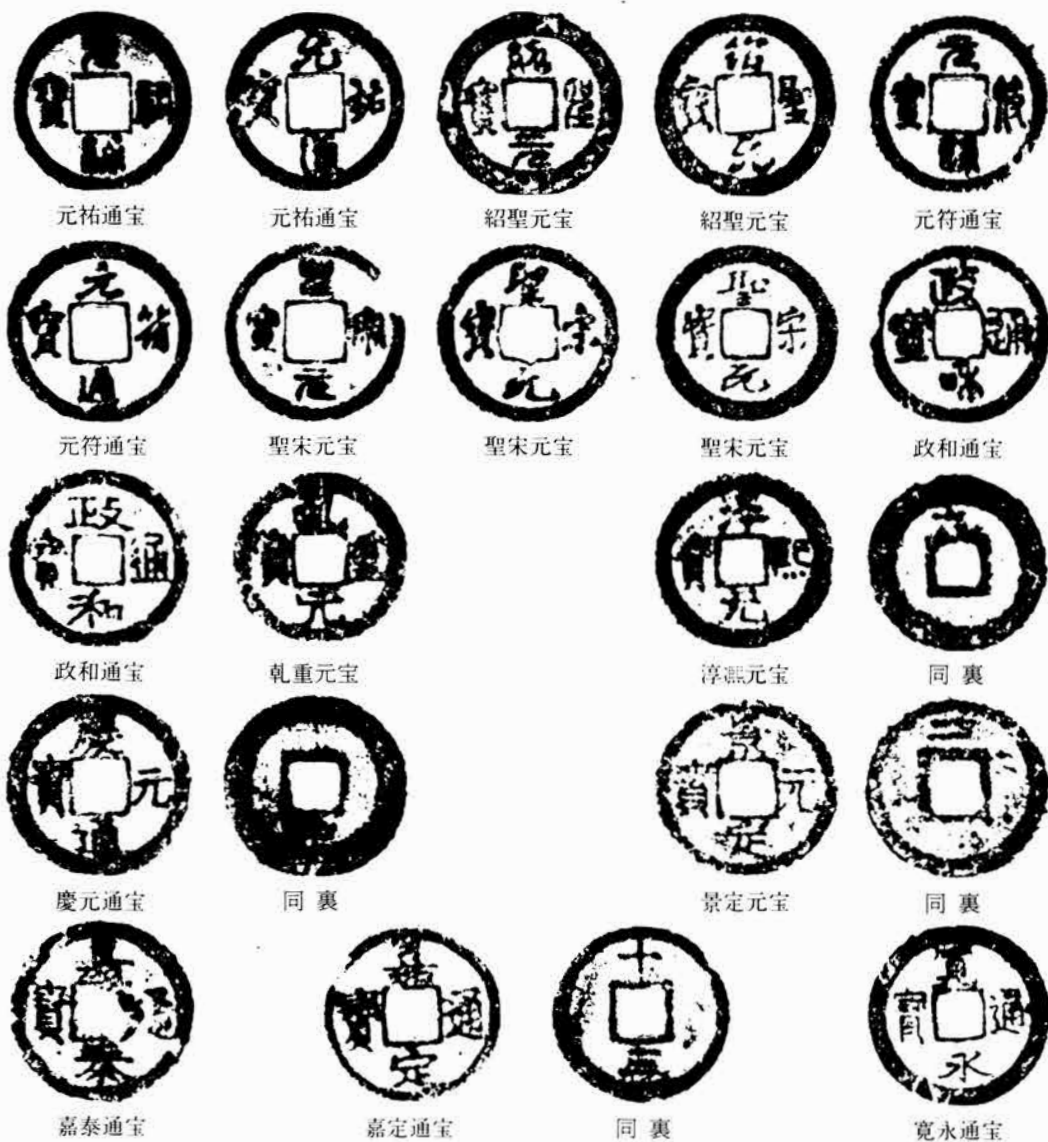


Fig.101 出土古錢拓影

16種である。

出土土壌別では20号、25号、26号に多くみられるが、特に目立った出土状況を呈してはいない。25号土壌では約39枚の銅銭が散乱していた。

第Ⅲ次調査

調査面積の大きさもあるが、469枚の銅銭が出土している。

出土状況をみると貫銭状態のもの（89枚）を除くと、約半数が溝、井戸、方形竪穴建築址、土壌などの遺構覆土内から、他の半数が2～3層中の遺構確認中に出土している。

貫銭状態のものは第1建物西側ほぼ同レベルで検出された。89枚が一連で出土しており1貫文の10分の1程度と考えられる。

貫銭の内訳は別表では明確にできないので以下に記すことにする。

唐 開元通宝6枚、乾元重宝1枚

南宋 慶元通宝1枚

北宋 皇宋通宝18枚、政和通宝2枚、天聖元宝2枚、嘉祐元宝3枚、熙寧元宝7枚、元豊通宝14枚、元祐通宝8枚、嘉祐通宝2枚、紹聖元宝3枚、元符通宝4枚、景祐通宝2枚、治平元宝2枚、景德元宝2枚、至和通宝、咸平元宝、太平通宝、聖宋通宝、天禧通宝、祥符通宝、祥符元宝、至道元宝、淳化元宝がそれぞれ各1枚。

以上、25種89枚である。このうち数枚には裏面を磨くなどの加工が加えられている。

その他の銅銭は第6方形竪穴建築址（39枚）、164土壌（31枚）に多くみられたが、さほど散乱状態に密・粗は確認できなかった。

第Ⅲ次調査出土銅銭は11Dグリット遺構確認中に出土した貨泉（新）と他の層、遺構覆土内から出土した嘉定通宝（宋）、開元通宝（唐）、景定元宝、嘉泰通宝（南宋）を除くと、すべて北宋の銅銭である。

北宋銭は第Ⅰ次、第Ⅱ次調査の各種の他に淳化元宝、景祐元宝、治平元宝、治平通宝、元符通宝の5種類が加わっている。

従って本遺跡出土銅銭は新の貨泉、唐の開元通宝、乾元重宝の2種、南宋の淳熙元宝、慶元通宝、嘉泰通宝の3種、宋の嘉定通宝1種、北宋の24種の計35種である。これに江戸時代の寛永通宝が加わる。市内の千葉地遺跡、諏訪東遺跡ではこれらの銅銭の他に五珠銭（前漢）が各1枚ずつ出土している。

（斎木秀雄）

	錢種	時代	初鑄	字體	出土面			計	備考
					I	II	III		
1	貨泉	新	14	楷書 篆書			1	1	
2	開元通寶	唐	621		1	3	17 3	24	
3	乾重元寶	北宋	758				1	1	
4	太平通寶	北宋	966		1		1	2	
5	淳化元寶	北宋	990				1	1	
6	至道元寶	北宋	995				7	7	
7	咸平元寶	北宋	998			1	1	2	
8	景德元寶	北宋	1004			3	6	9	
9	祥符元寶	北宋	1008			1	4	5	
10	祥符通寶	北宋	1008			1	4	5	
11	天禧通寶	北宋	1017				3	3	
12	天聖元寶	北宋	1023			3	9 3	15	
13	景祐元寶	北宋	1034			3	7 2	12	
14	皇宋通寶	北宋	1039			9 2	22 20	53	
15	至和元寶	北宋	1054			1	3 3	7	
16	至和通寶	北宋	1054			1	2	3	
17	嘉祐元寶	北宋	1056				6 3	9	
18	嘉祐通寶	北宋	1056			1 1		2	
19	治平元寶	北宋	1064				2	2	
20	治平通寶	北宋	1064				1	1	

	錢種	時代	初鑄	字体	出土面			計	備考
					I	II	III		
21	熙寧元宝	北宋	1068	楷書 篆書		2 5	18 18	43	
22	元豐通寶	北宋	1078			2 1	33 18	54	
23	元祐通寶	北宋	1086		2	3 2	13 15	35	
24	紹聖元宝	北宋	1094			3 2	5 5	15	
25	元符通寶	北宋	1098				2 6	8	
26	聖宋元宝	北宋	1101			1 2		3	
27	大觀通寶	北宋	1107			1 1	3	5	
28	政和通寶	北宋	1111			4 4	4 11	23	
29	宣和元宝	北宋	1119			1		1	
30	淳熙元宝	南宋	1174				1	1	
31	慶元通寶	南宋	1195				2	2	
32	嘉泰通寶	南宋	1201				2	2	
33	嘉定通寶	南宋	1208				1	1	
34	詔定元宝	南宋	1228			1		1	
35	景定元宝	南宋	1260				1 1	2	
36	紹平元宝						2	2	
37	寬永通寶	江戸	1642			6		6	

(4) ガラス製品 (Fig.102)

ガラス製品は、壺の口縁部片と珠数玉の2点が出土している。中世のガラス製品は出土例が少なく、貴重な資料と言えよう。

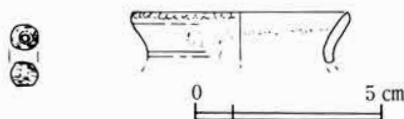


Fig. 102 ガラス製品

壺 (Fig. 102-1) 緑色でかなり透明度の高いガラス製である。気泡を多く含み、成形時の回しによる斜方向への流れが観察できる。内外面ともほぼ滑らかなので、おそらく管吹き成形であろうと思われる。器形的には、つぶれた球形の胴部をもつ小型の広口壺と考えられる。復元口径5.8cmを測る。口唇外面には細かい剝離痕がある。切り離し後のリタッチではなかろうか。口縁内面には褐白色のシブのような物質が付着している。第II次調査の2区87号土壌覆土最上部より出土した。鎌倉における中世ガラス製容器は、極楽寺旧境内、千葉地遺跡に出土例がある他、墓地の分骨容器が知られている程度である。

珠数玉 (Fig.102-2) 外面は黄白色を呈しているが、内部は青色の不透明ガラスと思われる。径7.5mmの球形に近い形だが、上下にややつぶれ傾き、径2mmの孔が通る。孔の両端側は少し面取りされている。第III次調査の6区92号土壌覆土より出土した。ガラス製の珠数玉あるいは雙六の駒は、鎌倉市内では南御門遺跡、浄明寺稲荷小路遺跡などで出土しているが、例数は多くない。

(河野真知郎)

(5) 銭造関係の遺物

A 鞆の羽口 (Fig.103-1~4)

出土総数は8点で、内4点を図示した。

1の形態は炉に接する口の円周が吹き込み口の円周よりもすぼまり、全長約10cm、外径7.5cm、内径2.6cmである。吹き込み口は強い火の影響からか橙褐色に変色しており、炉に接する口には暗灰色の溶融物が付着する。2は、全長12cm、外径7.5cm、内径2.6cmの円筒状を呈し、吹き込み側の内管は中央部から徐々に広がりを示し直径3.5cmになる。又吹き込み口側は口唇部が半周欠損しているが、欠損の割れ口は滑らかになっており何らかの加工がなされたと思われる。炉に接する側には暗灰色の溶融物が付着している。1及び2の胎土は黄褐色を呈し、砂、小石を含む粘土で、共にIグリッド井戸から出土。3、4はいずれも吹き込み口は欠損しており長さは不明である。残存部分も全体にひびが入りもろくなっている。炉に向ける口の円周は欠損側の円周よりもすぼまる。3の断面図における外径は5cm、内径2cmで、炉に向ける口付近には二次焼成の跡がある。4は断面図における外径5cm、内径1.2cmで、炉に向ける口付近には3と同様二次焼成の跡がある。3及び4の胎土は、薄桃色を呈し、1mm大の小石を含む粘性の弱い粘土で、共に第8溝より出土。

B るつぼ (Fig.103-5~8)

出土総数は9点であるが、同一個体になるものもあると思われる。図示した4点のるつぼ片は口縁部から胴部にかけての破片で、底部になる部分の出土例は見られなかった。器形としてはおそら

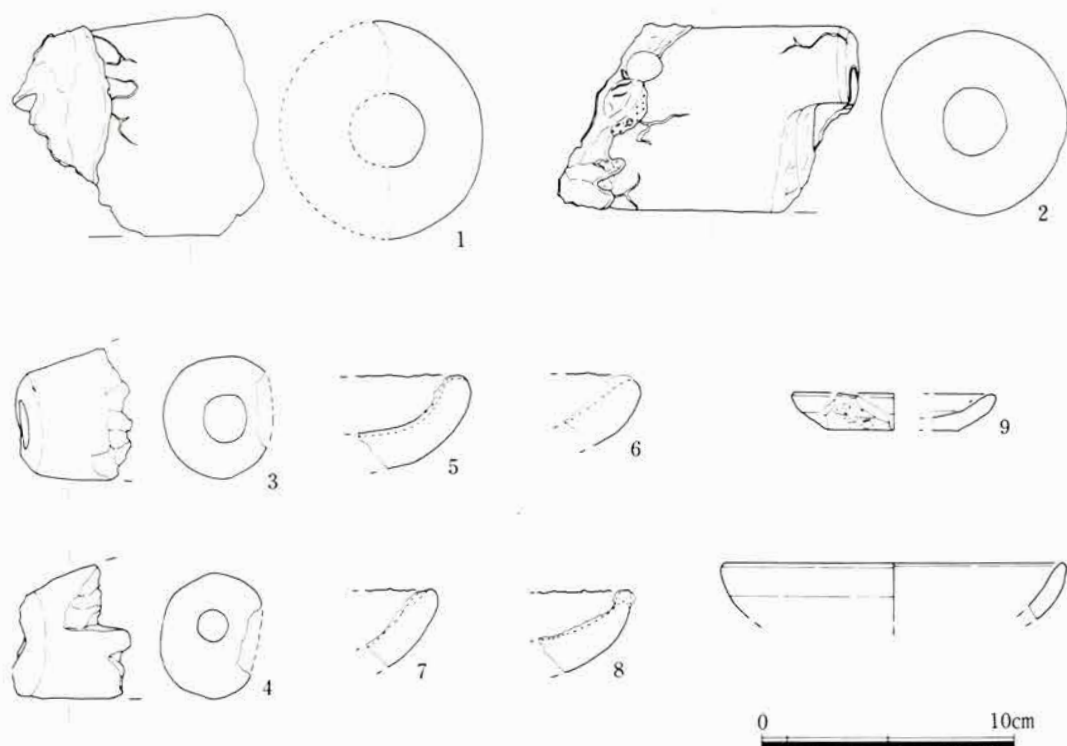


Fig. 103 銭造関係の遺物

く丸底の皿状になると思われる。粘土に小石粒や植物繊維を混入させた幅約1.5cmほどの分厚い器体を持つ。内面は溶融物が付着し気泡が抜けてできた小さな穴が無数にあき、クレーター状を示す。付着物の色は暗赤色、暗紫色、緑色などが見られる。何かを溶かしたのかはこれだけから断定するのは難しい。外面はいずれも強い火を受けて、5は橙褐色に、その他は灰白色に変色し無数にひびが入りもろくなっている。5は第1溝より、6は第8溝より、8は第39土壌より出土。

C 溶融物付着土器 (Fig.103-9、10)

総出土数は3点で内2点を図示した。9、10共に皿状のかわらけを利用している。9は口径8.1cm、高さ1.5cm、回転糸切りである。内底から外面にかけて溶融物が付着し外底部には付着していない。溶融物は黒色でどろりとした状態がそのまま冷えて固まり光沢を放つ。第20土壌より出土。10は口径13.6cmである。口縁部分の破片で、内面に気泡が抜けてできた小さな穴がたくさんあき、溶融物は薄い。外面には1mm大の小石がまばらに付着する。溶融物の性格については共に不明である。

D 溶範 (Fig.104)

向きは不明であるがコーナー部分と思われる。何を鑄造したのかは不明である。素焼きのもので、胎土は砂の多い粘性の弱い粘土である。割れ口を見ると外側は橙褐色、内側は暗灰色の二層を示す。これは外側に外形を作るための土を用い、内側に型を作るため化粧土として別の性質の土を用いたためであろう。正面図下部には幅約1.5cmの凸状の側縁があり、その外側面中央部には刃物による

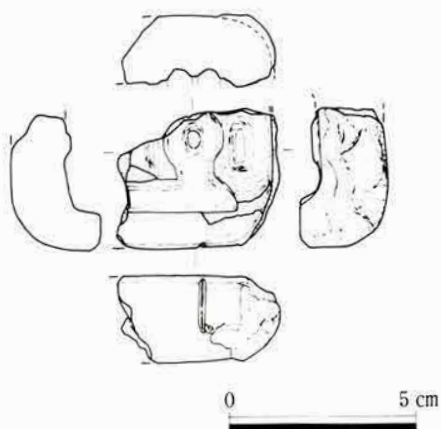


Fig. 104 溶 範

線刻状の傷を有す。正面図右側には型を抱合する際、ずれを生じさせないための突起物がある。この突起物と凸状側縁部との間（右側面図参照）には窪みを有し、流し込み口の可能性も考えられる側面から裏面には付着粘土が見られる。抱合後周りを粘土で封じたのであろう。出土地は16Eグリット地山上からである。

E その他

鉍滓が12点出土している。暗赤紫色や緑色をなしたものなどがある。

溶範を伴う鉍業関係遺物の出土した遺跡としては、本覚寺遺跡が挙げられ、二の鳥居西遺跡では炉跡が見つかっている。今後の調査によって鍛冶の実状も次第に明らかになってくるであろう。

(小 沢 隆 幸)

VI. 木製品 (Fig.105)

1号井戸、97号井戸、166号土壙(方形堅穴建築址)などから合計26点の木製品が出土した。この内最も多いものは箸状木製品で17点を数えた。その他には曲物2点(内1点は形状不明)、曲物底板、下駄、杓子、が各1点ずつ、漆器2点、その他2点などで、日常の生活用具が大半を占めていた。尚ここでは井戸枠材は木製品に含めない。又、これらの他に数点の漆製品が出土しているが、遺存状態は非常に悪い。

以下、木製品、漆製品について説明を加える。

(1) 木製品

1は柾目の薄板材(厚さ5mm)製の曲物で、表面には黒漆が塗られており、井筒(97号井戸)として用いられていた。接合部は桜の皮(幅10~14mm)で縫い合わされており、内面には刃物による切り込みが入れられている。切り込みは接合部付近では、底辺に対して垂直で、底辺から上辺にまで至っており、間隔は1.2cm~1.5cmを測った。また他の部分では、底辺に対して60°の角度を持ち、底辺から高さ15cm~27cmの所で止まっている。間隔は1.5cm~5cmを測った。外側には直交する対角線上4ヶ所に立板(幅11cm)があてがわれ、更にその外側には、3本のタガ(上の物幅3cm、中下の物幅7cm)により補強が施されている。直径49.4cm、高さ29.4cm、

2は曲物の底板で、柾目の板材を円形に削り出した物。直径17.5cm、厚さ1.3cm

3は板目材を削り出したもので、一端付近に径5mmの穿孔がある。他一端は欠損している。

長さ17.2cm、幅1.4cm、厚さ4.5mm

4は柾目材を削り出して杓子状にしたもので、杓子部の一部が欠損している。よく使い込まれて全体的に磨滅している。長さ22.1cm、幅5.5cm、厚さ7.5mm

5は柾目材を削り出した、平面が長円形の連歯下駄である。歯は鋸で切り出されているが、根本付近を残して欠損している。鼻緒孔の穿孔方法は木質部の痛みがひどく不明である。長さ21.8cm幅、9.7cm

6~12は箸状木製品で、前面を削り出した、断面が多角形の棒の両端を尖らしたものである。総数で17本が出土している。6は長さ21.6cm、径7mm、7は長さ24.3cm、径6.5mm、8は長さ22.4cm、径6mm、9は長さ21.6cm、径7mm、10は長さ20.7cm、径5mm、11は長さ20.4cm、径5mm、12は長さ20.7cm、径6mm。

(宮田 真)

(2) 漆製品 (Fig.106)

数点出土したが、もともとの微高地であるため残存が非常に悪い。器形の復元出来たものは2点である。共に柾目板使用で漆は光沢があり安定している。

1は黒漆塗りの碗である。口径、器高は不明であるが、底径6.4cmを測る。底厚は1.2cmと厚く、6~7mmの高さに「総高台」状に削り出されている。底面は使用のためか漆が全面にみられない。

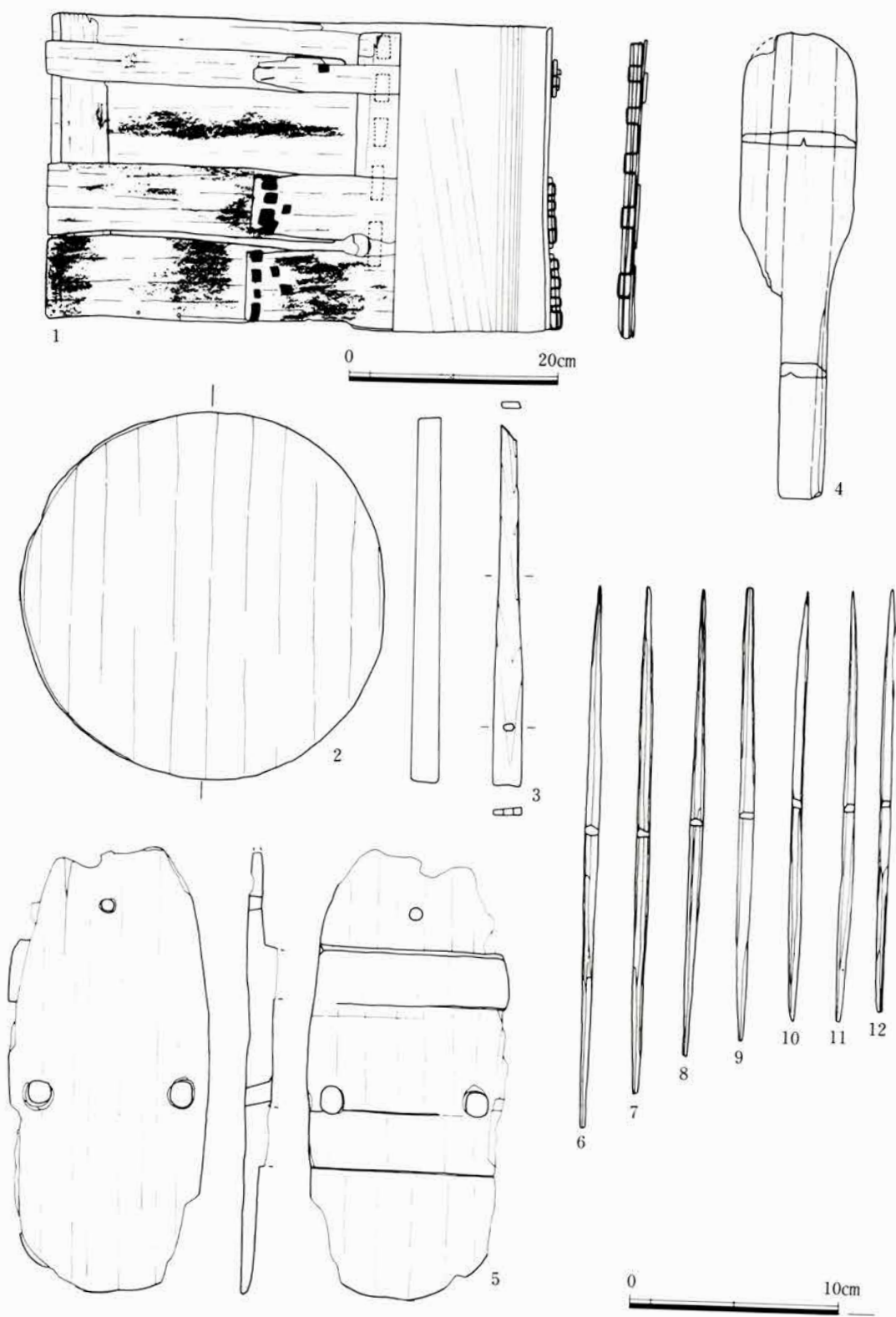


Fig. 105 木製品

97号土壙(井戸) 出土。

2は口径11cm、器高1.1cmを測る皿である。内面は布状(やや漆が付着した)のものが全体に付着している。外面一部に朱漆による筆描き文様が見られる。文様は花卉あるいは葉を下向きに描いたもので、やや太めの筆を使用している。内面は全体としては不明であるが一部には朱漆が見られるので同一文様が描かれていたものと考えられる。

166号土壙(方形竪穴) 出土。

漆器は今小路周辺の発掘調査で多量に出土しているが、若宮大路付近では出土量が極めて少ない。堆積土層との関係が指摘できようが本来は多量に使用されていたと思われる。

(斎木秀雄)

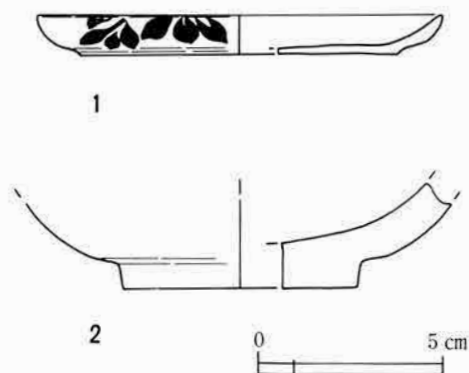


Fig. 106 漆製品

VII 骨角製品 (Fig.107、108)

骨角製品としては筭、篋状製品、サイコロ、雙六の駒などが出土したほか、加工痕のある骨や鹿角なども見られる。

(2)筭 (Fig.107-1~32)

平たい板の一方が細まり、反対端に1孔をあけ、片面に丸溝を彫った形が一般的であるが、溝や孔のないもの、孔の壊れた跡を再加工したもの、溝を複数彫るものなど、若干の変化がある。鎌倉出土のものには概して装飾的な文様は刻まれない。材料となった骨が何のものであるかはよくわからないが、長さからみて鹿かそれ以上大きい牛馬の骨を使用したと思われる。頭部の孔の周辺に骨髓側の海綿状部を留めるものもある。

1は良く磨かれた典型的な形のものである。V区38土壙出土。2は尖端がくびれない形で、頭部孔も三角形をなす。拡張区299土壙出土。3は頭部孔が上方へ抜けてしまった例である。287土壙出土。4は86土壙、5は第II次調査4区2層下部、6は88土壙出土。7は尖端部片だろうが、きわめて長く溝がみられない。反っている。9では溝が主副3本、10では同幅の2本が彫られている。ともに2層出土。11は溝が細い葉研彫形で、篋等の転用品と思われる。VII区第1トレンチ出土。12は第II次調査7土壙出土。13は同4区2層出土。14、15は表裏両側に溝が彫られている。14は第II次調査3区、15はII区地山土上出土。16は孔の跡を凹状に削り直している。第II次調査2区89土壙出土。17は表採品。18は頭部孔がなく、短かく削り直して再使用したものかもしれない。19は拡張区3層下部出土。22はVI区2溝覆土下層出土。24は299土壙、26は287土壙出土。27は凸面の片端に寄ったところに細い溝が彫られ、筭かどうか不明。第II次調査2区第1土丹層下出土。28は同4区2層下部、29は同1区土丹層下出土。31は第II次調査2区第3土丹層下、32は同2区87号土壙出土。

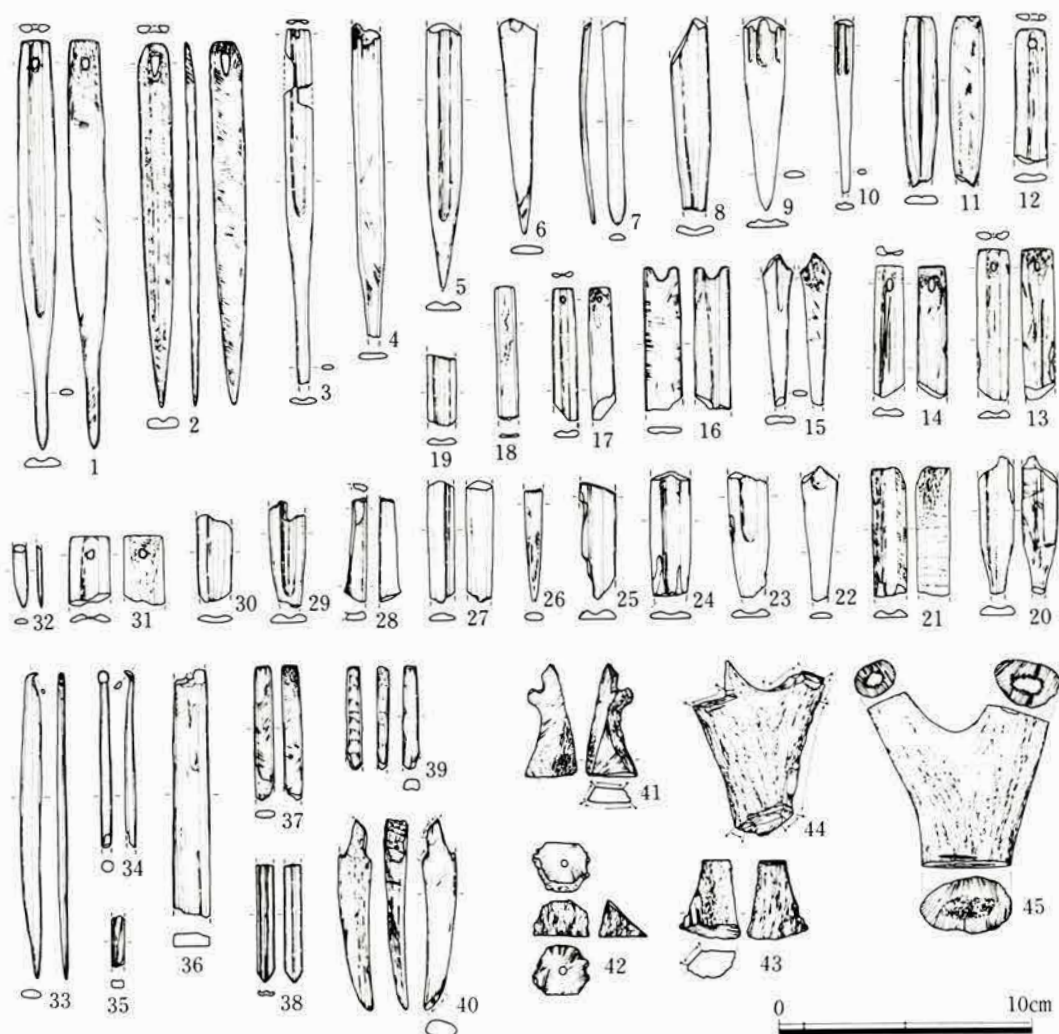


Fig. 107 骨製品 1

(2)耳かき形筭 (Fig.107-33、34)

33は平たい棒の一端を斜めにとがらせ、反対端を鍵の手に削っている。削り痕はやや粗く、ふつうの形の筭を耳かき形に作り直したものかもしれないが、溝は見られない。第II次調査27土壌出土。

34は下端を欠失するが、まったく耳かきの形をしている。当時の化粧道具セットには耳かきも含まれるので、これも筭というより耳かきとしても良いかもしれない。しかし耳かき部は匙状に凹まないで、これで耳垢を搔けるか疑問である。第II次調査2区第1版築面南外方出土。

(3)筥状製品 (Fig.107-35~38)

35はあまり平たくない棒状品で上下両端欠失。斜めに溝状の凹みが彫られている。第II次調査4区1土壌より出土。

36は欠失した上端に孔の一部が残存している。筭とするには分厚すぎるもので、加工も粗雑であり、調度品の一部か未成品であろう。

37は平棒状で下部欠失。頭部に骨髄側を残し、無孔、無溝の筭かもしれない。

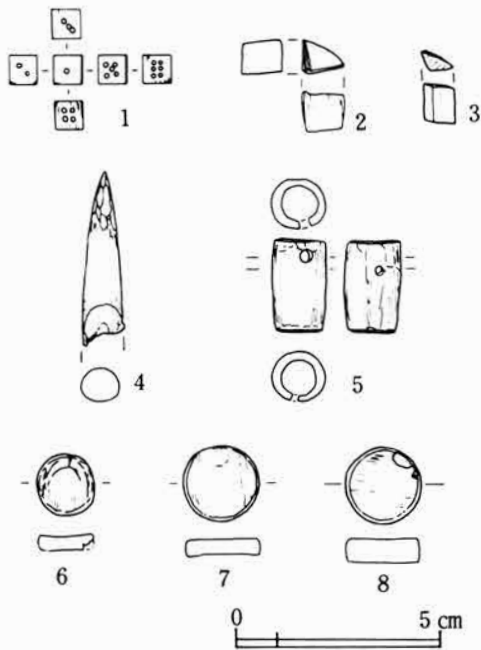


Fig. 108 骨製品 (2)

38は片面に2条、反対面に1条の溝を彫り、下端はぶく尖らせてある。用途不明。

(4) 加工痕ある骨 (Fig.107-39、40)

39は角棒状で、一側面には小刀による削り痕、隣の面には丸ノミによる凹面加工がなされている。材料にはイルカのクチバシ骨を使用しているように見受けられる。第II次調査2区3層出土。

40は何かの肋骨のような曲がった骨の先端と根本側とに切削痕を残す。上部の加工痕は骨を折り取るための刻み込みかもしれない。第II次調査2区2溝出土。

(5) 加工痕ある鹿角 (Fig.107-41~45)

41は鹿角を薄切りにしたものであるが、何を作ろうとしたのか、余材か不明。166土層出土。

42鹿角の枝部の輪切りに近いものだが、やはり

用途不明。43も鋸のようなもので切った痕があるだけである。42は2層より、43は166土層出土。

44は鹿角の二股部であるが、三ヶ所の切断部はいずれもノミのようなもので削り込んだ後に、折り取っている。113土 出土。

45は二股部を鋸で引き切っている。内部が空洞になってしまった角なので廃棄したのかもしれない。IV区5溝より出土した。

(6) サイコロ (Fig.108-1)

約7mm角のもので、褐白色の骨製である。完全な立方体ではなく、わずかなゆがみがある。目の配置は「一天地六」という通り、反対面との合計が7となるようきちんと配されている。目は焼き箸で付けたのか、回転錐でつけたものか、判断できないが、1、3、5などの数で星の片寄りがある。III区64土層覆土中より出土した。

(7) 小切片 (Fig.108-2、3)

三角柱形の切片で、小口は鋸引きである。サイコロなどの小型骨製品を製作した際の余材と思われる。ともに第II次調査3区20土層覆土より出土した。

(8) 尖頭製品 (Fig.108-4)

円錐状の骨の先端に、さらに十数回の削りを加えて尖った先を作り出している。ニカワ分の多い骨で褐色を呈する。削り以外の表面も磨き加工されているように思われる。根本側は欠失しており、

や鎌の「返し」があるかどうかかわからないが、尖頭をわざわざ削り出しているので実用的な刺突具と考えたい。VII区第1トレンチ出土。

(9) 有孔筒状製品 (Fig.108-5)

径13mm、長さ22mm、厚さ約2mmの筒状品である。紅刷毛の軸と同様に、側面の一部に平坦面が作られている。その面の反対側上端近くに少し大きめの孔があげられ、平坦面のやや低い位置に小さめの孔がある。紅刷毛の軸にはふつう孔はあげられないし、装飾性にも乏しいので別品と思われる。しかし何か刷毛のようなものの軸であろう。165土壙覆土上部より出土した。

(10) 雙六駒 (Fig.108-6~8)

6は径15mm、厚さ4mmほどのものだが、焼けてヒビ割れている。黄味灰白色ないし暗紫灰色を呈する。I区3層中の出土。

7は径18.5mm、厚さ4mmの完形品であるが、裏面は土圧でつぶれたのか凹面となっている。全体によく磨かれている。第II次調査20土壙より出土。

8は径18~19mm、厚さ6mmと、やや分厚い感じのものである。材料はかなり目がつんでおり、鹿角かもしれない。3層出土。

雙六駒と思われるものは市中から度々出土するが、骨製品がほとんどである。完全な円板形というより、側面が膨らむので、つぶれた鼓形という方が正しいであろう。浄明寺稻荷小路遺跡などでは、ガラス製で上面がドーム丸の凸面を示すものもあり、正倉院御物の雙六駒と似た形を示している。基石に関しては現在まで良好な資料は得られておらず、6~8も雙六駒と考えて間違いのないものと思う。

(河野真知郎)

VIII 自然遺物

井戸、溝、方形竪穴建築址覆土を中心に、貝殻、植物種子、動物骨等が出土している。以下各種の自然遺物について簡単な説明を加えていくことにするが、動物骨の分類にあたっては早稲田大学考古学研究室 金子 浩昌氏の御教示を受けた。又、本来は金子先生に動物骨についての詳しい分析、研究資料をいただき、本報告書に掲載する予定であったが、紙数の都合もあり、周辺遺跡の報告書に載せることとした。

植物の種子では桃が多く、わずかに栗、梅が出土している。

貝ではアワビ、ハマグリ、サザエ、カキ、アカニシが多く出土している。

動物骨では牛、馬が多く、シカ、イノシシ、ウサギ、犬、ネコなどが出土している。これらの骨のうち大型の牛、馬の骨では切断痕を有するものも認められる。

この他に鳥類、魚類の骨も多く出土している。魚類ではイルカが多い。

(齋木秀雄)

第4章 まとめと考察

本遺跡は敷地内（建設予定地）全域の調査が種々の要因により不可能であったため、出来るかぎりの面積の調査を実施したが、検出された遺構群の時代別変遷あるいはそれらと若宮大路との関係を考えるには不十分な結果に終わってしまった。しかし、土壇墓、溝、道路状遺構、井戸、方形竪穴建設址等が数多く検出され、若宮大路付近での中規模調査としては多くの新事実を把握することができた。

ここではこれらの調査により把握された事実等から遺跡の年代・遺構と若宮大路との関係、土壇墓の発生等について述べることにする。

遺跡の年代について

遺跡の年代は出土した遺物からみると、古代はここでは除くとして、12世紀末期から17世紀前半頃までと考えられる。

最も古い時期に属する遺物は、磁器では口縁玉縁の白磁碗、口縁端反りの白磁碗、同安窯系の青磁碗、皿でありかわらけでは5群のかわらけである。口縁玉縁の白磁碗などは鎌倉では最も早い時期に搬入された磁器であり、市内鶴岡八幡宮・研修道場用地内の調査では創建時（12世紀末期）の東側境界線を形成する三方堀から出土している。又かわらけ5群は、現在の新市内での出土点数は少ないものの、平安時代の土師式土器が中世のかわらけ（あるいは土師質土器）に変化する過程で出現するものと考えられており、類例は八幡宮・研修道場用地、向柄苅遺跡最下層より出土している^(注1)。現在の所、12世紀段階の土師質土器に比定しうる唯一の遺物である。このかわらけを伴う遺構は、本遺跡では2～3の小土壇だけであるが、これに続く年代（かわらけ4群）のものが第6溝・第8溝で多く出土している。

最も新しい時期の遺物としてはC土壇墓に伴う銅銭（寛永通宝）、第1トレンチ西端地行層出土の志野焼皿があげられるが、これらを除くと第2溝、第5溝出土の1群かわらけ、K土壇墓出土のかわらけである。1群かわらけは市内では玉縄城本丸跡、鶴岡八幡宮・直会殿用地第3、第4面出土、のものと同タイプである。共に16世紀代頃の年代が与えられよう。K土壇墓出土のかわらけは長勝寺遺跡^(注4) 検出の土壇墓内出土（副葬品）と多くの共通点を持ちやや古い。

出土遺物のなかで、上記の新しい時期のもの古い時期のもの占める割合は極くわずかであり多量に出土しているのは舶載品では鎬蓮弁文の青磁碗、口元の白磁皿、国産品では瀬戸窯製品他、かわらけでは2群、3群である。これらの遺物は周辺の遺跡でも同様の割合で出土している。本遺跡は12世紀末～17世紀前半頃までの長い間営まれていたが、検出遺構・出土遺物が最も増加するのは13世紀後半から15世紀にかけての比較的短い期間であると言える。中世都市鎌倉が栄え、徐々に衰退していく様が検出遺構、出土遺物からも把握されるようである。

若宮大路との関係について

検出遺構と若宮大路との関係をみると、同様の位置（若宮大路東側に位置し、かつ大路に面して

いる)に存る松風堂ビル用地の調査報告^(註5)でも述べているが、まず第1に井戸・方形竪穴建築址が比較的高い密度で構築されていることがあげられる。これは、現在までの本遺跡地周辺での発掘調査が若宮大路沿いで多く、東側小町大路近くでの様相が十分に把握できないということもあるが、上記の松風堂ビル用地の他島森書店用地の発掘調査でも井戸・方形竪穴建築址(特に井戸)が調査区若宮大路側に偏在することが確認されている。これら偏在する井戸・方形竪穴建築址等の年代は、出土遺物が混在していることもあって、十分に把握されていないが、覆土内の遺物をみると13世紀後半から14世紀末期頃までのものが多く検出されているようである。

次に検出された溝の方向等から若宮大路の幅、中世の区画等を考えることとする。若宮大路の二ノ鳥居周辺部での路幅については、鎌倉スイミングスクール用地^(註6)等の発掘調査の結果から、以前推論を発表したことがあり^(註7)その中では中世の大路幅は現在の若宮大路幅以下の規模であったとの結論に達している。この結論に達した最大の要因としては鎌倉スイミングスクール用地内西端で検出された、現在の歩道に切られている井戸(あるいは溝)と、今川酒店用地内の河川跡の存在であるが、本遺跡西端(第1トレンチ西端)でも近世の地行層、井戸状遺構(あるいは溝)が検出されている。又、遺跡地大路西側歩道下には今川酒店用地で検出された旧河川が続くと推定されており、さらに東側歩道下の下水道工事の際には河川状の遺構は全く認められておらず、本遺跡西側付近での若宮大路の幅も現在の道路幅(約15m)以下の規模であったと考えられる。

東西方向の溝に限って若宮大路との関係を見ると、最も古い時期の第8溝と最も新しい時期の第2溝とではやや方向が異なる。現在の若宮大路の方向では第2溝の方が、より直交方向に近い。若宮大路が中世大路の方向を現在もなお保っているとすれば、中世市街地の区画は第2溝の時期が最も若宮大路を中心とした正碁盤目状に近いことになる。しかしこの時期の区画は、本遺跡地内に限って言えば、若宮大路付近に片寄っている。第2溝は出土遺物から15世紀後半から16世紀前半頃と考えられており、溝の構築年代の新しいものほど現在の若宮大路とほぼ直交である。この傾向は松風堂用地内の発掘調査でも認められる。しかし、今小路周辺の遺跡では若宮大路と直交する溝はほ

以上のことから若宮大路とそれを中心とする街区を考えると若宮大路付近では年代が新しくなるにつれて正碁盤目状に街区がなされてくるが、鎌倉時代前半にはさほど整然とした街割りは行なわれていなかったように思われる。鎌倉時代の街割りは、中央に若宮大路を造営したものの、全体に碁盤目状の街割りはなされていなかったのではないだろうか。今後、市街地の発掘調査が進展するに従い、この問題も明確にされるであろう。

土壙墓の発生について

鎌倉市内、特に市街地における土壙墓の発生については、現在のところ十分な資料を得ておらずこの問題を論ずるには時期が早いとも言えるが、多くの土壙墓が検出されたということもあり、ここでは、土壙墓の発生について簡単に触れることとする。

現在までに市内(旧市内)で土壙墓が検出されているのは長勝寺遺跡、鎌倉スイミングスクール

用地、鶴岡八幡宮境内・国宝館建設用地^(注8) 本覚寺旧境内遺跡^(注9) である。^(注10) このうち国宝館建設用地内の土壙墓は男女合葬であり、平安時代末期の年代が考えられているが、他はさほど時代差がないものである。

長勝寺遺跡では調査団長である大三輪龍彦氏が出土人骨の状況等から少なくとも上流階級に属さない人々と墓であるとした上で、「永享の乱を経て、足利公方の鎌倉から古河への移転は武士階級の鎌倉からの移転を促すこととなった。このことが鎌倉におけるやぐらの終末への直接の原因となったことはいうまでもない。これに代わって一般民衆の墓として形成されたのが土壙墓だったように思う」と述べている。これは大変に興味深い。

検出されている土壙墓は長勝寺遺跡を除くと、若宮大路周辺に集中（中世に限る）している。中世の中央街路である若宮大路わきに土壙墓群が営まれるという事は、大路の重要性を考慮するとやや異常であり、やはり、市街地における土壙墓の発生は大三輪氏の指摘するように鎌倉から武士階級が移転し、鎌倉が幕府開設以前のような状態にもどった時と考えるのが妥当であろう。

本遺跡地の土壙墓群には寛永通宝を副葬品（六道銭）として使用している例もあり、第1溝内の人骨出土状況と合わせ考えると、長期にわたり「墓地」として使用されていたものであろう。これには大巧寺が関係していると思われるが、寺伝が明確でないために墓地の造営時期が把握できない。しかし、少なくとも第1溝埋没以前に周辺部に土葬骨を伴う遺構（土壙墓？）が存在していたことは明確である。第1溝の年代は明確ではないが、出土遺物からみるとおそらく15世紀前半には埋没していたと考えられる。

以上、検出された遺構と若宮大路との関係等の2～3の問題点について若干の考察を加えてきたが、これらの他に方形竪穴建築址の性格、構造に関わる問題や、出土遺物の流通の問題等残された問題点の方が多く残ってしまった。

まとめとしては不十分な点が多く、乱雑な文章になってしまったが、とりあえず、発掘調査で判明した事実関係を中心に述べてみた。先学の方々の御叱正と御教示をまちたい。

註1. 1982年調査、担当の馬淵和雄氏に御教示いただいた。

註2. 齋木秀雄、「玉縄城本丸跡出土のかわらけ」鎌倉考古No15

註3. 『直会殿用地発掘調査報告書』1963年

註4. 『長勝寺遺跡』昭和53年

註5. 『小町1丁目309番5地点発掘調査報告』1983年

註6. 昭和53年調査、未報告

註7. 齋木秀雄「中世鎌倉の街遺構―若宮大路周辺の発掘調査から―」郷土神奈川第9号昭和54年

註8. 1982年調査 今春報告書刊行の予定である。

註9. 1982年調査 未報告

註10. この他に多宝寺跡、来迎寺北遺跡、長谷寺境内等で甕（常滑大甕）墓、石組墓等が検出されているが、土墓でも特異な例であるためここでは除外した。



▲1. 調査前全景（東から）

▼2. 同（西から）



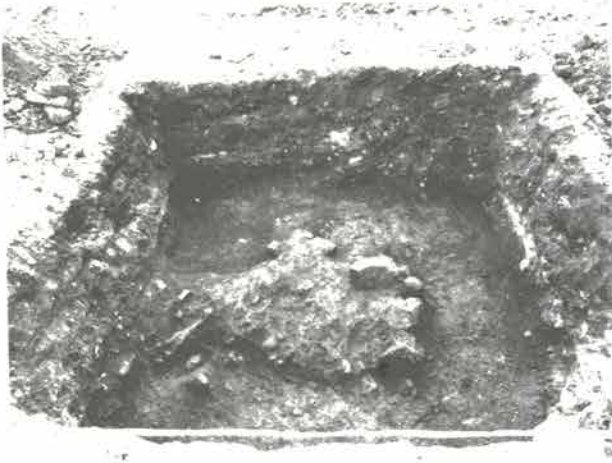
1. 第2テストビット
部分（東から） ▶



◀ 2. 第3テストビット
土丹敷遺構（南から）

3. 同（東から） ▶





◀ 1. 第4テストビット
上層（東から）

2. 同 鎌倉石出土状況
（北から）



◀ 3. 第5テストビット（西から）



◀1. 第II次調査区 土丹敷遺構（東から）

▼2. 同（西から）



◀3. 土丹敷遺構上の溝（南から）

4. 同（東から）▶





◀ 1. 第II次調査区 全景 (最終・東から)

2. 同 (西から) ▶





◀1. 第1 方形竪穴建築址
(北から)

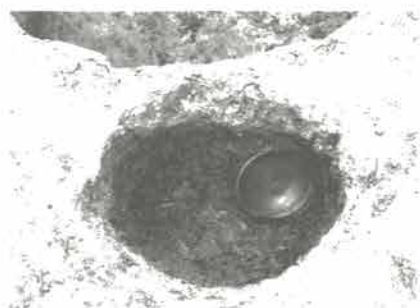
▼2. 同 遺物出土状況



▼3. 検出土坑群他 (東から)



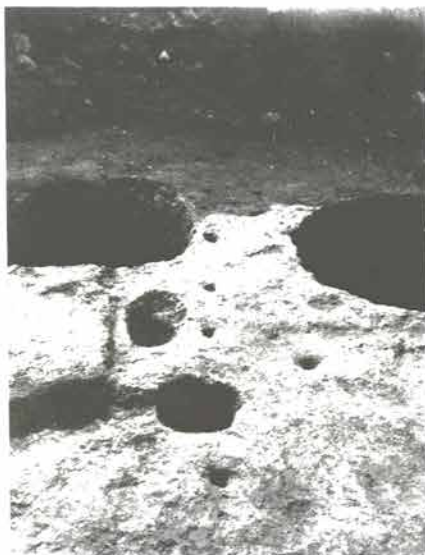
▼4. 小土坑出土 5群かわらけ





◀ 1. 検出柱穴列他 (西から)

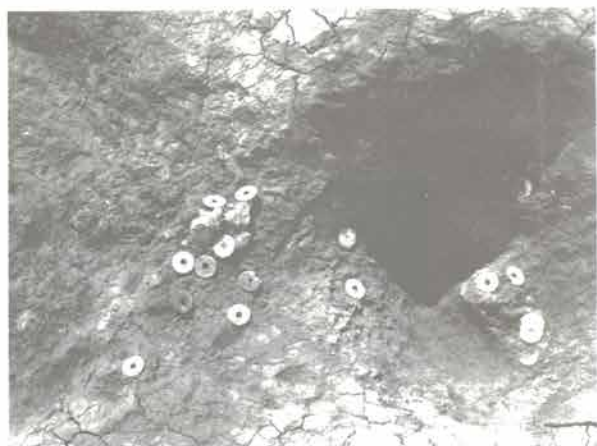
▼ 2. 同 (北から)



◀ 3. 同 (西から)

4. 土壇、井戸 ▶
(南から)





◀ 1. 銅銭出土状態 (Ⅱ次)

▼ 2. Ⅱ-87土壇 (東から)



▲ 3. Ⅱ-4土壇

4. Ⅱ-71土壇 ▶
遺物出土状況





◀ 1. 土層堆積 II-28土坑

2. 同 II-66土坑 ▶



◀ 3. 同 II-25土坑

4. 同 II-35土坑 ▶





▲ 1. 第Ⅲ次調査区 全景 西部分（南から）

▼ 2. 第Ⅲ次調査区 全景（西から）





▲ 1. 第Ⅲ次調査区 全景 東部分 (南から)

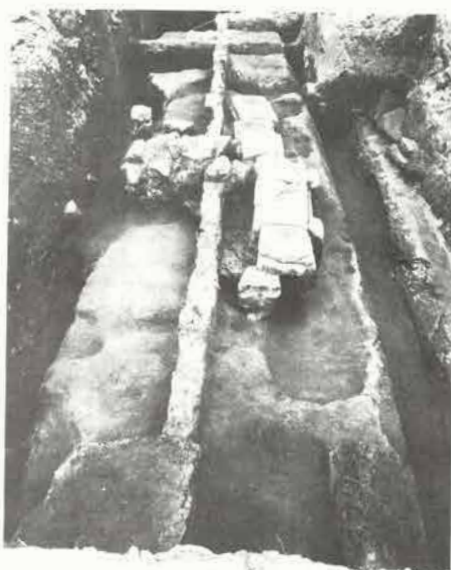
▼ 2. 第Ⅲ次調査区 全景 (東から)





◀1. 第1トレンチ
鎌倉石集合 (北から)

2. 第1トレンチ 全景 ▶
(東から)



▲3. 第1トレンチ 西端
近世地行層 (北から)

4. 同 出土志野皿▶





◀ 1. B土坑墓 (I次
・南から)

2. A・B土坑墓 ▶
(I次・北から)



◀ 3. E 土坑墓
(東から)

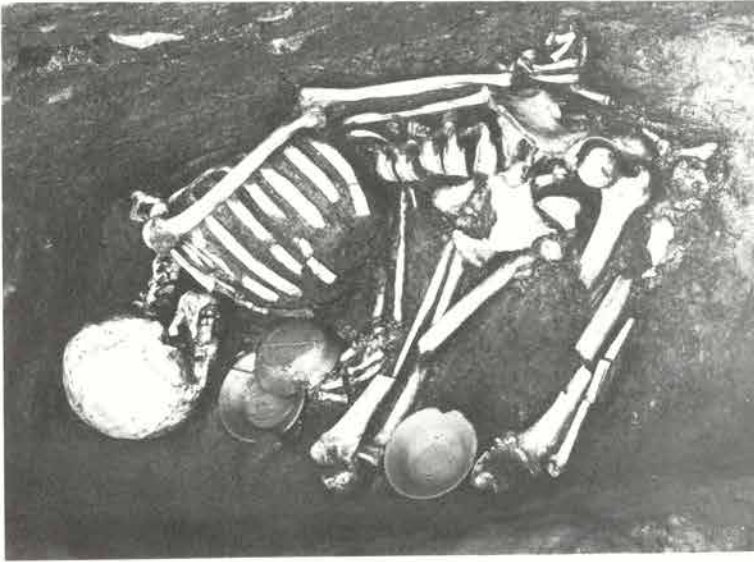


◀ 1. C 土壇墓 (Ⅱ次)

2. 同 六道銭
出土状況 ▶



◀ 3. H 土壇墓
(Ⅱ次 南から)



◀ 1. K 土壇墓
(Ⅲ次・北から)

▼ 2. G 土壇墓 (Ⅱ次・東から)



▼ 3. F 土壇墓 (Ⅱ次・南から)



4. I 土壇墓 (Ⅲ次・▶
南から)





◀1. 第1 溝内 人骨出土状況
(西から)

▼2. 同 (東から)



▼3. 同 部分 (東から)



1. 第5溝内 J土坑墓 ▶
(北から)



◀ L犬骨

M犬骨 ▶





◀ 第1溝 (西から)

▼2. 第6溝 (北から)



▼3. 第8溝 (西から)





▲第2溝（西から 大雨後の崩落状態）



▲2. 同 土層堆積（西から）



◀3. 同 第1井戸との切り合い状況（西から）

4. 同 東端の現代攪乱▶

▼5. 第5溝（北から）





◀ 1. 第2方形竪穴建築址
(東から)

2. 同 覆土上部
遺物出土状況 ▶



◀ 3. 同 北壁の壁板圧痕と
小柱穴列 (南東から)



▲第3方形竪穴建築址（西から）

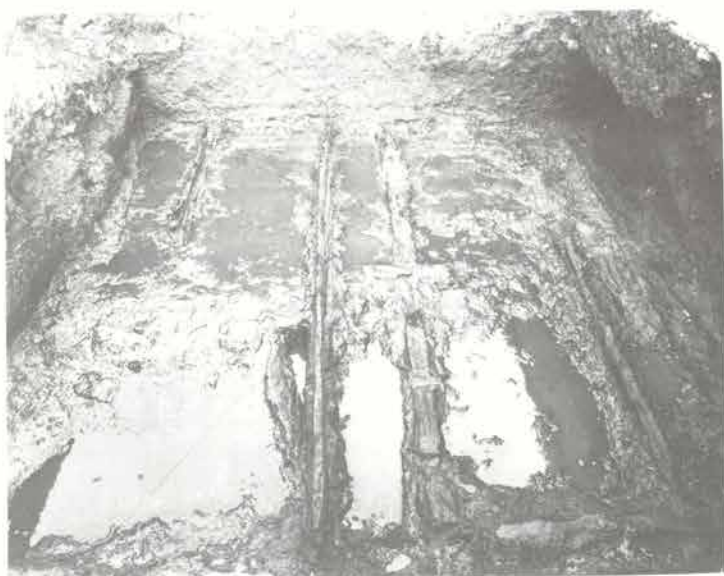
▼第4方形竪穴建築址（北から）



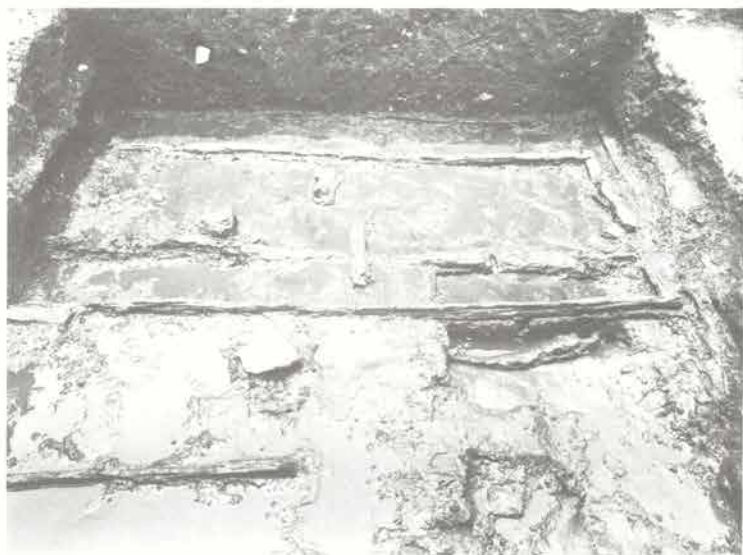


◀1. 第5方形竪穴建築址
(東から)

2. 同 (西から) ▶



◀3. 同中央部 根太木交差状況
(西から)



◀ 1. 第5 方形竪穴建築址
(北から)

2. 同 ▶



◀ 3. 同 土層堆積状況 部分
(北から)



◀ 1. 同 中央東西 根太木と
北側の縦板 (北から)

2. 同 北壁板組み痕
(南から) ▶



◀ 3. 同 北壁に残る檜木と
残存する枿穴 (南から)

4. 同 根太木下部
漆器検出状況 (北から) ▶





◀ 1. 同 堅穴覆土上部検出の曲物
及び銅銭出土状況（北から）



2. 同 覆土下部▶
遺物出土状況



▲ 3. 同 床面(?) 青白磁
水注片出土状況

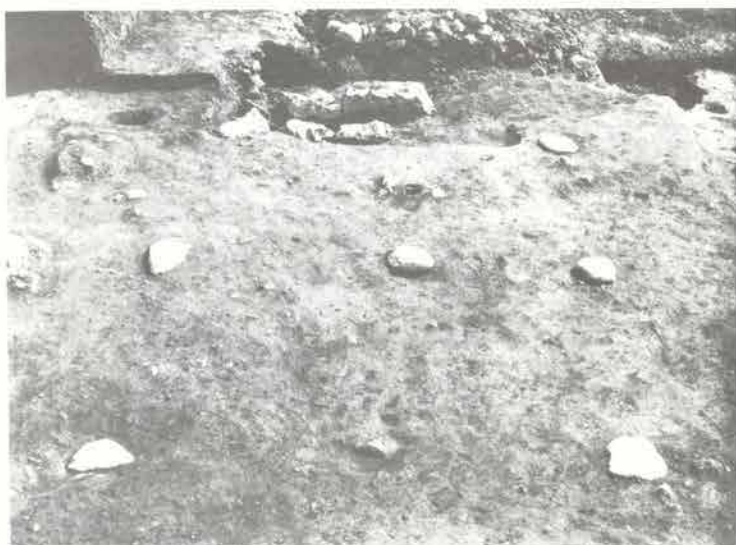
4. 同 全景 ▶
（北東から）





◀ 1. 第1建物
(南から)

2. 同 (北から) ▶



◀ 3. 同 建物東
かわらけ出土状況

4. 同 建物西 ▶
銅銭出土
状況





◀1. 第1井戸
(西から)

▼2. 同 井戸 土層堆積 (北から)



▼5. 同 井戸枠に残る銅銭跡



▼3. 同 井戸下部 土層堆積 (西から)



▼4. 同 井戸下層遺物出土状況 (西から)





◀ 1. 第2井戸
(東から)

2. 同 (南から) ▶



◀ 3. 同 (南西から)



◀1. 第3井戸
(西から)

▼2. 同 (北から)



▼3. 同 (西から)



▼4. 同 全景 (北から)



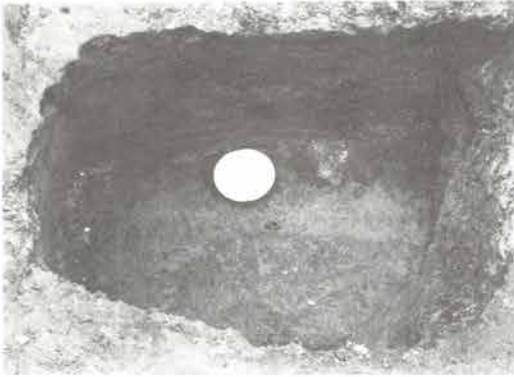


◀ 1. 第4井戸（南から）

2. 同 全景（南から）▶



◀ 3. 第5井戸
（東から）

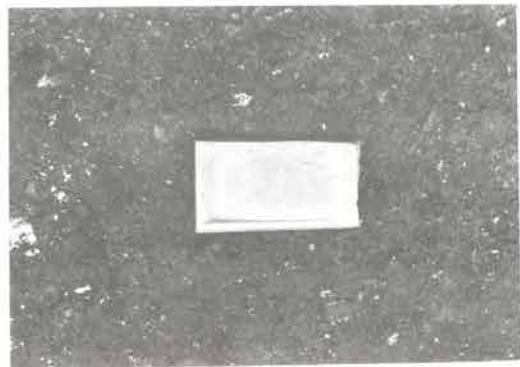


◀1. 第6井戸 青磁皿出土状況（北から）



▲2. 硯出土状況

▼3. 同



▲4. 白地鉄絵片出土状況



◀5. 5群かわらけ
出土状況



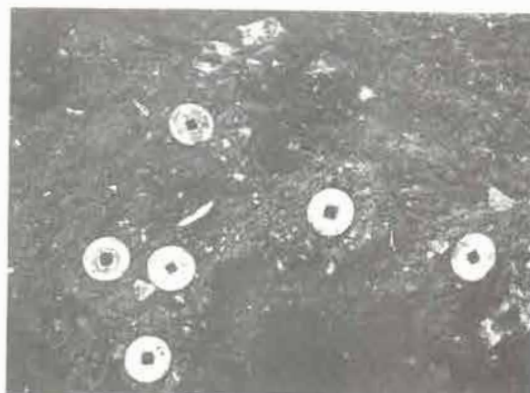
◀ 1. 土製小型私華瓶出土狀況

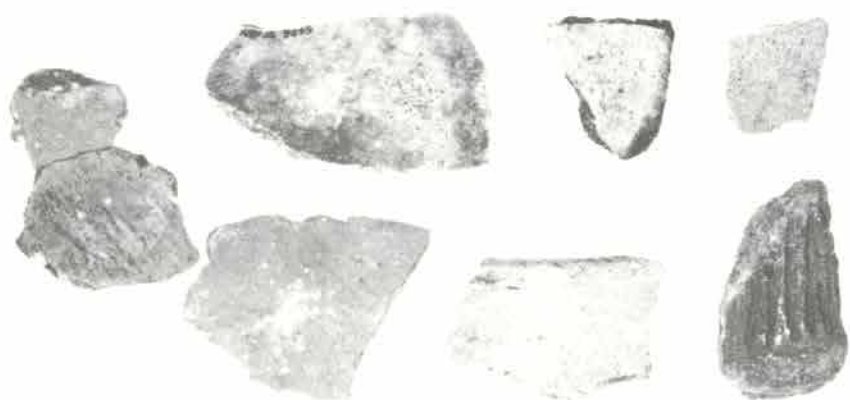
▼ 2. 渥美壺出土狀況

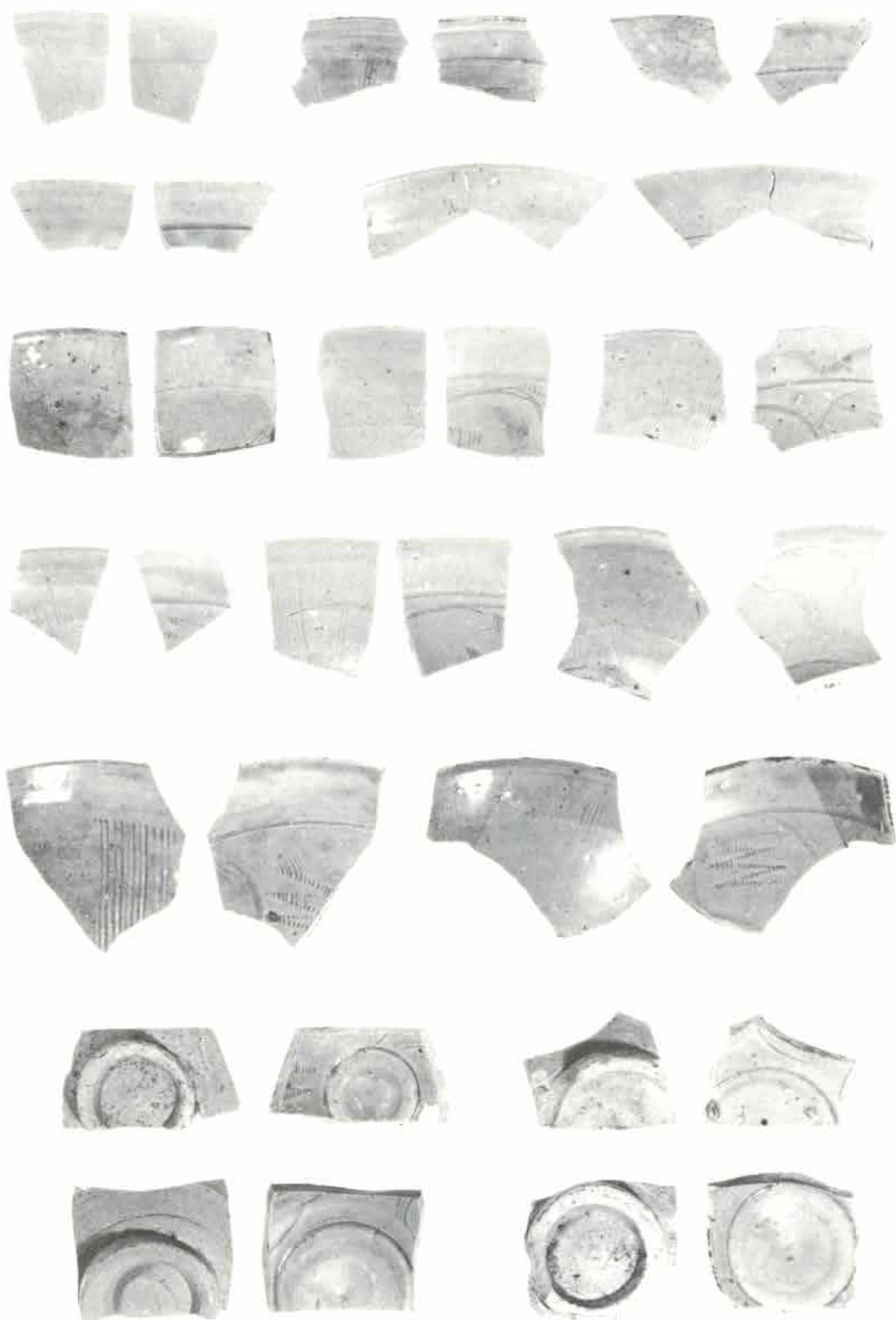


▲ 3. 鉄製品（不明）出土狀況

4. 銅錢出土狀況 ▶

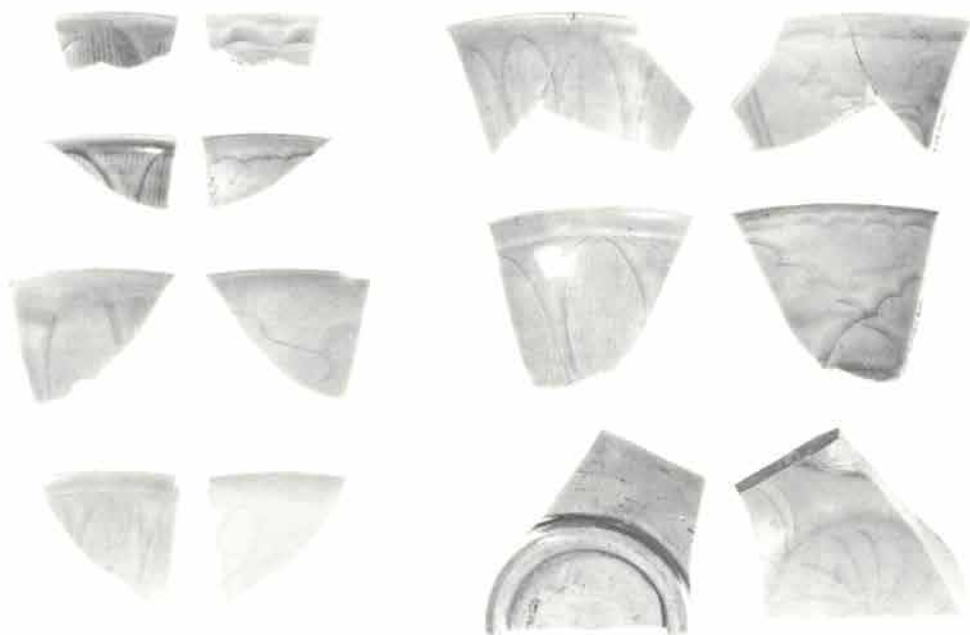




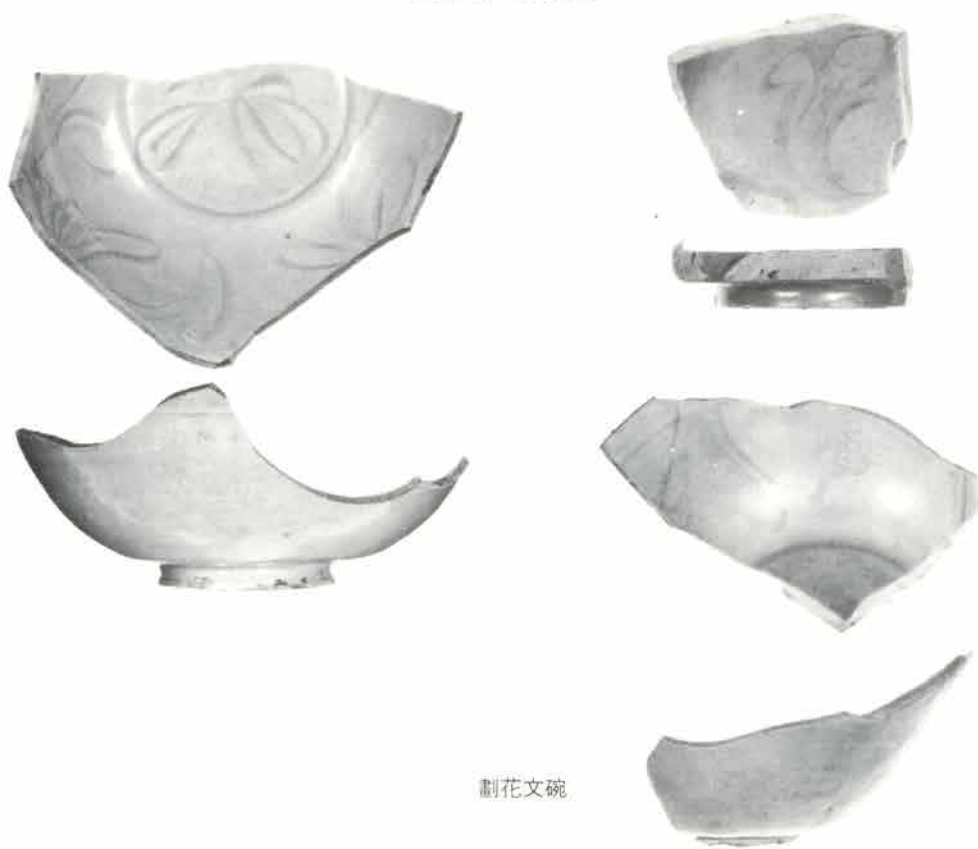


櫛描劃花文碗

青磁1

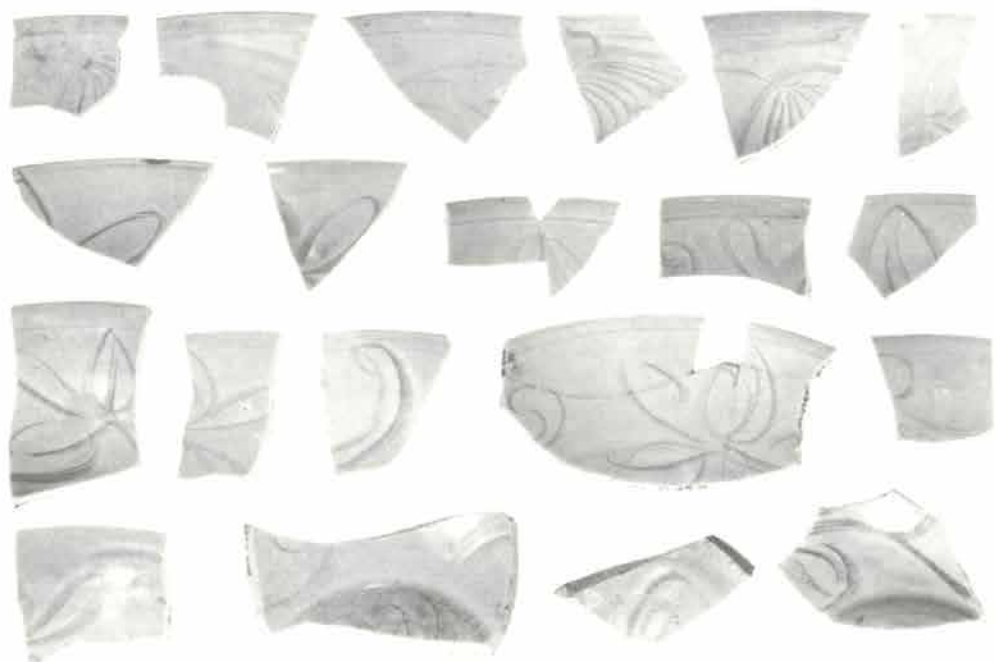


楡描蓮弁劃花文碗



劃花文碗

青磁



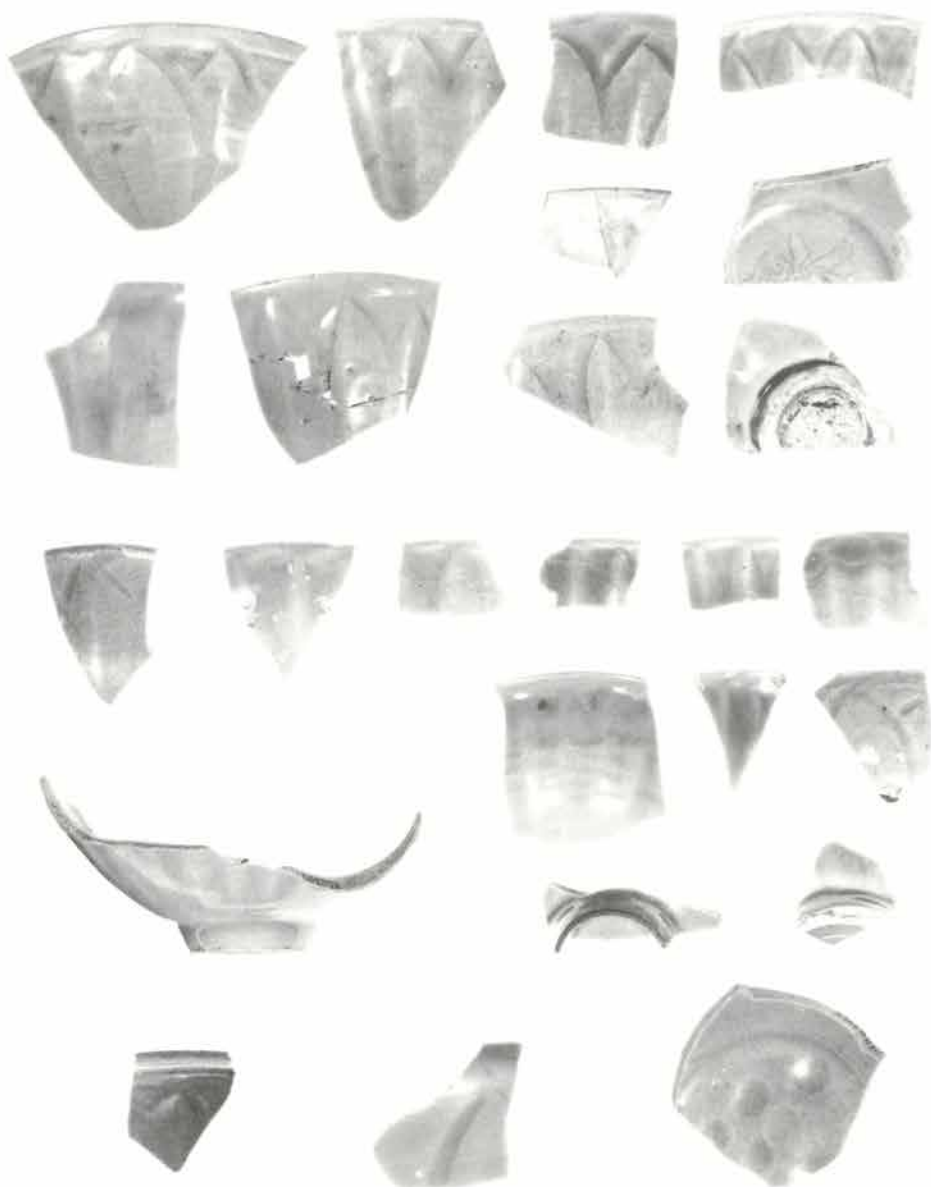
劃花文碗C-1



劃花文碗C-2



劃花文碗C-2

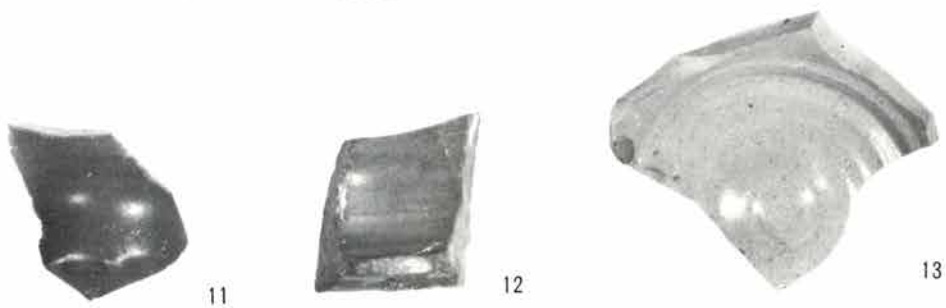
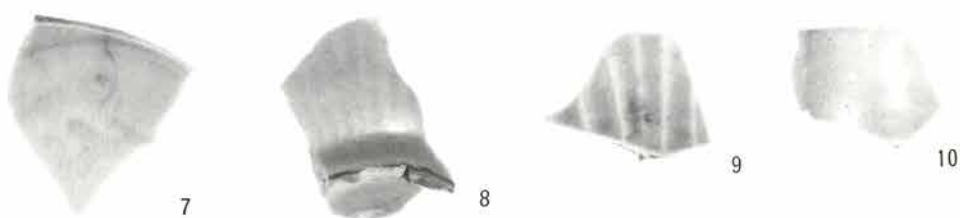


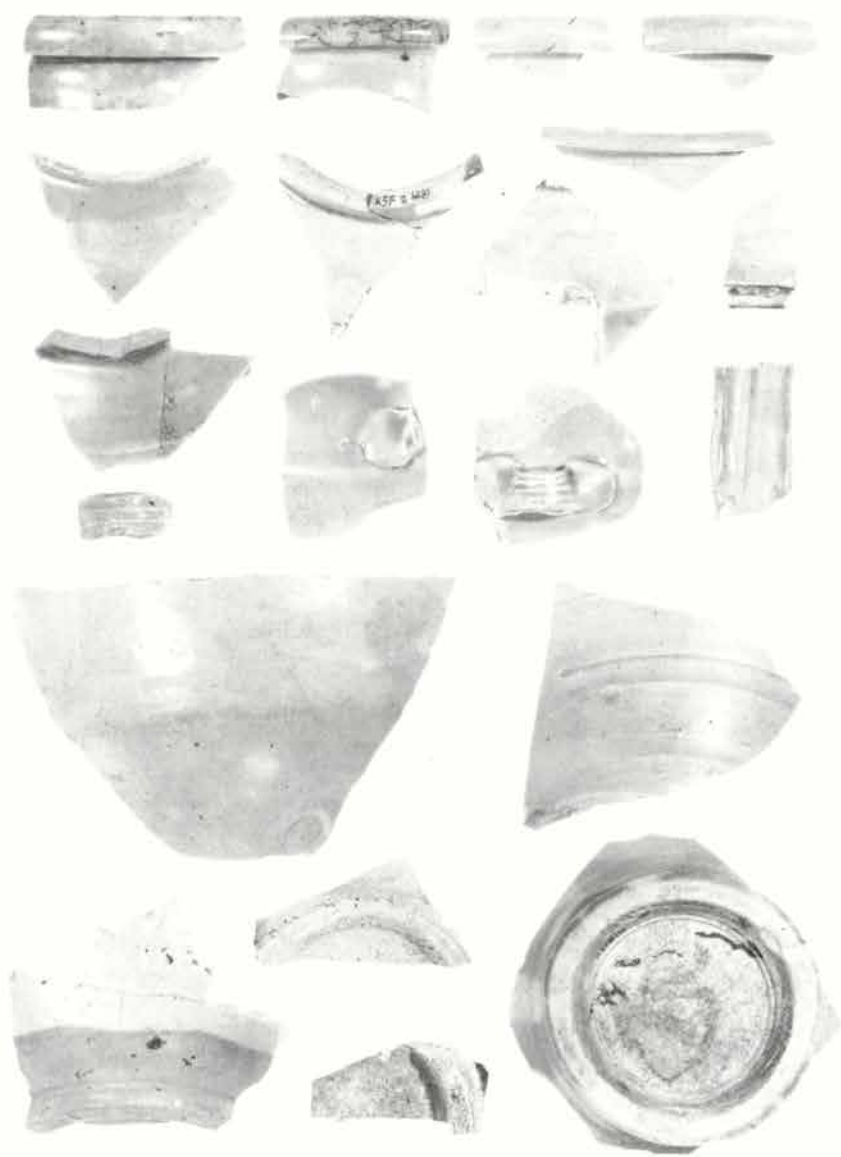
鍋・蓮弁文碗
青磁 4



無文碗

▲魚文皿

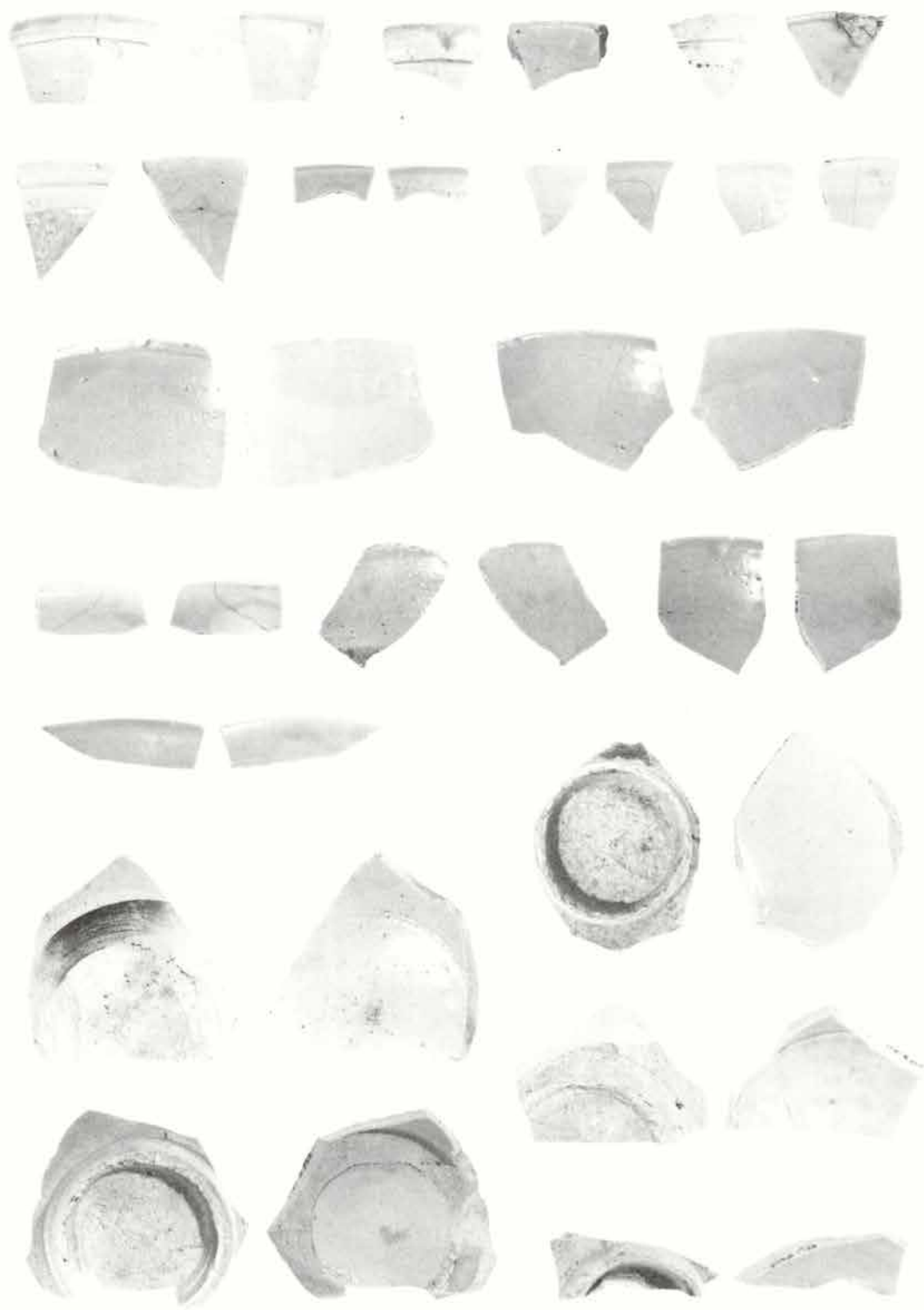




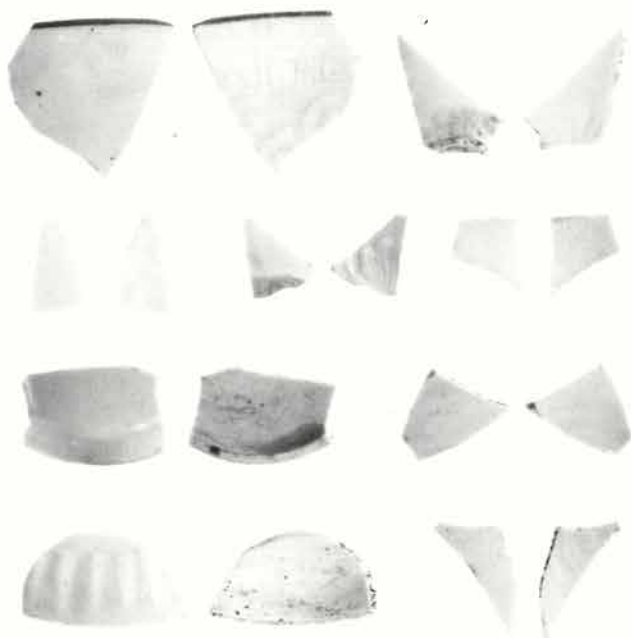
白磁四耳壺・水注類



白磁 四耳壺底部の墨書



白磁玉緣碗・端反碗



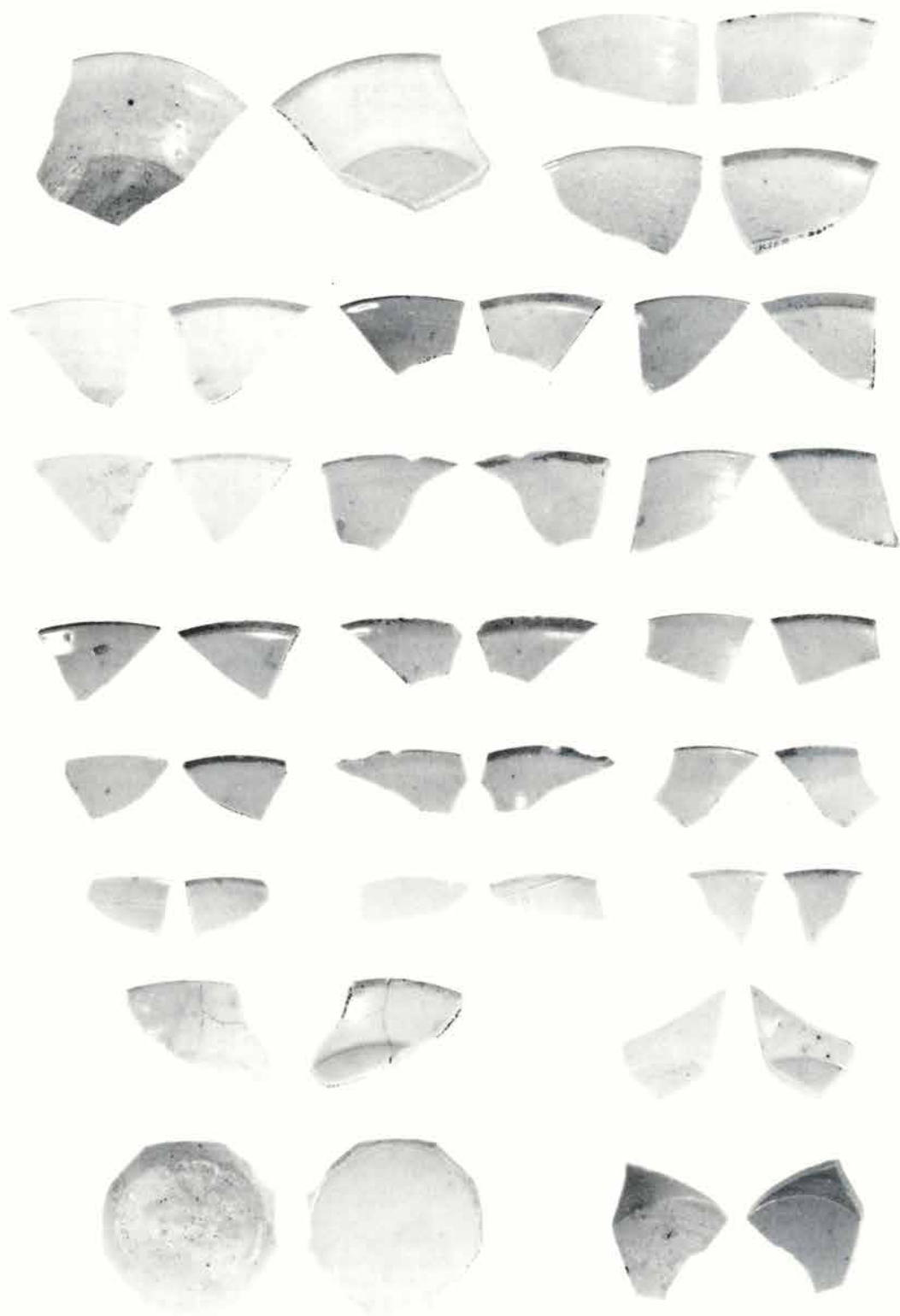
▲ 白磁高台付皿



白磁小物類



白磁口兀碗・皿



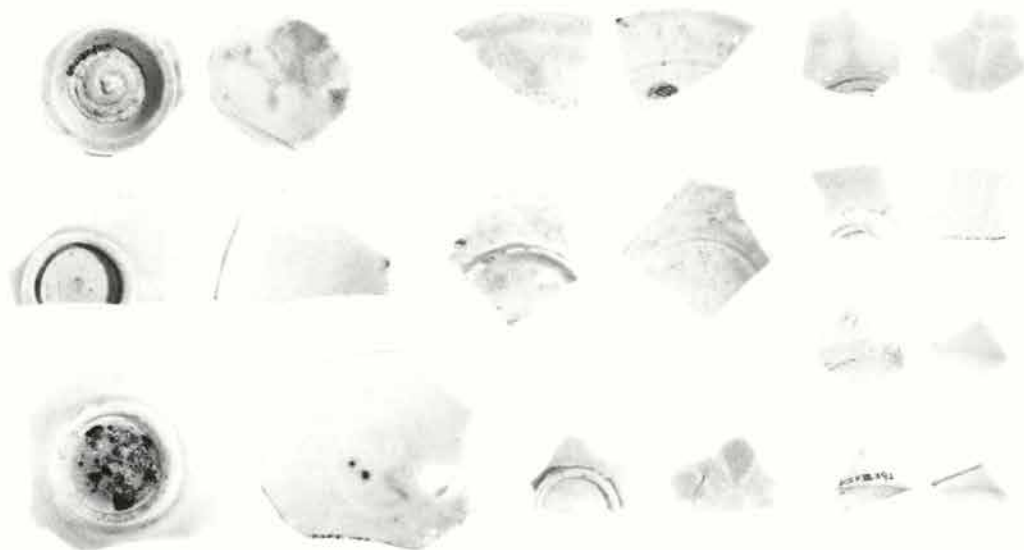
白磁口无皿



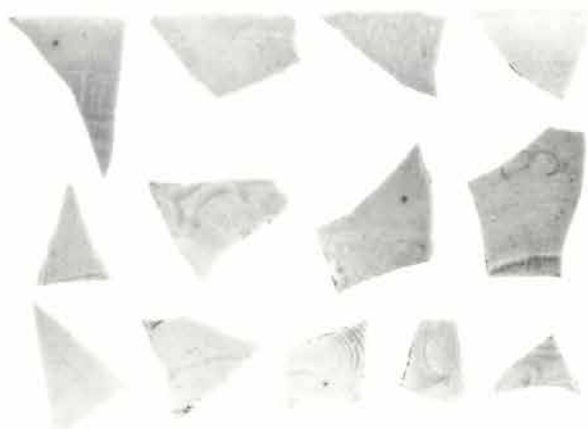
青白磁梅瓶



青白磁梅瓶蓋



青白磁碗・皿類



青白磁碗



青白磁小皿



青白磁小皿



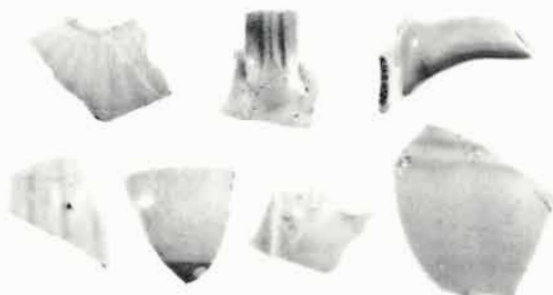
青白磁合子蓋

青白磁合子身





青白磁水滴



青白磁水注



青白磁小壺類蓋



青白磁小壺類



青白磁器台



▲ 明代の白磁皿



▲ 白磁鉢



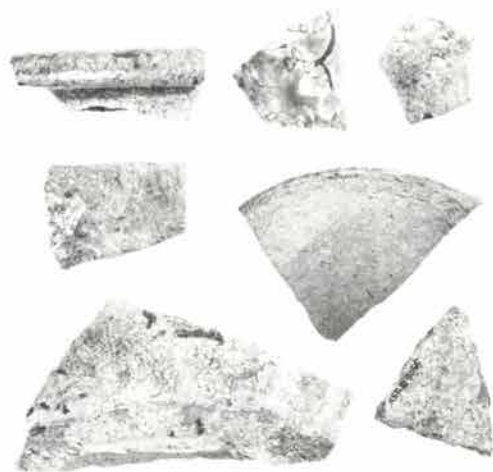
青磁釉等雑釉壺類



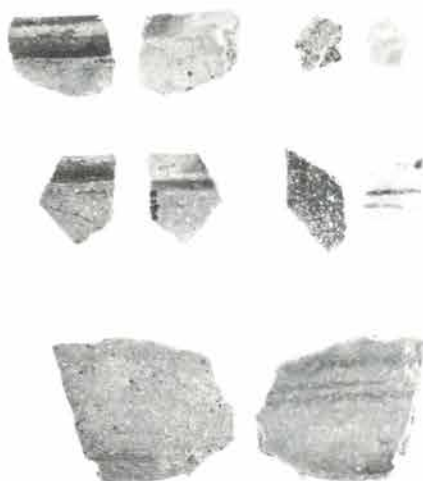
天目茶碗



白磁鉄絵鉢



緑釉・二彩



黄釉・黄釉鉄絵

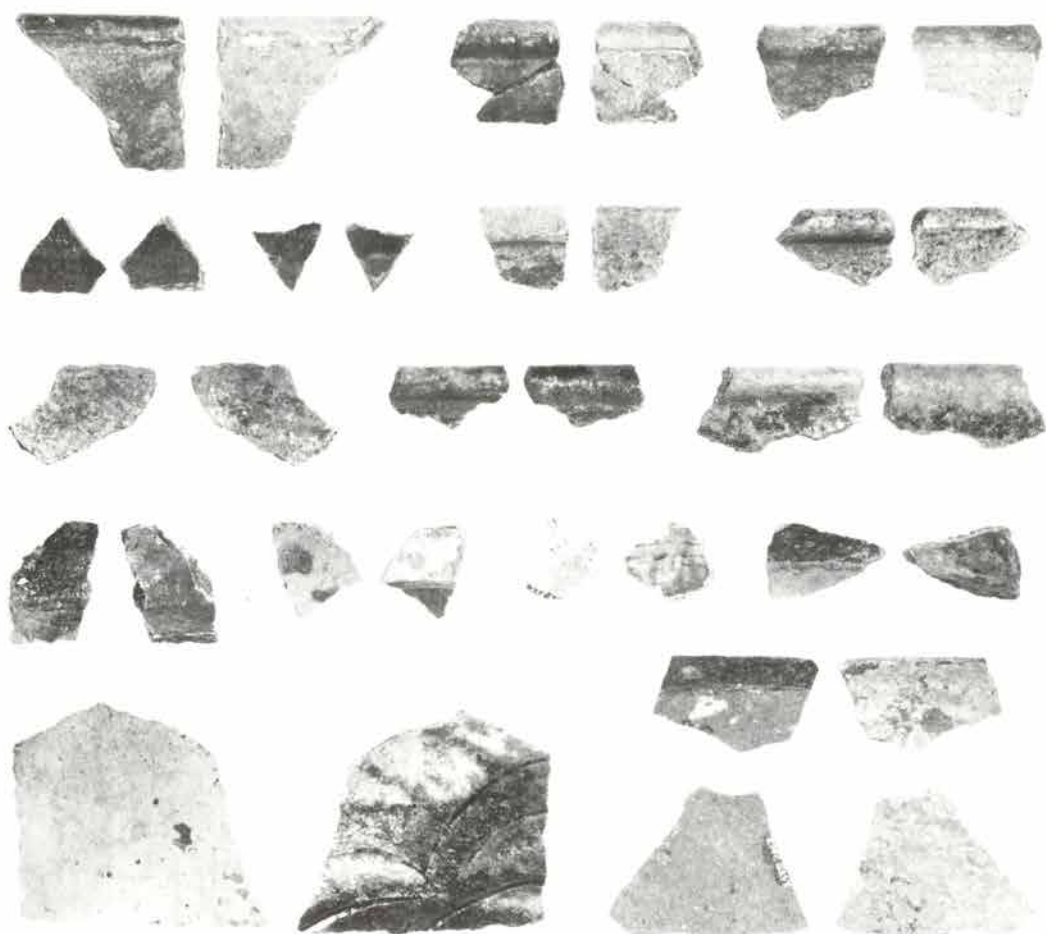


その他の舶載陶磁器

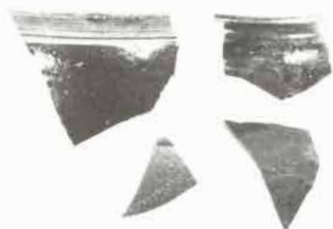


黄釉盤

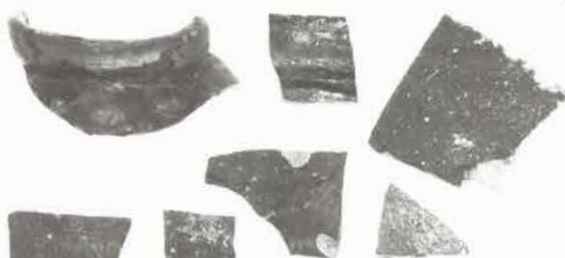
黄釉鉄絵



緑釉・二彩



褐釉茶入類



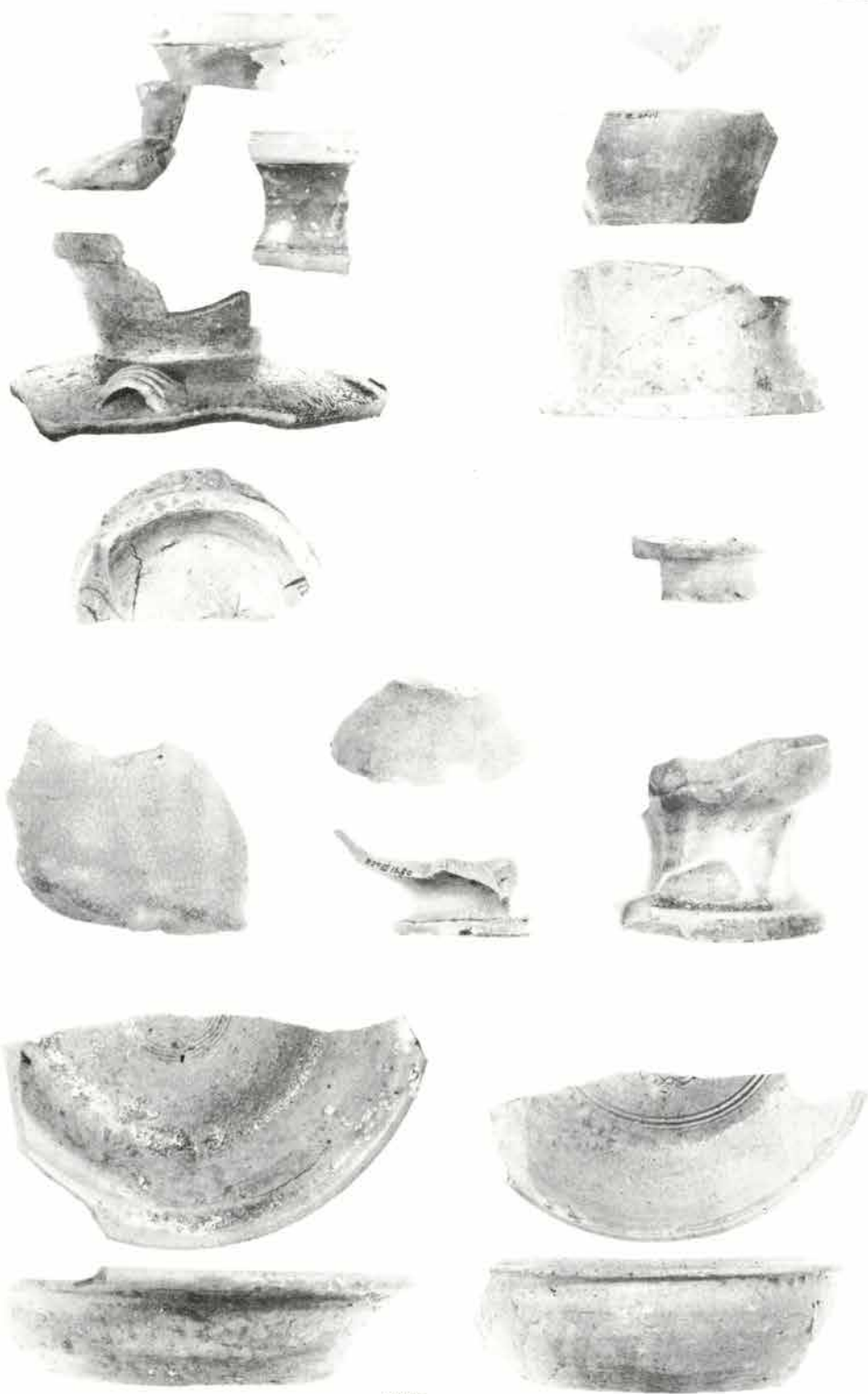
褐釉陶壺類



褐釉陶甕類



妬器植木鉢





黄瀬戸



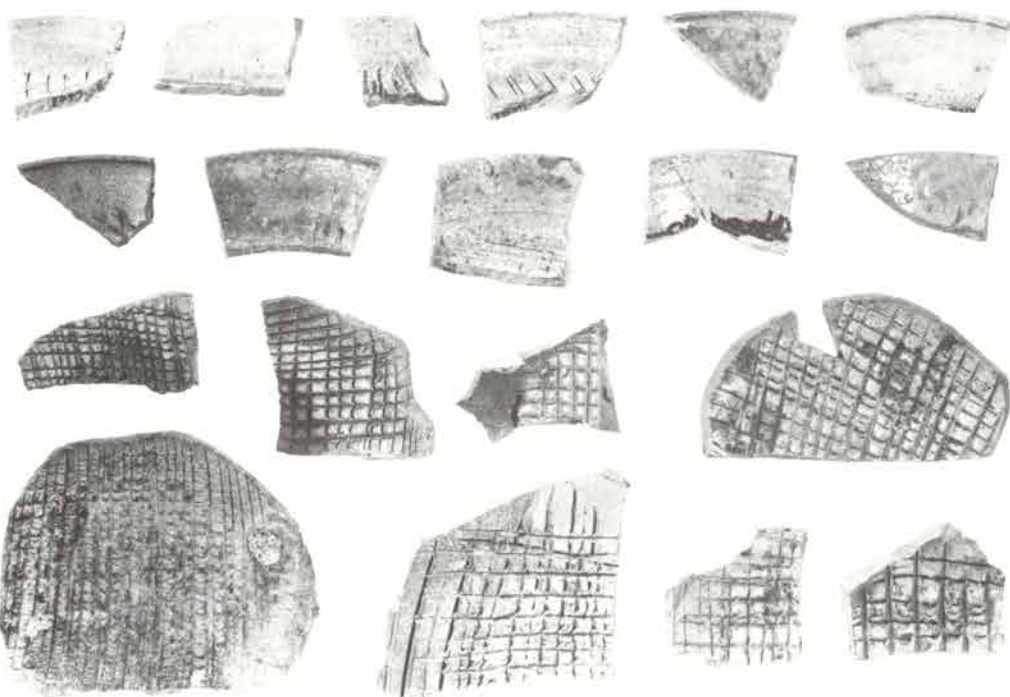
洗・盤・鉢
瀬戸2



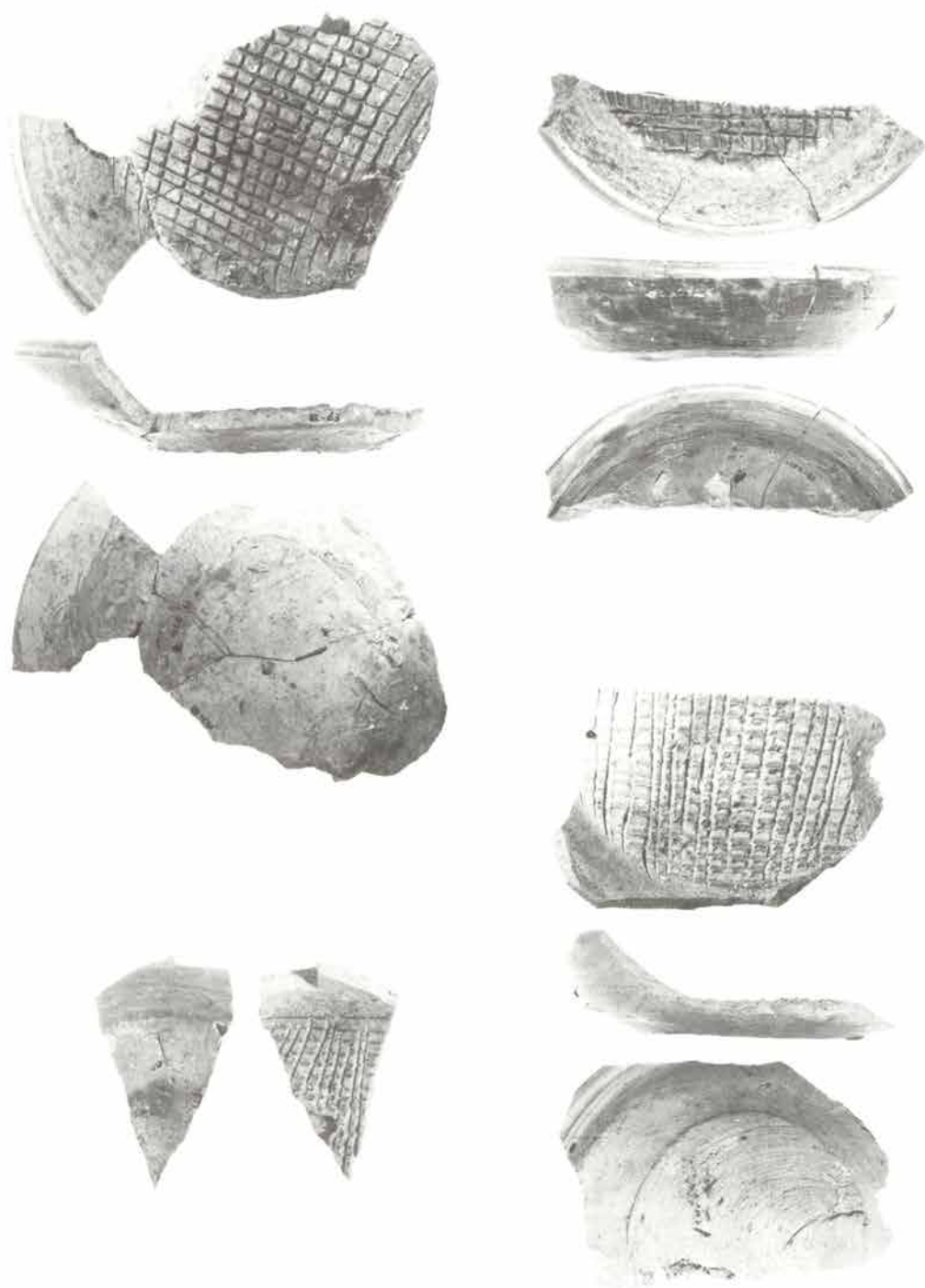
盤



底部卸目皿



卸皿



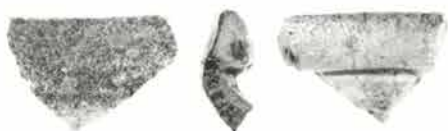
卸皿



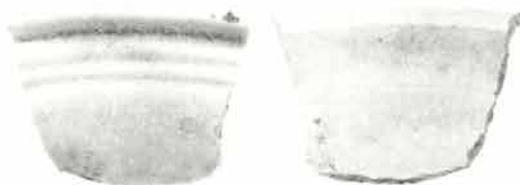
灰釉碗



合子



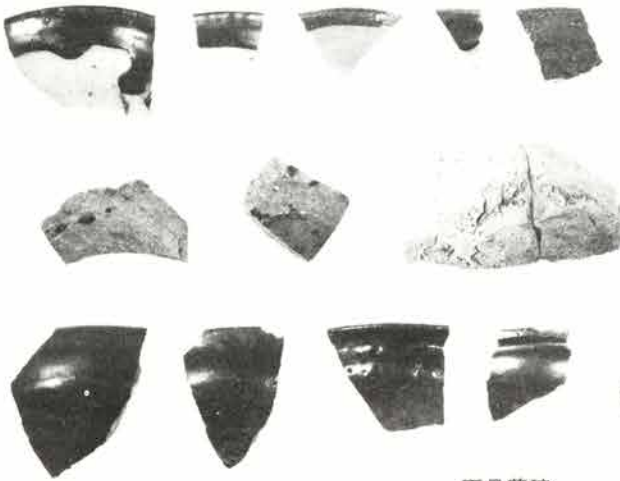
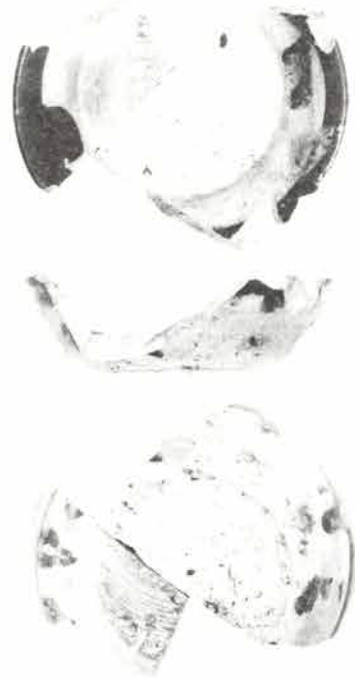
不明品



片口



仏華瓶



天目茶碗

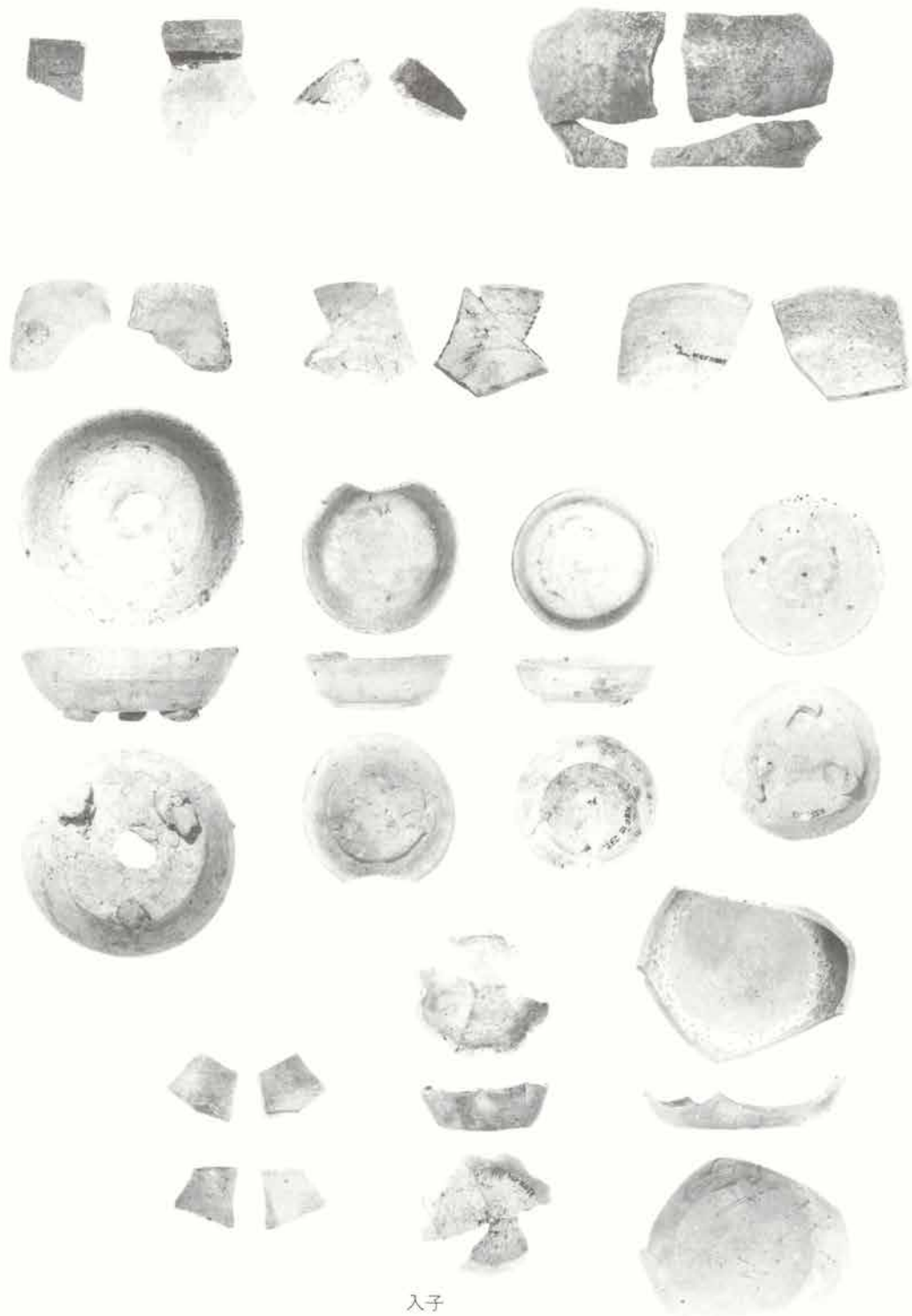


鉄釉碗

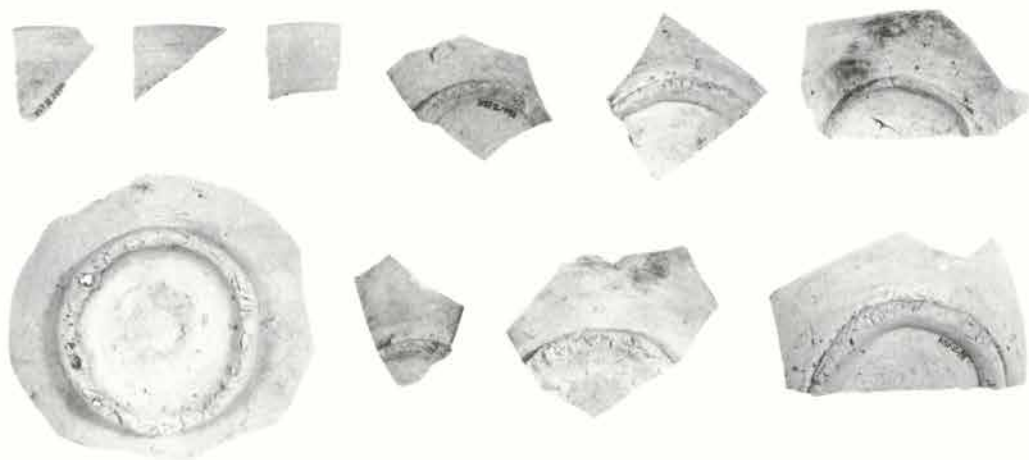


合子蓋

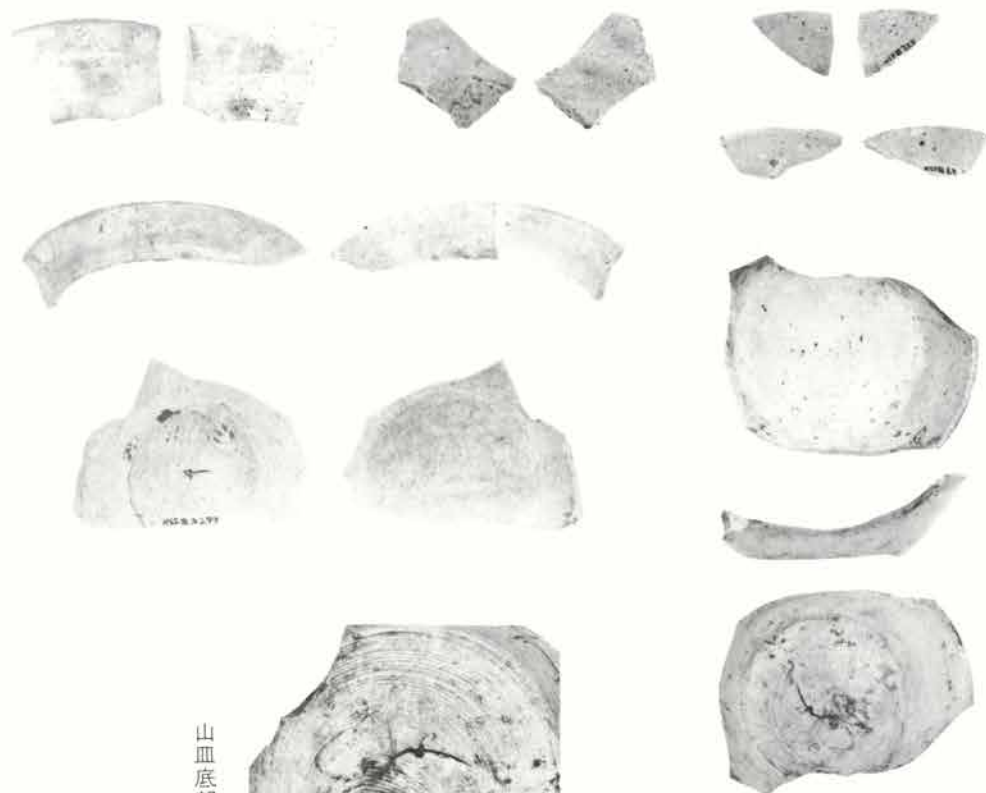
瀬戸6



入子



精胎の山茶碗



山皿
底部の墨書

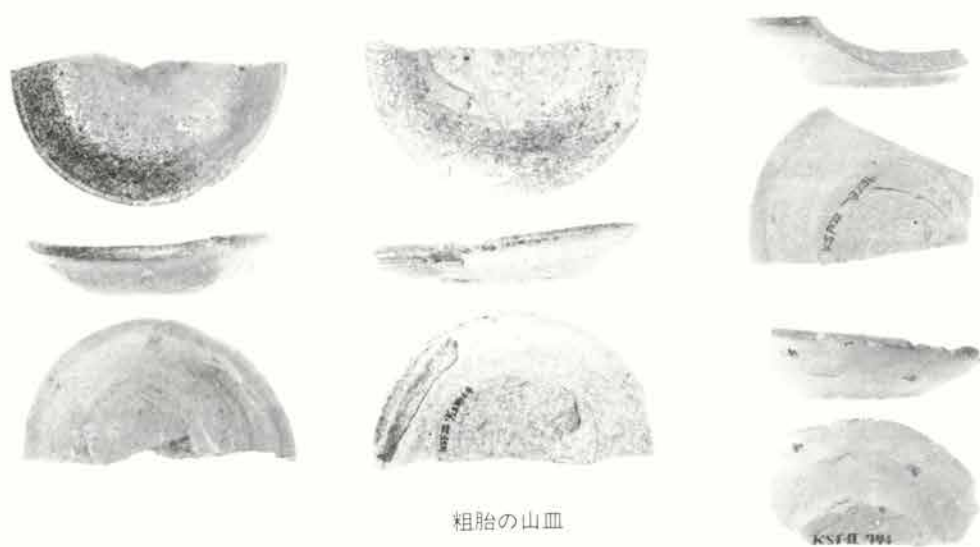
精胎の山皿



粗胎の山茶碗



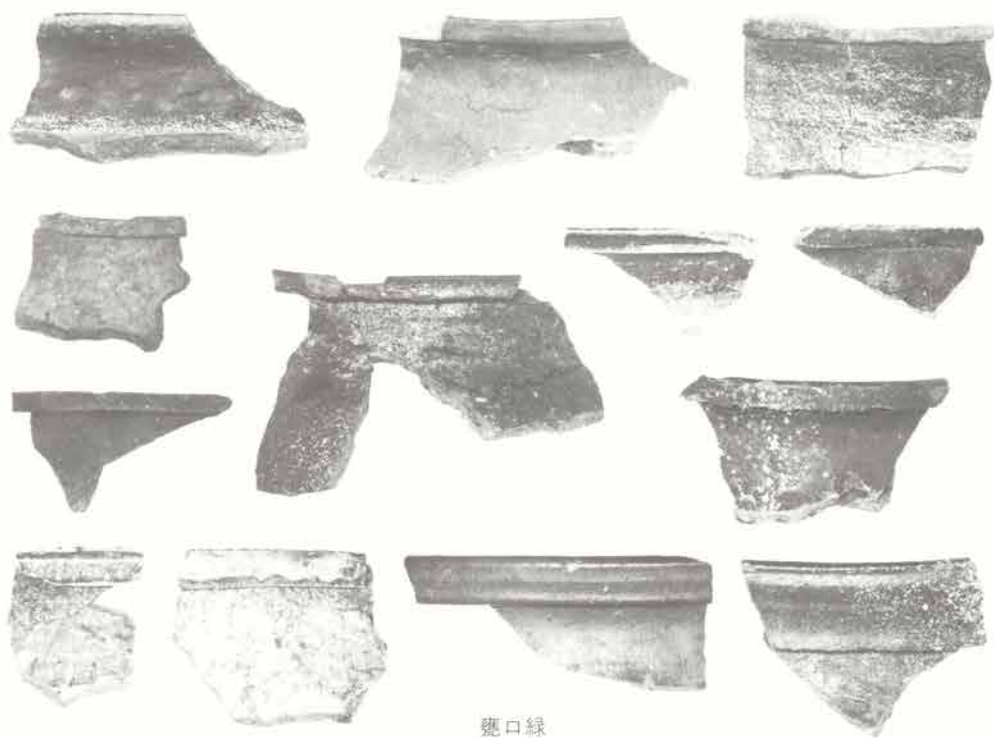
粗胎の山皿



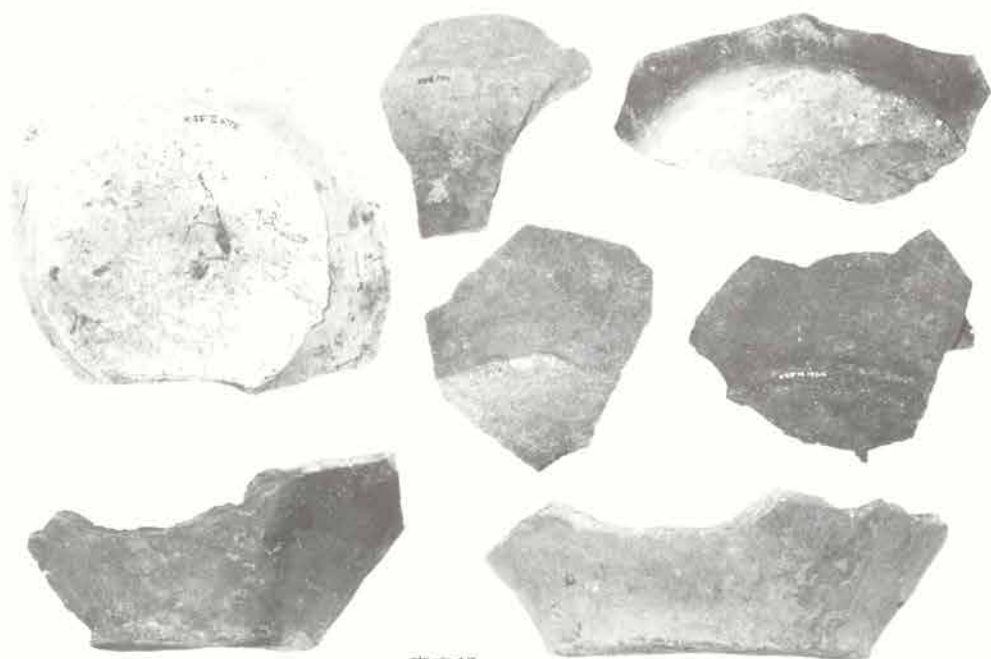
粗胎の山皿



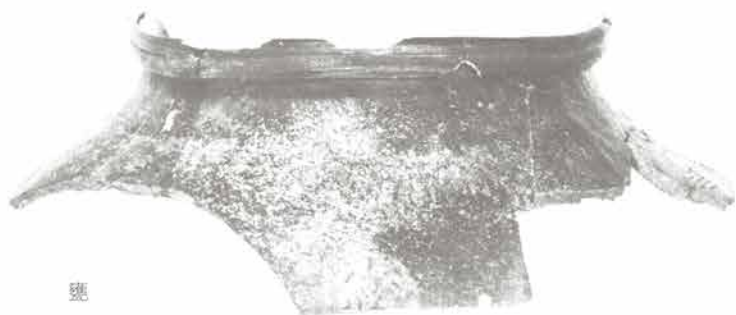
山茶碗窯系捏鉢



甕口縁



甕底部



甕



壺

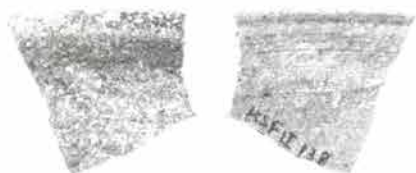
高口壺 ▼



常滑 2



壺



碗



二ね鉢



甕



鉢



こね鉢

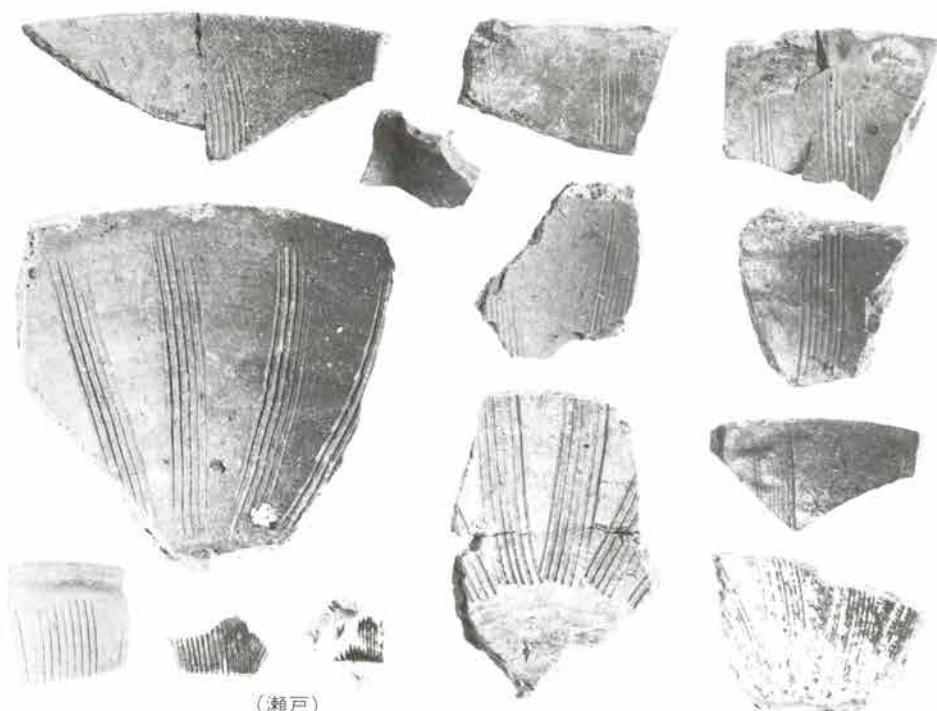


渥美壺



坏

産地不明品



(瀬戸)

播鉢



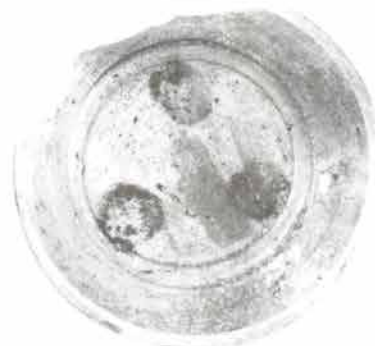
東播系須恵質捏鉢



信楽広口壺



常滑系卸皿



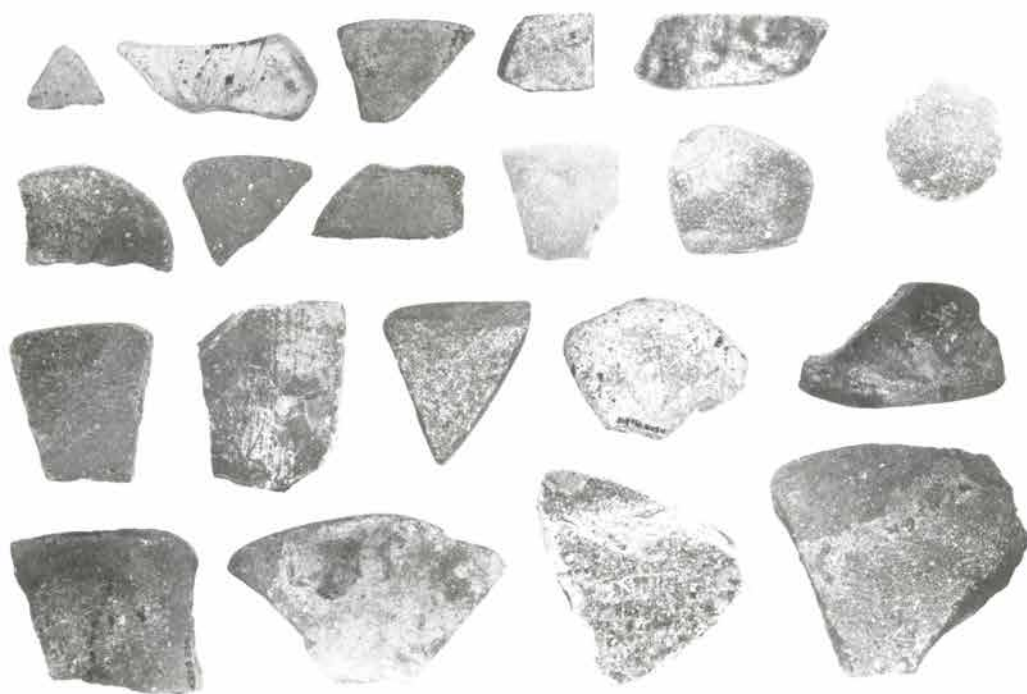
志野皿



亀山風格子印目のある陶片



産地不明の須恵質陶器



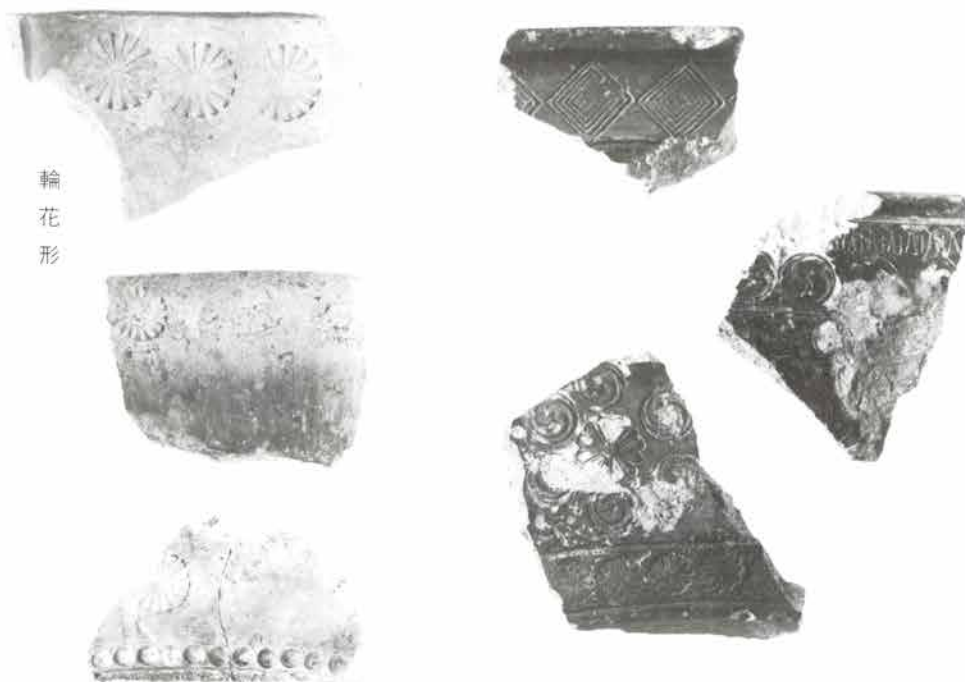
研磨痕のある陶片



瓦質鉢形

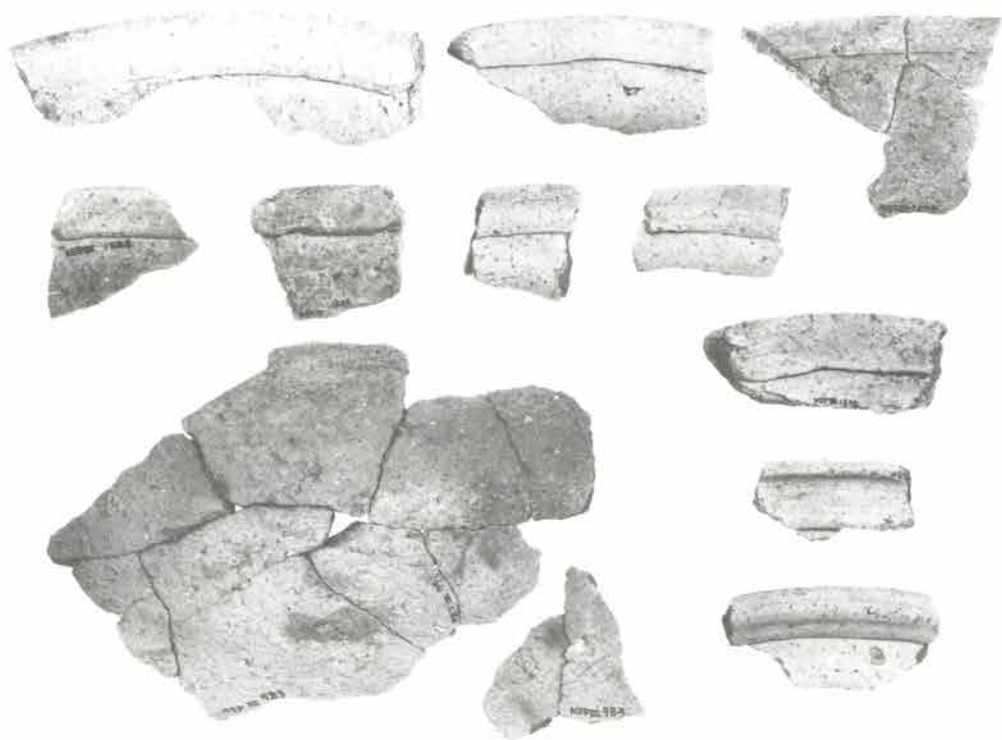
脚つき

瓦器質



輪
花
形

手埴り



伊勢系土鍋



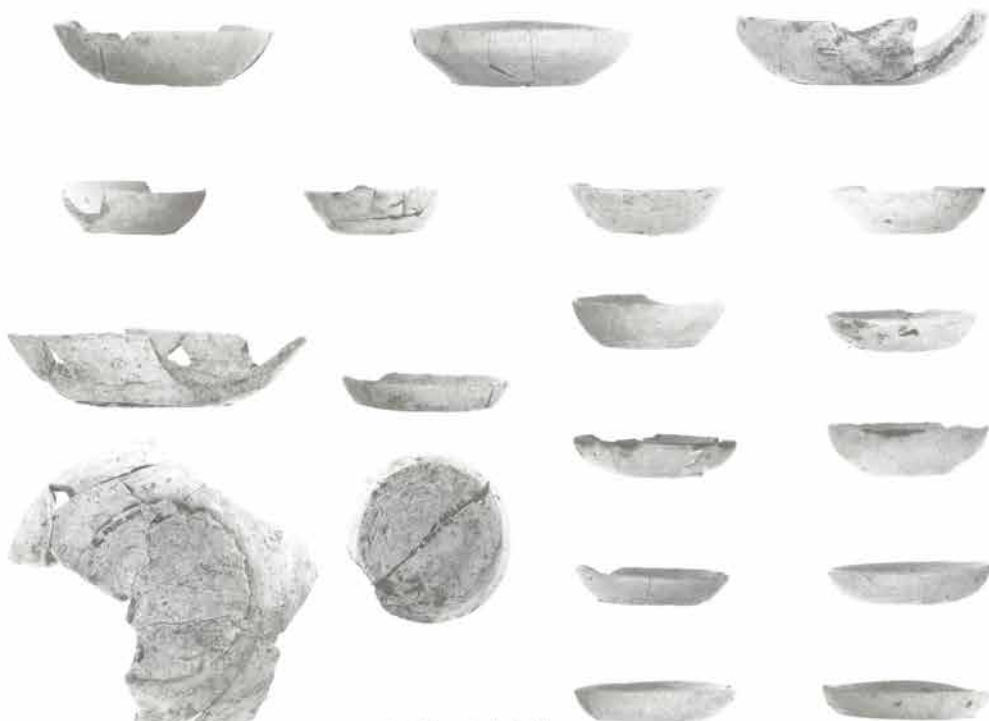
羽釜・鍔釜類



1群 かわらけ



2群 かわらけ



3,4群 かわらけ

かわらけ(1)



6群 大皿



6群 小皿



5群 大皿



5群小皿

かわらけ(3)

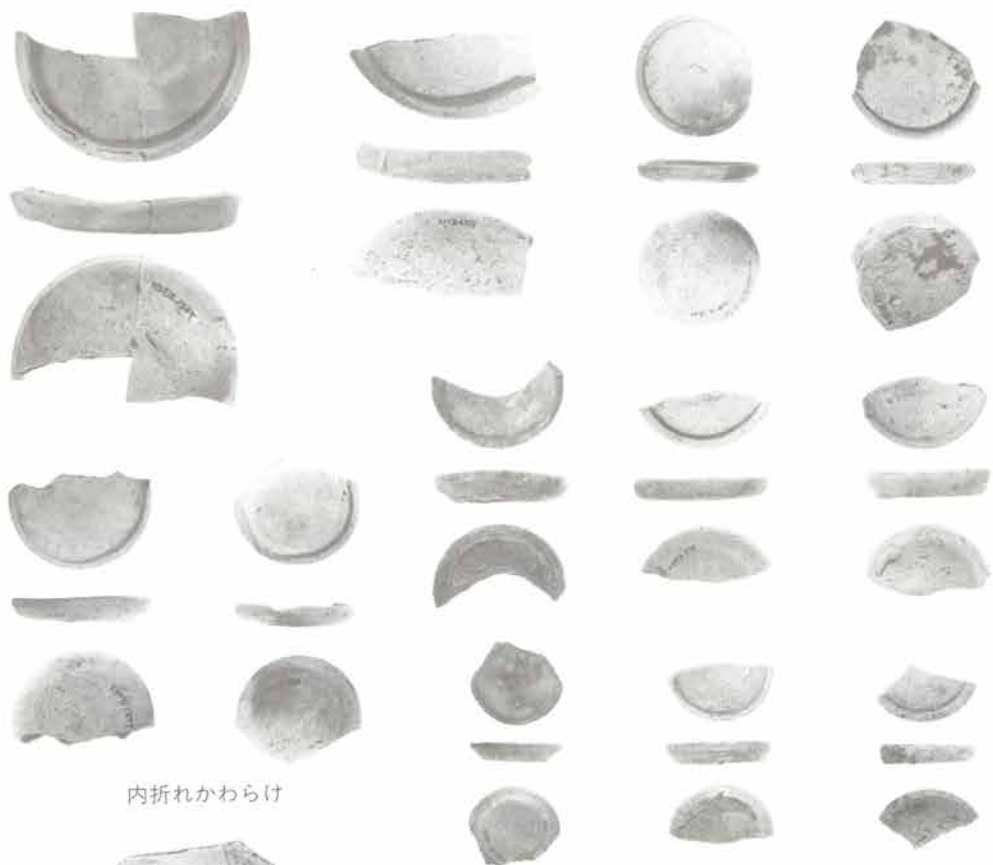


5群 大皿

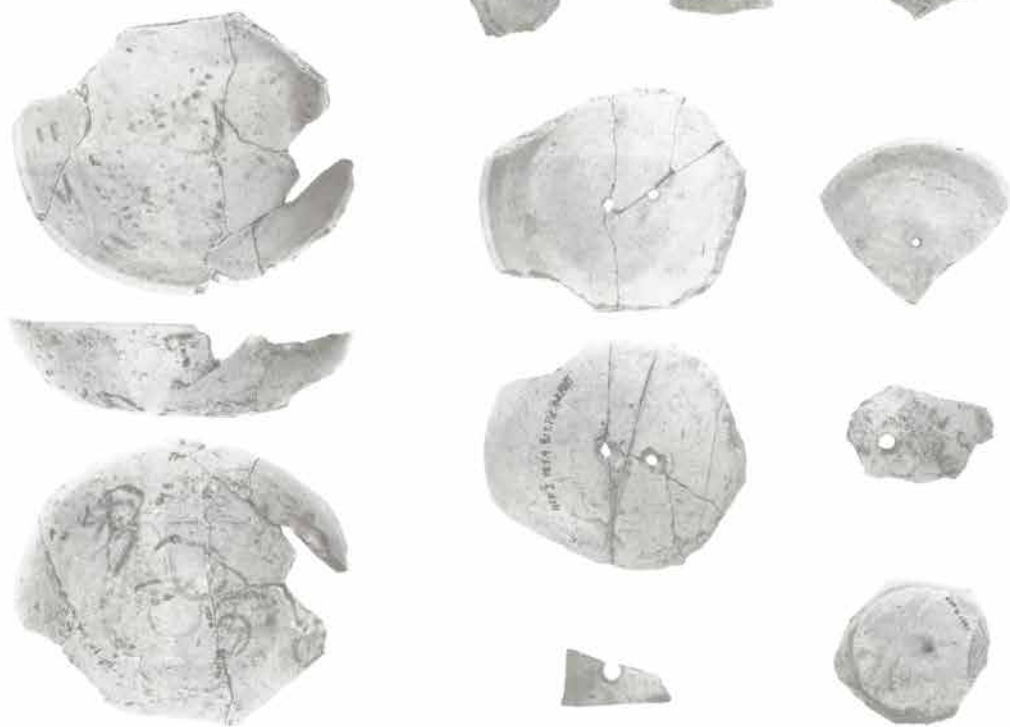


5群 小皿

かわらけ(4)



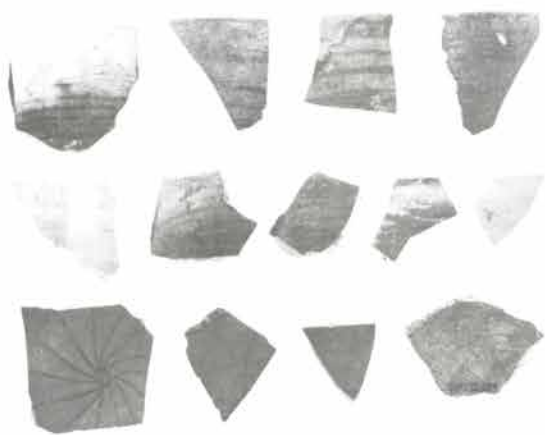
内折れかわらけ



墨書かわらけ

かわらけ (5)

穿孔かわらけ

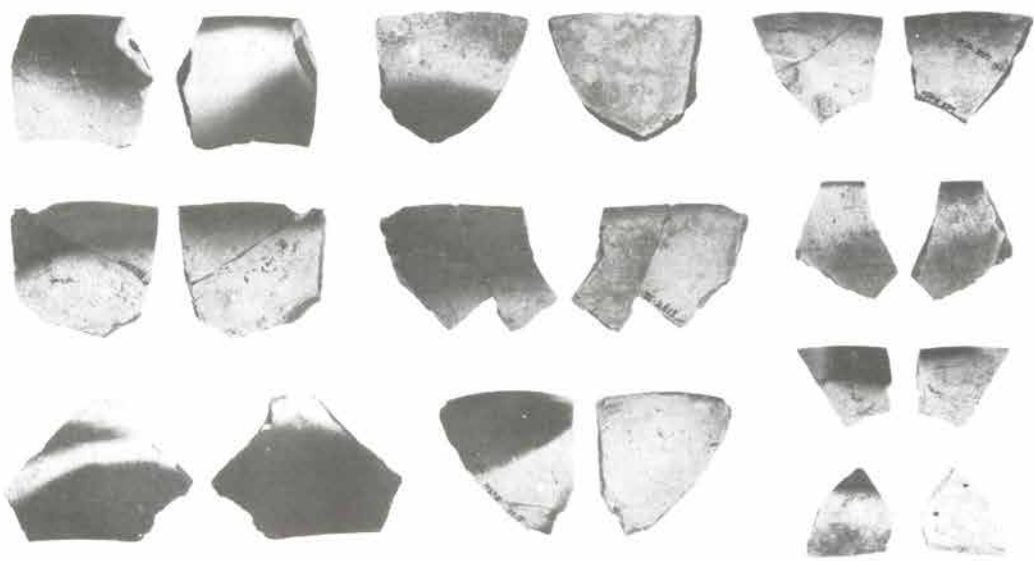
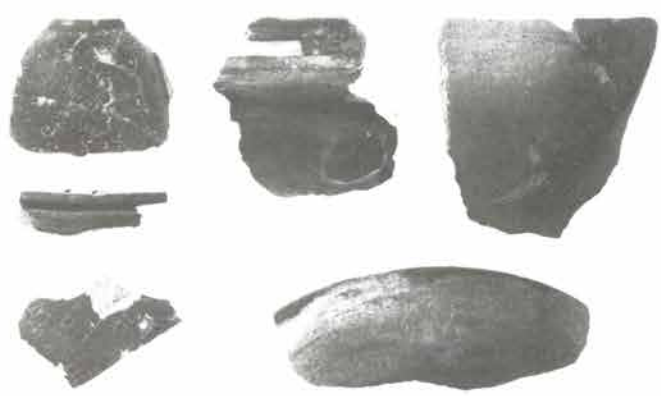


瓦
器
皿

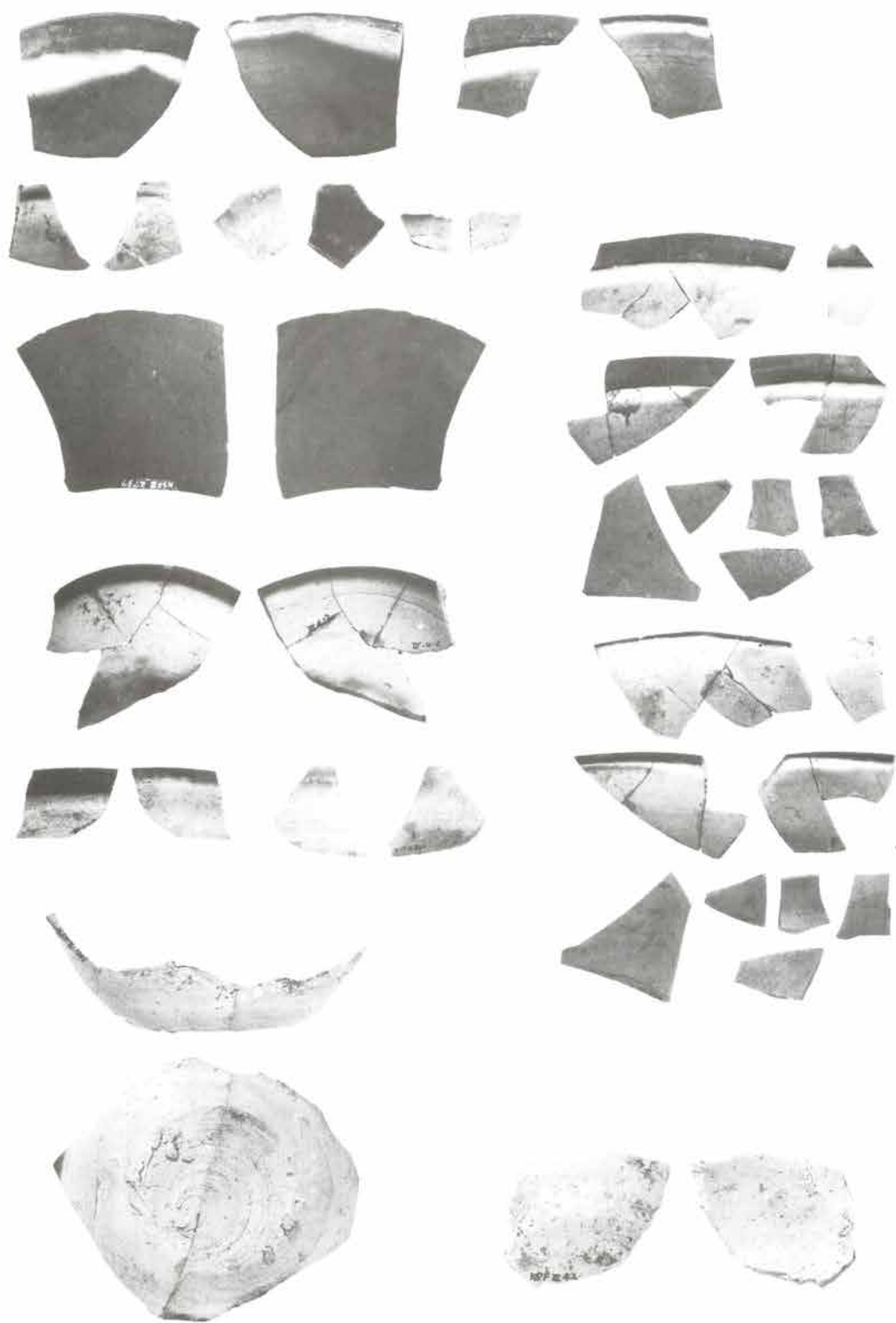
瓦器碗



瓦器質土器類



瓦器質黑綠皿



瓦器質黑緣皿



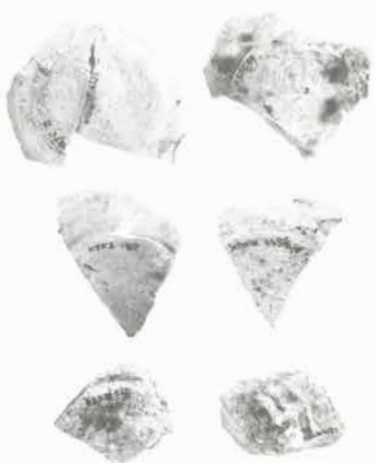
白かわらけ (手づくね) 大皿



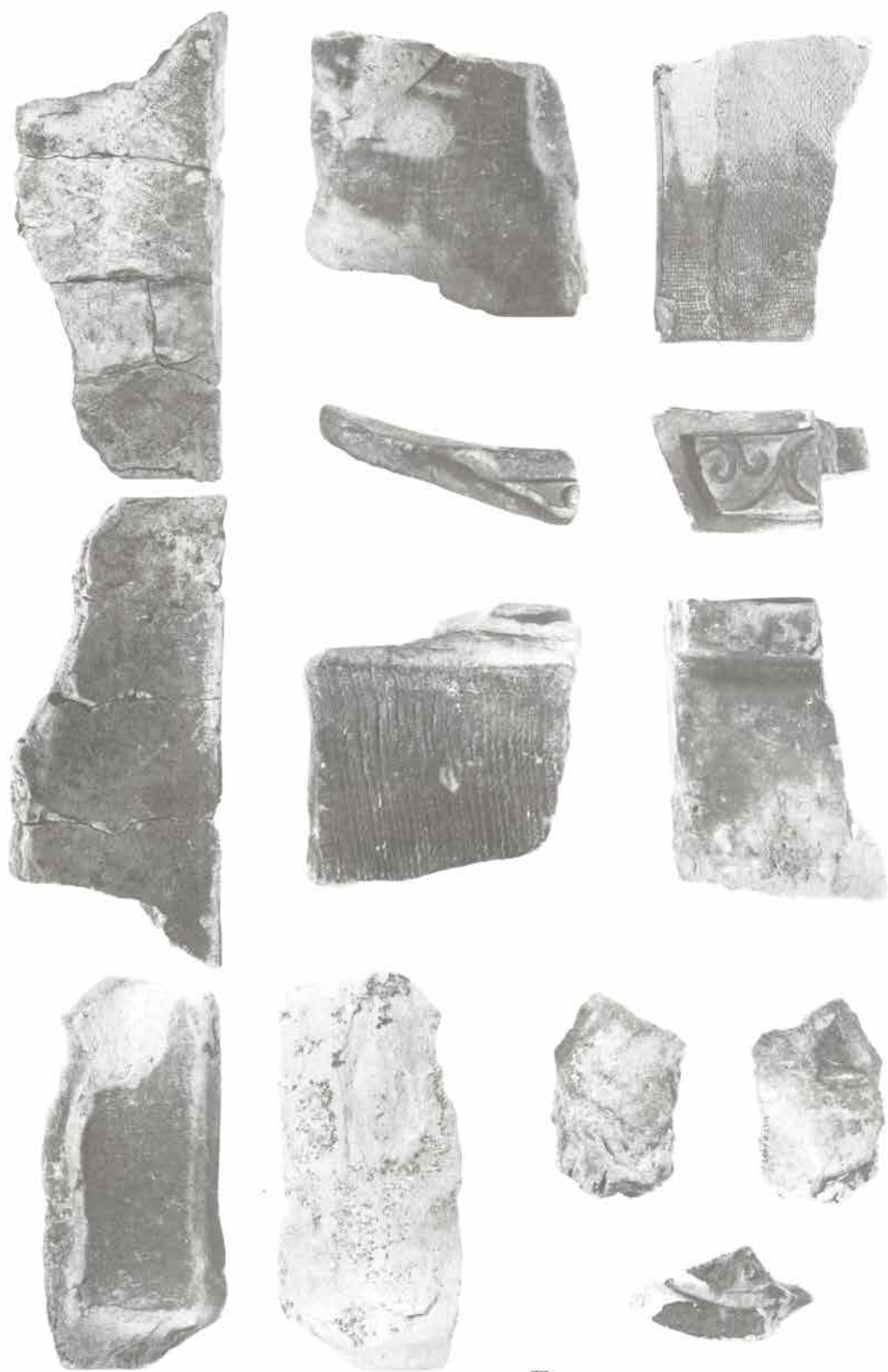
白かわらけ (手づくね) 小皿

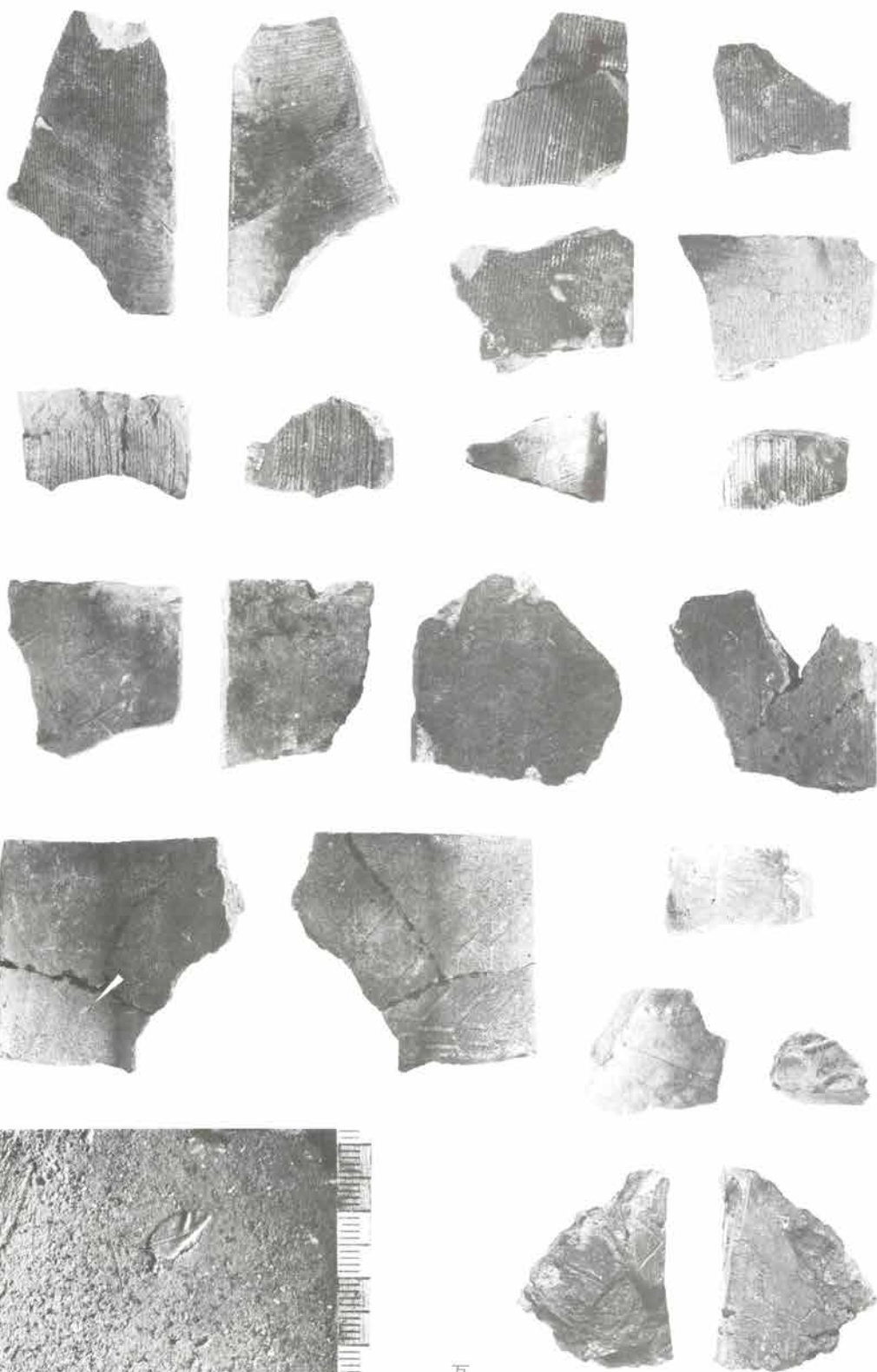


白かわらけ



白かわらけ (ロクロ成形)







小型壺

小型無頸壺

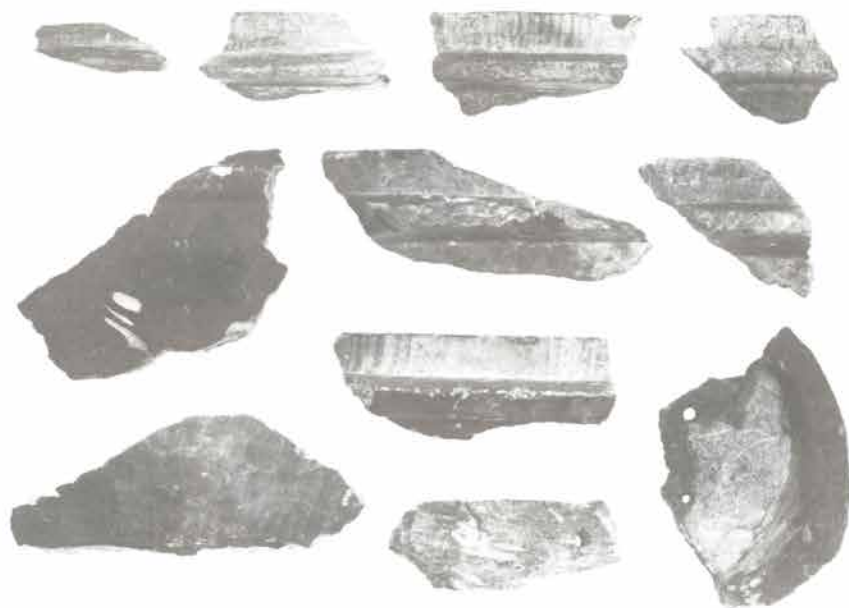


円板



土錘

土製品



滑石鍋



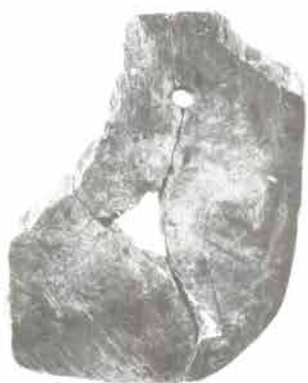
滑石鍋加工未成品



温石



滑石鍋転用品



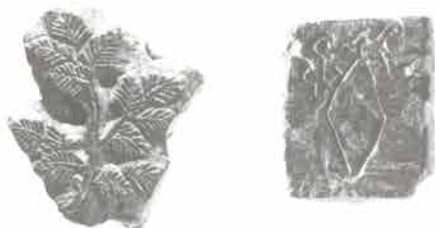
陶硯



滑石鍋転用硯



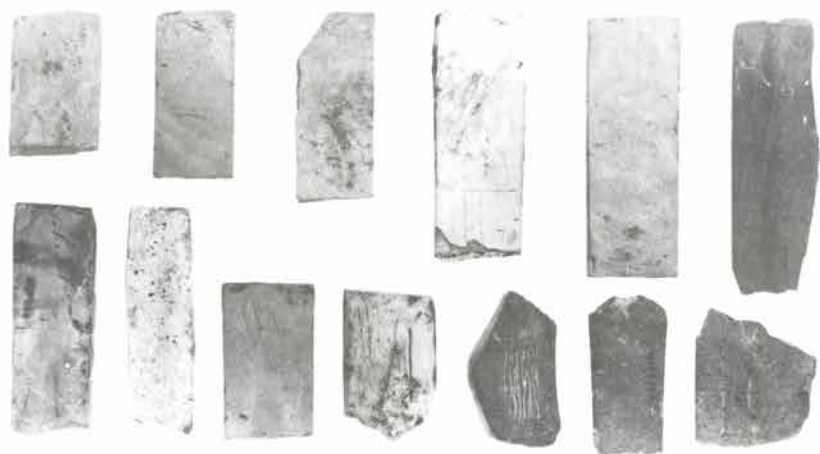
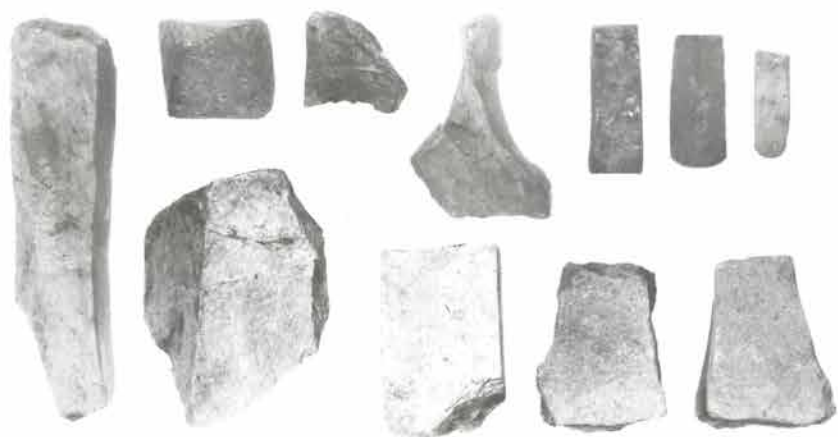
線刻戯画のある滑石



滑石スタンプ



碁石



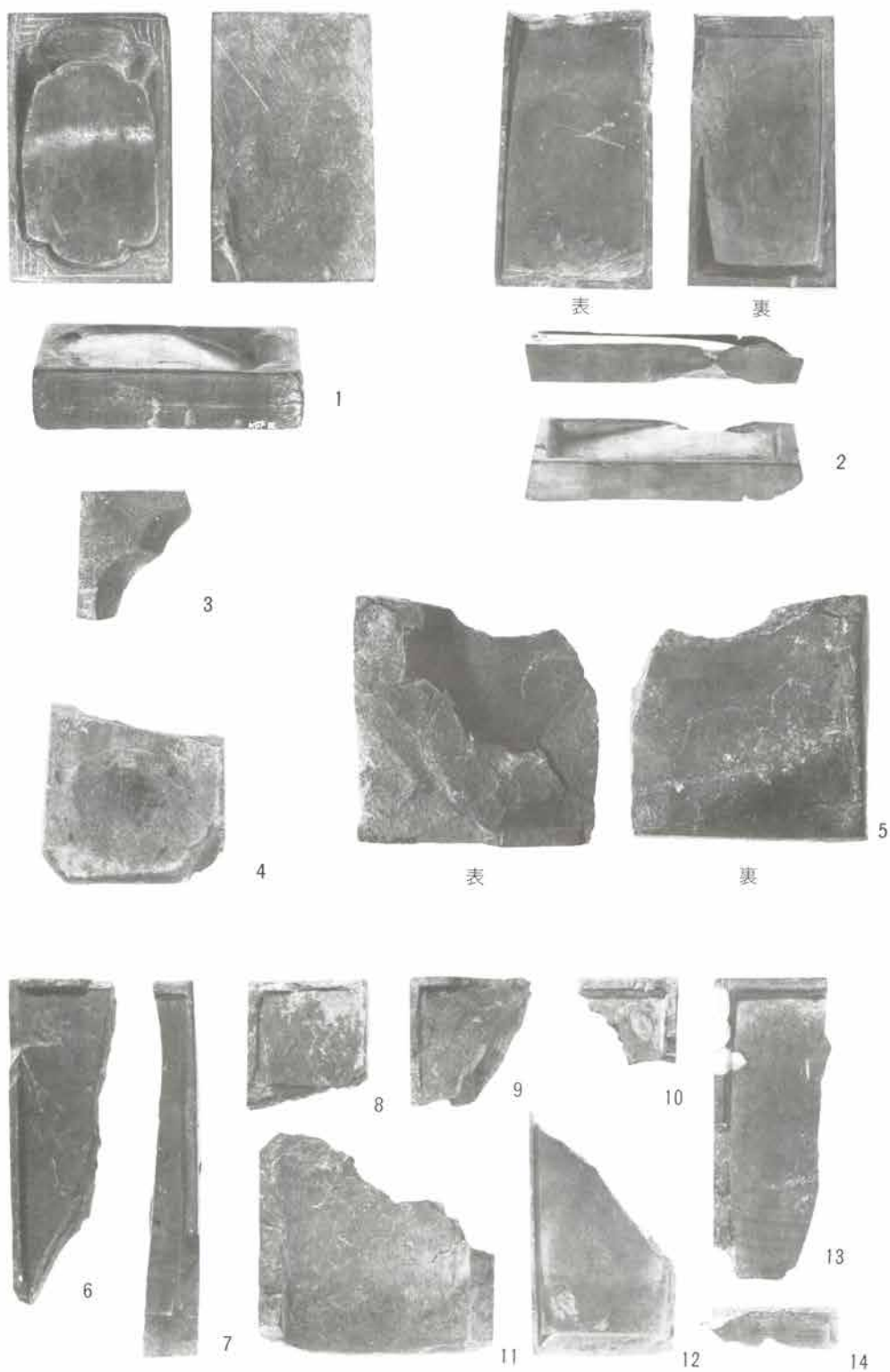
砥石



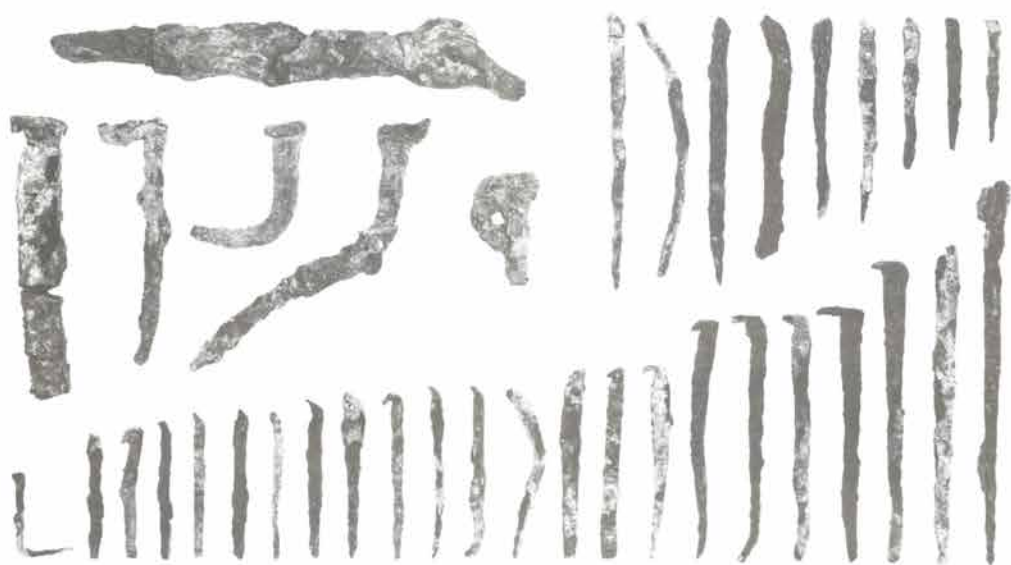
燧石

軽石

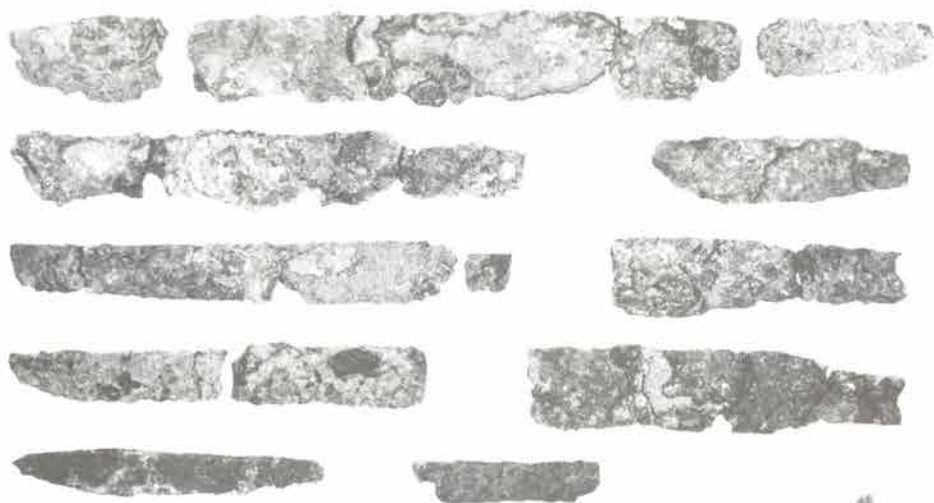
石製品 (3)



石製品 (4) 硯 (両面硯 2, 4, 5)



掛け金・釘



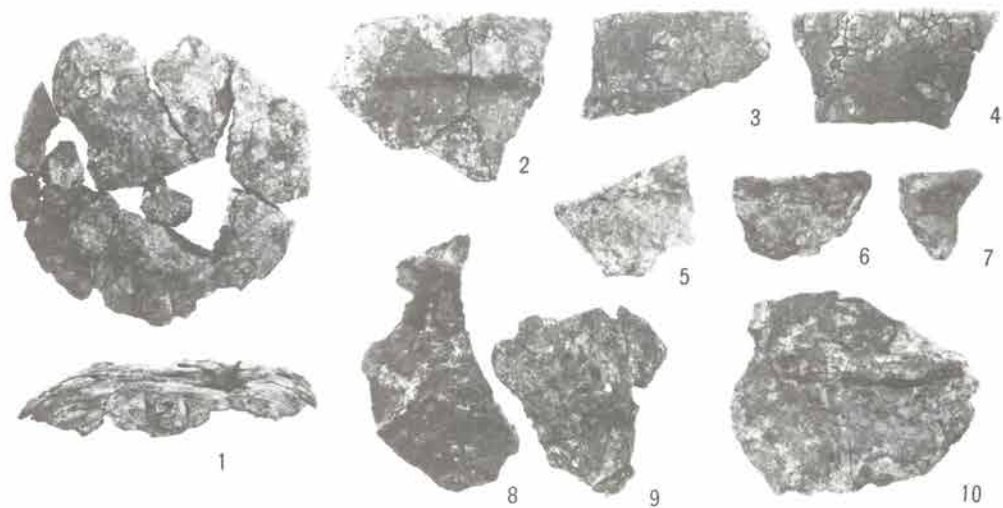
刀子



▲ やりがんな

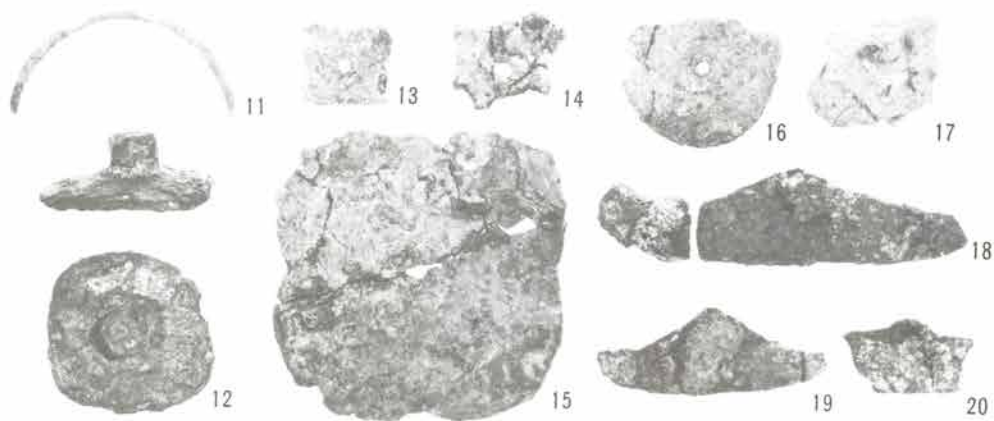
鉤

くさび



1 鉄蓋

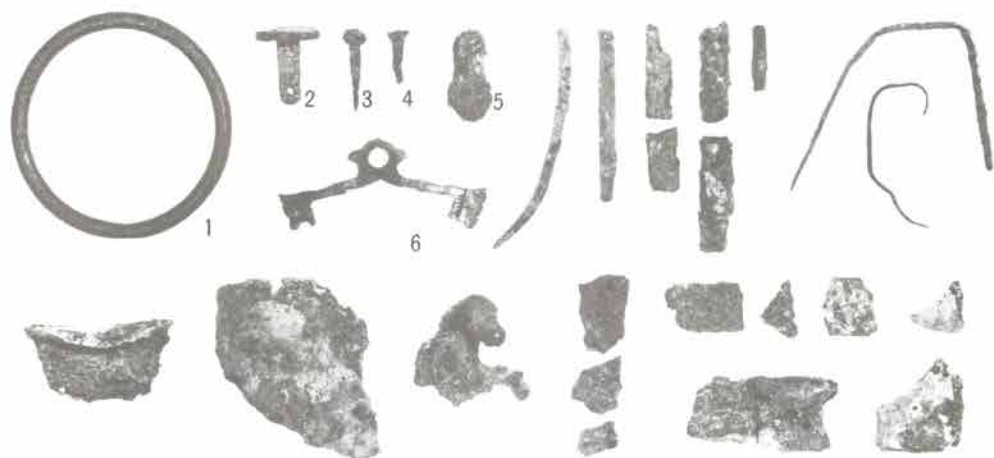
2~10 鉄鍋



12 鉄蓋

16, 17 紡錘車

18~20 燧金

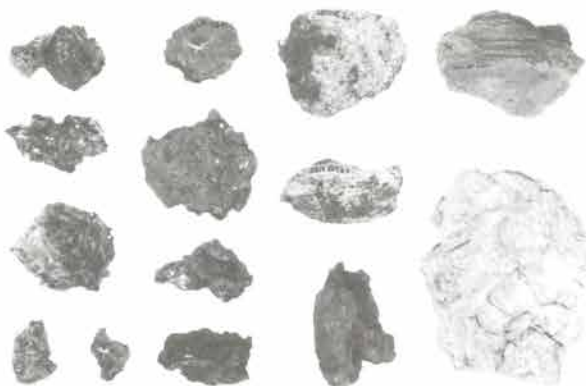


青銅製品 1 環, 2~4 びょう, 5 足, 6 飾具

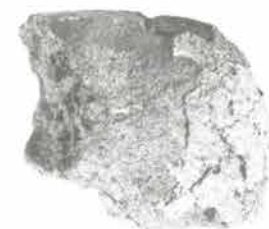
金屬製品 (2)



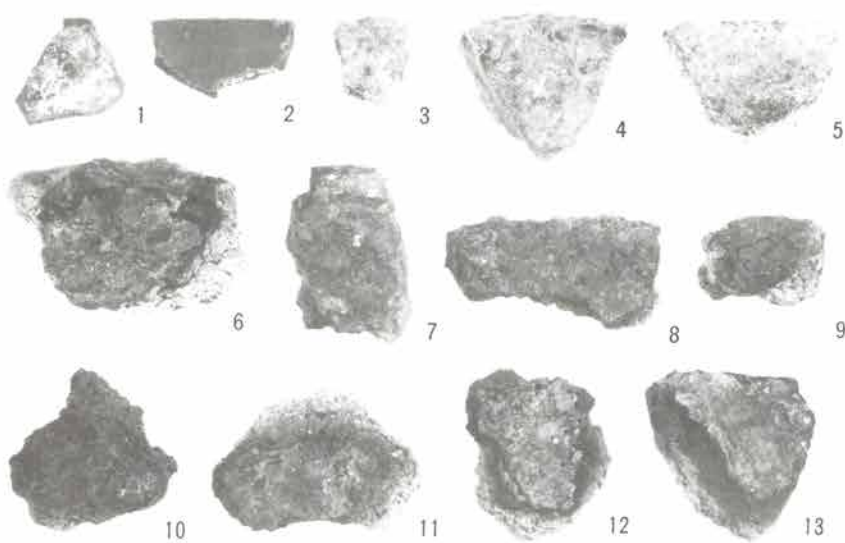
▲鞆の羽口



▲スラッグ



▲溶範



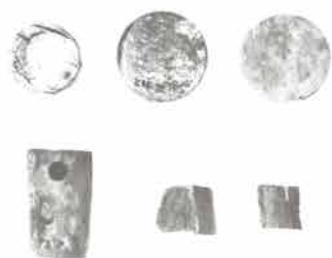
溶融物付着土器(1~3)、
るつぼ



骨製筭



筭状・尖頭状骨製品



双六駒等の小物



鉄芯の入った骨製品



骨製サイコロ



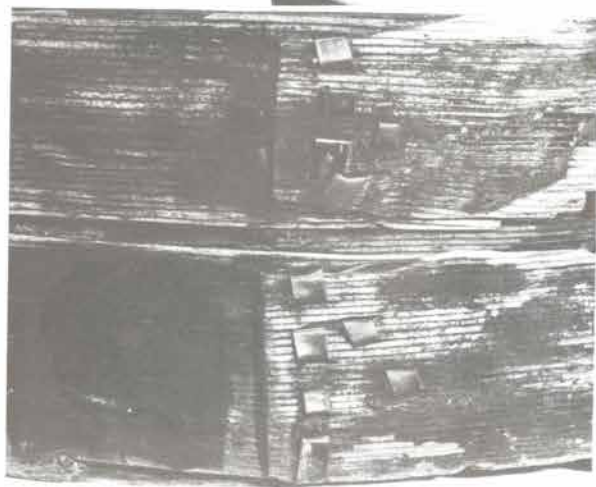
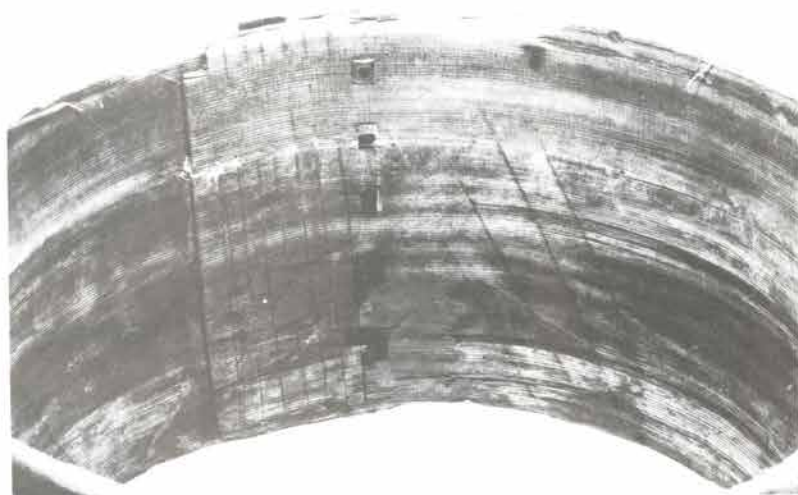
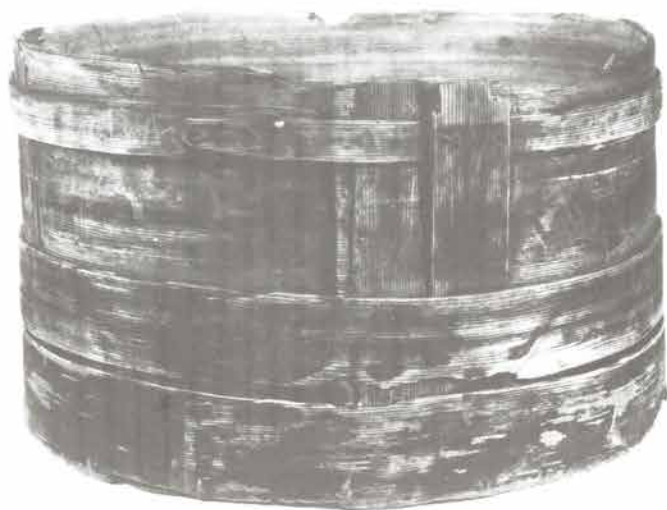
加工痕ある鹿角



ガラス製珠数玉



ガラス小壺



木製品(1) 曲物



しゃもじ



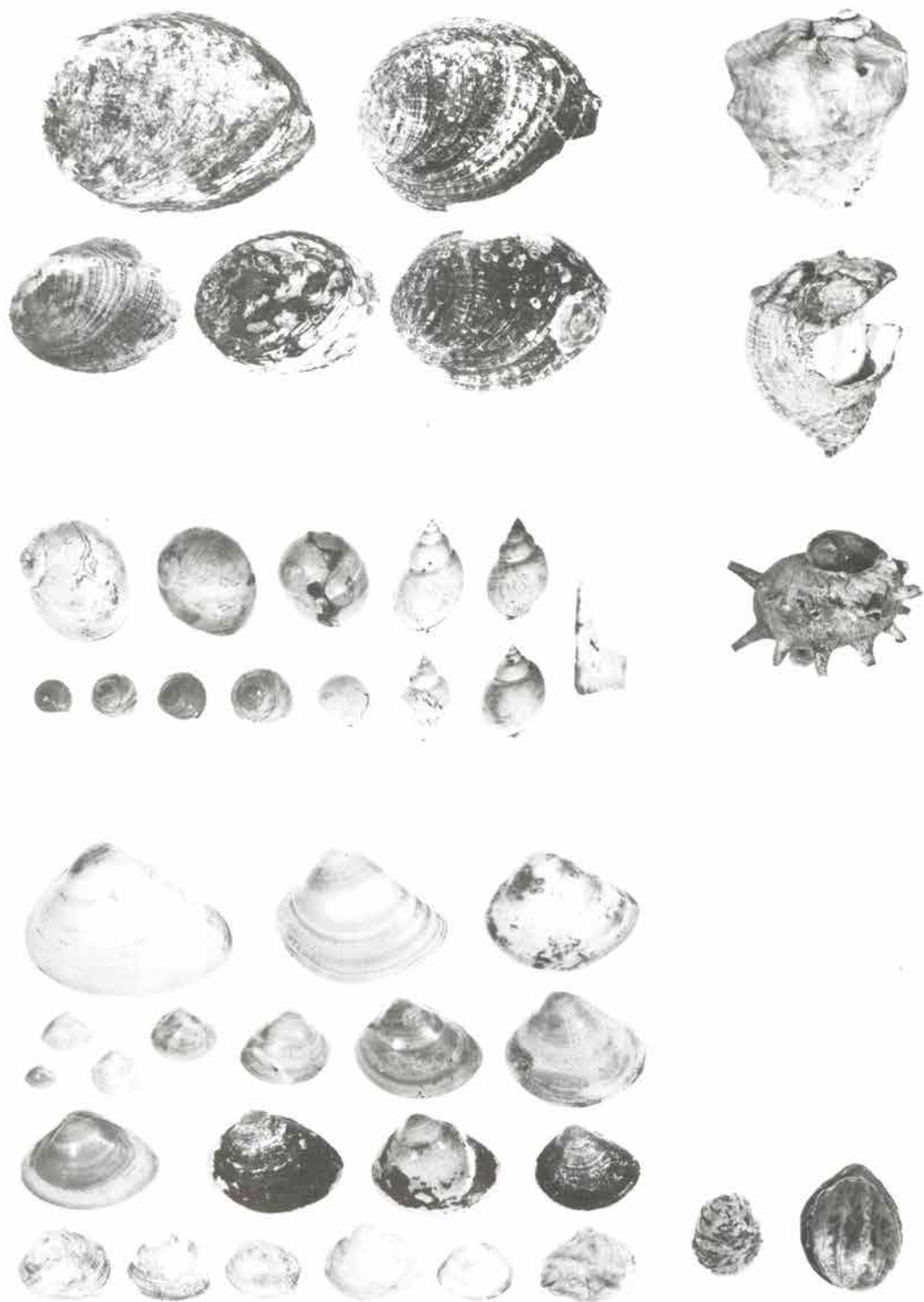
箸



下駄



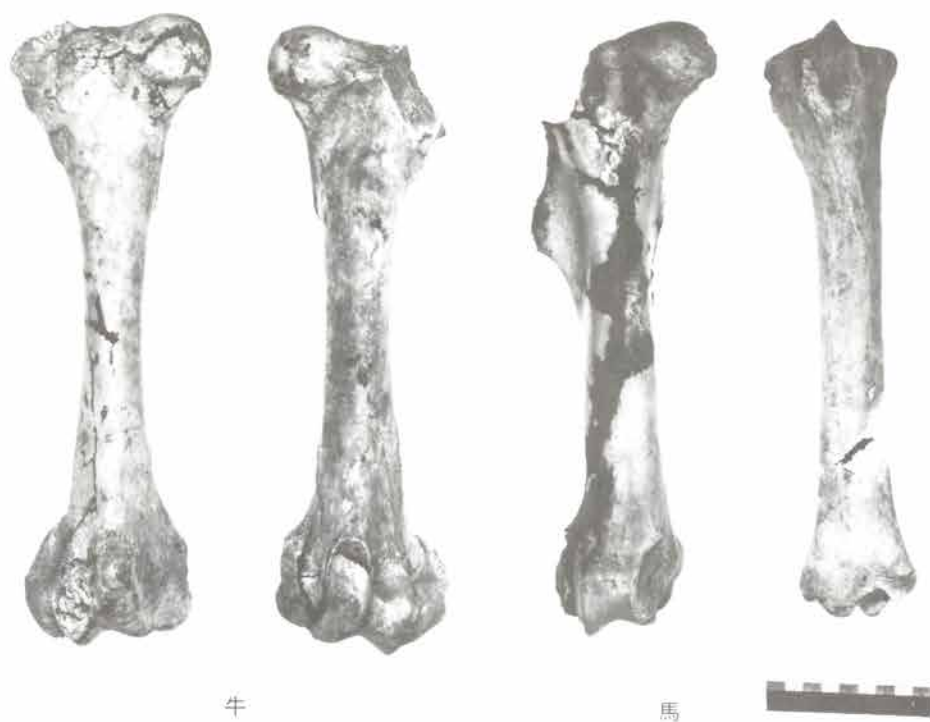
漆器



自然遺物(1) 貝, 種子



切断痕を有する動物骨



牛

馬

自然遺物(2) 動物骨



歯



▲シカ

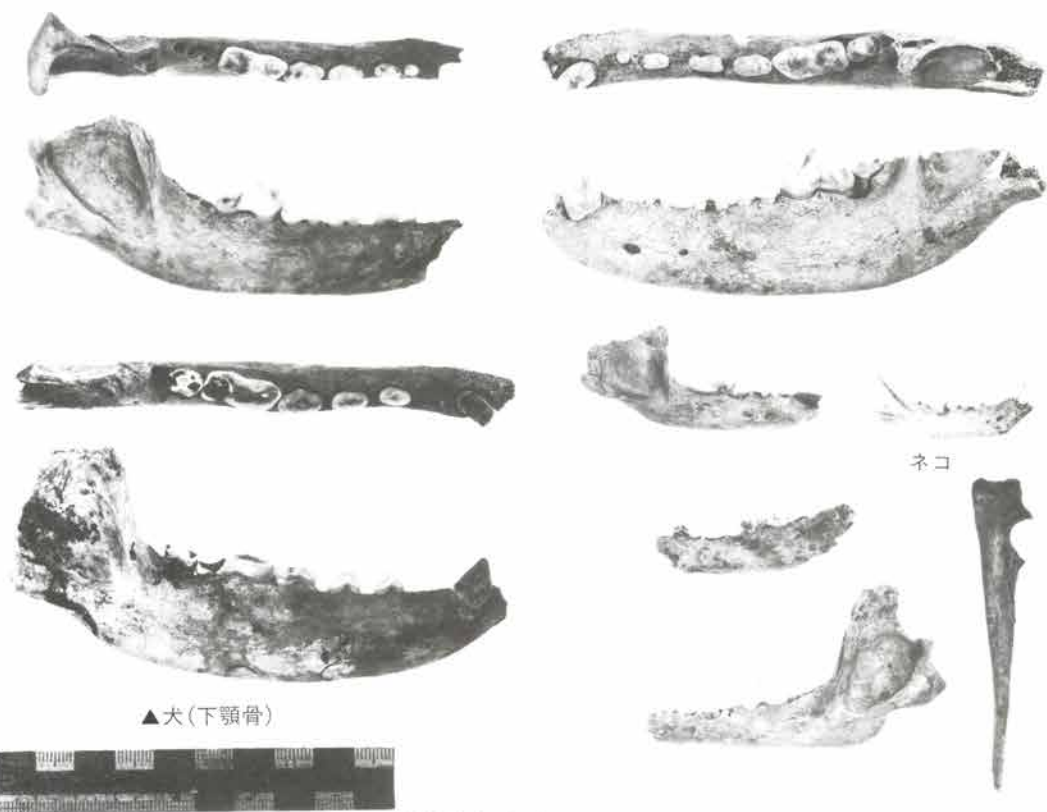


▲イノシシ





▲犬



▲犬(下顎骨)

ネコ



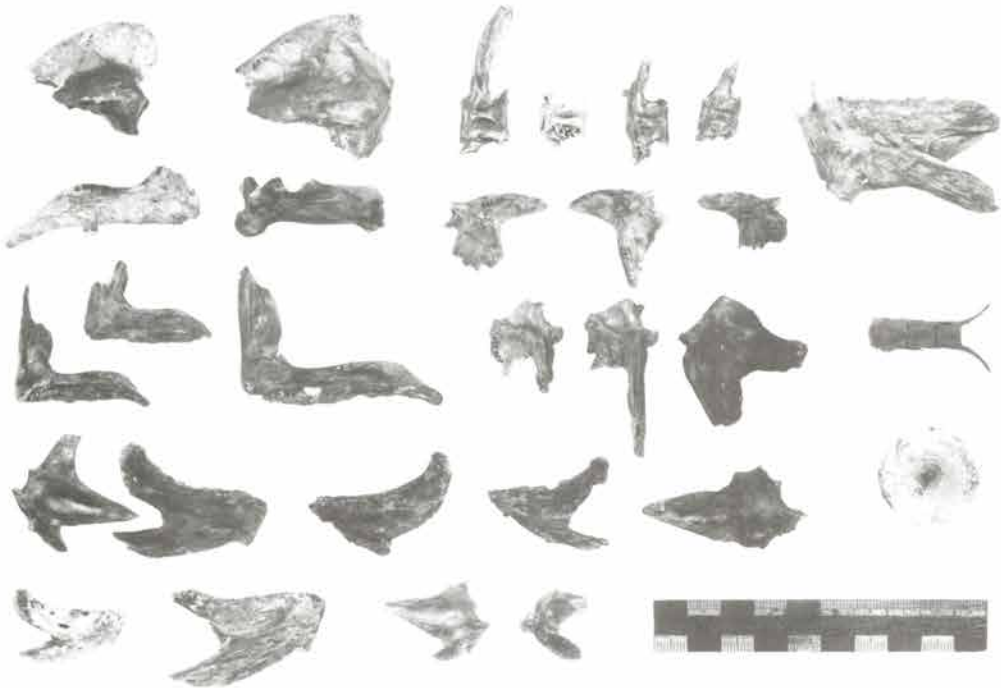
▼うさぎ



▲鳥骨

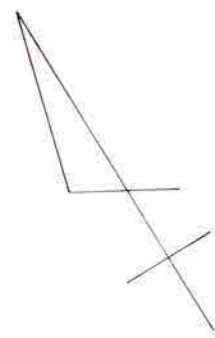


▶イルカ

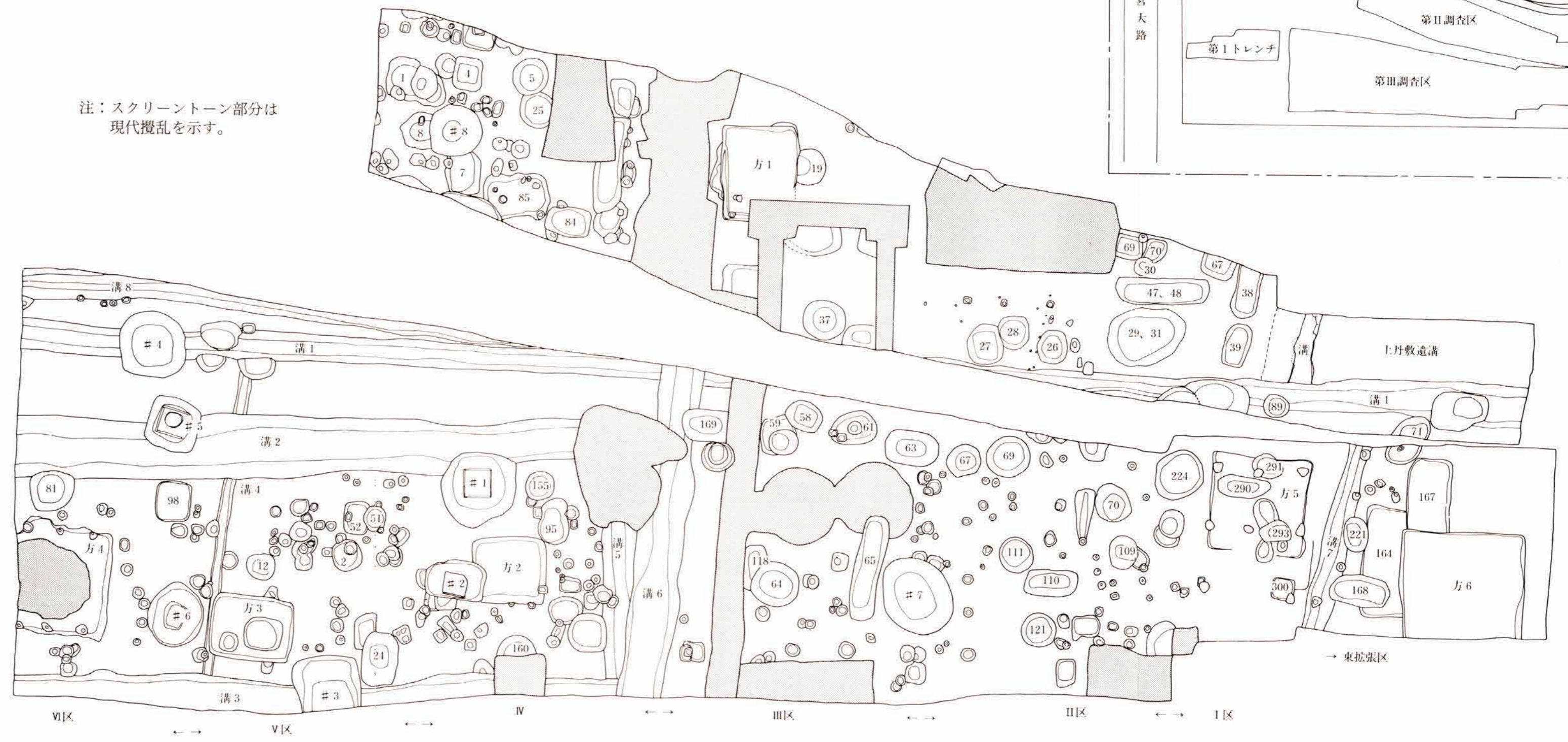
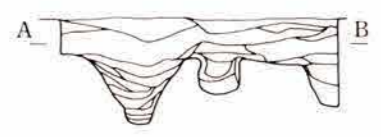
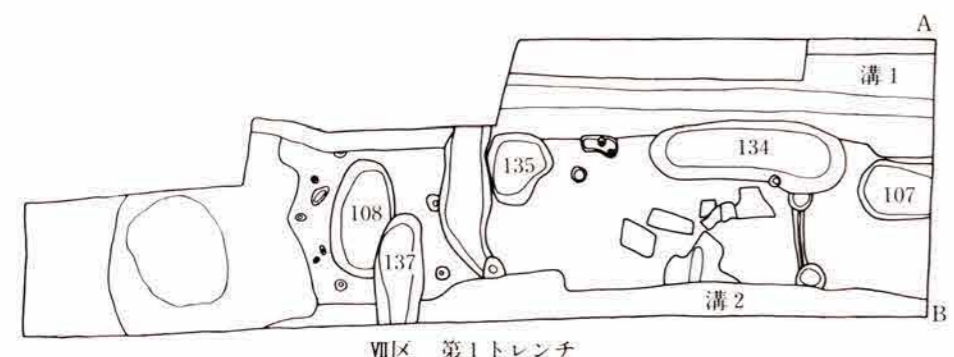
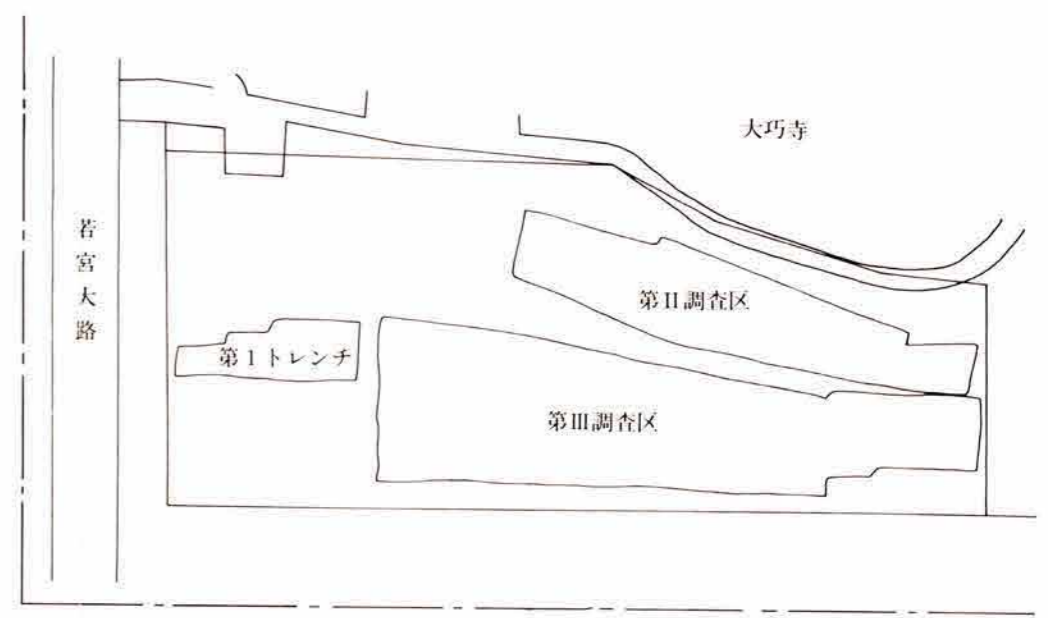


▲魚骨





注：スクリーントーン部分は
現代攪乱を示す。



鎌倉市・小町

(推定)藤内定員邸跡遺跡

—鎌倉市新中央公民館用地内
遺跡の発掘調査報告書—

発行月日 1985年2月28日
編集者 教育文化施設用地発掘調査団
発行者 鎌倉市教育委員会
鎌倉市御成町18番10号
印刷所 株式会社 稲元印刷